
ラピスの心臓

おぼっさむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラピスの心臓

【Nコード】

N4006R

【作者名】

おぼっさむ

【あらすじ】

狂鬼と呼ばれる凶暴な生き物でひしめき合う、灰色の森で覆われた世界。孤児として独りぼっちで生きる主人公のシュオウは、生まれながらの優れた動体視力を見込まれて、偶然の出会いを果たした凄腕の刺客に拾われる。十二年後、様々な知識や技術を習得したシュオウは、見聞を広めるために旅にでる。才に溢れるシュオウは、様々な出会いや経験を経て、着実に上への階段を昇っていくことになる。天井知らずの立身出世ファンタジーはここから始まる。

このお話には【サクセスストーリー】【戦争】【恋愛】【主人公

T U E E】等の要素があります。

このお話には【レイプ、性暴力】 【寝取られ】等の要素はありません。

この物語は、Arcadiaでも投稿しています。

プロローグ

子供の頃の記憶を辿っても、覚えていることはいくつもなかった。暗く不潔な街の裏で泥水をすすり、残飯をさがして一日が終わる。気がつけばそんな毎日を送っていて、どうして自分がこんな状況にあるのかもわからなかった。

親がいない。守ってくれる大人もいない。一人ぼっちの孤独を噛みしめるだけの日々だった。

街の表通りに出ると、たくさんの人通りで賑わっていた。

人々はお喋りをしたり買い物に夢中になっている。幸せそうに見える。ええ。

けどなぜか、皆自分と目が合うと途端に顔をしかめて遠ざかって行った。

屋台や露店の商売人達からは、客が来なくなるからどこかへ行けと怒鳴られた。

ある日、水たまりに映った自分の姿を見て理由がわかった。

そこには右目と、その周りの皮膚に大きな火傷の跡があった。

火傷の痕はズタズタに爛れていて、酷く醜い。

ああ、そっか。

漠然と納得する。

自分が一人ぼっちなのは、きつと親に捨てられたからだ。

この醜い姿を見て自分を嫌いになったに違いない。

そう思った。

自分の目が他の人間より優れているのを知ったのは、まったくの偶然だった。

コキユという人の血を吸う素早い羽虫がいる。

普通の人にはまともな目で追うこともできないこの虫が、自分には姿形や羽の動き、空中を飛び交う軌道まで見る事ができた。

この虫を大人達の前で捕まえて見せると、皆驚いて褒めてくれる。ご褒美だと言って食べ物に分けてくれる事もあったので、それが自慢だった。

凍えるように寒い夜。

昼頃から降り始めた雪で、辺り一面うつすらと白い雪に覆われはじめている。

この日は食べる物が見つからず、街外れのゴミ捨て場を漁っていると、表通りのほうから数人の男達が走ってくるのが見えた。

全員が薄茶色の服を着て、腰に剣をさげている。

どつやら街の警備兵らしい。

彼らはあわただしく裏道に散っていったが、その中の一人が、自分の存在に気づき声をかけてきた。

「坊主、ここらで妙な奴を見なかったか？」

髭面の警備兵は、ここまで走ってきたのか少し息をきらせている。

「みてないよ」

「少しでも変だと思う者を見かけたら教える。知らせてくれたらなんでも好きなものを食わせてやるぞ」

警備兵はそうまくしたてて、足早に路地の奥へと消えていった。

好きなものを食わせてやる、という言葉が強烈に耳に残る。

街の表通りで見えてきた屋台で甘酸っぱいソースをつけて焼いた骨付きの肉や、甘い菓子をはおぼる自分を想像すると、口いっぱい涎があふれた。

どのみち今日の収穫はゼロなのだ。

ご褒美にありつける可能性に賭けて、周囲一帯を探してみることにした。

小一時間ほど裏道を歩きまわった。

寒さはさらに増し、凍える空気に長時間さらされた手は感覚がなくなるほど冷たくなっている。

搜索をあきらめようかと思ったその時、建物のあいだにわずかにあいた隙間に、雪の上に点々と続く赤い染みに気づいた。

近づいてみると赤い染みの他にも、雪で消えかかった足跡のようなものまである。

足跡と赤い染みを辿っていくと、下水の入り口に辿り着いた。

赤い染みは奥へと続いている。

下水には一度も入ったことがない。

恐ろしかったが、なんでも好きな物を　　という言葉が頭の中で蘇り、勇気を振り絞って中へ入ることにした。

風がない分、下水道は外より多少暖かったが、澱んだ腐敗臭が漂っていて不快だった。

少しおいて、暗闇に目が慣れてくる。

外から漏れてくるわずかな光だけでも、なんとか地形を把握できた。

赤い染みは下水のさらに奥深くへ続いているようだった。
人の血を好むコキユが、赤い染みに群がっている。そこで初めて
染みの正体を知った。

血だ。

だとすれば、この血が出るほどの怪我を負った誰かは、さきほど
の警備兵達の探していた人物かもしれない。

下水のさらに奥へと続く血痕を辿る。

床に落ちている血はだんだんと量が増している。
生きていたとしたらかなりの重傷のはずだ。

少しすると血の跡が唐突に途切れた。

次の瞬間、突風のようなものが頭のすぐ上を物凄い早さで通り抜
けた。

なんだろう、今の。

カサリ、と服がこすれるような音が耳に届く。

「そこにだれがいるの？」

「……子供？」

暗闇に響いたのは女の声だった。

声質は高く透き通っていて、若く聞こえた。

硬い物を叩く音がして、目の前で火があがる。

小さな焚き火が闇を照らした。

焚き火の後ろには、腹を押さえてうずくまるように壁にもたれかかる者がいた。

女の人。

女のまつすぐに伸びた黒髪が、揺れる炎に照らされて赤く染まっ
て見える。

細目で端正な作りの顔には、脂汗がにじんでいた。

「どうしたの坊や。こんなところで」

「あ、あの」

正直に答えることができず、咄嗟にうまい言い訳も出てこない。

「こっちにおいで。そんな格好じゃ寒いでしょ、火にあたるとい
い」

女の声は穏やかで、そのせいなのか不思議と警戒心はなくなっ
ていた。

進み出て焚き火の前に座り込む。女とは正面を向き合う位置だ。
凍えていた手を揉み込みながら火でとかした。

「坊やは何歳？」

「知らない」

「そう。まあ……見たところ六、七歳ってところかな」

「……おばちゃんは、だれ？」

問いかけにかえってきたのはゲンコツだった。

「いたッ」

「私はまだ二十代。お姉さんって言いなさい。もしくは、アマネさん」

アマネ、というのが女の名前らしい。

また叩かれるのは嫌なので、名前で呼ぶことにする。

「アマネさん……はどうしてこんなところにいるの？」

「仕事でね、無様に失敗してこの様」

アマネが腹に当てていた手をあげて見せると、服がびっしょりと血に濡れて赤く染まっていた。

「どんなしごと？」

数瞬ためらってから、アマネは答えた。

「ヒトゴロシ」

「えッ？」

アマネの言葉に驚いた。

「冗談ではないという意味表示なのか、アマネが真剣な顔でこちらを凝視してくる。」

「赤無しの死神 といえば、西側ではそれなりに名前が通っているんだけど。東側の、それも坊やみたいなたびスケに言ったところで知ってるはずがないよね」

「アマネさんはつよいの？」

仕事柄、強くなければ勤まるはずがない。

ろくに世間を知らない子供の自分にとっては、強い人間というのは筋肉だらけの大男くらいしか想像ができない。

そのイメージと比べると、アマネは女性らしい華奢な体躯でどこからみても人を殺して金儲けができる人間には見えなかった。

「強いよ、とつてもね」

アマネは言うてから自嘲気味に笑う。

「でもこんな様じゃ説得力ないね」

「向こうのほうがつよかったの？」

言った途端、周囲の空気が変わったような気がした。

アマネの目が鋭くなり、不機嫌そうに眉をひそめる。

「ハメられたの。たいした相手ではないと聞いていたんだけど…」

…相手は極石級の化け物だった」

「きよ、く、せき？」

「化け物みたいに強い人間のことだよ」

それからしばらく、アマネは何か考えこむように黙りこくってしまっただ。

焚き火の枝がはじける音だけが聞こえる。

気まずい沈黙に絶えられなくなり、自分から話題を変えた。

「さつき、兵隊がだれかさがしてたよ」

「探してるのはきつと私だね。坊やがここに来たとき、てっきりそいつらが来たのかと思って咄嗟にナイフを投げたんだけど、危うく坊やに当ててしまうところだったよ」

ここへ来て、アマネに気づく寸前に頭の上を何かが通過したことを思い出した。

一陣の突風かと思ったそれはナイフだったらしい。一歩間違えれば突き刺さっていたかもしれず、考えただけでゾツとした。

「じゃあ、さっきのは……」

「背が低かった事に感謝だね。大人だったら心臓を一突きで今頃あの世逝き」

その光景を想像して身が縮こまった。

そんな自分を見て、アマネは盛大に笑った。

「それにしても、さっきからまとわりついてくるこの虫はなに……。火で追い払ってもすぐ戻ってくるし、すばしっこくて叩く事もできないし」

アマネの周囲には無数のコキユが飛び回り、好きをみては血に染まった服に群がろうとしている。

「コキユっていうんだよ。人の血を吸うの」

「それで……こんな嫌な虫は西側にはいなかったのに」

アマネは苛立たしげな表情で、何度もコキユを手で追い払った。だがその程度のことでは血が大好物なこの虫はあきらめたりしない。

「つかまえてあげるよ」

「捕まえるって、坊や……こんなすばしっこい虫をどうやって」

集中する。

途端にコキユの姿形や飛ぶ動作を目が捉える。

飛んでいるコキユは、早すぎて虫網をつかっても捕まえるのが困難な虫だ。

だが、自分にとってはコキユが高速で移動している様子が、ゆっくりと緩慢な動きとして視認できる。

左手を伸ばして一匹、右手を伸ばして二匹。その動作を何回か繰り返して、アマネの周囲を飛び交っていたすべてのコキユを掴み殺した。

今まで何度も繰り返した事で、自分にとっては歩いたり食べたりするのと同じようにあたりまえにできる事だ。

「はい」

手のひらを広げて、握り潰したコキユをアマネに披露する。

何匹かはすでに血を吸い終えていたようで、潰れたコキユの体からアマネのものらしき血が飛び出している。

褒めてくれるかな。

そんな打算もあったのだが、アマネはただきよんとしているだけだった。

「いまのどうやって……」

「見て、つかまえた」

「そうじゃなくて！ ろくに見ることもできないような素早い虫を、どうやったらこんな正確に捕まえられるの？」

「よく見れば、簡単にとれるんだもん」

「よく見れば捕まえられるって、今のはそんな簡単なことじゃ

そうだ、これ」

胸ポケットから取り出されたのは一枚の銀貨だった。

「この銀貨は西側のとある王国で昔使われてたもの。これを上にはじくから、表面にある模様がどんなのか言ってみて。正解したら良い物あげる」

「ほんと？」

「約束する。じゃ、いくよ」

金属をはじく音がして、アマネが親指で銀貨を上にはじき上げた。銀貨は勢いよく高速で回転して上昇していく。虫を見る要領と同じように、集中して回転する銀貨を見る。

見る、絶対に見える。

さらに集中を深める。

空中で拘束回転する銀貨の動きは、しだいに緩慢な動きになり、表と裏の模様を確認することに成功した。

銀貨がアマネの手の中に戻った。

「さて、どう？」

「片方は小さな花びらがたくさんついた大きな木。反対側は頭が鳥みたいな四本足のどうぶつ」

「……正解。いったいどんな動体視力してるのよ」

アマネは心底開心した様子だった。

なんとなく自分がみとめられたような気がして誇らしくなる。

「ねえ、いいものくれる？」

なにをくれるのか、もしかしたら今投げた銀貨かもしれない。期待に胸が躍ったが、返事は期待していたものとは違った。

「坊や、孤児よね？」

緩慢に頷く。

「誰か面倒をみてくれてる人はいるの？」

素早く首を横に振る。

「じゃあいいか　坊や、私と一緒に来ない？」

「え？」

「私は古い戦闘術を受け継いでいてね、それを活かして今の仕事をしているの。この技を師匠と呼べる人から仕込まれたとき、一つだけ約束させられたんだよ」

「どんなやくそく？」

「受け継ぐこと……。私が受け取ったものを、また次へ渡すことを。そして私は、次へ伝える相手にあなたを指名したい」

「どうして、ぼくに？」

「あなたのその目は尋常じゃないわ。動体視力って言ってね、動いている物体を見る力をそう呼ぶの。あなたはきっと強くなる。私なんかよりずっとね」

「よく、わからない」

孤児として、ただ目的もなく生きてきた自分にとって、アマネの言ったことの意味が理解できなかつた。

強くなる　そのことに意味などあるのだろうか。

たゆたう炎を見つめながら、必死に自問自答した。

「私はね、この出会いに運命を感じてる」

「うんめい……」

「初めて受けた東側の仕事で、はじめて失敗して、はじめて逃げ込んだ先で、坊やのような子と出会った。坊やは孤児で、私は受け継いだものを渡す相手を探していた。ね？」

「……わからないよ」

「じゃあ、これならどう？ この話を受けてくれるなら、あなたが独り立ちできる大人になるまで家と食べ物あげる」

我ながら現金だと思うが、このアマネの提案には心が動いた。

「ほんと？」

「本当よ。ただし、これだけは言っておくね。あなたにやってもらう稽古は、ここでこのまま孤児として一生を終えたほうがましだったと思えるくらい辛いものになる。けど、それに耐えてくれるなら、家も食べ物も、私の知りうるかぎりの教養も与えてあげる。つまり、これは契約ね」

「けい、やく……ぼくと？」

「そうよ、互いに得るものがあるのだから。坊やが約束を守ってくれば、わたしもさつき言ったことは全部守る。そういう契約。」

返事はもらえる？」

アマネの提案をよくよく吟味してみると、ほとんど自分に得があるように思えた。

だが、フェアな条件を提示できるような立場でもなく、出口のない迷路の中にあるような孤児としての現状を思えば、アマネの申し入れを断る理由は微塵も浮かんでこなかった。

「アマネさんと、いく」

どこか不安そうな面持ちでこちらを見ていたアマネは、その言葉を聞くと花が咲いたような笑顔を見せた。

「よかった。後悔はさせないわ」

アマネは微笑んで、その場から勢いよく立ち上がった。

「アマネさん、おなかの怪我は？」

「ここに来てからすぐ血止めの塗り薬をたっぷり塗っておいたから。とつくに傷はふさがってるの」

「え？ でもさっきまで」

アマネはたしかに苦しそうに腹を押さえて座り込んでいたはずだ。

「あれは演技。ああして弱っているように見せておけば、相手が油断するでしょ？」

「アマネさん、ずるい……」

「隙がない、と言ってほしいな。ところで、そのアマネさんってのはもうなし。今から私のことは師匠って呼ぶこと」

「ししよっ？」

「そうよ。これから坊やを鍛えてあげるんだから、ケジメはつける。だから私は師匠、あなたは弟子」

「ししよっ……」

師匠、という言葉を口にするだけで、奇妙な幸福感を感じた。

ずっと孤独でいた自分に、やっと特別な関係の人間ができたからかもしれない。

「よしよし。それじゃ行きましょう」

アマネは焚き火に水をかけて消した。

こちらの手をとり、一步を踏み出しかけたとき、おもむろに一時停止する。

「おっと、大事なことを聞いてなかった。坊やの名前は？」

「知らない。ずっと一人だったから」

「なるほど……………それじゃ、坊やは今日からシュオウって名乗りなさい」

「シュオウ？」

アマネに与えられた名前は、あまり聞き慣れない響きのものだった。

「……………気に入った？」

「うん！」

この瞬間、師匠であるアマネは、同時に自分にとっての名付け親にもなった。

「よしよし、素直でよろしい」

アマネが満足気に頷いた。

「でも、どうしてシュオウなの？」

「え”ッ!？」

アマネの顔が引きつった。

「えっと、まあ、気が向いたら教えてあげる
さあ、追っ
手に見つかっちゃう前に出発！」

ごまかすように急ぎ足になったアマネを、追求することはしなかつた。

誰かに必要とされる事の嬉しさと、これからの希望に満ちあふれた人生を思うと、まるで足に羽根でもはえたのではと錯覚するほど、足取りは軽やかだ。

暗く湿っていて悪臭の漂う下水は、お世辞にも快適な場所とはいえなかったが、シユオウは今まで生きてきたなかで最も晴れやかな気分で、アマネと共に歩む人生の最初の一步を踏み出した。

深界のほとり、灰色の森。

果てしなく続く灰色の世界は、歩いているだけで気が滅入る。

遙か高くそびえたつ灰色の木々は、曇り空のわずかな光さえ遮断してしまふ。

視界に広がる暗く鬱屈した世界を俯瞰した。

空気が、重たい。

水の匂いが鼻をくすぐる。

雨、か。

まもなく、粉のように細やかな霧雨が降り始めた。

シユオウにとって歩き慣れたこの森も、雨が降ると状況が一変する。

狂鬼 と呼ばれている、凶暴な獣や虫たちが活発に食べ物をもとめて動き始めるからだ。

「ヴオオオオオオオオオオオ！」

森の各所から、狂ったように猛る獣の咆哮があがった。

シユオウは灰色の大木に身を寄せ、外套で体を覆った。

草木のように自然に、そして石のように動かずに、ただ時がすぎるのを待った。

目を閉じる。

昨日から、あの時のことが繰り返し頭をよぎる。

泣いていた。

常に飄々としていて、掴みどころのない人だった。

十二年前、偶然の出会いから共に人生を歩むことになった女性を想う。

文字を教わり、生き方を学んだ。戦い方を伝授され、強く鍛えてもらった。

師であり、恩人であり、名付け人であり、育ての親でもあったあの人を、泣かせてしまった。

『本当に行くつもり？』

『あなたにはまだ早いわ』

『傷つくにきまってる。人の世界はそんなに優しくもないんだから』

『どうしてって、そんなの心配だからに決まってるじゃないッ！』

『……もういい。好きにしなさい』

冷たい風にあおられて、体がぶるりと震えた。

どのくらい時間がたったのか、今が夢か現かもはっきりしない。落ちて着いて被っていた外套をはずし、周辺を観察する。

一面の真っ暗闇。

雨はやんだようで、森は静けさを取り戻していた。

歩こう。

この森は頑なに人が生きる事を拒絶する。
元々はこの場所も、人が住み普通に暮らしていた土地だったのだと師匠に教わった。

遙かな昔、この地に灰色の木が生えるようになった。それは時間を経るごとに少しずつ確実に数を増やし、やがて人の住む場所を奪うほど急拡大したのだという。

灰色の木は森を形成し、その森には人を襲う凶暴な生物が住み着いた。

生活の場所を追われた人々は、逃げるように山や高所に避難していくことになる。

だが奇妙なことに、灰色の木は平地より高い場所には一本も生えなかった。

こうして出来上がったのが、見えない境界線で区切られた今の世界だ。

平地は灰色の森、山や高所は人間が住まう地となった。

こうした灰色の森で覆われた世界を、人々は 深界 と呼び、人間の暮らす山や高所を 上層界 と呼んで区別していた。

灰色の森の歩き方は、子供の頃から師匠に叩き込まれている。

気配を殺し、体臭を消し、足音を封じて歩く。

十二年、そうした修練を積んだ結果、いまでは狂鬼に悟られることなく森を歩くことができるようになっていた。

健康な成人男性であっても、深界の森に入れば三十分と命を繋ぐことは難しい。

人にとって地獄に等しいこの世界を、自由に闊歩するのは容易ではない。

つねに気を配りつつ歩かなければいけないため、精神、肉体ともに疲労が激しかった。

暗い森を歩きながら、装着した革製の眼帯にさわる。

『これを持って行きなさい。その顔の痕は人里だと悪目立ちするから、できるだけ隠しておきなさい』

師匠から渡されたのは、黒革製の手作りの眼帯だった。

シュオウの顔には子供の頃から右顔面に大きな火傷の痕がある。

このおかげで皮膚が癒着して右目を開くことができず、見た目にとっても醜い。

師匠から贈られた眼帯はそれをすべて覆い隠すように出来ていた。素材は丈夫で良質な皮。シュオウの顔の形にフィットするように作られていて、眼帯というよりは仮面に近いかもしれない。

はじめ、旅立ちを反対していた師匠も、弟子の巣立ちを予期してこれを用意してくれていたのかもしれない。

唐突に森がぱつぱりと途切れた。

生気のない灰色の森の空気が途切れて、途端に命の息吹を強く感じる緑の自然の香りを感じる。

見上げると天にも届きそうな山々が、シュオウを威圧するかのようになりそびえ立っていた。

十二年もの時をすごした灰色の森へ振り返る。

『行ってらっしゃい、シュオウ』

最後にはそう言って送り出してくれた、師であり育ての親を想いながら、深く一礼する。

行ってきます、師匠。

目的地までは、もっとなと鼻の距離だった。

第一話 ムラクモ王国

シユオウは長い間、人里から離れて生活を送っていた。

その間、師から様々な事を教わり、学んだ。

だが、文字や言葉で知った事では、あまりにも味気ない。

灰色の森の歩き方や狩りの方法について学んでいたときも、話で聞いて教えられたときよりも、実地で直接訓練をした時のほうが、遙かに経験値は高かった。

そういつた事もあり、シユオウの中で実際に己の目で、耳で、鼻で世界を感じたいという欲求は日増しに強くなっていき、結果として、ほぼ強引に師匠であり育ての親である人の元から、逃げるようにして家を出てきてしまった。

灰色の森をようやく抜けると、そこは白い石を敷き詰めて作られた街道だった。

別名 白道 と呼ばれるこの街道は、夜光石 という特殊な鉱石を切り出し、加工した物を敷き詰めて作られている。

夜光石は空気中の湿気に反応して、白くぼんやりとした光を放つ特性がある。

この夜行石の放つ光は、灰色の森の浸食を防ぐ効果があり、狂鬼もこの光を避けて通ろうとする傾向がある。

理由は不明で絶対の効果があるわけではない。

それでも白道の上を行くかぎり、ある程度の安全は約束されるので、人々にとっては重要な交通手段となっている。

白道の上を歩く。

白道は表面こそザラザラしているが、どれも綺麗に真っ平らだった。

これなら馬車の車輪も難無く通過することができ、流通もスムーズになる。

灰色の森は複雑に絡み合った植物等で最悪の足場だったが、白道は人間が人間のために用意した道というだけあって歩きやすかった。足取りも軽く白道を進むと、地面が少しずつ上へと登り始めるところで白道が途切れた。

この辺りから、この土地の者達が定めた安全地帯ということだ。

高所へとゆるやかに傾斜している道を進むと、目の前に石造りの外壁に囲まれた街が見えた。

この世界には、東西南北に連綿と連なる山脈がある。

ムラクモ王国 は東の山脈に位置する大国だった。

豊富な鉱物資源を活かした武器製造で国庫は潤い、人々の生活も豊かだ。

王都ムラクモ

街の入り口ではためく旗にそう書かれていた。旗の中心には翼のある蛇のような生き物が描かれていた。

懐かしい、のかな。

自分の子供時代、浮浪児として生活をしていた国の名前がムラクモ王国だと師から教わってはじめて知った。

この王都ムラクモは、まさにシュオウが子供時代をすごしていた場所でもある。

十二年ぶりに感じる街の匂いは、郷愁にも似た気持ちと、孤児として生きていた苦い記憶を沸き上がらせた。

現在の時間は夕暮れ時。

街は仕事帰りの男達や、夜食の買い物に出てきた女達で賑わっている。

街ゆく人々が、時折シユオウの顔をチラチラと覗いてくる。

それが顔の半分近くを覆う大きな眼帯のせいなのか、見慣れない格好のせいなのかわからなかった。

なんとなく落ち着かない気分で、シユオウは表通りから離れた。

少し裏道にそれると、辺りはひっそりとした住宅地で、ここなら少し落ち着けそうだった。

シユオウの持ち物は、狂鬼の虫の歯で作った短剣、狂鬼の獣の皮で作った外套、それと数日分の携帯食だけだ。

食べ物は何も狩りをすればどうとでもなる。睡眠も野宿でしのげる。生きていくだけならそれだけで十分だが、人間の世界というのは何かと金が必要になってくる。

長年、隠遁生活をしてきたシユオウであっても、まともな宿で休んだり、その土地のものを食べたり飲んだりしてみたい、という欲はあたりまえにあった。

世界を見るといふ目的がある以上、各国を渡り歩くためにもやはり金は絶対に必要だ。

都合のいいことに道の隅に 職業斡旋ギルド と書かれた立て看板が目に入った。

仕事をして金を稼ぐ、という当たり前の行為も、今のシユオウにとっては新鮮で、考えただけで胸が躍った。

看板の案内に従って街を歩き、ギルドにあっさりとたどり着いた。土地勘のない余所者だったなら迷ったかもしれないが、シュオウは子供の頃に、この街の裏道を行ったり来たりの生活を送っていたため、迷う心配はない。

「おや、いらっしやい」

ギルドに入っすぐ、カウンターにいた初老の男が話しかけてきた。

「看板を見て来たんですけど、ここで仕事を紹介してもらえますか」

「ふむ」

男はシュオウの靴から頭のつってっぺんまで視点を動かした。

「なるほど。で、どんな仕事をお望みだね」

「長期間拘束されず、できるだけ稼ぎのいい仕事を」

「短期間で儲かる仕事……か。ううん、難しいね」

男は口を下に曲げて、難しい表情で手元の資料をパラパラめくった。

「難しいですか」

「いやね、夏頃だったら他国からくる隊商の荷運びの仕事が、人手がいくらあっても足りないくらいあるんだが、冬を目前にした今の時期はどこも人手を欲しがっているとこなんてないからね。今紹介できそうなのは、どこも長期で人手を募集している所ばかりだね」

「そうですか……」

どうやら仕事の少ない時期と重なってしまったらしい。

あきらめて今後の事を考えようかと考えていた矢先、男が何かに気づいたように眉をあげた。

「お、一つだけ紹介できそうなのがあったよ。王国軍の従士志願者の募集だ」

「軍の従士、ですか」

体は鍛えてあるし、戦うことについても師に血反吐を吐くほど鍛えられてきたのでそれなりに自信もある。

なので体を使う仕事への躊躇はないが、軍隊ともなると長期間拘束されるのは避けられない。

「長期の仕事は困ります」

「いやいや、それがね違うんだよ」

「違う？」

「これは軍の従士候補を選抜する試験の参加者を募集するものでね、たとえ試験に合格しても、その後軍に入るかどうかは本人の意志が尊重される。そのうえ合否にかかわらず、試験後に高額報酬を受け取れるんだよ」

「随分と、条件が良い」

「ううん、ただどねえ……」

男は良いにくそうに唸ってから、言葉を続けた。

「この試験は彩石持ちの貴族の子らが通う 宝玉院 の卒業試験も兼ねているらしいんだ。この試験内容が危険なものらしくてね、従士志願者のうち半分以上が毎年この試験で死んでるって話だよ」

「そんなに……」

「まあね。貴族様と違って、俺達みたいな濁石持ちの平民は、自分を守る術が腕っ節と運しかないからね」

この世界の生き物は、一部の植物等を除いて、みなが輝石と呼ばれる石を体の一部に持って生まれる。

輝石は人間の場合、左手の甲の部分に埋め込まれたような形で存在する。

輝石には 彩石 と 濁石 という種類がある。

濁石は、輝石が灰色に濁って見える様からそう呼ばれていて、多くの人々があたりまえに持っている石がこれだ。

輝石が灰白濁している事以外に、なんら特別なものはない。

一方彩石は、青や緑などの鮮やかな色をした輝石のことを言い、これらの輝石は水や風などの様々な自然を操り、干渉する力を有していた。

彩石は遺伝によって確実に継がれていくので、どの国でも彩石を持つ人間は特権階級に属している。

もちろん、ムラクモ王国も例外なく彩石持ちの人々は貴族階級にあった。

「こっちから言っておいてなんだけど、これはやめておいたほうがいい」

「試験の期間は？」

「うちが預かった資料によると、一ヶ月ほど、とあるね」

拘束される期間が一ヶ月、生きて帰れば多額の報酬を貰えるうえ、軍への加入は強制ではないらしい。

条件としてはシュオウの希望に叶っている。

試験は死が隣り合わせな危険なものようだが、シュオウはそれ

を突破する自信があった。

「その仕事でいいです。紹介してください」

「本気かい？」

「問題ありません」

「まあ、うちとしてはこの仕事を紹介すれば、軍からそれなりに報酬が出るからありがたいんだが……」

半信半疑な男の目を見て、頷いてみせた。

「覚悟はあるようだね。わかった、そういうことなら紹介状を出そう」

「ありがとうございます」

男が取り出した紹介状は、ギルド名と紹介者のサインの書いてある紙だった。最後にギルドの紋章が入ったろうそく印を押して完成した物を受け取った。

「お前さんは旅の人だろ。今日の泊まる場所は決まってるのかい？」

「いえ、金がないので野宿でもしようかと」

「野宿って、こんな寒い時期にかね」

「慣れてますから」

子供の頃でもどうにかして真冬を生き延びたのだ。成長し、体力もある今なら街中での野宿などたいして苦にならない。

「よかったらここで泊まってくかね？ たいしたものじゃないが、パンとスープくらいならご馳走できるよ」

「いいんですか？」

「なあに、お前さんみたいな上客を外で寝かせたりしたら、うちのギルドの名折れだからね」

気を遣わせてしまったかもしれない、と申し訳なくも思ったが、シュオウはこの好意に甘えることにした。

夕食の席でだされた暖かいスープとパンは、とても美味しく森からここまで溜めた疲労が癒されていくようだった。

また、この街で最近起きた出来事や、仕事で経験した事などを聞くこともできて、とても楽しく有意義な時間を過ごすことができた。

ギルドの奥にあった簡易ベッドを借りて、シュオウは疲れた体をようやく落ち着けることができた。

出足は、まずまず好調かな。

自分でも思っていた以上に疲労を抱えていた体は、そのまま飲まれるように睡眠へとおちていった。

翌朝、ちゃっかりと朝食までいただいたシュオウは、適度に満たされた腹をなでながら、従士募集の受付所のある兵舎を目指した。

募集要項にある 従士 というのは、濁石保有者の平民が軍に入った際に与えられる階級であり、左手の甲で鈍く光を反射している灰白濁した輝石を持つシュオウは、これに該当する。

彩石を持つ人間が軍人となった場合、その階級は 輝士 と 晶士 の二つに分けられると聞いた事があるが、自分に関わりのない事だと思っていたため、あまり詳しくは知らなかった。

シュオウは彩石を持つ人間には、まだ一度も会ったことがない。自分を含め、浮浪児だった頃に目にした大人達も、師匠のアマネも濁石保有者だった。

この世界のほとんどの人間は濁石を持つ、なんら特別な力を持たない人々だ。

普通に街で生活を送っているかぎり、そうそう彩石保有者を目にするともない。

彩石を有する貴族やその子女達は、その力を遺憾なく発揮するため、ほとんどが人生で一度は軍に所属するらしい。

楽しみだな。

色付き輝石を操る人間の話は、師からたくさん聞かされた。

風を刃にして飛ばしたり、水の球で人間を吹き飛ばしたり。

そんな不思議な力を操る人間は、どれほどの強さを秘めているのか。シュオウの好奇心は尽きない。

渡された地図を見るまでもなく、目的の兵舎までたどりついた。

軍の施設というだけあって、外から見ただけでも頑丈そうな建物が敷地いっぱい建てられていた。

兵舎の堅牢な門をくぐる。

素っ気ない中庭を通り、奥へ進むと、立派な石造りの建物が姿を

現した。

建物の入り口に武装した兵士が二人、見張りに立っている。

二人の兵士はシュオウが建物に近づくのを待ってから、厳しい目をこちらに向け問いかけてきた。

「何者か、なんの目的があつてここへ来たのか、簡潔に答えなさい」

兵士は腰の剣に手をかけている。

「ギルドから紹介を受けて、従士志願者として来ました」

ギルドからの紹介状を見せると、兵士は途端に表情をゆるめた。

「なんだ……。ここから左脇に入った中庭に仮設の受付テントがある。そこへ行って手続きをすませなさい」

「どうも」

指示通りに行ってみると、そこには芝生の生えたそこそこの広さの中庭があった。訓練用なのか、人型の力カシがいくつか置いてあり、その近くに木剣や木槍なども見える。

仮設の受付テントというのは、メインの大きな建物から別館へ移動する外廊下のすぐ近くにあつた。

ただでさえ空気が冷え込むこの時期に、わざわざ外に受付所を設ける必要があるのだろうか、と疑問に思う。それもなにか事情があるのだろうか、と一人で勝手に納得することにした。

仮設テントに近づくと、中から複数の男達の声が聞こえた。

中を覗くと、三人の兵士が小さなテーブルの上でコインゲームに興じているのが見えた。

入り口を見張っていた従士とは違い、この三人は青と白の高そうな布地でできた軍服を身に纏っている。

それぞれの手の甲には、青、緑、橙色の輝石が見える。あきらかに士官クラスの軍人達だ。

「すみません」

声をかけると、三人の男達の視線が一斉にシュオウに集中した。

「あ？」

男達のうち、もっともシュオウの近くに座っていた男が、気怠そうに立ち上がり、歩み寄る。

「ギルドから紹介されてきました。こちらで従士志願者を募集しているとか」

「ふん、やつとか。運が良かったな、お前で定員達成だ。この用紙に名前と試験への参加に同意する項目に署名しろ」

色付きの輝石を持った人間との、最初の遭遇は最悪なものだった。他人を見下したような目。へらへらと締まりのない下卑たにやけ顔。

目の前の青い軍服に身を包む男は、ひとを不愉快にさせる才能を、生まれ落ちた時から持っていたのではないかと思いたくなるほど感じが悪い。

男は傍らから紙とペンを取り出し、それをシュオウの右脇の地面にわざわざ放り投げた。

後ろで座ったままの二人の男は、こちらの様子を伺って奥でへらへらと笑っている。

「それとな、採用試験に参加する奴の財産は、一度こちらですべて預かることになっている。金、武器、食料。最低限の着る物以外はここにさせ」

「……………理由は？」

「はあ？ おまえ、軍に雇われたくてここへ来てんだよな？ だったら大人しく言うことを聞いていればいいんだよ」

男の態度がますます強硬になる。

なんの保証もなく持ち物を提出しなければならない、という命令に対して疑念は一切晴れていないが、軍人を相手に揉め事を起こすのは避けたい。

シユオウは渋々ながら従うことにした。

机の上に持ち物を並べていく。

携帯食料。 武器。 外套。

結局この程度の物しか、財産とよべる類の物は持っていなかった。

「おい、ふざけてんのか？ 金を出せ、銅貨一枚でも隠したらゆるさねえぞ」

「金はない。疑うなら調べてもらってもいい」

「ならその場で飛び跳ねろ。音がなにもしなければ信じてやる」

シユオウは言うとおりに従って、その場で数回飛んでみせた。が、言った通り一銭も持ち合わせがないので、相手の男が期待した音はなにも聞こえなかった。

「ち、本当に無一文かよ」

金があつたらこんなところにくるものか。

心の中で悪態をついているうちに、後ろにいた男達までシュオウの目の前にやってきて、机の上に置いた物を物色しはじめた。

「さつすが平民、ろくなもん持ってないな」

「なんだこれ、干した肉……？ こつちの短剣はまとも刃もついでないぜ」

「この外套は悪くない。なんの皮で出来てるかわからんが、質はよさそうだ」

この時、シュオウの疑念は確信へと変わった。

この男達はこうして仕事を求めてやってきた平民達の物を、都合よくとりあげて自分の物にしているのだろう。

おまけにまだシュオウが目の前にいるにも関わらず、それを隠そうともしてない。

彼らがこうした行いを、あたりまえの日常としてしていることの現れだ。

「そうだ」

はじめに対応した男が、シュオウの顔を見つめて顔を醜く歪めた。

「お前のその顔につけてるのもよこしな。見たところそれなりの作りじゃないか。売れば多少でも金になるかもしれない」

「お断りだ」

例え裸にされたとしても、これだけは渡せない。

「おかしいな、よく聞こえなかった。……もう一度言ってくれよ」

男は耳に手を当てる、大袈裟なジェスチャーをした。横にいる男達が、それを見て腹をかかえて笑う。

「これは大切な人から貰った物なんだ。欲しければなんでも好きにもっていけばいい。だけど、これだけは渡せない」

男達の笑い声が途絶える。

対する男は、唇を震わせ、血走った目でシュオウを猛烈に睨みつけた。

「ふざけんなよッ！ 俺が出せと言ったらおとなしく出せばいいんだよッ！ ただの糞平民風情が、輝士であるこの俺に楯突くなんてありえねえんだよッ！」

烈火の如く怒りだした男は、腰に下げていた長剣を鞘から抜き取り、切っ先をシュオウへ向けた。

「お、おい、いくらなんでもやりすぎだ。騒ぎになったら色々めんどろくなことになるぜ」

さっきまで横で笑っていた男が止めに入った。

だが、怒りで頭に血が上った男は、武器を納めようとはしない。

「黙ってる。こいつは他国からのスパイだった、そういうことにする」

「する、って……」

「この糞平民は俺達に反抗したんだ。こついう奴は、見逃したら調子にのって、後で俺達のことをチクるかもしれない」

「それはまずいよ。こんな事してるのがバレたら……」

二人の男のうちの一方の顔が青ざめた。

「やるしかないか」

二人の男も剣を抜き取った。

シユオウは仮設テントから後ろ歩きで、ゆっくりと距離を置いた。それに続くように、抜剣した男達がテントを出る。

言うことを聞かなければ口封じ、か。思考が短絡的すぎる。

やたらと好戦的な男に、不正がばれることに怯える取り巻き達。この三人、叩けばどれだけホコリが出てくるか。

それとも、ムラクモの軍人がすべてこうなのだとしたら、失望するしかない。

シユオウは気づかれない程度に嘆息した。

こうなってしまうては、どう転んでも面倒ごとは避けられそうにない。

三人の男達は前方からシユオウを覆うような位置をとり、剣を構えた。

一連の動作はあきらかに素人のそれとは違い、訓練した兵士特有の血なまぐさを想起させる。

中央に陣取った男が、全員に諭すように声をあげた。

「あやしい平民を見つけ、声をかけたら抵抗してきて、仕方なく殺してしまった。そういうことでいいな？」

左右の二人が無言で頷く。

攻撃は、まず左にいた男から始まった。
勢いをつけた走り込みからの横なぎ払い。

視る。

シュオウの目は、火傷が原因で右目を使うことができない。にも関わらず、唯一無事な左目は、常人とは比べものにならないほど、優れた動体視力を持っていた。

しかし、その類い希なる動体視力を発揮するためには集中力が不可欠だ。

子供の頃は、平常心を保てる場合にのみ、この並外れた視る力を発揮することができたのだが、荒事や精神が不安定な状況下では、集中が散漫してしまい、うまく視ることができなかつた。

だがそれも、師匠に鍛えられたおかげで、生死を賭した状況であっても冷静を保っていられる。

今のシュオウにとって、多少訓練を積んだ程度の軍人が剣を振りかざしたところで、躲すことなど兎戯に等しかった。

横切りにシュオウの腹を狙った剣線を、軽く後退して絶妙なタイミングで躲す。

「なっ!?!」

剣を振りかぶった男が、間の抜けた表情で自分の剣とシュオウに視線を数度泳がせた。

本人は切ったつもりで、剣に血がついていないのが不思議だったのだろう。

「なにやってんだ、このヘタレ!」

「い、いや、だつてよ」

「もういい！俺達二人で一気にとどめを刺すぞ」

中央の男は剣を袈裟懸けに振り上げ、右側の男は刺突の構えで同時にシュオウに襲いかかった。

この攻撃もまた、さしたる労力を使うこともなく、体をひねってすべて躲した。

剣の腕はたいしたことないな。

灰色の森には、予備動作もなく稲妻のような早さで爪を振り回す狂鬼がいる。

そうした化け物を相手にしてきた日々を思えば、彼らの繰り出す鈍い攻撃など、訓練にもならないお遊び以下の領域だ。

それからも数度、男達はわかるがわるに剣を振り上げてはシュオウに一撃を浴びせかけた。

だがそれらすべての攻撃も、シュオウは難無く体捌きだけで躲してしまふ。

「畜生、あたらねえ……なんなんだこいつ」

男達は息を切らせて剣を地面に突き刺し、杖がわりにしてゼイゼイと激しく呼吸している。

「もういい。晶気を使う……本気でやるぞ」

「わ、わかった」

「了解……」

晶気というのは、彩石保有者が使う力を指して使う言葉だ。

力を使う気が。

シユオウははじめて緊張感をもって身構えた。

彩石保有者の使う晶気については、知識としてはそれなりに理解している。だが、シユオウにはそれを実際に目の当たりにした経験はない。

左の橙色の輝石を持つ男が、地面に手の平を向けると、地面の土が少しずつ空中に持ち上げられて集められ、しだいに太い矢のような尖った物体を形成した。

続いて中央の緑色の輝石の男は、手を上にかざして手の平に鋭く回転を続ける風の刃を作り出している。

右側の男も、いつのまにか胸の前で激しく唸る水球を溜め込んでいる。

見た瞬間にわかった。

それぞれの力が、一撃で人体を破壊してしまうだけの威力を秘めている。

もらったらタダじゃすまないな。

覚悟をする。

晶気を視るのはこれが始めてことだ。

たとえ目で捉えることが出来ても、躲すことはできないかもしれない。

そもそも視ることさえ出来るかどうかわからない。

だから、覚悟をする。命を賭けることを。

死ぬかもしれない。

中央の男の合図と共に、それぞれの晶気が一斉に放たれた。風の刃はシュオウの足を狙い、土の矢は胸を、水球は顔を狙って飛んでくる。

なんだ……………簡単じゃないか。

あまりにもあっけなく、シュオウの目は各攻撃を的確に捉えていた。

足をあげて風の刃をやり過ぎし、右に体をずらして土の矢を躲し、最後にしゃがんで水球を避けた。

感じたのは、達成感などではなく失望感に近い。

師から聞いていた話では、晶気は恐ろしい力だという風に聞いていた。

それを聞き、畏怖すると同時に興味も強く抱いていたシュオウにとって、この力を労せず処理できてしまったことが悲しかった。

「なんなんだよおまえッ！ ありえない、ありえないありえないありえない。ただの平民に、晶気を躲すなんて芸当、できるはずがないんだッ！！」

中央の緑の輝石の男が、顔を真っ赤にしてわめきちらす。

左右の男達は、いま起こったことが信じられないとでもいうように、互いに口をぽかんと開けて後ずさった。

怒り狂う男は、一人で罵詈雑言を喚き散らしている。

冷静さのかけらも垣間見えぬその様子から、この男は性格に相当難を抱えていそうだ。

そんな事を落ち着いて考えていたシュオウが気に入らなかったのか、男はさらに怒気を深めて叫んだ。

「濁り野郎のくせに、余裕かましてんじゃねえよおお!!」

緑の輝石の男が、両手を天に掲げた。

時間をおかずして、すぐに手の平に風の刃が形成される。その大きさはさきほどの晶気の二倍以上もあり、周囲の空気が切り裂くような鋭い音と共に吸い込まれていく。

それは、あまりにも予想外の出来事だった。

突然この場一帯に凍えるような冷気が発生し、吐く息が白く曇る。視界に収まるすべての範囲の地面が瞬時に凍結し、薄氷で覆われた。

全員が不意をつかれ、風の力を溜め込んでいた男も、集中が切れたのかあれだけ溜め込んだ晶気をすべて散らしてしまっていた。

「そこまでじゃ」

声が出たほうを見ると、そこには雅やかな軍服を身に纏った、人形のように冷たい無表情で佇む、一人の少女がいた。

第二話 氷姫

凍てつく風が吹き荒び、雨粒が雪にかわるこの季節は、アミュ・アデュレリアにとってお気に入りの時期だった。

小さな体で背伸びをして、執務室の窓を開ける。

冷えきった早朝の空気が部屋を満たしていき、急激に室温を下げていった。

薄紫色の長い髪が風に揺れた。

「あとう、ちょっと寒いんですけどお……」

同室で待機していた部下が、自分の体を抱えるようにして寒さを訴えた。

「我慢せよ」

アミュは部下の訴えを、無情に斬って捨てた。

「氷長石様におかれましては、ご機嫌がいまひとつのご様子で」

「突然仕事を押しつけられてはの。……今日は久方ぶりの余暇を満喫できるものと思っておったのじゃがな」

貴重な休暇を無慈悲に奪った部下へ、アミュは軽く睨みをきかせた視線を送った。

本当なら今頃、自分の領地で好物のパイを食べている頃だ。

「申し訳ありません。ですが、王括府より直々の通達でありましたので」

「宝玉院の卒業試験のことであろう」

宝玉院とは貴族の子弟が通う軍学校のことである。

毎年、この時期になると卒業試験が行われ、今年はその担当責任者として自分が指名された。

「はい。例年よりも今年は従士志願者の集まりが悪いようで、予定日をすでに一月近く延長しております」

「採用試験は命を危険に晒すものじゃからの。集まりが悪いのも致し方なかるう」

「ええ、そうだった噂も広まり、年々志願者の数は減ってきているようですねえ」

宝玉院の卒業試験は、伝統的に従士志願の平民も連れ添って行われる。

未来の士官としての適正を判断するためのものだが、試験は命に関わるほど危険なので、これに参加する平民には高額報酬を用意していた。

しかし、だからといって簡単に命を危険に晒す者は少ない。とくにムラクモ王国は平民といえど、生活に困窮することはないほど豊かなのでなおさらだった。

なので、かなり前からこの従士志願者の条件には、国籍や出自、前科などといった要素はすべて排除して募集している。

そうしてどうにか、毎年必要な数を確保しているのである。

「今の段階であと何人足りぬ？」

「こちらでも正確なところは把握できておりません。なので、これから現地へ確認をしに行こうと思っております。氷長石様もよろしければ一緒にいかがでしょうか」

「うむ、お前を往復させても時間の無駄じゃからな。……じゃが、

輝称はよせ。軍務中である」

「失礼致しました、重将閣下」

恭しく頭を下げる部下を尻目に、アミュは執務室の扉に手をかけた。

「行くぞ、カザヒナ」

面倒ごとは早く終わらせたい。

アミュは急ぎ足で目的地へと向かった。

人間が左手甲に持って生まれる輝石には、複数の種類がある。

軟石級 と区分される、なんら特別な力を持たない灰濁した輝石、これを濁石という。

硬石級 と区分される彩石は、それを有する者の意志で自然を操り、干渉する特別な力を発揮する。

最後に、 極石級 と区分される燦光石がある。

この燦光石は、彩石の中でも突出した力を発揮できる輝石に与えられた名だ。

燦光石を持つ者が晶気を使えば、その力は天災規模で発揮される。

人口の多い大国であっても、燦光石を有する者は極わずかしかない。

自然と、人間社会の中で希有な燦光石は、特別な名前と呼ばれる

ようになっていった。

ムラクモ王国のアデュレリア一族が代々受け継いでいる《氷長石》もまた、そんな燦光石の一つである。

燦光石の持つ特性は、ただ扱う力が強大だというだけではなく、肉体の老化がゆるやかなり、寿命が伸びるといって特長がある。

老化の速度や寿命の延び具合は、石の保有者の素質により変化するため、程度には個人差が生じる。

アミュは十二歳の頃に、曾祖父より《氷長石》を継承した。以来長い年月、体軀はその頃からまったく成長していない。

声も体も幼い子供のままのアミュは、それでもアデュレリア公爵家の当主であり、ムラクモ王国軍の片翼、左硬軍《氷狼輝士団》の頂点に君臨していた。

「ここか」

「第十一兵舎。ここで間違いないようですね」

部下のカザヒナに案内されたのは、主に従士達の訓練施設や待機所などが併設されている兵舎の一つだった。

アミュの訪問に気づいた、建物を警備していた従士達の慌てぶりは凄まじく、大慌てで一人がこの兵舎の責任者らしき男を連れてきた。

責任者らしき男を中心に、総勢二十人ほどの男達が一斉に地面に平伏した。

「重将閣下のご来訪であるにもかかわらず、お迎えにあがることも出来ず、まことに申し訳ございません」

中年の責任者らしき男が、慇懃に謝罪した。

「よい。急な用件じゃ。全員おもてをあげよ」

許しを出したにも関わらず、この場で平伏した者達は誰一人として顔をあげはしなかった。

それどころか、さらに顔を地面にこすりつけるように深く頭を落とす。

これが、燦光石を持つ者と、それ以外の者との大きくて埋めることのできない隔たりだった。

この場でアミュが、出迎えがないとはなにごとか、と一言いつてしまえば、ここにいる者全員が打ち首になってもおかしくない。

平伏している者達はそのことを知っていて、怯えて手が震えている者までいた。

「いまいましいことじゃ。」

必要以上に恐れられるというのも疲れるものだ、とアミュは思った。

「宝玉石卒業試験に付随する従士志願者特例採用試験の状況を確認してきた。受付はどこでおこなっておる」

「はッ。この先の中庭に通じる渡り廊下のすぐ近くにて、特設の受付所を設けております」

「担当官に話しを聞く。しばし施設内を歩かせてもらおうぞ」

「お、お待ちください閣下ッ！　すぐに案内の者を
「いらぬ。お前達は仕事に戻るがよい」

この時になつてやっと顔をあげた中年の男が、まだ食い下がりそ
うな気配を見せたので、命令だと一言追加しその場を後にした。

「皆さん、大層な恐がりようですねえ」

受付所へ向かう途中、カザヒナがほがらかに笑った。
アミュにとつては笑い事ではない。

「……蛇紋石の禿頭のせいじゃ。あれが昔、目の前で茶をこぼし
た従士を処刑して以来、氷長石の名まで一緒くたに恐れられる。同
じ燦光石を持つ身とはいえ、人格まで同じはずがあるまいに」

「彼らにしてみれば、蛇紋石も氷長石も同じに見えるのでしよう」
「サーペンティアと同一視されるなど、まったく不愉快極まりな
い」

「全面的に同意致します」

お喋りをしている間に、目的の場所が見えてきた。
どう見ても適当に用意された仮設のテントがある。
そこへ歩み寄ろうとしたとき、様子がおかしい事に気がついた。

遠目に三人の軍人達が、一人の平民らしき青年を取り囲んでいる
のが見える。

「揉め事でしょうか」
「そのようじゃの」

軍人の男達は、青い軍服を身に纏った輝士階級の者達だ。

一方の騎士達に囲まれている平民の男は、濁石持ちのごくありふれた平民のようだった。

だが、見た目は随分と個性的で、ムラクモではめずらしい灰色の髪と、顔の右半分を覆うマスクのようなものを装着している。

軍人の一人が、怒鳴り散らしながら剣を抜いた。

「あらまあ……止めますか？」

カザヒナが一步踏み出し、アミュを見た。

「あの男、三人の輝士を目の前にして、焦っている様子がまるでない」

灰色の髪の男は、あくまで平静に見える。

構えることもせず、見る者によっては怯えていると捉えてしまうほど静かだ。

が、それなりに長い時間を生き、多くの強者を見て来たアミュにはわかる。

青年のとつた足の位置、相手との間合いは、すでに臨戦態勢を整えた状態にある事を。

青年の落ち着きはらった態度、冷静に状況を見据える視線は、熟達した剣士の風格すら漂わせている。

始まってみれば一瞬の出来事。

輝士達がそれぞれ繰り出した剣を、平民の青年は最小限の動作だけで軽々躲してしまった。

「あら、まあ……………」

カザヒナが感嘆の声をあげた。

攻撃動作がすべて徒労に終わった輝士達が、それぞれに輝石の力を行使しはじめる。

「馬鹿者どもが、平民を相手に晶気を使うつもりのようじゃ」

「今度こそ止めましょう」

「もう間に合わぬ」

輝士達が使ったのは、単発で晶気を発するまでに要する時間の少ない、威力の弱いものだ。だが弱いといっても、それはアミュから見たもので、普通の人間の身体に風穴を開けるくらいはたやすくやっつける威力は十分にある。

素早く練り上げられた晶気は、止める間もなく早々に放たれた。

この後に起こるはずの光景を想像して、カザヒナは咄嗟に目を閉じて顔をそらした。

アミュも、体に穴が開き血を流してうずくまる青年のイメージが咄嗟に沸く。

だが、次の瞬間に目に飛び込んだのは信じられない光景だった。青年は放たれた三種類の晶気を、一つ一つの確に躲してみせたのだ。

ありえぬ。

「え？ あれ、どうして……………」

視線を戻したカザヒナは戸惑っていた。

アミュも心の中で同調する。

輝士の扱う晶気は、ケチな剣での一撃などとは次元が違う。多少腕に覚えがあつて身軽だからといって、晶気を、それも三発も同時にすべて躲してしまふなど神業の領域だ。

しかも、その神業をやつてのけたのは平民ときている。

輝士の一人が相手を罵倒するような事を叫びながら、両手をあげて晶気を集中しはじめた。

輝士の両手に研ぎ澄まされた空気が、悲鳴をあげつつ風の刃となつて集まつていく。

「あれは、まずい」

まずいのは標的にされている青年ではなく、輝士のほうだ。自分で扱いきれる以上の量の晶気を練つてしまつている。

力が暴走すれば、自分を傷つけるだけではなく、まわりの者まで巻き込んで木っ端微塵になつてしまふかもしれない。

アミュはカザヒナを置き去りにして、力強く地面を蹴り出した。

揉め事の渦中へ走りつつ、輝石の力を行使する。

アデュレリア一族が持つて生まれる輝石は、氷結を主とするムラクモではめずらしいものだ。

その力は空気中に漂う水分から氷塊を創造したり、触れたものを凍らせたり、といったものだが、アミュの持つ氷長石は、行使する力の内容も威力も桁が違う。

アミュは咄嗟に周囲の気温を極寒の領域にまで下げた。

空気が青くなつたと錯覚するほど、一瞬で大気が凍てつく。

次に精一杯加減して、地面を氷で覆った。
音もなく静かに、氷は瞬きをする間に視界に入る大地すべてを薄氷で白く染めた。

「そこまでじゃ」

三人の輝士と、平民の青年の視線がこちらに集まる。
不意打ちが功を奏し、輝士の一人が集めていた暴力的な晶気は、放たれることなく霧散していた。

「ひ、ひひ、氷長石様!？」

輝士の一人が素つ頓狂にそう叫んだ。

いつのまにか後ろから追いついていたカザヒナが、稲妻のように鋭い怒声をあげた。

「無礼者！　一輝士が、許しもなく閣下を輝称でお呼びするとは何事か!！」

よく言う、と思ったが黙っておく。

カザヒナは二人きりの時はそれなりに砕けた話し方をするのだが、他の軍人が同席する場合には忠実で厳格な部下という姿勢を崩さない。

こうした融通の利く性格を好んで、アミュはカザヒナを自分の副官に指名していた。

「し、失礼致しました」

三人の輝士は慌てて平伏の姿勢をとった。

地面にはアミュが極力手加減をして張り巡らせた薄氷があるので、彼らはその上に手足をくつつける形になる。

一方、平民の青年のほうはその場に突っ立ったままで、戸惑った表情でアミュとカザヒナを交互に見ていた。

「なにゆえ平民を相手に晶気を使った」

アミュは冷徹な態度で問う。

わずかな沈黙の後、風の晶気を使った輝士が、顔をあげないまま言葉を選ぶように喋りはじめた。

「この男が、我々の指示に従わず、抵抗をしたため、しかたなく

……」

「そして武装もしていない平民を相手に、三人がかりで晶気を使った、か」

輝士達の体がわずかに動いた。

やましいことがある、と背中に書いてあるのではないかと問いただしたくなるほど、彼らは怯えてみえた。

案の定、視線を仮設テントへ移すと、中にあきらかに輝士達の所有物ではないであろう武器や袋、衣類などが積まれて置いてあった。仮設テントまで歩み寄り、受付のテーブルの上に置かれていた外套を手取る。

「あ

平民の青年が声を漏らした。

「そなたの物か？」

青年はこくりと頷いた。

「騒ぎの原因はこれじゃな」

大方、従士志願としてきた者の金品を奪おうとし、それにこの青年が抵抗した、ということころだろう。

アミュがそう指摘すると、輝士達は一斉に顔をあげて口々に言い訳をはじめた。

「これは違うんです、一時的に預かっていただけで」

「そう、あとですぐ返そうと思っておりました！」

輝士として、あまりに無様なその姿に、アミュは軽蔑と怒りの感情を同時に感じる。

アミュのまわりにコントロールを失いかけた冷気が漂いはじめていた。

「黙るがよい。こうして志願者達から私物を集めていたようじゃな。持ち物を奪った者の名をすべて明かせ。すべて持ち主のもとへ返す事ができれば、命に関わるような罰だけは許す」

「そ、そんな……」

カザヒナが、なおも自己弁護に勤しもうとする彼らを見下ろし、冷酷な声で告げた。

「ムラクモ王国軍の規則では、非戦時の無抵抗の平民への晶気の使用は堅く禁じている。これを破れば死罪。貴様達の卑しい命を救おうという閣下のご慈悲を無下にしたいというのなら、好きなだけ

汚い口を動かすがいい。そのときは即刻その首を落としてくれる」

カザヒナはおもむろに剣を抜き、刃を輝士の一人の首に当てた。

「お、おゆるしを、なにとぞなにとぞ……」

「では、閣下のご命令を即時実行せよ」

カザヒナが輝士の一人の頭を思い切り蹴り飛ばすと、全員が大慌てで奪った荷を持てるだけ抱えて飛び出していった。

カザヒナがアミュのほうに振り返った時には、さきほどまでの威厳ある軍人としての姿はすっかり形を潜め、飄々としたいつものカザヒナに戻っていた。

この変わり身の早さだけは、尊敬に値する。

「これでよろしいでしょうか、閣下」

「うむ。今後はこの施設の責任者に事情を説明し、あの者達の行動を監督させよ」

「かしこまりました。彼らに科す刑罰はどのように？」

「まかせる。二度とこのような愚かな事を思いつかぬよう、厳しい処罰を用意するように」

「そのようにいたします」

「さて」

指示を終えて、アミュはあらためて平民の青年のほうを向いた。遠目ではあまり意識しなかったが、近くで見ると青年はスラリと背が高い。

見た目には完全な子供であるアミュは、彼を見上げる格好になった。

「そなたには申し訳ない事をしたな。ここに居たという事は、
従士志願に来たのじゃろう」

青年は黙って頷いた。

彼の左目は、あきらかにこちらを警戒していた。

その眼光は鋭い。

「そなたにまだその気があるなら、このままこちらで受験者名簿
に名前を入れよう。どうじゃ？」

「あの、いいんですか。こんな揉め事をおこしたのに」

荒事に対処していた姿と、見た目の印象から勝手に粗暴なイメー
ジを抱いていた。だから青年の落ち着いた冷静な声を聞いたとき、
意外だと思った。

「非はこちらにあったのじゃ、先ほどの事でそなたに責任を問う
ことはない」

「……なら、最初の目的通り、従士採用試験を受けることを希望
します」

青年はこちらを真つ直ぐ見据えて言った。

氷長石の名の元に、ほとんどの者達はアミュの前に平伏する。

なのに、この青年は怯えた様子も見せず、立ち振る舞いは堂々と
している。

それはとても新鮮なことで、アミュにとっては驚くに値する出来
事だった。

そのせいで、返事をするときに言葉が詰まりそうになる。

「う、うむ、そうか。では誰ぞ呼んで案内させよう。待っている

間に受付用紙に記入をすませるがよい」

カザヒナが呼びにいった施設の者に青年を預け、アミュは彼の去っていく背中を見つめていた。

「なんだか不思議な男の子でしたね。あんな立ち回りを見せたっていうのに、なんにもなかったみたいに着いていて」

「そうじゃな……」

落ち着いている、はたしてそうだろうか、とアミュは思考する。

一介の平民が、輝士三人に取り囲まれ、晶気を使ってまで命を狙われた。

だというのに、事後の青年はカザヒナの言うとおり心穏やかであったように見えた。

だがあの目は違う。

冷静ではあっても、あの眼光鋭い左目は煌々と燃え上がっていた。あの目に睨まれて、落ち着いている、などという感想を抱くのは不可能だ。

見極めようとしていたのだとしたら。

青年がアミュやカザヒナを見る目には、探るような気配を感じた。それ自体不愉快ではなかったが、直前まで命のやり取りをして、直後に極石級たるアミュを目の前にしても尚、相手を見極めんとするだけの度胸は並ではない。

面白い。

青年の書いていった用紙に目をおとす。
そこには、綺麗な字で シュオウ と書いてあった。

「シュオウ、か」

「閣下？」

自然と頬がゆるんだのを、カザヒナが目ざとく見つけた。
アミュはわわてていつも通りの無表情を作る。

「あの者のこれからの動向を知りたい。内々に調査せよ」

「かしこまりました。……気になりますか？」

「さてな。じゃが、もしかすると拾いものになるやもしれぬ」

あるのはただ漠然とした期待感。

この出会いが、後の縁となるかどうかはわからないが、何かがある、そんな直感めいたものがたしかにあるのだ。

アミュは振り返り、居並ぶ無機質な建物を見上げた。

中で、先ほどの件を知って、石床に頭がめり込みそうなほど低頭した責任者の男が待っている。

これからバラエティーに富んだ謝罪と言いつきを、耳にたこができるほど聞かされるのだろう。

うんざりする気持ちを堪えながら、アミュはこの場を後にしたのだった。

第三話 ふぞろいな仲間達

石のように硬く握った右手の拳を、小指から一本ずつこじ開けるようにして広げた。

まるで水で手を洗った直後のように、手の平が汗でじつとりと濡れていた。

さつきから体が小刻みに震えている。

それが寒さのせいなのか、シュオウにはわからなかった。

あの少女が。

氷長石、と呼ばれていた。

極石級、燦光石、名を得た輝石。

いつか読んだ古い本には、燦光石の保有者が、たった一人で一国を滅ぼしたという記録が記してあった。

その話を師匠にしたら、おとぎ話だと笑われた。

シュオウの脳裏に、はじめて師匠のアマネと出会った時のことが浮かんだ。

『相手は極石級の化け物だった』

あの時の師匠はたしか、そう言っていた。

ムラクモ王国の極石級。

あの少女が、師匠に傷を負わせたその人なのだろうか。

だとすれば納得がいく。狂鬼も裸足で逃げ出すようなあの人に、逃げの一手をとらせたことも。

三人の輝士が放った晶気を難無く躲すことができたとき、シュオウは失望感と同時に、全能感にも似た驕りに一瞬心が震えた。ムラクモ王国軍が誇る輝士達ですら、師匠に鍛えられた自分にとってはやすい相手ではないか、と。

だが、あの少女が放った極寒の晶気は、シュオウに芽生えた僅かな高ぶりを一瞬にして冷ましてしまった。

腹立たしい。

あの少女にはない。

ほんの一瞬でもまわりを見下そうとした自分に腹が立つのだ。

一度開いた右手が、無意識のうちに再び強く握られていた。

「いたぞ　　だ」

不意に耳に届いた声で、シュオウは顔をあげた。

思考と現実が混濁し、そのズレの修正にわずかに時間を要した。

「おい、大丈夫か？」

見れば自分の案内を任された兵士が、訝しげにこちらを伺っていた。

どうやら考えこんでいたせいで、兵士の言葉に無反応で返してしまっただけらしい。

「大丈夫です。少しぼうつとしていただけで」

「ならいいが。……二回目になるが、ここが待機所だ」

見上げても全体を把握できないほど大きな建物が目の前にあった。言われるまで気づいていなかった自分も、どうかしている。

「大きいですね……」

「ふだんは雨天の時の訓練場として使われている。ここ最近は、従志願者達の寝泊まり待機所としてしか使っていないがな。これが、あなたの番号だ」

小さな番号札を渡される。

札には数字で十七と書いてあった。

「これは？」

「くじ札だ。箱から番号札を抜いて、同じ番号の者達を一隊として扱う。あなたには悪いが、これが最後の一枚なんで直接渡させてもらった」

「それはかまいませんが」

巨大な建物の入り口は、左右に引いて開けるドアだった。

その隙間から喧噪が漏れ聞こえてくる。

兵士が引き戸を開けると、喧噪はより一層強くなった。

建物の中は想像していたよりも遙かに広く、天井も高く開放感がある。

その広い場内を埋めつくすように、大勢の男達がひしめきあって

いた。

「ちょっと待ってな。
ってるやつはいるか？」

おおい！ 誰か十七の番号札を持

兵士が大声で怒鳴ると、すぐに奥のほうから手があがった。

「ここよー！」

怒鳴った兵士に負けず劣らずのバカデカイ声が返ってきた。
奥で伸びた手は、こっちへ合図を送るように左右に振られている。
ただ肝心の手の持ち主は、人混みに隠れてここからではよく見え
なかった。

「ほら、あそこへ行くといい。これから今回の採用試験について、
監督官からの説明があるはずだ。あとの細かい事は同じ隊の奴に聞
いてくれ」

兵士はそう言って、足早に去っていった。
シュオウはあわてて兵士の背中に礼を言った。

改めて建物内を見渡すと、律儀にもさっきの手の持ち主が、継続
してこちらに合図を送ってくれていた。

人混みをかき分けながら急ぎ足でそこへ向かう。

一人一人かきわけながらどうにか手の主の元までたどり着いた。
合図を続けてくれた事に礼を言おうとした瞬間、シュオウは、あ
ッと言いかけて固まってしまった。

目に飛び込んできたのは、筋骨隆々の大男と、その隣で佇むカエ

ル人間だった。

カエル人間のほうは 蛙人 と呼ばれる種族だろう。

この世界には、人類とほぼ同じくらいの知能を持っているとされる他種族がいくつがある。

蛙人はその中の一種族で、地方でひっそりと生活を営んでいるらしい。

また、文化や言葉の違いから人間社会との交わりはほとんどない。

はじめて見る蛙人は新鮮だったが、シュオウを驚かせたのは大男のほうだ。

雲突くような長身と溢れんばかりに隆起した筋肉に、鏡になりそうなほど磨き上げられたスキンヘッド。

そして、そのたくましい容姿からは意外なほどに穏やかな微笑を見せる顔には、べつとりと濃い化粧が塗りたくらわれていた。

「ちょっとお、大丈夫？ 気持ちはわかるけど、いきなり目の前で固まられちゃったらこっちだって困るわよ」

大男はシュオウの顔の前で、正気をたしかめるように手を振った。

「あ、いや、ちょっと驚いて」

正確にはまだ驚いている最中だった。そのせいで馬鹿正直に言うてしまったことをすぐ後悔する。

「あはは、正直ね。そんなにオカマがめずらしかった？ それともこっちのカエルかしら？」

大男は蛙人のほうを見ながら笑った。

シユオウはオカマです、と口走りそうになるのをどうにか堪え、引きつりそうになる顔をどうにか抑えるのに必死だった。

女のような話す大男は、声が見事に野太いせいで、さらに独特な個性が強調されている。

「いえ。すみません、失礼な事をしてしまつて」

いくら不意打ちの衝撃だったとはいえ、初対面の人を相手に失礼極まらない態度だった。

「気にしないで、慣れてるから。それより、あなたもしかして従士志願者？」

「そう、ですけど」

「やつぱりいゝ！ ってことは、十七の番号札をもらったから、アタシ達を呼んだって事かしら？」

シユオウはすぐに頷いて、握っていた十七の番号札を大男に見せた。

「よかったあ。もしかしたらアタシとこのカエルの二人だけで試験に参加させられるかもって聞かされてて、ちよつとへこんでたのよお」

大男はそう言いながら、大きな手を空中でかき寄せるように泳がせた。

その仕草は、妙齢の女性が噂話をするときによくするジェスチャーに似ている。

「ということ、あなた達と一緒に試験を受けることになるみた

いですね」

「そうよ。アタシの名前はクモカリっていうの、こっちのカエルは」

クモカリに視線を送られた蛙人は、この時になってはじめて口を開いた。

「ジロの名前は、ジロ……みたいな」

蛙人の口から出た自己紹介には、奇妙な語尾がついていた。

「え？」

「ジロって言うらしいわよ、このカエル。それにしても言葉使い変でしょ？ アタシとの初対面のときからこの調子なのよ」

クモカリの言葉に、ジロは怒りをあらわにした。

半眼でクモカリを睨んで、抗議の言葉を早口でまくしたてる。

「カエルじゃないし！ ジロだしッ！ まじむかつく！！」

ジロの表情を見るかぎり、それなりに真剣なのはわかった。

が、あきらかに人のものとは違う、くたびれた足の裏のような声で発せられるおかしな言葉のせいで、まったく迫力がない。

「うるっさいわね。あんた、あたしと初対面のときにキモイって言ったでしょッ！？ だからあんたなんてカエルで十分よ、かえるかえるかえるー！」

負けじと応戦したクモカリは、そのままジロと口論をはじめてしまった。

ただでさえ目立つ二人が大声で言い合っているせいで、しだいに周囲の注目が集まりはじめる。

「そのくらいにしておきませんか」

シュオウは二人の間に割って入って、どうにかその場を治めた。

「ふん、今はこれでかんべんしてあげるわ」

「こっちのセリフだしッ」

どうにか休戦状態に落ち着き、シュオウはほっと一息ついた。

「ところで、あなたの名前はまだ聞いてないわよね？」

「シュオウ、です」

「シュオウね。覚えたわ。これからよろしくね」

クモカリがそっと手を出したので、シュオウは握手でこたえた。ジロも続き、四本指の手を差し出してきたので、ぎこちないながらもこちらも握手を交わした。

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

「ちよーーっとなったッ！」

クモカリが突然、胸の前でバツ印を作る。

「え？」

「さつきからあなたのその敬語、気になってたのよ」

「敬語、ですか」

「それよ、それ。今のもまさにそう。これからしばらくの間一緒

にすぎすのよ？ いちいちそんなかしこまってちゃ肩が凝っちゃう」
クモカリの指摘で、自分の話し方が普通から少しはずれているらしいと自覚した。

そういえば。

子供の頃、師匠と深界の森で共同生活をはじめてすぐ、しゃべり方がなまいきだと、その都度ゲンコツをもらっていた。

そうして十二年あの人に調教された結果、丁寧に喋る癖がついてしまっていたようだ。

「よろしく……………これでいいか？」

シュオウが言い直すと、クモカリは堪えるように吹き出した。

「今度は急にぞんざいになるのね。面白い子ねえあなた」

「人と接する機会の少ない場所で暮らしていた。だから、普通に会話するだけでも距離感がわからないんだ」

子供の頃からろくに人と会話する機会もなく、その後の唯一の話し相手は、師弟という特殊な間柄であったため参考にならない。

シュオウの場合、生い立ちが原因で、等しい間柄の人間を相手にしたときの話し方がわからなかった。

「へえ、よっぽど田舎の出身なのね」

「ジロは話し方、上手っぽい」

ジロが唐突に割って入った。

「どこが上手なのよ。そんな変なしゃべり方する奴を見たのは、あんたがはじめてよ」

改めてジロに注目する。

顔には大きな目と大きな口がある。身長は小柄な人間と同じくらいで、体の線がほっそりしているのでこじんまりして見えた。

ジロの皮膚は綺麗な乳白色で、シュオウが想像していた黄緑色や茶色の蛙人とはかなり違っていた。

買えばそれなりに高そうな革製の服を着込んでいるが、靴ははいていない。

そして左手の甲を見たが、そこに輝石はなく、右手も同様だった。輝石の位置は人間とは違うらしい。

少なくとも、今シュオウから確認できる位置に、輝石を見つけないことはできなかった。

「言葉はどこで習ったんだ？」

蛙人と人間は使う言語がまるで違う。

ジロの話し方は違和感があるが、滞りなく意志の疎通ができるレベルで言語を習得しているようだ。

「ジロの住んでたところに物を売りにきてた行商人の女の子っぽい。いつもこんな風に喋ってたしい。全然おかしくないっぽい」

ジロに言葉を教えたその人間が、本当にそんな喋り方をしていたのだとしたら、彼は教えを請う相手選びを致命的までに失敗したのかも知れない。

ジロの言葉にクモカリが再度抗議を入れ、再び小さな小競り合いがはじまったが、向き合って口喧嘩をしている二人の間には、よく

よく見れば険悪な空気は感じなかった。

シユオウが来る前から、こうして彼らなりにコミュニケーションをとっていたのだろうか。

説明会が始まる時間になり、部屋の奥にある壇上に小太りで中年の男が現れた。

続いて壇上にあがった者の姿を見て、場がざわめきだした。

「あれは」

豪華な青の軍服を纏い、体をすっぽり覆う事ができる純白の外套をたなびかせ、薄紫色の霧雨のように細かな髪をゆらしながら、さきほどまで目の前で話していた、あの少女が壇上にあがった。

少女の透き通った藤色の輝石は、まるで雪の結晶のように美しく煌めいていた。

氷長石、か。

まだざわつく場内をそのままに、最初に壇上に上がった中年の男が、大声で話し始めた。

「あー、んん。この度、従士採用試験への参加を決めてくれた諸君らにまずは感謝を言っておこう。私は監督官を務めるイベリコだ。これから今回の試験内容についての最終説明を行うが………あー、特別に今回の採用試験の最高責任者である、アデュレリア重将閣下が同席されることになった」

監督官の言葉で、ざわめきがどよめきに変わった。

場内を埋め尽くした男達の中には、その場で平伏しはじめるものまでいた。

一瞬にして混乱状態一歩手前である。

「ま、待て待て、閣下は通常通りの進行を望まれておられる。いないものと思うようにとのご命令なので、全員そのつもりで。伏している者は起立をするように」

「なんだか、あのおっさん疲れてるわね」

クモカリの見立てにシュオウも同意した。

遠目でわかるくらい、監督官は憔悴しているようだった。

時折ハンカチで汗をぬぐったり、目頭を押さえたりしている。

「まあ、無理もないわね。あの氷姫が横にいるんじゃない」

「氷姫？」

「あら、まさか知らない？ ムラクモの氷姫といえば、氷長石のアデュレリア公爵様のことよ。あんなに幼く見えるけど、中身は百歳越えた婆様よ、ばあさま」

「あれで百歳………」

氷長石の容姿は幼い。

背は小さいし、顔や手のパーツも小さい。なのに目がくりくりと大きいせいでさらに幼さに拍車がかかってみえる。

だが、だからといって未熟な印象は微塵も伺えない。

シュオウは実際に、あの少女が力を行使した場面に立ち会い、会話もしている。

見た目は子供でも、立ち居振る舞いや話し方には他者を屈服させるような威厳と、同時に包容力もあった。

「間違っても目なんかあわせちゃだめよ」

「なぜ？」

「昔ね、氷姫の前でお茶をこぼした平民を、一族もろとも氷漬けで処刑したって逸話があるの。そしてついた渾名が冷酷無比な氷姫市井じゃ有名な話よ」

なるほど。

クモカリの話を聞いてみれば、この場にいる志願者達が怯えたように俯いているのも無理はない。

だが、あの少女がそのくらいの事で人を殺すだろうか。

たとえ身内であろうと、シユオウを不当に害そうとした輝士達を裁いた、あの氷長石が。

壇上の少女へ視線をやると、彼女は静かな面持ちで佇んでいた。

「えー、では試験内容の説明と、今日のこれからの予定。そして試験後の報酬について説明をはじめます。明日から諸君らにやっってもらう試験の内容は、深界の森の踏破試験である」

監督官のその言葉に、建物内の空気が揺れた。

無理だ。無謀だ。どうしてそんな。大金もらったって割に合わない。いまから参加を拒否できるのか。できるわけがない。死にたくない。

皆が口々に後ろ向きな言葉を吐いた。

「あー、まちなさい。踏破といっても、なにも森を諸君達だけで奥まで抜けるとは言っていない。試験に使うのは大昔に利用されて

いた古道で、途中にある休憩所を目標として設定してある。それに、諸君らには我が国の誇る輝士、または晶士の卵である宝玉院の生徒が同行することになっているので安心してもらいたい」

うまく言うものだ。

今の監督官の言いようでは、まるで試験にたいした危険がないように錯覚しそうになる。

だが、聞いたことをよく噛みしめてみれば、試験に使うのは今は誰も使う者のいない古道だ。

灰色の森の浸食を防ぎ、狂鬼除けとしての効果もそれなりにある白道。

それに使われる夜光石は、質にもよるが長く置いておくほど、発光する力が弱くなっていく。

古道と言っているくらいだから、夜行石の効力はとくに消えているか、弱まっていると見るべきだ。

ただでさえ狂鬼に対しての白道は完璧な効果のない防護策で、それが古道ともなれば危険は何倍にも増す。

のんきだな。

監督官の言葉ですっかり安心してしまっている男達が愚かに見えた。

監督官の説明は続く。

「試験は明日早朝、王都の西門を出た先、上層界と深界の境目から開始される。

西門は一般人の立ち入りは厳禁とされているが、諸君らは今回特別に通行を許可されている。

今日はこの後、諸君らに同行する輝士達と顔合わせしておき、そ

の後、こちらが指定する宿に泊まってもらおう。

食事、飲み物はすべて無料。その他、諸君らが試験に必要なと思う物があれば、係の者に言えばこちらで用意する。ただし食料はこちらが用意した物以外、試験への持ち込みは厳禁とする。

今、外で同行する生徒達が番号クジを引いている。諸君らの持つ番号札と、生徒達の引いた番号が一致すれば、それをもって一小隊として登録される。

諸君らと番号を同じくした輝士達は、試験中一蓮托生の間柄となる。そのことをよく自覚するように。

以上だ。質問がなければ説明会はこれで終わりとする」

「報酬はどうなってるのー？」

突然のクモカリの大声で、一度引き上げかけた監督官はあわてて元の位置に戻った。

「おっと、いかん、そうだった。あー……報酬は試験後に参加者全員にカトレイ金貨十枚を約束する」

「わっ、と歓声が上がった。

「ふうん、話通り結構な額じゃない」

クモカリは満足気に頷く。

「この報酬は高いのか？」

生まれてこのかた金を使ったことがないシュオウは、カトレイ金貨十枚の価値を把握できなかった。

「カトレイ金貨のこと？ そうねえ、物価にもよるけど十カトレイもあれば、食べ盛りを抱えた五人一家が数年働かずにお腹一杯食べられるわね。小さな土地なら買っておつりがくるし、大きな土地だって頭金としては十分すぎるわ。それくらいには高額ってわけ、わかった？」

だとすれば、これはただの平民に支払われる額としては破格なのだろう。

そして金貨の価値の分だけ試験の危険度が高い、ということだ。

監督官はさらに質問者がいないことを確認し終わると、壇上を後にした。

氷長石である少女もまた同様で、いつのまにか場外へと姿を消していた。

建物のドアが勢いよく左右に開かれた。

外から、水色の制服姿に身を包んだ十代後半くらいの男女が中に雪崩れ込んでくる。

宝玉院という、貴族の子女が通う軍学校がある、と仕事を紹介してくれたギルドの男は言っていた。

そこで人の上に立つ者としての振る舞いを学び、馬術や剣、学問や晶気の使い方などを訓練するらしい。

彼らが持つ色とりどりの鮮やかな輝石が、目に眩しい。

なるほど、とシユオウは彼らを眺めながら思う。

宝玉という名を冠しているだけあって、生徒達の持つ色彩豊かな輝石は、まさに宝石のように綺麗だった。

貴族の子女達は、引き当てた番号を口々に叫びながら、しばらく

の間を共に過ごす事になる者達を探し、合流していく。

「十七、だれか十七の札を持つてる者はいないか」

喧噪の中、シュオウ達の番号を叫ぶ女の声が聞こえてきた。

「ここよー!!」

クモカリが手をあげて大声で返す。

よく通る野太い声は、がやがやとうるさい場内でも一段とよく響いた。

やがて、クモカリの送る合図をたよりに、二人の女生徒が姿を現した。

金髪で眉目の整った女生徒が、クモカリを視界に入れた途端に硬直する。

目を大きく見開きぼうぜんとして立ち尽くす女生徒を見ていると、さきほどの自分もこんなだったのだろうか、と可笑しくなった。

「ま、まさか、お前達が……」

クモカリ、シュオウ、ジロの三人はいつせいに十七の番号札を女生徒の前に突きつけた。

それを見た女生徒が青ざめた表情で頂垂れる。

「そんな、こんなにあんまりだッ!!」

金髪の女生徒が盛大に嘆いた。

もう一人の女生徒は、制服の色とよく似た水色のウェーブがかっ

た髪が特徴的な子で、気怠そうによそを向いて、まるでこちらに關心がない。

その女生徒が出した最初の一声は、乾いた砂のようにサバサバとしていた。

「アイセ、うるさい」

「なんだとツ!? シトリ、お前はこれを見てなんとも思わないのか?」

シトリと呼ばれた女生徒は、眠たそうな双眸でシュオウ達を一通り見回した。

「べつつに。どうでもいいじゃん」

「よくないツ! デカイおかま! カエル! そのうえ顔を隠した根暗男! なんなんだこのサーカス一座です、みたいな面々はツ」

アイセと呼ばれた金髪の女生徒は、ご丁寧にシュオウ達を一人ずつ指さして率直な感想を述べた。

なんとなく気持ちはわかるのだが、初対面の小娘に根暗呼ばわりされるのは、あまり愉快的事ではない。

「まあまあ、決まっちゃったことを嘆いていたって仕方ないじゃない? ここは気を取り直して 」

クモカリが金髪の女生徒を宥めようと声をかけたが、相手は怒気をはらんだ目を尖らせて、冷たく言葉を言い放った。

「黙れツ。平民が気安く私に口をきくな」

「……………はいはい、わかりました」

傲慢な言いようだ。

最初から相手を見下し、平民だからとそれ以上見る事も考える事もしない。

どうやら、あの三人の輝士とこの傲慢な女は同種のようなのだ。

もう一人の女生徒のほうは、最初から興味なしの態度を貫いている。

やたらと威張り散らすもう一方と比べれば、こちらのほうが何倍もましだ。

急に人混みから二人の男子生徒が歩み出て、金髪の女生徒に声をかけた。

「よう、アイセ。どうやらハズレを引いたみたいだな」

そう言った男子生徒の声には、からかうような色が含まれている。

「なんの用だ」

興奮気味に喚いていた女生徒の声と表情が、不意に硬くなった。

「成績優秀な我らが主席様、モートレッド伯爵令嬢が引き当てた平民はどんなものかと興味があつただけさ。それにしても 笑
える面子だな。シトリと組まされただけでも不利だつていうのに」

二人の男子生徒が嘲笑する。

「……………言いたいことはそれだけか？」

「ふん。僕らが引き当てた連中を見てみるよ。全員が元傭兵団に

いた奴らで、今は深界を渡る隊商の護衛で食ってるらしい。規則がなければ、お前のとこのクズと一人交換してやりたいくらいだよ」

彼らの後ろを見ると、顔や体に無数の傷があるいかにもな男達が、こちらを伺っていた。

「なるほど、口だけ君のお前達にはお似合いの子守というわけだな」

「なんだとッ……」

「私は自身の実力だけでこの試験を突破してみせる。やる気のないパートナーと珍妙な平民達も、きちんと使いこなしてみせてやるさ」

「ちッ。今言ったことを覚えておけよ。かならず後悔させてやるからな」

男子生徒は言い終えると、そそくさと元居た場所へ戻っていった。

「ばっかみたい。ねえ、アイセ、顔は見せたんだしもう行ってもいいでしょ？ さっさと寮に戻って休みたいんだけど」

水色髪の女生徒が、自らの巻き毛に指をからませながら言った。

「……いいだろう。私ももう用はない。お前達は試験に備

えて早く寝ろ。明日から死ぬ気で働いてもらうからな」

女生徒は目もあわせず、投げてよこすようにそう言って去っていった。

「勝手にまくしたてて、勝手に大騒ぎして、勝手に宣言していったわね」

「ジロ……あいつら嫌いっばい。偉そう。まじウザイ」
「あはッ。初めて良い事言ったじゃない、アタシも同感よ」

からからと他人事のように笑うクモカリとジロを横目で見つつ、シユオウは今更ながらに仕事選びを間違えたのではないかと後悔しはじめていた。

シユオウ達は兵舎を後にして、三人揃って指定の宿へ向かっていった。

後ろを見ると、武装した従士が二人、ずっと後をつけてきていた。試験を放棄して逃げるのを防止するためなのだろう。

途中放棄を警戒するのはいいとして、ここまでするところをみると、よほどこの試験への参加者集めに苦労しているのかもしれない。

宿までの道のりは、簡単な地図を渡されているので迷う事はないが、兵舎からはそれなりに距離があった。

冷えた空気を運ぶ風が枯れ葉を踊らせる。

空はどんよりと曇っていて、暗い色の雲を見ていると陰鬱な気分が拍車がかかった。

「ねえ、ほんとにこっちの道で大丈夫？」

地図を見ながら、シユオウは近道のために裏道へ入った。表通りと違い、入り組んでいて人気のない裏の路地を歩いている。土地勘のないクモカリが心配そうにあたりを見回している。

「大丈夫だ。こつちの道を通ればかなり時間を短縮できる」

「そう？ まあいいけど。まだ時間には余裕があるんだから、そんなに急いでいく必要もないわよ」

「人混みも避けられるからな」

人混みを歩くのは疲れるし、なぜかシュオウには道行く人々の視線が集まりやすく、それも嫌だった。

クモカリ、ジロと連れだっている今、人通りの多い道を歩いてヒソヒソ話をされるのはごめんだ。

裏路地の細い道を左へ右へと曲がっていくうち、突然大きく開けた土地に出た。

広大な広場に、規則的に並んだ無数の墓石。

色の薄い冬の景色と相まって、辺りに漂う寂しげな空気感がより一層強調されている。

しばらく墓地の外側を沿うように歩くと、石の祭壇の前に集まった人々の集団に出くわした。

その横を通り過ぎようとしたとき、奥の建物から数人の男達によって棺が祭壇の前まで運ばれている光景を目にした。

「あれは……」

「お葬式みたいね」

葬式、あれが。

立ち止まり、様子を伺っていると、集団の中から一人初老の男がこちらへ歩み出てきた。

「おまえさんがた、故人の知り合いかね？」

「いえ、違います」

「そうかい。まあこれも縁だ、よかつたら返魂儀に立ち会ってくれんかね」

「ですが、部外者の自分達が……」

「亡くなった爺さんは人好きだった。送ってくれる人が一人でも多いほうがきつと喜ぶよ」

横にいたクモカリがシュオウを肘で突いた。

「どうするの？ アタシはかまわないわよ。さつきもいったけど時間は平気だし」

「ジロはどうだ？」

「ジロは人間の葬式見たことない。だから微妙に見てみたいっばい」

「わかった。では、参加させてもらいます」

シュオウ達は葬儀に集まった人々の最後方に立ち、儀式を見守ることにした。

この場にいる者は、シュオウ達を除いて皆黒い喪服を厳かに着込んでいる。

普段着で参加した自分達はかなり浮いている気もするが、一番後ろにいたので誰も気にしていない。

棺が開けられ、中から顔に深い皺を刻んだ老人の遺体が現れた。

棺を運んできた男達が、かけ声と共に老人の体を持ち上げ、祭壇の上にある磨き上げられた黒石の台座に乗せる。

血の気の失せた老人の体は、見上げるように天を仰いでいた。

この老人とシュオウは、当然ながらなんの面識もない。

だがきつと、たくさんの人たちに愛されていたのだとわかる。集まった人々の間から、悲痛に漏れてくる嗚咽がそれを証明している気がした。

まだ年若い青年が前へ出て、老人の遺体の右手を胸の上に、左手を台座の上の置いた。

この黒石の台座は、左手だけを乗せることができるよう、そこだけ出っ張った作りになっている。

これから返魂儀を行う旨が説明され、老人に向けた最後の言葉が、参列者の中の遺族らしき人達によって読み上げられる。

死んだ人間の輝石を砕き、天へと返す儀式のことを 返魂儀 といふ。

輝石はそれを持つすべての生物にとって、ただの石というわけではない。

輝石には、中心奥深くに存在する 命核 という小さな核が内包されている。

この命核が砕かれたとき、その輝石の持ち主の肉体はサラサラとした砂や灰のように崩れ落ち、雲散する。

この時に肉体が分解されて出来る粒子を 光砂 という。

輝石の命核は命に直結している。

それが砕かれる事により、生命は光砂となって天へと返る。

それがこの世界のあたりまえの現実だった。

送る言葉が終わる。

老人の手を台座に乗せた青年が、儀式用の先の尖った鉄槌を手に持ち、祭壇にあがった。

青年は鉄槌の尖った部分を老人の輝石に当て、そのまま上に大き

く振り上げた。

高く掲げた鉄槌が振り下ろされる。

鉄槌の先が老人の手の甲に食い込み、輝石が碎ける硬質な音が空気を揺らした。

輝石の命核を砕かれた老人の遺体は、瞬きをする間もなく発光する粒子に分解され、光砂となって天空へ舞った。

白く光り輝く光砂の中には、時折、赤や黄などに輝く美しい粒も混じって見える。

そのあまりに美しく荘嚴な眺めに、シュオウは息をするのも忘れて見入っていた。

数多存在する生物の中でも、人が放つ光砂の光はとくに美しいという。

愛や喜び、憎しみや悲しみ等の多くの矛盾する感情が混ざり合い、せめぎ合う事で人間という一個の生命を構築している。

互いに相容れようとはしないそれらの要素が、常に対立を繰り返す事で命の光が磨かれていくのだとしたら、人のそれが美しいことに、なんら疑問を抱く必要はないのだろう。

返魂儀、人間の光砂の輝き。それらの事はいつか読んだ書物に書いてあった。

だが、実際の自分の目で見たこの光景を、言葉や文字で語り尽くすのは難しい。

己の目で、肌で感じなければわからない事が、この世界にはたくさんある。

その事をシュオウは強く想った。

空に舞い上がった光砂は、やがて雲に溶けるようにしてその姿を消した。

今、この瞬間までそこにあつたはずの老人の遺体は最初からなにもなかったかのように消えてなくなり、黒石の台座の上には砕かれた輝石だけが、老人の生きた証として儚げにそこに在るだけだった。

「良いお葬式だったわね」

墓地を後にして、一行は目的の宿屋に向かい、それほど時間もかからずに到着していた。

宿はかなり大きく、内装も綺麗で居心地も良い。

宿の女将によると、今日明日と軍によって貸し切りになっているらしい。

宿の一階部分は食事や酒を楽しめる空間となっており、実際に寝泊まりするのは二階と三階部分に分かれている。

シユオウ達は二階の奥にある三部屋を与えられた。

今は一階でテーブルを囲み、注文した食事と飲み物を堪能している真っ最中だ。

「ジロはどうだった？」

「勉強になったっばい」

ジロは魚のバター焼きに舌鼓を打ちつつ、相槌を打った。

「ふーん、見かけによらず勤勉なのね、この力エル」

それはそうだろう。

この白い蛙人は、多少変ではあっても、自分のものとはまったく違う言語をモノにしたのだ。

それだけで相当な努力家だとわかる。

外はもう完全に暗くなっている。

宿の一階は、採用試験の参加者達で溢れていて、酒とご馳走に酔いしれた愉快的な笑い声で満ちていた。

出された料理についてクモカリやジロと話をして、部屋に戻ってゆっくりと休める、はずだった。

だが、さきほどの説明会のときにいた傭兵くずれの男達が、シュオウ達のテーブルの前までやってきたことで空気は一変した。

「おい、その変態。おまえだオカマツ！ さっきっからきしょくわるい喋り方しやがって、酒がまずくなるじゃねえか」

からんできた傭兵くずれの男は目が座っている。

いつから飲んでいるのかわからないが、かなり出来上がっているようだった。

クモカリは男の挑発には一切反応せず、マイペースを決め込んで飲み物をあおった。

「無視よ、無視。ほっとけばそのうちどっか行くから」

シュオウとジロにだけ聞こえるように、クモカリは囁き声でそう言った。

「聞こえてんのか、こるあ！ だいたい男のくせに化粧なんてし

やがって、気持ち悪いんだよコノヤロウ」

『気持ち悪いな。しっしっ、あっちいけ』

傭兵くずれの言葉に誘発されて、脳裏に過去に聞いた言葉が蘇った。

『なんだこのガキ。飯がまずくなるから顔を見せるな』

『不気味な子ね、きつとあの顔のせいで捨てられたんだわ』

『かわいそうにな、顔のソレさえなければもらってくれる人もいたかもしれないのに』

『客が来なくなるからうちの店には近寄らないでくれ』

孤児だった醜い自分を見る、大人達の視線。

嫌悪、同情、蔑み、嘲笑。

それらの色を含んだ眼が、シユオウを見下ろした。

やめろツ、そんな目で俺を見るな！

「化粧臭い変態にカエルと一緒にたあ、そこの坊主も苦勞するなあ？ 同情するぜ。ぶあははは」

傭兵くずれが嗤う。

シユオウは無意識に顔の眼帯に触れていた。この下には、醜く爛れた顔がある。

「……………楽しいか？」

「あ、なんだって？」

「ちよっと、シユオウツ」

クモカリがとめようとしている、だが、無理だ。
負の感情が脳内をめぐり、自分を抑制できない。

「ひとと違う外見をしている者が、そんなにおかしいかと聞いたんだ！」

気がつけば、シュオウは怒鳴っていた。

周囲の喧噪がぱたりと止み、険悪な雰囲気は漂いはじめる。

下卑た嗤いを続けていた男の顔が険しくなった。

「ああ、可笑しいぜ、だから笑ったんだ。それをてめえみたいな若造にとやかく言われる筋合いはねえな」

男がゆっくりシュオウの席まで歩み寄り、手に持っていた酒をゆつくりと、シュオウの頭の上に注いだ。

アルコール臭漂う液体が、シュオウの髪を濡らし、顔をつたって服まで届く。

シュオウは椅子を後ろへ飛ばし、テーブルを思い切り強く叩いて立ち上がった。

「……やるうつてのか？」

互いの視線が交差する。

だが、場の空気は突然の乱入者達によって一気に冷めた。

「お前達、なにをしている！」

騒ぎを聞きつけた軍の従士達が雪崩れ込んでくる。

「くそッ」

従士の姿を確認した傭兵くずれの男達は、そそくさと店の奥へ消えていった。

「アタシ達も上に行くわよ」

シユオウ達もテーブルに料理を残したまま、二階の自室へ引き上げた。

割って入った従士達には顔も見られているが、何も追求はされなかった。

彼らにしてみれば、騒ぎを静められればあとのことはどうでもいいのだろう。

二階へ上がったシユオウ達三人は、とりあえず一番近いクモカリの部屋に入った。

「あーもう、びしょびしょじゃない」

部屋に入ったシユオウは、クモカリに強引にタオルで頭を拭かれていた。

頭から酒をかぶったせいで、髪から苦いような甘いような気持ち悪い匂いがする。

「もういい。自分で出来る」

タオルを奪おうとするが、クモカリは譲らなかった。

「いいから、まかせておきなさいって。アタシ達のために怒ってくれたんだし、このくらいはさせてよね」

違う。

シユオウは奥歯を噛みしめた。

あれは仲間のために怒ったのではなく、すべて自分のためだった。過去のいまわしい記憶をさらって、その鬱憤を外へぶちまけただけだ。

「ねえ、その顔につけてるのも取っちゃいなさいよ。それも濡れてるじゃない」

クモカリがシユオウ顔に手を伸ばす。が、シユオウはその手を思い切り払いのけてしまった。

「え……」

手を叩く乾いた音がして、気まずい空気が流れた。

「……………すまない。後のことは自分でやる」

シユオウは引き留める声を無視して部屋を飛び出した。

そのまま自分の部屋に入り、髪や服を濡らしたままベッドに体を沈めた。

体は鉄塊のように重く、指一本動かしたくない。何も考えたくない。

深界の森の中を一日中歩いて、これだけの疲労感を感じたことはなかった。

そのままシュオウは飲み込まれるように眠った

ムラクモに到着してから二日目の夜は、こうして終わった。

翌朝、早朝から叩き起こされて、試験参加者達は街の西門を出てしばらく山を下った集合地点まで歩かされた。

朝の新鮮な空気も、寝不足でふらふらとする体にはなにも恩恵がない。

山から平地へとかわる寸前、そこがスタート地点らしい。目の前に広がる深界の森には、何本かの細い白道が見えた。

「シュオウ、あれ見て」

クモカリに促されたほうを見る。

そこには、昨日の傭兵くずれ達の小隊があった。

彼らもこちらに気づき、威嚇するように睨む視線を送ってくる。

立たされた位置がシュオウ達と近いところをみると、もしかすると同じ白道を行かされるのかもしれない。

また、面倒なことが起こりそうな予感がする。

シュオウは誰にも聞かれないように、小さく嘆息をもらした。

第四話 狂いの森

王都の西門を出た先の山の麓に、従士志願者は集められた。

時刻は早朝。皆、無理矢理叩き起こされたせいで寝惚けた顔をしている。

途中、飲み過ぎたせいなのか、胃の中のものをすべて吐きだしている者までいた。

ここから見える景色の先には、灰色の森が視界一杯に広がっている。

世界を見るために森を出てきたのに、なんの因果か再び森へ入ることになったシュオウは、なんとなく納得いかない気持ちを抱えていた。

「しまりのない顔だな」

合流した貴族の娘が言った、最初の言葉がこれだった。

寝不足、かつ昨日の疲労が顔に出ていたシュオウを指して言ったのだらう。

露骨にこちらを見下したような視線に、なにか言ってやりたい気分にもなったが、ほうっておけ、と心の中で呟くのに留めた。

宝玉院の生徒達は試験官の元に集められ、何かの説明を受けている。

ここからでは何の話をしているか聞こえないが、生徒達は緊張した面持ちで話を聞いていた。

試験官が説明を終えると、各生徒達に茶色い背負い袋が手渡されていった。

荷物を受け取った生徒達から、自分の小隊の元へ戻っていく。

シュオウの小隊の生徒達も、重そうに背負い袋を抱えて戻ってきた。

た。

「お……まえたち、さっさとこれを受け、取れッ……」

金髪の女生徒が、一番重そうな袋を押しつけるようにしてシュオウに渡した。

受け取ってみて、袋のあまりの重量に驚く。

袋は硬くて大容量の何かでパンパンに膨れていた。袋の底がやぶけてしまうのではないかと心配になるくらい重い。

「重いな、何が入ってるんだ」

「試験官は食料だと言っていた。試験開始まで中を開けるなどもな。こっちの袋もそうだな」

金髪の女生徒は、背負っていたもう一つの袋をクモカリに渡した。

「これは、それほどでもないみたいね。シュオウ、交換する？」

「頼む」

体格も筋力もクモカリのほうが優れているので、素直に申し出を受け入れた。

重たい袋を、クモカリが受け取った袋と交換する。

さすがに軽々とはいかないようだったが、クモカリは重たい袋を肩に背負って、まだ余裕がありそうだな。特盛りの筋肉は伊達ではないらしい。

「わたしのも持って」

そう言って最後の一袋をクモカリに投げたのは、水色髪の女生徒だ。

二つ目の袋を受け取ったクモカリは、最初それをジロに手渡そうとしたが、しばらく荷物とジロを交互に見て、手を戻した。

背負い袋はかなり大きく、小柄なジロに持たせるのは酷だと思ったのだろう。

結局、シュオウが一つ、クモカリが二つ、袋を運ぶ事に決まった。

「それから、食料の支給品以外の持ち込みは不可だと言われた。もし持っていたら今ここで出せ　　まず、お前だ」

金髪の女生徒がシュオウを指さした。

「ない」

昨日の夜までは数日分の携帯食を持っていた。食料の持ち込みができないという話は事前に聞いていたので、すべて宿の人間に預けてきている。

「本当だな？　この後試験官が全員の荷物を検査する。その時になって私に恥をかかせるなよ」

次に女生徒はクモカリを見た。

「アタシも持ってないわ。信用できないなら、体中まさぐって調べてみる？」

「だ、黙れ汚らわしいツ。もういい、最後にカエル、お前も持っていないだろうな？」

問われたジロは、なぜか気まずそうに目をきよるきよる動かしている。

「…………ジロ、魚の骨持ってる。これもだめっばい？」

ジロは懐から、魚まるまる一匹分の骨を取り出した。

「あんた、それって昨日の？」

クモカリが呆れた様子で聞くと、ジロは目をそらしながら一回頷いた。

「まだ身が残ってたから、口に入れて持ってあがった」

昨日の騒ぎの最中、そんなことをしていたらしい。見上げた食意地だ。

「たとえ骨だけでもダメだ。今すぐそのへんに捨ててこい。まったく、先が思いやられるぞ」

ジロは、まだ味があるのに、と呟きながら渋々骨を捨てに行った。

女生徒の言葉通り、複数の試験官達が各小隊の荷物検査をしてもらった。

ポケットやズボンの中まで調べられ、先ほど渡された三つの背負い袋の中まで細かく検査をしたのだから、徹底している。

荷物検査を受けた従志願者の中には、ポケットにクッキーのかけらが入っていた者がいて、それだけで試験官はかなり厳しい口調で注意していた。

準備を一通り終えて、全小隊が即時出発できる状態を整えた。さて、このまま一斉に試験開始か、と身構えていたのだが、どうも一本の白道につき、一隊ずつを時間差で出発させるらしい。シユオウ達の小隊は二番手に出発する組となった。

試験場となる深界の森には、九本の白道が見える。

そのうち、最も北側に位置する白道は、整備が行き届いていて状態も良く、道幅も広い。

この状態の良い最奥の白道は、試験官達の移動と、試験後の帰り道に使われる。

残り八本の白道は、外から見える箇所だけでも、どれも同じくらい状態が悪そうだった。

次の出発時刻までの空いた時間で、小隊員達の簡単な自己紹介が交わされた。

金髪で、高圧的な態度の女生徒の名前は、アイセ・モートレッド准輝士候補生。手の甲には淡い緑色の輝石がある。

身長は女性としては平均的なくらいで、高くも低くもない。しかし、引き締まった長い足と、小顔のおかげか、全体的なスタイルは抜群と言っても過言ではないくらい見栄えがいい。

胸の大きさはそれほどではないが、だからといって男性的な印象はなく、洗練された都会的な女性の雰囲気を漂わせている。

整った眉目と厳しい表情が、その印象をより強調していた。

彼女は、小隊の隊長でもある。

水色髪の気怠いオーラを纏った女生徒のほうは、シトリ・アウレール准晶士候補生、と投げやりに言った。

常に眠そうな瞳は、夢と現のどちらを見ているのかはつきりしない。

だがそんな昼行灯な性格からは不釣り合いな、ふくよかな胸と女性的な魅力に満ちたやわらかそうな肢体のおかげで、チラチラとシトリに視線を送る男が後を絶たない。

一般的な市井の女性なら、自分が異性にもてることを喜ぶものだが、彼女からそんな印象は一切受けなかった。

シトリの手の甲には淡い青系色の輝石がみえる。おそらくは、水を操る彩石だろう。

アイセとシトリは、どちらも背格好は大差ない。

なのに、両者から受ける印象はまるで違う。

アイセは触れれば切れてしまう鋭い刃物のようであり、シトリのほうは水面に映った曇りの日の月明かりのようにぼんやりしている。アイセは肩先まで直進する真っ直ぐ伸びた金髪。シトリのほうは腰くらいまであるフワフワとした水色の癖毛だ。

性格が髪質にまで現れるものかと、シユオウは一人感心していた。

二人の服装は、水色の上等な制服だ。

貴族の子弟が通う軍学校の制服だけあって、質は素人目にも上等だとわかる。

上は男女共に、白いシャツの上に水色の上着を羽織っている。

下は男子が紺色のズボンで、女子は同色のスカート、その下に厚手のタイツをはいている。

靴は膝下くらいまである黒のブーツだ。

「その格好で参加するつもりか？」

シユオウは思わずそんな事を聞いてしまった。

宝玉院の制服が、深界を歩くのに適していないわけではない。

彼らが身につけているものは、平民の一張羅より良品質、かつ丈

夫そつで、強度の面では心配はいらないだろう。

だが、深界を歩くにはあまりに綺麗すぎて、汚してしまうのはもつたない気がしたのだ。

「当たり前だ。お前達とはかく、私たちにとっては卒業試験なのだから」

案の定、アイセはシュオウの発言を一蹴した。

シュオウ達の小隊が出発する時間となった。

開始地点に、横一列に八組の小隊が並ぶ。

シュオウの小隊は、最奥の試験官移動用の白道から四番目の白道を指定された。

同じ道に、昨日シュオウに酒を浴びせた傭兵くずれと、アイセ達にからんできた男子生徒のいる小隊が先に入っている。

試験官が剣を抜き、上に掲げて振り下ろした。

スタートの合図だ。

横一列に並んだ小隊が、各白道へ向けていつせいに駆けだした。

勢いよく走りだしたアイセに引きずられるように、シュオウ達は小走り以後を追った。

いまはもう使われていないという古道は、入り口からは若干広く見えたが、実際に中に入ってみると、奥に行くほど道が狭くなっているのがわかる。

古道の入り口に入ってすぐ、シュオウは全員を止めた。

「待て」

「なんだ、忘れ物なら今更無理だぞ」

スタート時の勢いそのままに奥へ走り込もうとしていたアイセは、煩わしそうにシュオウを睨んだ。

「渡された荷物の中身を調べていない。本格的に奥へ行く前に把握しておきたい」

「そんなこと、もう少し先へ行ってから休憩のときにでも」

シュオウはアイセの返事を待たずに、自身の背負っていた袋を降ろして中身を確認した。

クモカリも地面に二つの袋を降ろした。

言うことを聞けと喚くアイセを無視して袋を開ける。

シュオウの持っていたほうには水を入れた革袋が入っていた。雨の多い森には、あちらこちらに水溜まりがあるので、補給の心配はいらないうららう。

他に、パン、干した肉や乾燥した豆料理、蜜漬けの果物が入った小瓶等の保存食が詰められていた。

クモカリの持っていた袋の一つには、折りたたみ式のテントと、寝袋、ロープやランプ、火おこしの道具といった野外向けの寝具や雑貨が入っている。

野宿をするには、まあまあな装備とあっていい。

問題は、最初にシュオウが渡された底が抜けそうなほど重い袋だった。

中には丈夫そうな太った袋が入っていて、そこに手をつ突っ込むとジャラジャラと細かい粒の感触がした。

「米、か」

「けつこうな量みたいね。これだけあれば五人で一ヶ月、食べるのには困らなそうよ」

クモカリが米を手で掬い、上からさらさらと落とした。

「当たり前だ、この試験の目的は目標地点までの踏破であって、参加者を飢え死にさせるものじゃないんだからな」

米は栄養もあつて腹持ちもいい。

炊かずに置いておけばすぐに腐ることはないし、旅の主食としては贅沢なくらいだ。

だが、シユオウは解せない気持ちを抱えていた。

「目的地まではどれくらいかかる？」

シユオウの質問にアイセは眉間に皺を寄せた。

「試験期間は今日から一ヶ月だが、毎年早い小隊で二週間くらいで目的地まで辿りつくらしい。遅くても三週間もすれば、一通りの小隊は指定地点まで到達すると聞いている」

目的地までは最速で二週間、遅くても三週間はかかるらしい。だがどちらにしてもこの米の量は多すぎる。

米は火を使って炊かなければ、まともに食べる事ができない。

シユオウ達の行く古い白道は、夜光石の効力も弱まり、道幅も馬車一つ通るのがやっと、というくらい狭い。道の左右には圧迫するように灰色の森が迫っていて、この先を行けば、奥はこれ以上狭くなっている可能性もある。そんな状況で火を使えば、匂いで狂鬼を呼び寄せてしまう危険もでてくるのだ。

上層界の生き物とは違い、狂鬼は火を怖がらない。むしろ、本来

森にないはずの臭いから人の気配を察知して襲いかかってくる。そのため、深界を行き来する仕事をしている者達は、臭いのでにくい特別な木材を使ったりと、それなりに工夫して火を使っている。当然、試験参加者達に、そんな特別な道具は渡されていない。

「この米は置いていく」

そう言うと、全員が驚いてシュオウを見た。

「なにを勝手なことを言っているツ！ さつきから調子に乗って仕切ろうとしているが、この小隊の責任者はこの私だ。大事な食料を置いていくなど、そんな勝手は許さないぞ！」

アイセはヒステリックに怒鳴って、米の入った袋を指さした。

「米は食べるために火が必要になる。森で不用意に火を使えば狂鬼を呼び寄せる。それを知っていて、わざわざこんな重たい物を運ぶ必要はない」

「火が狂鬼を呼ぶだと？ 深界については私もそれなりに習っている。白道の上で火を使っただけではいけないなんて、教わったことはないぞ」

「それは白道がまともな状態で、さらにそれなりの準備ができている場合の話だ。これから俺達が行くのは、狭くてまったく整備されていない古道だ。常識は通用しないと思っておいたほうがいい」

アイセは少したじろいだ。はじめて迷いの色が見える。

「だ、だが……」

「俺も、お前と同じ試験の参加者だということのを忘れるな。自分が死ぬかもしれない状況で、勝算のない意見を提案したりはしな

い。どうしても持って行きたいのなら好きにしろ。俺はここで抜けさせてもらう」

アイセは難しい顔で米袋を睨み、何事か考え混むように黙った。信じて貰えないのならそれまでだ。ここで判断を誤るような人間と、この試験を共に乗り切る自信はない。

「ねえ、ちよつと待って」

クモカリが手をあげてシュオウに問いかけた。

「なんだ」

「深界で素人が火を使うのは危ないっていうのは聞いたことがあるからわかるんだけど、お米を置いていくとして、残りの食べ物だけで最後までやっていけるの？」

乾燥した硬いパン、肉や豆、甘い果物などの保存食は、そこそこ節約して食べても一週間もつかどうかの量しかない。相当切り詰めれば二週間分は捻出できるかもしれないが、体力面で心配がでてる。

「米を抜いた手持ちでは、だいたい一週間、どんなに努力しても二週間で底をつくだろうな」

「だろうな、だと。まるで他人事みたいな言い方だが、森を抜けるまでに食料が尽きたら全員飢え死になんだぞ」

アイセの表情が一層険しくなる。

試験途中に食べ物がなくなってしまうのと、豊富な食料を抱えて狂鬼に襲われるのでは、はたしてどちらがましなのだろうか。この試験を管理している側が、この二択を意図的に用意したのだとし

たら、なんとも意地が悪い。

「食事の度に狂鬼に襲われる心配をしているくらいなら、少ない食料が尽きる前に森を抜けてしまおうがいい。さっき言っていたな、二週間で試験を終わらせる小隊もいる、と。なら、できるだけ食べる量を節約しつつ、二週間以内を目標に森を抜ければいい」

アイセはわずかに思案して、ようやく答えを出した。

「……………わかった。自分でもどうかしてると思うが、お前の案を受け入れよう。だけど、食料が尽きる前に森を抜けられそうになかったら、お前から食べる量を減らしてもらおうからな」

シユオウは大きく頷いた。

その程度の約束で納得してくれるなら、安いものだ。

アイセはまだ完全には納得していない様子で、すぐにシユオウから視線をそらした。

クモカリは微笑んで頷いている。ジロは黙っているが不満を抱えている様子はない。

シトリは何事もなかったかのように、眠たそうな視線を遠くへ向けていた。

小隊は灰色の森の狭い白道の上をかき分けるように進んだ。

出発した時はまだ午前中だったが、今はもう日が落ちそうな時間になっている。

ただでさえ狭い白道は、所々欠け落ちてしまっていたり、隙間から雑草が伸びていて心許ない。

同じような色のない景色が延々と先まで続いていて、墓場の中を歩いているような気味の悪さを感じる。

まるで死者の行列のように立ち並ぶ灰色の木々が、不気味な空気をより一層強めていた。

唐突に空気が静まりかえった。

小さな虫や動物の音が消えて静寂が訪れる。

遠くのほうから、地鳴りのような重たい音が、一定の間隔で聞こえてくる。

その音は、徐々に大きくなっていった。

「この音はなんだ……」

先頭を歩いていたアイセが、足を止めた。

小隊全員が緊張した面持ちでその場にしゃがみ込む。

地響きのような重低音が、皆の不安な気持ちを煽った。

前方右側の森の中から、黒い巨大な虫の足が伸びた。

歪な形をした足が、尖った先っぽを地面に降ろすたび、ズシンズシンと大きな音を鳴らしている。

足がシュオウ達の目の前に一本、二本と出てきて、ソレは姿を現した。

オウジグモ。

巨大な虫型の狂鬼で、その形は蜘蛛によく似ている。

しかし、体の大きさは大きな二階建ての家くらいあり、黄色と黒の縞模様をした硬い外皮の上には細かい体毛がはえている。

このオウジグモは、捕食するときに粘着質の糸を出して獲物の動きを封じ、捕食する。灰色の森の食物連鎖の中でも上位に位置する

狂鬼だ。

てつきり、シュオウ達に狙いを定めて現れたのかと思ったのだが、様子がおかしい。

こちらを目の前にしても、オウジグモの歩行はゆるやかで、ただこの場を横切ろうとしているだけのようだ。

こちらに気づいていない、というより、興味がないというのが適切だろう。

悠然と歩を進めるオウジグモの口元をよく見ると、人間の服の切れ端らしい布地がひっかかっていた。

食べたのだ。

おそらく、試験参加者の一人だろう。

すでに腹がふくれているオウジグモは、それ以上に余分な栄養を欲してはいない。

ならば、このままやりすごすことができる。

「全員動くな」

シュオウは囁き声で言った。

だが、遅かった。

「うああああああッ！！」

アイセが叫び声をあげながら狂鬼めがけて突進していく。

その手には、緑色に光り輝く剣の形をした晶気が握られていた。状況を一切考慮していない、完全な暴走だ。

「待てッ！」

咄嗟に止めようと声をあげるが、アイセはそのままオウジグモの足の一本に、晶気の剣で思い切り斬りかかる。

オウジグモの足に触れたアイセの晶気の剣は、オウジグモの硬い外皮にはじき返された。

結局、体毛をわずかに剃りおとしただけで、オウジグモの足には傷一つついていない。

オウジグモの歩みが、止まった。

シュオウは尻餅をついたアイセの元まで走り、後ろから抱えるようにして少しずつ後ろへ引きずった。

アイセの手にあった剣状の晶気は、すでに消えている。

抱きかかえたアイセの細い体は硬直し、震える体からカチカチと歯が鳴る音が聞こえた。

オウジグモは少し周囲を探るように頭を動かした後、再びゆっくりと歩き始めた。

やがて、巨大な狂鬼の姿は見えなくなり、地鳴りのような足音も聞こえなくなった。

周囲の空気が元に戻る。

オウジグモが通った後の白道には、足の形に穴が穿たれていた。

ジロ、クモカリはすでに立ち上がり、白道に空いた狂鬼の足跡を見物している。

だが、シトリは顔面蒼白で地面にうずくまり、アイセはシュオウの腕の中で、捨てられた子犬のように震えていた。

どうやら、この狂鬼との遭遇は、彼女たちにとっては想像を絶する体験だったようだ。

オウジグモとの遭遇から、魂が抜けたように大人しくなってしまったアイセに影響されて、小隊の進行速度は重くなってしまった。辺りも暗くなりはじめていたので、寝床の用意をはじめることにした。

折りたたみ式のテントは風を通さない丈夫な布で出来ていて、中に入ればそれなりに寒さをしのげそうだ。

そのテントを二つ、狭い道のと真ん中に向かい合うように設営した。

脇に落ちていた木の丸太を椅子がわりにして、ようやく一息つく。

シユオウは一日目の食事として、小瓶に入った蜜漬けの果物を選んだ。

甘い物には心を落ち着かせる効果も期待できる。

全員が同じ量を少しずつ口に運び、初日のわびしい夕食が終わる。

シユオウは空いた瓶を軽く洗い、水を注いだ。

それから古くなった白道の一部を手に取り、地面に落ちていた石で細かく砕いていく。

「なにしてるの？」

クモカリがシユオウの手元を覗き込んだ。

「最低限の灯りを確保する。白道は、それ自体がただの加工した夜光石だからな。細かく砕いて水に浸せば、発光する力も少しは戻るはずだ」

シユオウは壊れた白道の破片を、砂利になるくらいまで砕き、それを水の入った小瓶に入れた。

水に浸かった夜光石が、ぼんやりと白く発光する。
炎のような暖かい光ではないが、暗闇を照らすには十分な光量だ。
この光は狂鬼よけとしての効果も僅かに期待できる。
即席のランプを、二つの天幕の中心に置く。
夜光石の光が、仲間達の姿をぼんやりと照らした。
ジロは、まださっきの蜜漬け果物をモゴモゴと口の中でころがしている。
シトリは膝を抱えてうずくまり、アイセは無表情に地面を見つめて微動だにしない。

「いつまでそうしている気だ？」

シユオウはアイセに向けて声をかけた。

出発前とはまるで別人だ。

オウジグモとの遭遇から一言も話さず、虚ろな目で下ばかり見ている。

「……………ほっといてくれ」

アイセは絞り出すように、ようやく声を出した。

「そもいかない。明日からの事も含めて相談したいこともある」

「相談？」

「全員の武器、持ち物。とくに貴族のお前達は、晶気でどんなことができるのか把握しておきたい」

「……………」

アイセの返事はなかった。

自分の手の平をじっと見つめて、なにか考え込んでいる。

「え、えつと、それじゃあアタシから」

クモカリが不自然なほど明るい口調で声をあげた。

「クモカリの得物は重斧だな」

クモカリが取り出した武器は大きくて重そうな両刃の斧だ。

今朝、宿を出発した時から、クモカリはこの重そうな斧を背負っていたので、いやでも目についた。

「アタシのいた村のホラ吹きジイさんがね、若い頃これで狂鬼を狩った、なんて言ってたのよ。それで軍の仕事の出稼ぎに行くって言ったら持って行って言うじゃない？ それでなんとなくね。まあ、見ての通り力はあるほうだから、それなりに使いこなせると思うわ」

「ジロのはコレっばい」

ジロは天幕の中から小剣と小さな丸い盾を取りだして見せた。
剣は刃の部分が小さく、一般的なサイズの剣の半分くらいしかない。

盾は丸い形で、焦げ茶色の木材に、部分的に鉄で補強されている。

「お前はとうなんだ。さっき、剣のような晶気を使っていたな」

シュオウはアイセに問いかけた。

「ああ……これの事が」

アイセが左手を空中にかざすと、手の中に緑色に光る晶気の剣が現れた。

晶気の剣は大人が使う長剣と同じくらいの長さで、刃となる部分からは風が振動して高音を鳴り響かせている。

「これは……」

「風の剣だ。私が最も得意とする晶気の間だな」

「晶気は手から離して使うものだと思っていた。こんな使い方もあるんだな」

シユオウは先日の三人の輝士を思い出していた。各々が使う晶気はばらばらだったが、全員が力を飛ばす使い方をしていた。

アイセが作り出した風の剣は、普通の剣と同じように相手に斬りつけるようにして使うのだろう。晶気を投げて使うものと比べれば、もったいない力の使い方のような気もするが、もし風の剣に鉄剣のような重さがないのだとしたら、それは戦いにおいて十分な利を得ることができる。

「輝士なら誰でも、晶気のある程度思う形に構築することができる。でも、得手不得手というものはある。私の持つ輝石の力は風に属するものだが、同じ力を持つている輝士の中にも、投げて使うの形が得意な者もいれば、砂埃をまきあげて相手を攪乱するような小技が得意な者もいる。私は、たまたま得意とする晶気の間がこれだったんだ。平民だって、弓が得意な者もいれば、剣が得意な者もいるだろ」

「つまり、他の輝士達もその晶気の間を使えるのか」

「これと同じ物を構築すること自体は誰でもできる。だが、構築と持続は別だ。構築した晶気を投げるようにして使うタイプは、晶気を構築してから、溜めて、放出するまでの手順がすぐに終わる。しかし、手元で常に晶気を維持し続ける剣のような形状は、晶気を

一定量で維持し続けなければいけないくて、これはちょっと難しい。これと似たような感覚で

アイセは晶気の剣を空中に放るようにして消した。すぐに両手を前に突き出す。

そこからアイセの手の前に大きくて幅のある風の壁が構築される。

「こんなことも出来る」

「すっごいわね、まるで盾みたい」

クモカリが小さく拍手した。

それに気をよくしたのか、暗い表情で淡々と話していたアイセの表情に明るい色が戻る。

「そ、そうだろうか？ これは晶壁といって輝士なら誰でも使える力だが、私はこれを長時間維持できるのが自慢なんだ」

「輝士なら誰でも、ということは、その青髪の女も同じ事ができるのか」

シュオウはうずくまって顔を膝の間に沈めているシトリを見て言った。

「シトリは晶士だ。急速な構築が必要になる晶壁のような力は向いていない」

「その晶士という役割は、輝士とは随分違う仕事をするものなんだな。ただの軍での階級だと思っていた」

軍の階級として、輝士と晶士というものが存在することは知っていたが、その二つの明確な違いは知らなかった。

「輝士と晶士は全然違う。輝士は剣も使っし、前に出て戦うために素早く晶気を構築できる素質がなければ勤まらない。晶士は逆に晶気をじっくり練って溜め込み、高威力、または広範囲で打ち出せなければならぬ。輝士、晶士のどちらになるかは自分で選択できない。これらの適性は生まれついでのもだからな。晶士としての素質を持つ者は少なくて」

アイセが饒舌に解説を続けようとした時、シトリの不機嫌な声が、それを止めた。

「うるさいな……」

シトリが顔をあげ、アイセを横目で見た。

「朝まであんなに偉そうにしてたくせに、急にペラペラと仲良く喋りはじめちゃって、気持ち悪い」

「私は別に……。ただ、これからのために必要な説明だと思ったから」

アイセの語気がだんだんと弱くなっていく。

「それで、いつもの傲岸不遜な主席のアイセが、平民相手に輝士と晶士の違いを説明してたの？ アイセ、いつも平民は使えない、貴族とは違う生き物だって見下してたじゃん」

「そ、それは……」

「そうやって口を動かしてればさっきの事がなかったことになると思ったの？ 恐かったんでしょ、素直に認めなよ」

シトリの挑発的な言葉に、アイセはその場から立ち上がった。

「そんなわけがあるかッ！ 私はちゃんとあの狂鬼に……一太刀浴びせた。なにもせずじっとしていたお前に言われる筋合いはないッ」

静かな森に怒声が木霊した。

「そのくらいにしておけ」

シユオウが一言そう言うと、二人は少しの間睨み合って、互いに顔を背けるように座った。

「もう寝る。わたしのぶんの寝袋をちょうだい」

シユオウは袋から寝袋を一つ取り出し、それをシトリに渡した。シトリは寝袋を抱えてテントの中に入っていった。

「……………私も寝る」

アイセもそう言い残し、シトリと同じテントに入ってしまった。う。

「やれやれね。アタシももう休ませてもらうわ。あんたはどうするの？」

クモカリは疲れた顔でジロに聞いた。

「微妙っばい」

「ハッキリ言いなさいよ」

「疲れたっばい……………」

ジロは自分の肩をトントンと叩いた。

「そ、じゃあアタシたちも寝ましようか。シュオウはどうするの？」

「俺は、もう少しここにいます」

シュオウはアイセとシトリが寝ている天幕を見た。

シトリの言い方はきつかったが、たしかにアイセは自分を見失っているように思えた。

今朝までの自信に満ちた瞳は、いまや虚ろで視点も定まらない。

あの大きな狂鬼との遭遇が、彼女の自尊心を打ち砕いてしまうほどの出来事だったのだとしたら、よほどの温室で育てられてきたのだろうか。

後ろの天幕からクモカリのイビキが聞こえてくる。

貴族の娘達も含め、彼らには見張りをする、という考えも浮かばないらしい。

シュオウは砕いた夜光石を小瓶に入れた。

こうして一晩中、少しずつ足していかないと、すぐに光は弱くなってしまう。

この時期、夜になると平地にある深界でも寒さが厳しい。

不安のせいかわ、シュオウは眠気を感じなかった。あるいは、慣れ親しんだ森の空気のおかげかもしれない。

シュオウは外套を目深にかぶり、暖をとった。

こうして、このまま夜明けがくるのを待つだけだ。

試験二日目の早朝。

曇り空がわずかに明るさを帯び始める頃、正面のテントからシトリが目をこすりながら起き出してきた。

「早いよね」

シユオウはまともな寝ていない。そのことを知らなければ、たしかに誰よりも早起きしたようにしか見えないだろう。

「まだ暗い。出発はもう少し明るくなってからだ。その時になったら全員起こすから、もう少し横になっている」

シトリは天幕へは戻らず、シユオウの横にピッタリとくっつく形で座り込んだ。

女性特有の甘い香りが、シユオウの鼻孔をくすぐった。

「それで、君は一番最初に起きてみんなを起こす係？ それってお人好しすぎ」

シトリが下から覗き込んでくるように言った。

どこを見ているのかはつきりしない、ぼんやりとした青い双眸が、上目遣いでシユオウを見る。

シトリは、全体的に見た目が青い。

髪も目も青系色で、着ている制服もそうだ。おまけに左手の輝石までが淡い水色をしている。

そんなシトリをまじまじと見つめっていると、まるで深い水底に引

きずり込まれていくような感覚に囚われる。

それは、シトリが女性的な魅力に溢れていることも、一因なのかもしれない。

シユオウは平常心が揺らいでいるのを自覚し、咄嗟にシトリから距離をとり、対面に座した。

「いきなりそれって失礼じゃない」

シトリは下唇を噛みながら、半眼でシユオウを見た。

「突然他人にくつつくのは失礼じゃないのか。それとも、こんなことが当たり前になるくらい、日常的に男の側に座るのか」

「やめてツ。そんなことあるわけないじゃない、気持ち悪い」

「だったら」

「胸や腰ばかり見てくる男なんてキモイだけじゃん。でも、君は近くにいてもわたしの体をジロジロ見たりしなかったでしょ？ なんとなくだけど、君は他の男達とは持つてるものが違う気がする。空気が違うっていうか」

「空気が違う……」

「だから、生まれて初めて色仕掛けっていうのをやってみてもいかなって思っただけ」

もし、シトリがシユオウに対して安心感を抱いたのだとしたら、それは大いなる勘違いだ。

シトリに体を寄せられたとき、その色香に心がグラついた。

シユオウも男としての欲求は当たり前前に持っているし、それを意図的に隠すつもりもない。

シトリから距離をとったのは、ただ単純に、女に慣れていないからだ。

子供の頃は論外として、思春期を共に過ごした女性は師匠のアマネだけ。

アマネは育ての親として、また師として敬愛していた相手で、異性として強く意識したことはなかった。

「ちよつと待て、どうして俺に色仕掛けをする必要がある？」

「君に、お願いしたいことがある」

ぼやぼやとしたシトリにはめずらしく、真剣な視線を向けてくる。

「……なんだ？」

「聞いてくれる？」

「聞くだけなら、な」

シトリは軽く咳払いをする。そして、小声で突拍子もないことを言った。

「わたしを王都まで連れて戻って欲しいの」

なにを言われるかと身構えていたシュオウだったが、これには流石にとまどった。

「ここまで来て、今更なにを」

「わたしはこの試験を棄権したい。最初から、こんなバカみたいな試験参加したくなかったんだけど、パパが世間体を気にして、どうしても出てくれてウルサイから仕方なく出ただけ。昨日みたいな、あんな大きな化け物が出るって知ってたら、こんなところ絶対にこなかった」

初めて見た時からやる気のなさそうな様子だったが、本当にやる

気がなかったようだ。

試験に参加したくないという気持ちが、昨日の狂鬼との遭遇で一気に噴出したのだろう。

シトリはあくまで冷静に、余裕を持って話しているように振る舞っているが、しきりに唇を噛んだり、体をゆすったりして、精神的に不安定になっているのが見てとれる。

シトリが継るように言葉を紡いだ。

「お願い」

「どうして俺に？」

「アイセがいない時に、二人きりで話せているから、というのもあるけど、君は言動を見てみると深界にすぐ慣れていそうだから。昨日のあののでかいのに会ったときだって、アイセを助けるくらい余裕があったのは君だけだった。だから、ここから王都までわたしを護衛するくらい簡単でしょ？ もし、このお願いをきいてくれるなら、君が貰うはずだったお金の二倍、ううん、三倍払う。だから

「

「断る」

「どうして!？」

「信用できない。会ってまだ間もない。おまけにまともに話したのはこれが初めて。そんな相手の言葉を信じられるわけがない。言われるままに王都へ連れて行って、お尋ね者にされるのは困る」

「でも」

「この話は終わりだ。そろそろみんなを起こすぞ」

厄介だ。

小隊のうち四人は深界については素人。

そのうち二人は貴族のお嬢様。一人は自慢の鼻を折られた自信過剰な女で、もう一人は始めからやる気のないうえに、途中棄権を希望している、軟弱で協調性のかけらもないお姫様。

はたして、彼らと共に、無事森を抜けることができるのだろうか。

朝日が薄雲を照らし、辺りは明るくなりはじめている。

いまだにテントの中でのんきに眠る三人を起こして、ここを出発する頃には丁度良い時間になっているだろう。

午前中はなんら代わり映えしない、森の景色の中を歩き続けた。主導権を握ろうとするアイセは先頭を歩き、シュオウに途中棄権の手伝いを依頼したシトリは、重そうな足取りで最後尾を歩いている。

時刻が正午をまわる頃、これまで出発してからずっと一本道だった白道が、突如二股に分かれる地点にさしかかった。

道は左右に分かれていて、どちらを選択するかによっては状況が大きく変わってくるかもしれない。

「最初の分かれ道、か」

アイセは腰に手を当て、左右の道を見比べている。

「目標地点まで一直線じゃないんだな」

シュオウがそう言うと、シトリは当たり前だ、と言って返した。

「そういえば地図を渡されていたんだっ」

アイセは服の内ポケットから、古ぼけた皮に書かれた地図を取り出した。

「その地図の通りに進めばいいのか？」

「残念ながら、そんなに簡単にはいかない。この試験で使われる古道は長い年月をかけて少しずつ森に浸食されている。だから、地図に書いてある道でも、途中で森に塞がれていたりするらしい。この地図は自分達の現在位置を知るのに使えるくらいだな」

アイセから地図を受け取る。

インクがぼやけ、すでに消えかかっている箇所もあるが、まだ全体を見ることが出来る。

はじまりの部分から八本の道が大きく描かれている。道が左右に分かれている最初の分岐路が現在地だ。この二つに分かれる道の先には、さらに分岐地点がある。その様はまるで出来損ないの蜘蛛の巣のようでもある。

選ぶ道によつては行き止まりになってしまふあたり、自然の作り出した迷宮のようなものだ。

「これほど道が分岐しているのは想定外だ。もし選んだ道の先が森で塞がれていたら、時間を大きく消費してしまう」

「別に大したこともないだろ。道を間違えたら戻ればいいだけだ」

「忘れたのか、俺達は試験開始時点で食料を置いてきている」

「あッ……」

アイセの顔に陰りが差した。

もしも道の選択を間違えた場合は大幅に引き返さなければならぬ。その分にかかる余計な時間は、小隊の食料事情を考えると大きな痛手となるだろう。

シユオウ一人なら森の中を突っ切ることはできる。だが、慣れない同行者四人を連れて森の中を歩くのは自殺行為だ。

森の中には、鉄を溶かすほど強力な酸を吐く植物や、動物の鼻や耳から進入して中から内蔵を食い荒らす虫のような、危険な動植物がたくさんいる。

安全な上層界で日常生活を送るほとんどの人間にとって、灰色の森の中は、入れば命を落とす死の世界への入り口に等しい。

「……明日から、食事は夜だけにしよう」

「朝食は硬いパンをちよつとと、一口くらいの大さきの干し肉だけだったのに、これ以上減らすの？ ……そんなに深刻？」

クモカリは胃の上に手を置きながら、不安げに聞いた。

「その通りだ。行き止まりの道を選んでしまった場合に備えて、食料は少しでも確保しておきたい」

「仕方ないみたいね……はあ、頭では納得できるけど、お腹はそうもいかないわね」

クモカリの腹が、グウと大きな音を鳴らした。

クモカリほどの巨体を維持するには、現状の食分量では足りないのだろう。気の毒に思う気持ちはあるが、仕方がない。

気がつくくと、全員の視線がシユオウに集まっていた。

その表情は一樣に暗く、不安に満ちている。

シユオウの緊張した表情と声が、彼らにも伝染してしまったのかもしれない。

「心配するな。まだ悲観するような状況じゃない」

アイセがゆっくりと強く頷いた。

「うむ。今はとにかく行けるだけ先に進もう。ところで、

右と左、どちらの道を選ぶべきだろうか」

「今の段階では、どちらを選ぶのが最良なのか判断できない。だから、好きなほうを選べばいい」

「……私がか？」

「隊長なんだろう」

「む、そうだな。それじゃあ、左だッ。左に行くぞ！」

アイセは宣言して左の道への一步を踏み出した。が、すぐに倒れ込むようにしてその場にしゃがみこんでしまう。

「痛ッ」

「どうした？」

シトリを除いた三人が、アイセの元に駆け寄った。

「怪我か？」

「足が……いや、なんでもない」

アイセの額には脂汗がにじみ出ている。

「ちょっと、どうみても大丈夫そうには見えないわよ。休んでいったほうがいいんじゃない」

クモカリがしゃがみ込んで、アイセの様子を心配そうに伺う。

「必要ないッ。私のことはいいから、早く行こう。お前達、先に行け」

「はいはい……………まったく心配してあげてるのに」

クモカリとジロは渋々先頭を歩きはじめた。シュオウもそれに続く。

振り返ると、アイセが必死の形相で足を一歩ずつ踏み込んでいた。貴族として不自由なく育ったお嬢様の割には、泣き言を言わないアイセに、シュオウは少し感心を覚えた。

本当なら、すぐにでも休憩を入れるべきなのかもしれないが、自身に甘えを許さない彼女に敬意を払い、この場は黙って先を行くことにした。

小隊は二日目の夜を迎えていた。

シュオウ達の現在位置は、地図上で見たところ全体の三分の一にようやく届くかどうか、といった所だ。だが、これも大雑把な見立てにすぎない。

今は寢床の用意もすませて、全員が束の間の休息で体を休めている。

「く　ッ」

アイセが苦しげに声を漏らし、右を抑えた。

その対面に座るクモカリが、気遣うようにアイセに声をかける。

「ねえ、痛いんでしょ？」

「足の裏が少しチクチクするだけだ。たいしたことはない」

「たいしたことないって……嘘だつてバレバレよ。顔が青ざめてるし、変な汗だつてかいてるじゃない……」

アイセは日中、痛みを堪えてよく歩いていた。

結局、シュオウはその事に気づいていながらも、最初に見逃してしまったことで、再び声をかけるタイミングを逸してしまった。

この自信過剰で強情なお嬢様に半端な同情をかければ、意固地になつてしまうのではないか、という心配もあった。だが、それにしても無理をさせすぎてしまった。

シュオウはアイセに向き合い、言った。

「脱げ」

「……………は？」

全員の視線がシュオウに集まった。アイセは目を丸くして聞き返した。

「い、今なんて言ったんだ」

「脱げ、と言ったんだ。その靴と、脚に履いているものだ。怪我を見てやる」

「お、脅かすなッ」

シュオウはポケットから一輪の花を取り出した。

「花？」

「ポルタレンという、深界にだけ咲く花だ。どこでもすぐに見つかる物じゃないが、偶然道ばたに咲いているのを見つけたから摘んでおいた」

アイセの青ざめて見えた顔が、瞬時に火照ったように紅潮する。

「ま、待てッ、会ってまだ間もないというのに、いきなり花を贈られるというのは」

「この花が出す蜜には鎮痛効果があるんだ。妙な勘違いをするな」

真面目な顔でシュオウがそう言うと、アイセの顔面が凍り付いた。

「あ、アハハハハ、冗談だ、今は冗談……。準備するから、少し向こうをむいていてくれ。お前達もだ、絶対見るなよ」

アイセはクモカリとジロにも念を押した。

「いやねえ、女の体になんてこれっぽっちも興味なんかないわよ」

「ジロも、人間のメスに興味なしなし」

二人はぶつぶつ言いながらも、テントの中に入っていった。

「いいぞ」

準備を終えたアイセは、こちらに背を向けたままだったので、シュオウは反対側にまわった。

アイセは左足を前に投げ出し、その上に右足を乗せている。

しゃがんでアイセの右足の裏を見ると、皮が擦りむけて固まった血でガビガビになっていた。見ていただけで痛々しい。

「ひどいな。一度水で綺麗に洗ってから処置しよう」

シュオウはアイセの傷ついた足をそつと水で洗った。

傷口に触れる水とシュオウの指で相当痛いはずだ。

アイセは苦痛に顔を歪めながらも、シュオウの手を止めることはしなかった。

ボルタレンの花を取り出し、花を逆さにして絞る。すると、そこからトロリとした透明な蜜が指の上に落ちてくる。

このボルタレンという花は、自らが分泌する蜜で小さな虫を誘い、蜜に含まれる麻痺性の毒で痺れさせて捕食する食虫花だ。

蜜は人体にもわずかながら効果があり、痺れさせる成分が、強力な鎮痛効果をもたらす。

こういった深界のものに関する知識は、すべて師匠からの受け売りだ。

「お前は、深界に詳しいんだな。出発してすぐの火の件もそうだが、怪我のときに使える花を知っているなんて、まるで医者か学者みたいだ」

アイセは神妙な面持ちで、傷口を洗い流すシュオウに語りかけた。

「俺を育ててくれた人が詳しくかった。その人から色々と学んだからな」

「育ててくれた、というと、お前は孤児だったのか？」

「そんなところだ」

「そうか……」

火山のように赤くはじけた足の裏にこびりついた血を綺麗に洗い流し、小指に塗ったボルタレンの蜜を丁寧に患部に塗布していく。

すると、アイセが体を強ばらせ、妙な声をあげた。

「あッ」

「痛かったか？」

「ち、違う。痛くはないけど、触り方が優しすぎてくすぐったいんだ」

「我慢だ。すぐ終わらせる」

シユオウは処置を続けた。

アイセは唇を噛み、目を摘むって身悶えている。

右足だけは固定しているので、蜜を塗るのに困ることはないのだが、さつきからアイセが体をくねらせているせいで、スカートの中から伸びる白い太股が、シユオウの視線を誘ってくるのが誤算だった。

目の前で繰り広げられる、艶めかしい光景に、その気はなくとも口の中に唾液が溜まり、ゴクリと喉を鳴らしてしまう。

シユオウはもっと見ていたい、という誘惑を振り払い、傷口を凝視して作業に集中した。

頭を冷やすために、必死で別の事を考える。

思い出したのは、子供の頃の事。

シユオウがひどい傷を負う度に、師匠がこうして傷を洗ってボールタレンの蜜を塗ってくれた。

そこだけを考えて美しい思い出だが、よくよく思い出すと、シユオウの体出来る傷や怪我の原因は、師匠その人からもたらされたものだった。美しい思い出というよりは、恐ろしい思い出といったほうがいい。

「終わった。あとは綺麗な布を巻いて、明日までできるだけ負担をかけないように、安静に」

探してみると、雑貨の入った袋の中に包帯があったので、それをアイセの右足に丁寧に巻いた。

「……痛みが消えた。すごいぞ！ あんなに痛かったのに、なにもなかったみたいに痛くない」

アイセは靴を履いて地面を何度も踏み、喜びの表情でシュオウを見た。

「蜜には鎮痛効果はあっても癒す薬としての効果はないからな。あまり無理はするなよ」

「あ、ありがとう……」

「え？」

「ち、ちょっと中で着替えてくる。汗をたくさんかいたからな」

アイセはシュオウと目をあわず、あわてた様子で自分の天幕へ入っていった。

シュオウの耳には、たしかに、ありがとう、という言葉が届いていた。

初対面ときは、互いに良い印象を持ってはいなかったはずなのに、不思議なものだ。

今のシュオウは、アイセに対してそう悪くない感情が芽生え始めている。

シュオウは地面に腰を下ろした。

すると、突然ぬるりと横から足が伸びてきた。

今この場にいるのはシュオウと、そして朝出発してから一度も口を開いていないシトリだけだ。

「なんだ、これは」

「足だけだ」

「見ればわかる。というか、居たんだな」

「酷いこと言うんだね。さっきからずっとここにいるのに」

「黙って俯いてばかりいたから、存在をすっかり忘れていた。

で？」

シトリは依然として足をシュオウの前に投げ出したままだ。

「わたしも足が痛い。アイセにしたことと同じ事をして」

「だめだ。ここに来るまで普通に歩いてた。怪我をしているように見えなかったぞ。それに、蜜はさっきので使い切った」

「ふうん……ねえ、もし、わたしが怪我したら、同じように治療してくれる？」

「さあな。するんじゃないのか。同じ花があれば、だが」

要領を得ない会話に苛立ちを感じて、投げやりに言った。

「冷たいね。アイセには妙に優しくしてるのに。もしかしてご機嫌とり？ アイセに取り入って、将来雇ってもらいたいとか？ わたしを王都へ連れて帰ってくれるなら、パパにお願いして仕事を紹介してあげる。アイセの家ほどじゃないけど、うちだって子爵家で、それなりに裕福なんだから」

「余計なお世話だ。これからのために必要だから怪我を見てやった、それだけだ」

「ふうん……あつそ」

シトリはふてくされたように足を引っ込めて、ぷいと余所を向いた。

結局、そのままだんまりを決め込んでしまったシトリが、いったいなにをしたかったのか、シュオウには解らないままだった。

この日の食事は、ほんの少しのパンと赤ワインで煮込んだ豆料理だ。

パンは長期保存用に、乾いていて硬く、味も素っ気ない。

豆料理のほうは細切れにした野菜と一緒に煮込み、調味料をくわえてあるので味はまあまあだ。

全員に同じ分量を分配し、少しずつそれを食べる。

昨日までとは違い、皆の間に自然と会話が交わされて、和やかな空気が満ちている。

それは、硬かったアイセの態度が軟化したのが大きな要因なのかもしれない。

「みんなに言っておきたいことがある」

皆が食事を終えて間もなく、アイセが姿勢を正して、注目を集めた。

アイセは座ったまま、深く頭を下げる。

「どうしちゃったのよ急に」

クモカリは啞然として声をあげた。

「私の性格が頑固で融通が利かないというのは、よく言われる。

だが、自分の失敗を認めるくらいの余裕はあるつもりだ。昨日、シトリが言っていた通りだ。お前達が平民だというだけで知りもしないで一方的に見下していた。それが間違いだったと知った。その

「

アイセはシュオウを見て言い淀んだ。
直感で、シュオウはアイセの望んでいる言葉を咄嗟に思いつく。

「シュオウだ」

「シュオウのおかげだ。お前は私よりよほど物を知っている。言うことや行動も的確で、私なんかとは全然違う。平民にもこんな人間がいるのかと思ったら、それを見下していた自分が、なんだくだらな存在に思えてきてしまった」

「たまたま深界についての知識があっただけだ。俺にも知らない事は山とある」

「だとしてもだ、お前は頼りになるじゃないか。落ち着いているし、冷静だ。そんな姿を見ていると自分と比べてしまっただけで情けない気持ちになるんだ」

しゅんと弱気になってしまったアイセを前にして、シュオウは二の句が継げなくなってしまうた。

僅かな沈黙が訪れる。

「アタシの故郷は鉾山街だね」

不意に、クモカ리가ゆっくりと自分の事を話し始めた。

「アタシも小さい頃から採掘を手伝って、けっこうな重労働だったから、気がついたらこんなに筋肉もついちゃったのよ」

クモカリは腕に力を入れて、たくましい筋肉を披露した。

「なにが言いたいんだ」

「要するに、掘る事に関しちゃ、アタシの知識と経験はちよつとしたもんなのよ。この中で採掘なんてしたことある人いる？ いないでしょ。つまりそういうことよ。誰にでも出来る事と出来ない事があるの。自分に出来ない事があって、側にそれを出来る人がいるなら、その人に助けてもらえばいい。でも、自分はその人に出来ない事ができちゃったり、知らないことを知ったりすることもあるんだから」

「助け合い、ということっばい」

ジロはキリッとした表情で頷いた。

「そうか……その通りだな。私も精々この試験の間に学ばせてもらおう。いいか？」

アイセはなぜかシュオウを見て言った。

「知っている事なら、な」

「さっそくだが、一つ教えてほしい事がある」

シュオウは黙って頷き、続きを促した。

「昨日の、あのでかい狂鬼の事だ。正直、恐ろしくて考えないようにはしていたが、これから先も、あんなのがウヨウヨしているのか？」

「この白道は狭いうえに古い。狂鬼除けの効果も期待できないから、これから狂鬼と遭遇する可能性は、一般的な白道とは比べものにならないくらい高くなるはずだ」

アイセは自分の手の平を見つめて、自問するかのように呟いた。

「あの狂鬼には私の晶気が通用しなかった。もし、またあんなのに遭遇して、こちらを狙ってきたらと思うと………」

「虫型の狂鬼は外皮の硬い種類が多い。獣型の狂鬼の大半は、単純な鉄剣でも傷はつけられる」

「そうか。なら、私にも名譽挽回の機会はあるかもしれないな。先のこととはわからないが、できるだけ順調な旅になるよう祈ろう。

今日は先に休ませてもらう。話せてよかった」

アイセが天幕に入り、シトリも無言で続いた。

クモカリとジロも寝袋を抱えて寢床に入って、夜の一時は解散となった。

皆、あまり口にはしないが、一日中歩きずくめで疲れきっているはずだ。

シユオウも、クモカリに休むように促されたが、後で休むと言ってやんわり断った。

外套を深くかぶり、体を抱え込むようにして丸くなる。この姿勢で目を閉じているだけでも、体力を温存できる。

静かで長い夜を、そうして孤独に過ごした。

「やっぱり起きてた」

早朝、といってもまだ夜中といってもいいくらい辺りは暗い。小瓶に夜光石のかけらを追加していると、シトリが目をこすりながら起き出してきた。

「まだ寝ててもいいぞ。今日もかなりの距離を歩くことになる」
「もう十分。下がゴツゴツしてて、寝てても体が痛いだけだし」

それに返事はせず、黙々と作業を続けた。
空気は身を切るように冷たい。

シトリはシュオウの正面に座り、手持ちの上等な外套を羽織って、手を擦りながら暖かい息を吹きかけた。

「なにか喋って。もう、いまさら連れて戻れ、なんて言わないから」

シトリのぼんやりとした碧眼が、シュオウをじつと見つめる。

「他の奴がいないとよく喋るんだな。話し相手が欲しいなら、俺よりクモカリやアイセのほうが向いてるだろ。普段から積極的に話しかけたらどうだ」

「いやよ。集団で馴れ合うのってダルいだけじゃん。昨日のアイセとかさ、突然良い子ちゃんになっちゃって、ほんとにバカみたい」

シトリは抑揚のない声で淡々と言った。感情がこもっていないので、どこまで本気で言っているのか把握しにくい。

「見ているかぎり、アイセにきついようだな。嫌いなのか？」
「だーいっ嫌い。いっつも自分は正しいです、みたいな態度でさ。真面目で努力家で、ほんとに見てるだけで暑苦しい」

「真面目で努力家なのは良い事だろ」

シュオウが言ったことを受けて、シトリの表情が険しくなった。

「ふーん……アイセをかばうの？」

「そうじゃない。けど、必死で努力をして頑張っている人間を笑うようなことはしたくないだけだ」

「つまんなあい。もう少し寝るから、時間がきたら起こしてよね」

そう言ってシトリはさっさと天幕へ戻って行ってしまった。

なんなんだ。

シトリとはまともに会話が続かない。

なんとなく腑に落ちない物を感じながら、シュオウは一人首をかしげた。

午前中、全員が起きてテントを片付け、早々に出発した。

今日から朝食は抜くことになっている。

空腹に耐えるように、クモカリとジロが腹を押さえていた。

夜のわずかな食事だけで体力がもつか心配だが、今は仕方がない。アイセの足は昨日より状態が良いようで、蜜の鎮痛効果も継続しているのか、足取りも軽やかに元気よく先頭を歩いている。

歩き出して間もなく、道の先が二股に分かれる分岐路にさしかかった。

だが、徐々にそこに近づくにつれ、シュオウは尋常ではない気配

を感じ取り、皆の足を止めた。

「待て、様子がおかしい」

「どうした？」

アイセが立ち止まり、こちらを振り向く。

「臭いだ……………森とは違う臭いがする」

微風に乗って、わずかに届く微かな違和感。

空気が苦い。

そう感じた瞬間、記憶からこの臭いを思い出した。

「火、か」

「火だと？　　そうか、先に入ったあいつらか。もう追いつ

いてしまったんだな」

シュオウ達の行く白道は、出発前に先に入った小隊があった。

アイセにからんだ貴族の男子生徒と、シュオウ達に喧嘩をふっかけた傭兵くずれ達がいる小隊だ。

途中道が二つに分かれていたが、彼らも同じ道を選択したのだらう。

それなら火の臭いがしても不思議はない。

だが、シュオウの不安は晴れない。

風で運ばれてきた火の臭いの中に、かすかに血の臭気が混じっていたからだ。

「全員ここで待っていてくれ。俺はこの先の様子を調べてくる」

「奴らを警戒しているのなら心配無用だぞ。森の中での試験参加者同士の敵対行動は禁止されている」

「それは心配していない。ただ、気になるんだ」

「気になるって、なにがだ？」

「この先から嫌な気配がする。先に行つてたしかめてから合図を送る。それまで待て」

緊張が必要な事態だと教えるために、強い調子でアイセに告げた。

「わ、わかつた」

「クモカリ、俺の荷物を頼めるか」

「まかせて」

シユオウは背負っていた袋をクモカリに手渡した。

「全員、身をかがめて静かにしていてくれ」

シユオウは単身で、臭いのする道の先をめざした。

身を低くし、足音を殺して少しずつ前へ進むごとに、血の臭気は強くなつていく。

緊張が高まる。

シユオウの視界に飛び込んだのは、焦げた臭いを放ちながら散らばる無数の焼けた枝。

その周辺に飛び散った大量の血と、血だまりの中に悲壮にころがる、ちぎれた人間の左腕。

少し離れたところでうつぶせに横たわった男の姿。

大地を抉つたような大きな爪痕が、ここで起きた出来事を物語っている。

狂鬼に襲われたのだ。

シユオウは感覚を研ぎ澄ませて、周囲の気配を探った。眼で全景を見渡し、耳で世界の音を聴く。

鼻はだめだ。焦げた枝の臭いと、濃厚な血の臭気で役に立たない。

狂鬼の気配はない。

狩りはすでに終わっている。

シユオウの経験が、そう断定してもいいはずだと告げていた。

腰をかめたままの状態で、倒れている男の元に駆け寄った。横たわって微動だにしない男の首元に手をあて脈を確認する。

生きている。

ドクンドクンと、力強く命の音は脈動している。

ゆっくりと男の体を仰向けに起こす。

男の顔を確認したとき、シユオウは少し戸惑った。

試験開始前日の夜、シユオウの頭に酒をかけた、あの傭兵くずれだったからだ。

「おい、しっかりしろ」

男の頬を軽く叩いて、シユオウは何度か呼びかけた。

すぐに男は絞るように呻き声をあげて、意識を取り戻した。

「……あ……う……」

「しっかりしろ。わかるか？」

「……おれ、は……生きているのか……？」
「そうみたいだ。仲間を呼んでくる　　そこで大人しくしてい
ろ」

シユオウは男をそつと地面に寝かせ、離れたところで待機してい
る小隊へ手を振って合図を送った。

間もなく、シユオウに追いついた小隊の面々は、この場の惨状に
酷く怯えていた。

血だまりと千切れた腕を見たアイセとシトリは口と鼻を抑えなが
ら、潤んだ瞳で辺りを見渡していた。

「酷いわね……」

「クモカリ、水を　　」

「あ、はい」

クモカリから水袋を受け取り、傭兵くずれの元まで戻った。

皆もシユオウに続き、横たわる男を囲むようにして集まった。

衰弱した様子の男を抱き起こし、水を与える。

男はゆっくりと確実に水を飲み下し、息を吐いた。

「ぷはあ　　」

「話せるか？」

「全身が痛い、口は、動かさそうだ」

「なにがあつた？」

傭兵くずれの男は、息を切らせながら、ゆっくりと説明しはじめ
た。

「狂鬼に襲われた……休憩中、飯を炊いていたんだ。そしたら、
突然二匹の赤い狂鬼が現れて、仲間の一人を食った。俺は咄嗟に手

をつかんだんだが、狂鬼はそれを噛み千切りやがった。俺はその後すぐに吹っ飛ばされて、たぶん意識を失ったんだな……他の奴はどうなった？ 貴族のぼっちゃん共ともう一人平民の男がいたはずだ」

「今の話にあつたこと以外の痕跡は見あたらない。おそらく逃げ出したんだろう」

「ヘッ、ははは……あいつら、俺の生死も確認しないで置いていったのか……流石は貴族様だけ、反吐が出るほど割り切つてやる、ごほッごほッ」

男は激しく咳き込んだ。

「もういい、事情はわかった。とりあえずここから離れよう。血の臭いにつられて、また狂鬼がくるかもしれない。歩けるか？」

「無理だな、右足が折れちまつてる。……俺の事は置いていけ、どのみち森のど真ん中で身動きできなくなった時点で運命は決まっちまつてたんだ」

男は投げやりに言った。

男の硬そうな髪にはわずかだが白髪が混ざっていて、外見から四十前後くらいの年齢に見える。

ヒゲをはやした年期の入った顔には、無数の傷跡が刻まれていた。この場で命乞いをしないのは、傭兵として場数を踏んできたからなのかもしれない。

自分を置いていけ、と言ったその顔に、恐怖や怯えの色は微塵もない。

あるのはただ死を受け入れ、命をあきらめた中年男の姿だけだ。

「この男を連れていく」

シュオウの言葉に、皆が難色を示した。

「気持ちわかるが、ただでさえきつい道のりなんだぞ、なのに、その……………」

アイセは言い辛そうに語尾を切った。

シュオウの意見に反対するということは、すなわち目の前の男を見殺しにすることになるからだ。本人の前ではつきりと否定し辛いのだろう。

「無理なら最初から提案しない。とにかく、今はこの男を連れて先に進もう」

まわりの返事を待たず、シュオウは男を強引に背負った。立ち上がる時、男の重さで膝が震えた。横幅があつてかなり重い。

「お、おいッ。俺はいいんだ、おろせッ！」

「黙ってる、無駄に体力を消耗するだけだ」

暴れてずり落ちそうになった男を、アイセが後ろから支えた。

「よし、お前がそこまで言うなら信じるぞ」

「くそッ……………」

男は観念したのか、それきりおとなしくなった。

「この先は分岐路になつてる。どっちを選ぶんだ？」

地面をよく見ると、わずかに人が踏み荒らした後のような形跡が、右の道のほうへと続いている。

「ここから逃げた生き残りは、右の道を選んだみたいだな。狂鬼がそれを追っている可能性もある」

地図では、この分かれ道はどちらを選んでも同じ道に繋がっている。なら、より安全である可能性が高いほうを選ぶのは当然だ。

「左へ行こう。　　いいか？」

念のためにアイセにも確認をとったが、アイセは即答で承諾した。

シュオウ達は、足の折れた傭兵くずれを加え、六人でこの場を後にした。

去り際、シュオウは後ろを振り返り、血だまりに視線を送った。

千切れた腕の甲にある灰色の輝石が、血に濡れて赤黒く見える。

側にいれば助けることが出来たのだろうか、という考えが頭をよぎって、直後にその思考を否定した。

人にかぎらず、輝石を持つすべての生き物は、輝石なくしてはこの世界で生きてはいけない。

あの腕の持ち主も、輝石のある左腕を千切られてしまった時点で、死という運命からは逃れられなかったのだ。

シュオウはやり切れない気持ちを残しつつ、この場を立ち去った。

「嘘だろ……………」

日中休まず歩き続けて、夕方を迎えて森は薄暗くなっている。にもかかわらず、シユオウ達の前に広がる光景は、まるで今日の努力を嘲笑うかのような一面の灰色の森だった。

古い白道は完全に森に飲み込まれ、この先に道があった痕跡すら探すことができない。

漂う悲壮な空気の中、アイセが膝をついて座り込んだ。

「右への道が正解だったみたいだ……………すまない」

いたたまれない気持ちになり、シユオウは謝罪を口にしていった。

「いや、あの状況では正しい判断だった。このことで誰を責めたりもできない。私も同意したからな」

アイセが力ない声で、シユオウをかばうように言った。

「そうよ、これはただ運が悪かっただけよ。でも、今日はこれ以上歩くのは無理そうね」

クモカリは暗くなった空を見上げた。

「ああ、今日はここで休むしかなさそうだ」

辺りはこうして話している間に、どんどん暗くなっていく。

明日は今日来た道を引き返さなければいけない。

そのせいで消費する時間と体力が、齒がゆかった。

夜になり、夜光石の頼りない光を囲みながらの夕食は、これまでにないくらい暗い雰囲気を漂わせていた。

皆、疲れている。食事量は最低限だし、日中は休みなく歩き続けている。

そのうえ、今日のあの出来事は、皆の心に暗い影をおとした。人の死を目の当たりにし、怪我人を連れて行くことになり、おまけに道半ばで引き返さなければいけない。

傭兵くずれの男は、ここへ来てすぐにテントの中で眠ってしまった。

ジロも疲労の色が濃く、早めに食事をすませて寝袋に入った。残った四人は、重たい空気の中で食事を口に運んでいた。

「アタシだって、この試験が命がけってことは知ってて参加したけど、実際に死ってしまうものを直視してしまうと、急に恐くなってくるわね」

クモカリは食事の手を止めて、難しい顔で不安をこぼした。

「私もそうだ。あの、血だまりの光景が頭から離れない。あそこに転がっていた腕が、もし自分のものだったら、という考えが浮かんで見ていられなかった」

アイセはパンを口に運ぶ手を止めて、視線をおとした。

「こんな危険な試験になんの意味があるのかしら。最初は命がけなのは平民だけかと思ってたけど、貴族の生徒達だって危ないんじゃない？」

「ああ、実際その通りだ。毎年、宝玉院の卒業試験での死者は、

従志願者として参加する平民だけじゃない。多いときで両手で数えきれないくらい、生徒にも死者が出る。平民は参加者の半分以上が死ぬと聞いている。そんな思いをしても、この卒業試験で合格基準に達するのは極数人なんだ」

聞けば聞くほど不可解な話だった。

いくらでも替えがきく平民とは違い、彩石を持つ貴族の数はかぎられる。

強力な晶気を操る彩石を持った貴族の軍人は、そのまま国の軍事力となるはずだ。

その貴重な卵である軍学校の生徒達を、あえて命を落とすかもしれない危険な深界に放り込むのはどういう意図があるのだろうか。

「一つ、聞きたい」

シユオウはアイセに疑問を投げた。

「なんだ？」

「さつき言っていた、試験の合格基準についてだ。平民の参加者は、試験に参加するだけで報酬が約束されているが、軍学校の卒業試験として参加している生徒達は、なにをすれば合格扱いになるんだ」

アイセは何かを言いかけて、わずかに固まった。

そして、苦虫を噛み潰したような顔で話し始めた。

「……………連れて帰ることが出来た平民の数だ。三人のうち、二人以上を連れて目標地点にたどり着ければ合格。その条件を満たさなければ、たとえ一番で目標地点に到達できたとしても不合格だ」

「まるでゲームの駒扱いね……」

クモカリにしてはめずらしく、険のこもった声だった。

アイセは何も言い返すことができず、気まずそうに視線をはずした。

「こんな試験、なんの意味もない。みんな本心ではおかしいって思ってるよ」

突如、シトリが吐き捨てるような口調で言った。

「おいッ!」

「本当のことじゃん。アイセだって、何年か前の試験でお兄さんを亡くしてるんでしょ？ 本当はこんなのおかしいって思ってるんじゃないの？」

「おまえッ」

激昂して立ち上がったアイセだったが、クモカリが鎮めるように絶妙な間で問いかける。

「ね、ねえ、お兄さんを亡くしたって本当なの？」

「………兄、といっても腹違いだし、一度も口をきいたことがなかった」

アイセは落ち着きを取り戻し、元の位置に戻った。

険悪になりかけている場の空気を読まずに、シユオウは無遠慮に疑問をぶつけた。

「話を聞くほど違和感を感じるな。親交がなかったとはいえ肉親を失って、それでも黙って試験に参加するのか？ 他の貴族の生徒

達だって、この試験で家族を失った経験をした者もいるんじゃないのか」

アイセは渋々、といった様子で答えた。

「この試験は、貴族の家に生まれた者なら全員が参加している。ある種の成人の儀式もかねているんだ。それに、卒業試験に合格することは名誉なんだ。軍で大きな仕事を与えられ、未来の出世も約束される。そうなれば家名もあがるし、親や親族は社交界で自慢できる。毎年の合格者は片手で数えられる程度だからなおさらだな。だから、試験の危険度などに不満をもっていても、それを堂々と言ったりする者はいないんだ」

「なら、合格できなければどうなる？ もう一度挑戦できるのか」

「いや、機会は一度だけだ。合格をもらえなければ辺境の冴えない仕事に飛ばされたり、事務や警備などの地味な仕事しか与えられない。当然、この手の仕事で出世は望めないから、出世欲のある者は試験に必死の覚悟で挑んでいる。数日前の私のように、な」

「たった一度の失敗で、その後の人生が左右されるのか。それでよく不満がでないな」

「我々貴族は、全員が一度は軍隊に入らなければならぬ義務がある。女なら五年、男は十年勤めれば死ぬまで年金がもらえるし、この試験で合格する者は極わずか。合格すれば羨望の的だが、不合格だからといって笑われたり、見下されるということはない。それに」

アイセはあからさまに言葉を切った。

「それに？」

「いや、なんでもない」

アイセはそれ以上話す意思がないと言わんばかりに、夕食のパンにかぶりついた。

それにしてもおかしな話だ。

試験に合格するための条件は、同小隊の三人の平民のうち、二人以上を連れて目的地まで辿り着くこと。

一見簡単そうに見えるこの条件も、食料という問題が壁となって立ちほだかる。

五人小隊に与えられる食料は、わずかな携帯食と、食べるのに火が必要となる米だ。狭く、本来の効力を発揮できなくなった古い白道で火を使うのは自殺行為。

本来自然界にあるはずのない火は、その独特な臭いで狂鬼を呼び寄せてしまう可能性が高まる。

その結果を、今日シユオウ達は目の当たりにした。

そして、そこそこの量のある米袋は、重い。

それを背負って長時間歩くのは、体格の良い大人であっても、相応な負担となり、小隊の進行速度にも影響する。

つまり、その点では試験がはじまってすぐに米を捨てていったシユオウの判断は正しかったことになる。

だが、次に問題になるのが時間だ。

米を捨てた場合、手持ちは量の少ない携帯食だけ。それが尽きる前に目標地点までたどり着くことができなければ、狂鬼に襲われなかつたとしても、いずれ餓死してしまう。

道は途中でいくつも分岐し、運が悪ければ行き止まりに当たって時間を大きく消費してしまう。

食料をすべてかかえて行けば、餓えることがないかわりに、狂鬼

に襲われる危険が高まる。

そして食べるために火が必要になる米を捨てていけば、狂鬼に襲われる確率が減り、身軽になるかわりに、食料が尽きる前に目的地までたどりつかなければならなくなる。

後者のやり方を選んでも、先を行く道が森に浸食されていけば、後戻りしなければならず、それにかかる時間により、少ない食料はさらに減る。

つまり、この試験はリーダーの責任感が強く、かつ合格することに意欲のある者ほど、苦しむ仕組みになっている、とも考えられる。

この試験は、とことん意地が悪く、参加者を苦しめるように出来ている。

このルールを最初に考えついた人間は、相当にひねくれ者で意地が悪い。

「この試験はいつからやっているんだ？」

「かなりの大昔からだぞ。ムラクモの伝統行事だからな」

「その長い歴史の中で、この試験内容を問題視する人間はいなかったのか？」

「もちろんいた。子煩悩な親などは、この試験に子供を参加させることを嫌がる者もいた。だけど、その都度」

「まただ。さつきと同じように、アイセは中途半端なところで言葉を切る。」

「言いくいことか？」

「びびってるんだよね」

シトリがアイセを嘲笑した。

「シトリッ」

「吸血公が恐くて、名前を出すのも嫌だっつて正直に言えばいいのに」

「吸血公……」

氷姫と同じような俗称なのだろうが、吸血とは穏やかではない。

「勘違いするな、別に恐くて言えなかつたんじゃない。シトリが言ったのは、ムラクモ王国軍元帥にして内政も一手に取り仕切る王轄府の長、そしてムラクモが誇る燦光石の一つ《血星石》を持つグエン・ヴラドウ元帥閣下の事だ。吸血公というのは、昔から影でそう呼ぶ者達がいるだけで、別にグエン様が人の血を吸っているからというわけじゃないぞ」

「聞いた事があるわ。数百年に渡って生き続け、ムラクモ王家を支え続ける吸血公グエン。その男は老いから逃げるために夜な夜な若い女の生き血をすすって……」

クモカリはわざと声を震わせて、芝居がかった身振りでそう言った。

「そんなわけあるか。吸血公というのは、グエン様の持つ血星石の力がどんなものなのか、一切の情報が無いせいで誰かがふざけて想像した話が広がってしまっただけなんだ。石の名前に血という言葉が入っていたせいで、適当に恐そうな話をでっちあげられたんだろっ」

「やあねえ、アタシだつてそれくらいわかつてるわよ。悪いことをしたら吸血公に血を吸われるぞっつていうのは、ムラクモでは定

番の子供を怖がらせるお話だものね」

話がそれは始めているような気がして、シユオウはその修正を
図った。

「話を戻したい。そのグエンという人物が、さっきの試験の話と
どう繋がるんだ」

「うむ……グエン様は昔からこの卒業試験を強く推しているん
だ。優秀な人材を探すためには命がけの試練が必要、というのがグ
エン様の主張だ。過去それに反対を表明した有力な貴族もいたが、
ほとんどが押さえ込まれたか、強硬に言い張った者は家ごと潰され
たと聞いたことがある。そのこともあって、試験についての不満を
語るのは、貴族の間ではどこか禁句のようになってる」

「ムラクモの王は、この件について何も言っていないのか」

グエンという男が、軍と内政を取り仕切る立場だとしても、立場
上はあくまで王の臣下だ。

試験に反対する有力貴族達が、過去に王に進言したりはしなかつ
たのだろうか。

「グエン様は三百年以上前の歴史書にも名前が出てくる。それく
らい長くムラクモを見守ってきたという事もあって、王家に絶対の
信頼をよせられている。それに、前女王陛下はすでに病で亡くなら
れ、今現在、王座は空席だ。次期王位継承者だった方は事故で命を
落とし、残されたサーサリア王女殿下が現在唯一の王位継承者だが、
当時まだ幼かった殿下を心配して、王家の燦光石である《天青石》
の継承を、グエン様が先延ばしにされている。燦光石を持つ人間は、
肉体の老い方がゆるやかになるからな」

「燦光石というのは、持って生まれる物ではないのか？」

大規模な自然災害級の力を発揮するといわれる燦光石。

この特別な輝石は、彩石と同じように血によって受け継がれると聞く。

今の話では、生後、それも時期を選んで継承できる、というふうにもとれる。

「燦光石はそれを持つ家の血を引く者のみが受け継ぐことができ特別な石なんだ。だが、その継承方法については有力貴族家の者でも知らされていない。燦光石の保有者が死ぬと、次の継承者が選ばれて、ある日突然、燦光石の新しい保有者になっている。その詳細については謎だらけだ」

「燦光石を受け継いだかどうかの基準はどうなる。言われたままに信じるのか」

「見ればわかるぞ。明らかに並の彩石とは気配が違うからな。それに、輝石はその力が強いほど重く、硬くなる性質がある。考えるだけでも不敬なことだが、その気になれば調べるのは簡単なことだ。実際に調べさせてください、なんて言う愚か者はいないがな」

「……なるほど、な」

グエンという男は、大昔からこの国の中枢で軍事と政治の両方に深く関わり、王家からの信頼も厚く、さらには燦光石の保有者でもある。これほどの傑物に意見を述べるなど、並の人間なら最初から考えることすらしないだろう。

現在は王が不在。次期王位継承者は燦光石の継承をしておらず、

まだ年若い。それらを考慮すれば、件の男は現在のムラクモにおいて、圧倒的な権力を有していることが容易に考えられる。

「話してくれて助かった。色々と理解できた」

「うん。なにか参考になったか」

「この命がけの無茶な試験は、この国の偉い人間が好んでやっていることだ、ということがわかった。それだけで十分だ」

強大な権力を手に入れた者は、ある程度自分の思い通りに生きることが出来る。わがまま、ともいえるが、力さえあれば、そうした事も許されてしまうのが人の世の常だ。矛盾だらけに思えるこの試験も、そうした権力者の趣味だといわれれば、いっそ楽に納得できる。

後ろの天幕から、傭兵くずれの大きなイビキが聞こえてくる。

「食事中だったのだが、話している間、皆なんとなく手が止まっていた。」

シユオウも、腹が減っているはずなのに、手元にあるチーズを少し嚙っただけでおいてある。

正面右側に座っているシトリが、少しずつ口に運んでいたパンを食べ終えて、チーズに手をのばした。

だが、掴み損なったのか、指先ではじかれたチーズが地面に落ちて転がってしまう。

「あッ……………」

普段、感情の色をあまり見せないシトリだが、この時は意外なほど落ち込んだ表情を見せた。

シユオウは落ちて砂埃や石粒のついたチーズを拾って、かわりに

自分の食べ残していたチーズをシトリの手の上に置いた。

「いいの………？」

「ああ。俺が一口嚙ったのでよければ」

シユオウは落ちたチーズの汚れを適当に払って、口に放り込んだ。腐汁のでた残飯にがつついていた子供時代を思えば、ほんの少し汚れただけの食べ物に抵抗感はまったくくない。

「シトリ、私のと交換してやろうか？ まだ口をつけていないんだ」

アイセは自分のチーズを見せつつ、シトリに聞いた。

「いい」

「でも、男の食べかけは抵抗があるだろ、こっちのと交換したほうがいい」

「わ………わかるかった」

シトリはシユオウの渡したチーズの塊を一口で頬張り、飲み込んでしまった。

この日の夜は、これ以降一度も会話することなく終わった。

最後に小さな争いをおこしたアイセとシトリは、それっきり互いを視界に入れようとしなかった。

冬の寒さが体に染みる深界の夜にあっても、その二人の周辺だけはさらに凍えるような空気が漂っていたような気がした。

人間は、生きていくうえでいくつもの試練に遭遇するという。いつか読んだ本でそれらしい言葉と共にそう綴られていた。

物語に登場する英雄達もまた、そんな試練を乗り越えて栄光の道を駆け昇る。

悪者を打ち倒し、人々に賞賛され、お姫様と結婚してその国の王になる。

そんな人生を夢にみたこともあった。

だというのに、現実の自分に与えられたこの試練は、あまりにも地味で苦しい。

重い。

背中に背負った傭兵くずれの事だ。

見た目以上に身が詰まっているらしい。

とにかく重い。それに硬い。

元傭兵というだけはある。なかなか鍛えられた筋肉だ。これが女性のふわふわとした柔肌なら、どれほどいいかと考えても無駄な努力でしかない。

そして、臭い。ただでさえ男臭いのに、トドメに汗臭さまで漂わせている。

眠い。

出発して早四日目となるが、その間まともな睡眠をとっていない

せいで目蓋が重かった。

疲れた。

道中、歩きながらクモカリやアイセ、時折ジロやシトリと交わす会話は楽しかったが、それでも日が出ている間は歩きっぱなしで、体力にはそこそこ自信のあるシュオウでも強烈な疲労に襲われる。なれない人付き合いと、寝不足もその一因である。

早朝から来た道を戻り、昼前には昨日のあの惨事があった場所まで戻ることができた。

血だまりはあいかわらずそこにあっただが、ころがっていた腕は消えていた。

おそらく、森の生き物に食われたのだろうが、考えるだけで気が滅入りそうだったので、だれも口にはしなかった。

分岐路の右の道を行き、そこからさらに奥へ歩を進めた。

ここまでシュオウは、昨日の傭兵くずれの男を背負って歩いてきた。

クモカリが自分が背負うことを申し出たが断った。重斧を背負い、かつシュオウが持っていた分とあわせて袋を二つ預けている。

シトリは荷物を持っただけで崩れてしまいそうなほど華奢だし、アイセは足を怪我している。ジロは体格の問題で無理。というわけで、実質荷物持ちとして勘定できるのは、クモカリしかない。シュオウが荷物を受け持った場合、斧と背負い袋二つを持つのは無理だ。そうして必然的に、シュオウが男を背負うことになるのである。

シュオウの首筋に、一筋の汗が流れた。

「おい」

背後から、男がシユオウを呼びかける。

「なんだ」

「降ろせ、もう十分だ」

「断る」

朝から何度したかわからない問答だ。いいかげんうんざりする。

「さつきから息があがってるじゃねえか……もういいんだ。ろくに歩けねえ怪我人をつれていけるほど、深界は甘くはねえぞ」

「甘くないのはよく知っている。いいから黙って背負われてくれ」

「……わかってるんだろ、あの夜、俺がお前達にからんだ張本人だつてことは」

「ああ」

「なんでなにも言わねえ。俺はお前の頭に酒をかけたし、そのデカイのや蛙人をバカにした。そんな俺をなぜ助ける」

「全部、過ぎたことだ」

「どうしてそう思える……憎くないのか、俺が。あの時、怪我をした俺を嗤いながら見捨てていくこともできたはずだ」

「出発前日の夜の事は、たしかに気分の良いことじゃなかった。でも、それが命と釣り合うほどの事だとは思えないんだ」

男は沈黙して息をのんだ。

「それに、助けるのが無理だと思っただら最初から連れてきたりしない。ただ、自分の手に持てるモノは持つて行く、それだけだ」

「……ちくしょう、わかったぜ、俺の負けだ……あの時の事はすまなかつた。俺はどうにも酒癖が悪くて、飲むと気が大きくなっちゃうんだ。今となっっちゃ後悔しかねえ……本当に悪いと思って

る

「許すさ　　そうだろ？」

シュオウはクモカリ、ジロの両名を見て言った。

「もちろんよ、あんなの慣れっこだし、最初から気にしてないわ」

「ジロはそんなことより、早く帰って魚を食べたいっばい……」

ジロはベロを出して溜め息を吐いた。

「だ、そうだ」

「ありがてえ。俺はボルジってんだ、呼び捨ててくれてかまわねえ。ぶつちやけた話ができたら言っておきたいんだが、もし俺がいることでお前達が本当にどうしようもないくらい苦しくなっちゃったら、ためらうことなく俺を置いていってくれ。俺はな、お前らに見捨てられなかった事が内心嬉しかったんだ、だからよ、これがせめてもの礼としてだせる俺の覚悟みたいなもので　　」

早口でまくし立てるボルジの口を、シュオウは止めた。

「ボルジ」

「んあ？　　なんだよ、まだ話は途中で」

「そろそろ黙ってくれないか。さっきから口が臭くてたまらないんだ」

「んぐッ」

「ぶッ」

小隊全員が吹き出した。

先を黙って歩いていたアイセも、後ろをのっそり歩くシトリも、

全員が笑い声をあげていた。

嘘を言ったつもりはなかったが、シユオウの言葉に不機嫌そうに口を閉じたボルジが可笑しくて、シユオウもこらえきれずに笑いがこぼれた。

状況はなにひとつ好転していない。なのに、こうして皆と笑っていられる時間が、たまらなく楽しいと感じる。

シユオウ達は歩き続けながら、その後もしばらく色々な話に花を咲かせた

五日目の昼過ぎ、道が大きく二つに分かれる分岐路にさしかかった。

一方は左にほぼ真横に伸びる道。もう一方はこのまま真っすぐ前に伸びる道だ。

特徴的なこの分かれ道は、地図上でも確認しやすい。

地図でおおまかに把握できる程度だが、かなり目標地点まで近づいているのがわかる。順調にいけば、二日ほどで森を抜けられるかもしれない

「どっちを選ぶ？」

アイセが疲れを滲ませた顔でシユオウに聞いた。

左へと続く道は別の大きな道へ続いている。その先に森を抜ける

事ができる道があればいいが、行き止まりしかなかった場合は、またここへ戻ってこなければならぬ。

地図上では、このまま真っ直ぐ進むルートを選択した場合、フォークのように三つに分かれる最後の別れ道がある。そこから伸びる三つの道はすべて目標地点まで繋がっているが、途中で森に塞がれている可能性もあるのだ。別れ道すべてが塞がれていた場合も、またここに戻ってこなければならぬ。

食料は節約しているが、ボルジの分も加えて一人あたりの配分はさらに少なくなっている。

「どちらを選んでも、先の事は未知数。運にまかせるほかないが、あえて二つの道の差を探すなら」

シユオウは左へ続く道を観察した。

よく見てみると、左への道には古くなり壊れた白道の隙間からはえる雑草に、踏まれたような形跡がある。

「ボルジを置き去りにした連中は、左の道を選択したかもしれないな」

「あいつらが……そうか。なら私達は真っ直ぐ進もう」

「あら、迷ってたのにあっさり決めちゃうのね」

クモカリが意外そうに言った。

「連中は狂鬼に襲われているし、仲間も見捨てた。そんな奴等と同じ道に行くのは縁起が悪いような気がしたんだ」

「縁起って……ババ臭いわね」

「う、うるさいッ。皆、よければ行くぞー！」

照れたように背を向けて、アイセは歩き出した。

その選択に文句をいう者はいなかった。
今のところ、どちらを選ぶにしても運にまかせる以外にない。
アイセのいう、縁起というものを判断材料にして進むのも、悪くはないだろう。

分かれ道を出発してからたいして時間もたたないうちに、薄暗い森の中から奇妙な音が聞こえてきた。

チツチツチツチツチツチツチ

舌を小刻みにならしたような高い音。

トツトツトツトツトツトツトツトツト

今度は少しだけ低音になった音が、やはり小刻みに鳴り響く。

「なんの音だ………」

皆が足を止め、アイセが緊張した面持ちで周囲を見回した。

チツチツチ、トツトツト、という不気味な音は左右から交互に聞こえてくる。

「気味が悪いっばい………」

ジロは小振りな剣と盾を構え、身を低くした。

それを合図にしたようにアイセも身構え、クモカリは荷物を置いて重斧を手に持った。

「やつらだッ、またあいつらが来たんだッ」

シュオウの背中に背負われているボルジは、震える声で言った。

森の草木が音をたてて揺れた瞬間、左右から同時に赤い狂鬼が姿を現した。

炎のようにたゆたう長い体毛。安定感のある四本足の先には、鋼のように頑丈そうな爪がある。頬まで裂けた口からは、ズラリと並んだ鋭い牙がのぞいていた。

そして額の上には、人が持つ物の三倍はある、白濁した輝石が鈍く光を反射している。

形こそ犬や狼とそっくりだが、その大きさは前足の長さだけでシュオウの身長と同じくらいある。

レッドアゲート、と名付けられたこの狂鬼は、シュオウのいた森にはあまり生息していなかった。

姿を見たことはあるが、そのときは安全な場所で遠目から見ただけで、これほど近くで相対するのは初めてである。

「こいつらだ、まちがいねえ！ 俺の隊を襲った二匹の狂鬼だッ」

レッドアゲートは群れで行動する獣の狂鬼だ。彼らは二体以上の群れをつくり、連携して獲物を狩る。

レッドアゲートのような獣型の狂鬼は、その行動に計算が含まれている。虫型狂鬼のように丈夫な外皮こそ持っていないが、素早さと狡猾さは侮れない。

「よ、よしッ、わ、わ、私にまかせておけ！」

アイセはそう叫んで、晶気の剣を構築した。

レッドアゲートはシュオウ達の前と後ろに立ちほだかり、少しず

つ後ろに間合いをとっている。

小隊の隊列は、前にクモカリとジロ。中央にアイセとシトリ。後方はボルジを背負ったままのシュオウがいるだけだ。

トルトルトルトルトル

ツツツツツツツツツ

あの不気味な音が、前後の狂鬼から聞こえてくる。

会話しているのか。

二匹の狂鬼は、舌を鳴らしてあの音を出している。互いにしかわからない方法で連絡を取り合っているのだ。

おそらくは、狩りの手順を。

どうする。

後方に陣取った狂鬼は、徐々に後退している。なぜか殺気は感じなかった。

急な事態を迎えた場合、咄嗟に最善の手を判断するのは難しい。

こころした場合、もっとも頼りになるのは経験だ。

森や狂鬼についての経験はそれなりにあるが、それはすべて自分一人だけで対処する場合で、仲間がいたり、怪我人を背負っている今のような状況での経験はない。

なにをどうすればいいのか、咄嗟に考えが浮かばない。

どうすれば。

対抗策を考える間もなく、前方の狂鬼は動く。後退をやめ、ジグザグに道を縫うようにこちら目がけて疾走した。アイセは晶気の剣を構えるだけで、恐怖でヒザがわらっている。これでは頼りにすることはできそうもない。

「防御だ！」

シュオウは叫んだ。

咄嗟のことだったが、クモカリは重斧の平らな部分を前にだし、ジロも盾を両手でしっかりと持って攻撃にそなえた。

目の前まで迫ったレッドアゲートが、前足の爪でクモカリとジロに襲いかかる。

振りかぶられた前足は、クモカリの斧に当たり、ギイイイと金属をひっかく嫌な音をたてた。

レッドアゲートは即座に爪を離し、素早く後退して距離をとった。

おかしい。

クモカリは並の人間よりはるかに筋肉質で、斧も盾として使うのに、強度は申し分ない。

だが、それにしても今の一撃は軽かった。本当なら斧ごと飛ばされそうになってもおかしくない。なのに、爪が軽く触れただけで狂鬼は攻撃の手を止めた。

まるで様子を見ているか、獲物を眺めているようだ。

後ろに陣取って動かないもう一体のレッドアゲートは、近いとも遠いともいえないような絶妙な位置でこちらを伺っている。

そのレッドアゲートの赤い眼が、シュオウを視ていた。

狙いは俺……いや。

レッドアゲートの視線はシュオウとは重ならない。その先にあるのは、シュオウの背にいる怪我人。

本当の狙いはボルジか。

はじめから、彼らはこの人間の群れの中でもっとも弱っているものに狙いをつけた。

だとすれば、一方が陽動するようにやる気のない攻撃体勢を見せ、後方の一体がなにかを待つように動かない理由も理解できる。

レッドアゲートのように群れで行動する狂鬼は基本的に臆病なのだ。

できるだけ狩りの危険度を減らし、欲張らずに標的と定めた獲物のみを得ようとし、狩りの方法はもっぱら追い込み役と獲物に襲いかかる役に分けられている。

彼らは待っている。

弱って楽に獲得できそうな獲物に隙ができるのを。あるいは、シュオウ達が足手まといになりそうな仲間を置いて逃げるのを。

前方の一体が、再び加速をつけて突進してきた。

レッドアゲートが次に攻撃をしかけたのはジロだった。

振り下ろされた前足を、ジロは器用に盾でいなし、後退する。

一瞬動きの止まったレッドアゲートに対して、クモカリが重斧を振る。だが、驚異的な反射神経ですばやく反転し、難無く躲かされてしまった。

「どうするのッ、このままだと押し込まれるわ！ 後ろのも一緒にこられたら」

クモカリが興奮気味に叫ぶ。

狂鬼に対して冷静に対処できているが、顔には怯えが色濃くでて

いた。

「よ、よし、次こそは私の風の剣で……………」

アイセは一步前にでた。

晶気の剣をそれらしく構えてはいるが、腰は完全にひけている。

トットトトト、ツツツツ

前後の狂鬼がなにかの意思を交わした。

唸り声が出て、二体が同時に動き出した。

二回の様子見の攻撃で、与しやすい相手と判断したのかもしれない。

二体は本気で獲物を捕りに動き出した。一糸乱れぬ完璧な動きで、ジグザグに迫り来る。

「同時にきた！？ ど、どうすれば」

アイセは前後に首を動かして、晶気の剣を前へ後ろへとふらふら動かしている。

「アイセツ！」

すまない。

シュオウは心の中で謝りながら、アイセの背中を前に思い切り蹴飛ばした。

「……………え？」

シュオウに押し出されたアイセは、クモカリとジロを追い越して、一人突出する形となる。

猛烈な勢いで迫る狂鬼の前で戸惑っているアイセの背中に、シュオウは大声で叫んだ。

「アイセ、盾だ！ 晶壁を！！」

「え、あッ」

アイセは晶気の剣を消し、咄嗟に晶気の壁を前面に展開した。

それとほぼ同時に、二体の狂鬼が小隊に襲いかかる。

前方の一体が繰り出した一撃は、アイセの晶壁によって完璧に防がれた。

後方から襲い来る狩り役の狂鬼は、やはり迷わずシュオウを狙ってきた。

もう一体の今までの攻撃とは比べものにならないくらいの強烈な右前足の一撃が、シュオウを襲う。

大丈夫。

シュオウにはすべて見えていた。

レッドアゲートの最後の踏み込みから、右前足を高く持ち上げる様子。舞い上がった砂塵と石粒。

なぎ払われる前足の爪が、シュオウの上半身を狙っている。

躲すのは簡単だが、あえて寸前まで体を動かさず、爪が届くギリギリの距離まで待ってから、わずかに立ち位置をずらし、激烈に空気を切り裂きながら迫る鋭利な爪の一撃を躲した。

仕留めた、と思ったはずだ。

飛び散るはずだった血しぶき、そこから漂う血の臭い。そのどちらもなく、爪はむなしく空気を切り裂いただけだった。

狩り役のレッドアゲートは一瞬の戸惑いをみせた。

舌で鼻を濡らし、血の臭いを探す。

まばたき一回分ほどの短い時間だったが、シュオウの眼はその瞬間を見逃さなかった。

狂鬼の直前まで距離を詰め、左前足の一番小さな足の指を、今出せるすべての力をこめて踏み砕く。

木が折れるような乾いた音がして、レッドアゲートが甲高い悲鳴をあげた。

後ろに飛び退いて、背中から地面に転がり苦しげに息を吐いている。

これではばらくは時間を稼げる。

シュオウは振り返り、アイセ達のいるほうを見た。

アイセが展開した風の晶壁に、前足での一撃を阻まれたレッドアゲートは、後退することなく、そのまま晶壁に前足と爪を押し当てていた。

踏み抜く気か。

アイセの晶壁は幾重にも折り重なった緑色の風の晶気で構築されている。岩をも切り裂きそうなほどの鋭い爪の一撃を、完璧に防いだその力は、見事とっていい。だが、問題はそれを扱う人間のほうだ。

「くうッ

」

アイセは次第に狂鬼の勢いに押されはじめて、立ち姿勢を保てな

くなつてきている。少しずつヒザは折れ曲がり、ついには地面に片膝をつく形となつてしまった。

「クモカリ、ジロツ！ 前足を狙え！！」

二人は互いに顔を見合わせた後、頷いてから前に出て、武器で痛烈な一撃を叩き込んだ。

クモカリが振り下ろした重斧は、晶壁を押さえ込むレッドアゲートの右前足に食い込み、ジロの小剣での一撃は、体を支える左前足に突き刺さった。

両前足に傷を負ったレッドアゲートは悲鳴をあげて転がり、這いずるようにして森の中へ逃げていく。

一体は片付いた。

しかし、後ろから感じる気配はまだある。

シユオウが振り返った瞬間、

「間に合った」

というシトリの声が耳に届いた。

見ると両膝を地面につき、両手の中に大きな水球を抱えるシトリの姿があつた。

シトリは晶士だ。扱う晶気は高威力だが、放つまでに時間を要するのだという。

これまでの修羅場の中、一人静かに力を溜め続けていたのだろうか。

普段の言動から、戦力としてまったく期待していなかったシユオウは驚いた。

残った狂鬼は左前足を浮かせつつ、こちらを睨みつけている。牙

を向きだし、尻尾をあげて臨戦態勢は解いていない。
そこに目がけて、シトリが青白く輝く晶気を放った。

「水球、放つッ」

放たれた大水球は、目算を誤ったのか狂鬼の少し手前の地面に衝突した。しかし、その威力は凄まじく、地面を大きく抉り、水球の衝撃で砕かれた古い白道は、つぶてとなって狂鬼に襲いかかった。轟音が鳴り響き、土埃が盛大に舞う。

視界が暗れると、そこにはヨタヨタと体を震わせながら立ち上がるレッドアゲートの姿があった。

完膚無きまでに痛めつけられた狂鬼は、血まみれになった体を揺らしながら森の中へと姿を消した。

「やった………やったんだッ!!」

座り込んでいたアイセが飛び上がり、クモカリとハイタッチを交わした。

「勝ったっばい、やったっばい!!」

ジロもぴよんぴよん跳びはねて、喜びを全身で表現していた。

「信じられねえ………一人の犠牲者もださずに、あの狂鬼を追い払っ
ちまうなんて」

シユオウの背にいるボルジは、臭い息を吐きながら感嘆の声を漏らした。

危険な状況を脱することができたので、ボルジを地面に降ろす。

シユオウは地面に尻餅をついたまま放心したように虚空を見るシトリに声をかけた。

「大丈夫か？」

「……たぶん」

涼しく見えるシトリの顔には、うつすらと汗が見えた。

シユオウは手を差し出した。

「凄かったな」

シトリはシユオウの手を取り、はじめて見せる花の咲いたような美しい笑みを浮かべた。

「ありがとう」

そう言って、シユオウに体重を預けて立ち上がる。

「あッ」

勢いよく引つ張ったせいかわ、シトリは立ち上がるのと同時にシユオウの胸に吸い込まれてしまった。

甘い香りと、柔らかなシトリの胸の感触が服越しに伝わり、心臓がドクンと跳ね上がる。

「ごっほん！」

シユオウがギギギと錆び付いたかのように固まった首を動かすと、にやにやと視線を送る仲間達と、目を尖らせてこちらを睨みつけるアイセがいた。

その視線に気づいた瞬間、シュオウは一步後ずさり、照れ隠しに咳払いを一つした。

「シトリのことは優しく抱き留めて、私には蹴りをくれるのか…」

いつもより半音低い声でアイセが言った。

「あれは、そうするのが一番だと思ったからだ」

「だとしても、女の背中を足蹴にして、狂鬼の前につき出したんだぞ。一言くらいあやまったっていいじゃないか」

「あやまった」

「いつだ？ 聞いてないぞ」

そういえば、と思い出してみると、たしかに口には出していなかったかもしれない。

「あー、いや………」

冷や汗が背中をつたう。

「ほらみるッ！ さあさあ、謝れ。遅れた謝罪でも受け入れるぞ。私の心は広いんだ」

本当に心の広い人間はそんな事を言わないと思うのだが、火に油なので黙っておく。

「とにかく、全員が無事でよかった。一休みしたら、暗くなるまでまた歩こう」

「こら、勝手にまとめるなッ、ちょっと、おい」

シュオウにまとわりつくアイセをネタに笑いつつ、小隊はわずかの間休息をとった。

大きな危機を皆の力で乗り越えたことで、小隊の雰囲気は良好だ。

シュオウは空を見上げた。

昨日まで薄い灰色だった雲が、今日は一段色が濃くなっている。

降り出す前に目標地点まで辿り着くことができればいい。

シュオウはしばらくの間、重たい曇り空を見つめていた。

深界踏破試験、六日目。

すでに日が出て時間がたっているのに、前日よりもさらに濃くなった雲に覆われて、辺りは夕方のように薄暗い。

まるで黄昏の世界に囚われたような感覚に、例えようのない漠然とした不安を感じた。

かつて一人で森の中に居たとき、これほどの不安を感じたことがあっただろうか。

あの頃の自分と違うこと。それは行動を共にする仲間達の存在だ。彼らを守りたい。

無事に森を抜け、それまでの苦労を皆で笑いながら話したいと思っっている。

だが、頭の中では常にそうはならない未来も想像してしまう。

もし、小隊の仲間達の一人でも失うことがあれば、もうこれまでの共に過ごした時間を、良質なものとして心に留め置くのは難しくなってしまう。

結局、自分が大事なだけか。

この不安な気持ちの根源は、仲間を失うことではなく、仲間を守れずに自分の心が傷つくのを恐れているにすぎない。

シュオウは空を見た。

雲は薄灰色の部分に、ほとんど黒に近い濃い灰色の雲が混ざりあっている。こうした色の雲が出るときは、激しい大雨が降りやすい。

雨が降れば狂鬼は狂う。その理由を人間は知らない。

狂った狂鬼は、空腹でなくとも敵と定めた相手を手当たりしだいに捕食しはじめる。生気のない灰色の世界の中、血肉を貪るその姿は、まさに狂気の沙汰。

その間、脆弱な人間にできることといえば、怯えて逃げ惑うか、じっと動かず雨がやむのを待つくらいだ。

今のシュオウにできる事は、雨が降り出す前に森を抜けられるように祈ることくらいだ。

朝の冷えた空気で、吐く息が白くなる。

けてして軽いとはいえない人間一人を背負って歩くのは、本当に疲れる。

だからといって速度を落とすわけにはいかない。

途中、息があがるたびに、自分を置いていけとわめくボルジの言葉を聞き流した。

シュオウにも意地はある。

拾っておいて、疲れたから置いていく、などとは絶対に言いたくないのだ。

「はあ、はあ」

疲労で息が荒くなる。鼻で呼吸する余裕がなくなり、冷たい空気を口から出し入れした。

「おい」

「置いていく気はないぞ」

ボルジに声をかけられたシュオウは、二の句を待たずに言った。

「ちげえよ。……これを、預かってほしいんだ」

ボルジは服の内ポケットから、宝石のついた指輪を取り出してシュオウに手渡した。

「指輪？」

「王都の 鳥の頭 って酒場で、給仕をやってる女がいる。隊商の護衛で東側に来るたびに、その店に寄って話してたら惚れちまってな。今回のこの試験で金を稼いで結婚を申し込もうと思ってたんだ」

ボルジは照れくさいのか、頭をボリボリと掻いた。

「そんな大事な物なら自分で持っていたほうがいい」

シュオウは指輪を返そうとしたが、ボルジはそれを手の平で突き返した。

「ここまで順調に来ることができたのは奇跡みたいなもんだ。俺っていうお荷物を背負わせたまま、無事に森を抜けられるなんて甘いことは考えてない。だから、もし俺になにかあつたら、この指輪を女に渡して欲しいんだ。店に行つて、俺の名前を出せば相手はすぐわかるはずだ」

「……しかし」

「お前を信用してるから、これを渡すんだ。頼む」

わずかにためらいながらも、シュオウは指輪を受け取り、胸ポケットの底にしまった。

「一応預かっておく」

「……ありがとうよ」

昼をすぎた頃、三股に分かれる分岐路に差し掛かった。直線に伸びる道と、左右に大きく分かれる二つの道が見える。

「ねえ、これって」

クモカリは期待に満ちた顔でシュオウを見た。

「地図では、これが最後の分かれ道みたいだな」

地図上で見る、フォークのように三つに分かれる道は、そこから試験の目標地点まで、かなり近いところにある。

もし正解の道を当てることができれば、半日とかからずに森を抜

けることができるかもしれないが、三つの道すべてが行き止まりになっっている可能性も十分あり得る。

「真ん中の道はダメっぽい」

どの道を選ぶか、相談しようとした矢先、ジロがそんなことを言った。

「どうした？」

「ここから見えるギリギリのところに、塞がってるっぽい。ジロは、人間よりちよつと視力良い感じだし」

目を細めて道の先を見ると、たしかに奥のほうで道が途切れ、森に浸食されている様子を見ることができた。

「本当だな。そうになると、選べる道は二つ。右か左、どっちを選ぶか」

シュオウはアイセに視線を送った。

「私が決めていいのか？」

「隊長が決めればいい」

アイセは自嘲気味に笑った。

「隊長……か、いまさらな気がするけどな。」

よし、右へ行

こう。この先が塞がれていないことを祈って」

アイセの言葉に全員が頷いて、力強く一步を踏み出した。

遙か上空にある雷雲が、グググと音を鳴らした。

周囲の空気は、午前中より重くなっているような気がする。

逢魔が時。

視界の先は、強欲に道を飲み込んだ、灰色の森で埋め尽くされていた。

「行き止まり、か」

「すまない、ハズレをひいてしまったようだ……」

「気にするな。幸い、ここまでそれほど距離はかかっていない。

明日には挽回できる」

「うん。でも、今日はそろそろ休んだほうがよさそうだな。夜が近いし、雨も降りそうだし」

太陽は沈みかけている。厚い雲に覆われた森は、まもなく漆黒の世界へおちるだろう。

「そうしよう。できるだけ道の真ん中にテントを用意して」

シユオウが指示を出そうとしたとき、シトリの震える声がかすかに遮った。

「ねえッ」

一番後ろにいたシトリは後ずさりながら、来た道の先を指さした。

「あれ、なに……」

道幅いっぱい横一列に並んだ大きな影が見える。影はゆつくりとこちらへ迫ってくる。

影の正体に気づいたとき、シユオウは固唾を飲み込んだ。数にして十体以上。赤毛の狂鬼、レッドアゲートが低く喉を鳴らしながら、こちらを睨んでいる。

数が、多すぎる。

「もしかしくなくても、私たちが狙っているんだろっな」

絶体絶命の状況にあっても、アイセは落ち着きを保っていた。狂鬼を前にしただけで震えていたこれまでの姿が嘘のようだ。

クモカリもジロも取り乱した様子はない。

前日のレッドアゲート二体を追い払った事で、自信に繋がったのかもかもしれない。

しかし、これだけの数を相手にするのは無謀だ。昨日の二体は慎重だった。それ故に、シユオウ達にも勝機を見いだすだけの余裕があったのだ。

今回のように多数の群れで現れたレッドアゲートは、数を頼りに力任せに襲ってくるはずだ。そうやってしまえば、全員が無事にこの危機を乗り越えるのは不可能になる。

考える。

いくつもの想像が浮かんでは消える。

どうすれば、仲間に犠牲をだすことなく、この危機を乗り越えられるのか。

戦う。

否。勝てたとしても必ず犠牲者がでる。

自分を囿に。

否。すべてを引きつけられるという保証はない。

逃げる。

どうやって？

うまく全員がすり抜けられたとしても、レッドアゲートの足からは逃げ切れない。

後ろは森に囲まれている。

自分一人なら森に入ってやり過ごすこともできる。だが、知識も経験もない仲間達にそれは期待できない。

考えろ、考えろ、考えろ、考えろ。

不意に、後方から流れてきた風が、冷や汗で濡れたシュオウの首筋を撫でた。

「風？」

風は森で塞がれた道のほう流れてくる。

高い木々で囲まれているこの場所では、本来こんなに低いところに流れるような風はこない。

もしかしたら。

一瞬の閃きから沸いた希望に縋るように、シュオウは森で塞がれているはずの道の奥を見た。

巨大な灰色の木々の間から左奥へ伸びる白い道が、かろうじて視界に入る。

「クモカリ、残った食料をすべて地面に蒔いてくれ」

「え？」

「たのむ」

「わ、わかったわ」

クモカリは食料の入った背負い袋を逆さまにして、中身をすべて地面にぶちまけた。

食料といってもわずかなものだ。

パンにチーズ、豆などの保存食。小隊にとって命綱でもあるそれらが、すべて道の上に散らばった。

「全員聞いてくれ。塞がれた道の先に小道がある。これから一斉に走ってそこを目指す。合図は俺がだす」

聞き返す者などいなかった。

シュオウの短い言葉だけで、全員がその意を汲み、ここから逃げ出すために身構えて足腰に力を入れる。

行け、というシュオウの言葉を合図に、全員が地面を蹴った。

レッドアゲートの群れは、シュオウ達が走り出したのと同時に一気に距離を詰めようと駆け出す。

地面に捨てた食料は、レッドアゲートの気を引くためのものだが、たったあれだけの食べ物で彼らが見逃してくれるはずはない。

欲しいのはわずかな時間。

臭いで注意が一瞬でも散漫になれば、小道に逃げ込むだけの時間稼ぎになってくれる。

生きるために、必死に駆け走る。

その最中、レッドアゲート達が地面に捨てた食料の臭いを嗅ぐために一瞬足を止めているのが見えた。

小道は、そこへ近づくほどはつきりとその姿を視認できた。

二本の巨木の間、人間一人が通れるくらいの狭い白道が奥へと伸びている。

捨てた食料に早々に興味を無くしたレッドアゲート達は、全速力で追跡を再開した。

一番に小道に辿り着いたアイセが、二本の巨木の間に入った。シトリ、ジロがそれに続く。

「シュオウツ！」

クモカリは小道の入り口の前で、ボルジを背負っているせいで遅れていたシュオウを待ち、先に入れと促した。

レッドアゲートの群れは、すぐそこまで迫っている。

シュオウは勢いそのままに小道に飛び込んだ。

それを確認して、クモカリも小道へ飛び込む。

「きゃあッ」

小道に入ったはずのクモカリが、尻餅をついて後ろへ引きずられていった。

「クモカリッ！！」

シュオウは背負っていたボルジを降ろして、クモカリの足を掴ん

だ。

物凄い力で引きずられそうになるが、地面に落ちたボルジがシユオウの足を掴み、そのボルジの体を先に入っていたアイセ達が掴んで、どうにかつなぎ止める。

見上げると、巨木の狭い隙間から、頭だけ突き入れて、クモカリの持つ背負い袋に噛みついたレッドアゲートが見えた。

レッドアゲートは唸り声をあげながら、クモカリを外へ引きずり出そうともがいている。

「袋だツ、背負い袋を肩からはずせ！」

クモカリはするりと、背負っていた袋から腕を抜いた。

入り口へ引きずる力がふつと軽くなる。

シユオウはすぐに起き上がり、クモカリの足を持ったまま中のみうへ引きずった。

直後、再びレッドアゲートがこちらに頭を入れ、牙を向き出しにして、何度も噛みつく動作をする。その度に血臭のする生暖かい息が届いた。

すこしして、レッドアゲートは頭を引っ込めた。

「あ、あきらめたのかしら……」

クモカリがおそろおそろ立ち上がった瞬間、ぬつつと鋭い爪を光らせる赤い前足が伸びてくる。

前足はクモカリの頭上まで届き、瞬きをする間もなく振り下ろされた。

シユオウは爪がクモカリに届く寸前、服を後ろに引っ張った。

爪は小指ほどの距離でクモカリには届かず、空を掻いただけに終わった。

呼吸は乱れ、心臓はうるさいくらい鳴っている。

ほんの少し、なにかを間違えば、クモカリはシュオウの目の前で引き裂かれていたかもしれない。

その後も、隙間からレッドアゲートの前足が、何度も獲物を掻き出そうとして暴れていた。

「奥へ行こう。ここは危険だ」

森の中に伸びる小道は、三股に分かれていた道の、中央の道がある方向に向かって進んでいた。

道幅の狭い白道の左右には、灰色の木々が隙間無く立ち並び、自然の作った壁のようになっていて、息苦しさを感じるが、今は壁と成って害敵から身を守ってくれる灰色の木々が頼もしい。

夜の暗闇の中で頼りにできるのは、足下の硬い白道の感触と、仲間達の存在だけだった。

しかし、荷物をすべて失ったことで、その仲間達からは意気消沈した気配しか伝わってこない。

まだ希望はある。この小道が別の道まで続いていれば、そこから一気に森を抜けられるかもしれない。

途中で行き止まりだったら。

考えたくもない。

食料も、休む場所さえもない状況で、今まで来た道に戻るのには、精神的にも肉体的にも負担が大きすぎる。

「みんなは、どうしてこの試験に参加したんだ」

暗闇の小道を行く途中、アイセが唐突に聞いた。

話をして、心細い気持ちを紛らわせたいのだろう。

暗い中を黙りこくって歩くよりは、よほど健全だ。

「クモカリはどうなんだ？」

最後尾に行くクモカリは、わずかに間を置いて話し始めた。暗闇でほとんど姿が見えないが、声でたしかにそこにいるのがわかる。

「報酬で王都に自分の店を持つと思うてるわ。アタシは孤児院の出身でね、子供のいなかったパパとママに拾われたんだけど、当時から男の子に恋をしたり、女の子の服を着たがったりしてたアタシを、なにもいわずに養子にしてくれたの。ママは少しして病気で死んじゃったけど、パパはそれから男手一つで育ててくれて………
…今も鉱山で重労働してるわ。せめてもの恩返しに楽しませてあげたくて、商売でもはじめようかって。そんな感じね」

クモカリの口調は、ついさきほど死線をくぐったとは思えないほど穏やかで、優しくかった。そのことで、彼の育ての親に対する暖かい気持ちも伝わってくる。

「……そうか。ジロは、どうだ？」

「ジロは旅をして、人間や色々な世界を見たかったばい。いつばい反対されたけど、後悔はしてないっばい。でも、人間の世界はお金いっぱい必要だし。いろんな魚料理を食べるために、これに参加したっばい」

旅の目的の大部分が食い意地に支配されてそんなジロの言葉に、皆がくすりと笑った。

「ボルジはどうして参加したんだ」

「惚れた女がいる。結婚を申し込むのに、まとまった金とまとまな職が欲しかった」

シユオウの背にいるボルジは、短く言った。

「皆、いろいろあるんだな。シトリは」

「わたしにそれを聞くの？ こんなほぼ強制参加のバカみたいな試験。パパに泣きつかれてなかったら、出たりしなかった。早く帰って暖かいベッドに入りたい」

シトリは無愛想な声で返した。

「アウレール子爵が泣きついた、のか……あんまり想像できないな」

「しないであげて。ああみえて、一応は強面で通ってるんだから」

「そうだな、ここだけの話にしておこう。シユオウ、お前は どうして参加した。金か？ それとも従士に志願したかったのか」

問われて、考えた。

俺は、どうして。

最初の目的は金だった。

ジロと同じように人々が暮らす世界を見て回りたくて、そのための金が欲しかった。

でも今は違う。

金のためにはじめてたことが、今は仲間と共に無事森を抜きたい、という目的に変化していた。

仲間と共に過ごしたこの数日間は、もはやシユオウにとって、何ものにも代え難い大切なものとして心にある。

それを説明するのは気恥ずかしいので、シユオウは照れ隠しに一言だけ告げた。

「金だ」

シユオウの言葉があまりに素っ気なさ過ぎたせいで、アイセは呆れた様子で笑った。

「つまらんやつだな」

「そつちはどうなんだ」

「私は与えられた道の中で、精一杯努力するだけだからな。この試験も、これから先の人生の中での小さな壁くらいにしか思っていなかった。でも、今はこの試験に参加できて　いや、お前達と同じ小隊になることができてよかったと思っている。疲れてふらふらするし、空腹で腹が鳴る。足も痛い。なのに、不思議と今の瞬間を愛おしく感じている。まだ終わってほしくないとすら思うんだ」

はじめて会った頃の傲慢で刺々しい話し方をするアイセを、今思いつくのは難しい。彼女もまた、この短い間に悩み、成長したのかもしれない。

シユオウも、たった数日で金のためが、仲間のために、という考えに変わっている。

無愛想で無気力だったシトリも、時折微笑んでみせたり、少しずつだが皆と言葉を交わし始めていた。

仲間と築いていく絆には、人を変える力がある。シユオウは、それを身をもって実感していた。

アイセが話を終えたのとほぼ同時に、シユオウの頬にぽたりと水滴が当たった。

雨。

本格的に降り出した大粒の雨。すべてを捨てて逃げてきたシユオウ達にとっては、これ以上ない追い打ちだった。

「こんなときに雨なんて……止むまで待機したほうがいいんじゃないのか？」

激しく降る雨は、周辺の木々や地面を叩き、ザアザアと大きな音をたてている。

アイセが叫ぶようにして言った言葉でも、雨音に打ち消されてかすかに聞き取れた程度だった。

「だめだッ、この雨は体温を奪う。少しでも歩いて、雨宿りできそうな場所を探そう」

まわりにこれだけ木があるというのに、雨よけの傘になつてくれそうなものは一本もない。雪になつてもおかしくなくらい冷たい雨に長時間さらされれば、最悪凍死してしまうか、よくても風邪をひいてしまつかもしれない。どちらにしても、深界の中で孤立する小隊にとっては致命傷になる。

「ねえ、道が」

暗闇の中でクモカリの声がして、足下を見ると、雨水に濡れた白道がぼんやりと光を帯び始めていた。そのおかげで、ほとんどなにも見えなかった周囲の様子がぼんやりと照らされて浮かび上がる。豊富な水分を受けた白道は、まるで白蛇のような姿で幻想的な光を放っていた。

道は長く先まで続いている。

「行こう、この先へ」

ここが別の道へと続いていけば、まだ希望を持てる。

激しく降りしきる雨の中、朧気な光の道に行く。

森のどこかから、狂鬼の猛った咆哮が聞こえたような気がした。

歩き始めて一時間もしないうちに、シュオウ達はあっけなく小道の出口まで辿り着いた。

「ここは……」

「三股の分岐路の真ん中の道だな」

小道を出た先は、これまで歩いてきた道と同じような古道だった。小道は右の道から斜め左方向に、ほぼ直線上に伸びていた。そこから考えて、この古道は、最初に塞がれていた中央の道でまちがいない。シュオウ達は、塞がれていた道の先へと辿り着いたのだ。

道のずっと奥を遠望したとき、シュオウは少しの間言葉を失った。

「みんな……あれを」

シユオウはそこへ向けて指さした。

長く一直線に伸びる白道のさらに先に、森の切れ間があり、そこから煌々と輝く白い光が見える。

道の奥から漏れる光は、整備された新しい白道の放つ光に違いがない。

「夢じゃないのか……」

アイセは自分の頬をつねった。

「幸いなことに現実だ」

夜以外休まず歩き続け、少ない食事で我慢して、狂鬼との命がけの戦いに勝利し、その後命から逃げてきた末に、ここまで辿りついたのだ。

仲間全員で勝ち取ったこの瞬間が、夢であるはずがない。

気づけば、言葉もなく皆で駆け出していた。

雨で濡れた体は凍えるように冷たくなっている。にもかかわらず、どこからともなく力が沸いてくるのだ。

アイセも、ジロも、シトリもクモカリも、そしてシユオウも、皆が希望に満ちた顔で走った。

アイセは試験官達の驚く顔を想像して笑い、シトリは暖かいベツドを望み、ジロは想像の中で魚料理に舌鼓を打っていた。

このまま、これまでであったことを笑いながら、森を抜けられる、そう思っていた。

二体の大型狂鬼が、目の前に立ちふさがる直前までは。

左右の森から、かき分けるようにして現れたのは二体の狂鬼。

左から出てきた一体は、森に入っすぐ遭遇したオウジグモ。

右の森から出てきたもう一体の狂鬼の名はソウガイキ。地域によつてはジルコンとも呼ばれるこの狂鬼は、亀によく似ている。緑色の胴体の上に、青い甲羅を背負い、その動きは緩慢だが、長い尻尾は威力、素早さ共に驚異的だ。

両者とも巨体を誇る大型の狂鬼で、人間くらいの大きさなら一飲みで食べてしまう。

オウジグモとソウガイキは、口からだらしなく涎をこぼしつつ、その目はシュオウ達を捉えて離さない。

小隊の仲間達の間、諦めに近い雰囲気は漂い始めた。

「ハ、ハハハ　誰か、これは夢だと言ってくれ」

アイセは乾いた笑いをはき出して、地面に崩れ落ちた。

ジロモクモカリも、アイセもシトリも、戦闘態勢をとろうともしていない。当然だ。勝てるはずがないと知っているのだから。

「あの小道に戻れば、どうにかなるか？」

アイセは後方の小道への入り口を見て言った。

「無駄だな。あれほどの大きさなら、木をなぎ倒してでも追ってくる」

「じゃあ……」

アイセの言葉は、そこで終わった。がっくりと頂垂れて、立ち上がろうともしない。

ついさっきまで、喜びで輝いていた表情は、受け入れがたい死の運命を前にして、暗く濁ったものになっていた。

仲間達のこんな顔は、見たくない。

「ボルジ、降ろすぞ」

「あ、ああ。そうだな、もう背負ってもらったって意味はなさそうだ」

ボルジはシュオウの背から降りて、そのまま地面に座り込んだ。

「行ってくる。ここで待っていてくれ」

豪雨の中、狂鬼に向かってシュオウは駆け出した。

背後からそれを止めようとする仲間達の声が聞こえる。

彼らから見れば、シュオウは自殺に等しい行動をとったように見えたとに違いない。あるいは、一人で逃げ出そうとした、か。

だが、そのどちらでもない。

シュオウは今まさに、確実な勝算を持って二体の狂鬼に挑もうとしている。

レッドアゲートのような比較的小型の狂鬼は、群れで獲物に襲いかかる事が多い。仲間を守りながらの行動に尽力しなければならなかったこれまでの、積極的に狂鬼と戦う事ができなかった。だが、今回のような大型の狂鬼はその動きも緩慢で、ある程度その動作に予測がたちやすい。

くわえて森には雨が降っている。捕食本能に狂う狂鬼は、普段の動きを忘れて猪突猛進に獲物を狩る。オウジグモの場合、獲物と定めた相手に粘着性質の糸を出して動きを封じてから狩りをはじめめるのだが、じりじりと走り寄るシュオウに対して、未だに糸を出してくる気配はない。雨のせいで狂い、糸で獲物の動きを封じるといいう行動を忘れているのだ。

つまり、狂鬼は雨の中で猛り狂う状況にあるからといって、かならずしも普段より危険度が増すというわけではない。

しかし、それも一定の水準で狂鬼と対することができるときにかきるので、力ない者達にとつては、狂鬼が狂つていようとそうでなからうと、その差はほとんど意味をなさないだろう。

オウジグモの尖った前足が、シュオウめがけて振り下ろされる。凝視してそれを回避する。空振りした前足が古道に突き刺さる。シュオウはオウジグモの直下に潜り込んだ。

巨大な本体から伸びる六本の足がある。前から二番目の足は、体が崩れないように支える重要な部分だ。

オウジグモは全身に硬い外皮を纏っている。そのせいで、人の持つ一般的な武器などで致命傷を与えるのは至難の業。だが、足の関節は横方向へひねる動作に極端に弱い。

本体を支える足を抱え込む。オウジグモの体重を支える重要な部位だけあって、この足を攻撃に使う事はない。

シュオウは自らの足を崩れた白道の一部に引っかけて固定し、抱え込んだ狂鬼の足を力一杯右回転にずらした。

オウジグモの間接が砕ける嫌な音がして、狂鬼の悲痛な咆哮が森に響き渡る。

足を壊されて体重を支えきれなくなったオウジグモは、その巨体を地面に沈めた。

シュオウはすかさずオウジグモの体毛を掴み、体の上へよじ登って、立ち上がろうと必死にもがくオウジグモの上に立つ。

胴体と頭の繋ぎ目近くにある、白濁した特大の輝石の前まで歩み寄り、腰に差した武器を抜いた。

師匠のアマネは、この奇妙な武器を 針 と呼んでいた。

白い先の尖った刃を木製の柄に取り付けただけの単純な武器だ。

斬りつけることもできず、ただ突くことのみの特化したこの刃の部分は コクテイ という狂鬼の割れた歯の破片で出来ている。

コクテイの歯は硬い。岩だろうが、鋼鉄だろうが、たやすく噛み砕いてしまう。

輝石には、それを所有する者の有する能力が高いほど、硬く重たくなる性質がある。オウジグモの輝石の硬さは、並の人間のそれを軽く凌駕するが、コクテイの歯の強度はそのさらに上にある。

シユオウは針を下向きに両手で持って、オウジグモの巨大な輝石の上に構えた。

輝石を砕くうえで重要になるのが、大きさと安定だ。人間やレツドアゲートのように、小さめの輝石で本体が素早かったり、不安定だったりするものを、激しい戦いの中で砕くのは難しい。しかし、このオウジグモのような大型狂鬼の場合、そのどちらの条件も満たしている。

振り上げた針で輝石の中心を貫いた。

刃は狂鬼の輝石に食い込み、中心奥にある命核を砕く。

輝石が砕ける硬質な音がして、今ここにあったはずのオウジグモの巨体は、浅黒い光砂となって空中に四散した。

オウジグモの体が崩れる寸前、シユオウはソウガイキのいる右奥方向へ飛び出した。

あと一体。

着地の瞬間に一回転して衝撃を減らし、勢いを殺さずに間合いを詰める。

胴体よりも長いソウガイキの尻尾がシユオウを狙ってなぎ払われ

た。当たれば一撃死は確実な攻撃を、絶妙なタイミングで飛び込んで躲す。

振り払われた尻尾を戻す際の二撃目が、シュオウを再び襲った。一撃目と同じ動作でそれを躲す瞬間、針を突き刺して、振り回される尻尾を乗り込むようにして掴んだ。

ソウガイキが突き刺された針の痛みに苦痛の声を漏らした。尻尾が異物を振り落とそうと縦横無尽に振り回される。

シュオウは、尻尾が上へ高く振り上げられた瞬間、針を抜いて空中に飛び上がった。

ソウガイキは、高く真上に舞い上がったシュオウを完全に見失っていた。

この、亀によく似た狂鬼は、青い甲羅の下に輝石を隠している。その位置は甲羅の中心。高所から見下ろせる今のような状況なら簡単に位置を特定できる。

空中での上昇が終わり、重力に引きずられて、雨を背負いながら下降していく。

命がけの状況にあって、シュオウの心は場違いなほど落ち着いていた。

落下していく最中、師匠に鍛えられた十二年間の記憶が頭の中を駆け巡る。

森に放り込まれては何度も死にかけ、鍛えるためだといつては血反吐を吐くまで殴られた。何度逃げだそうと考えたかわからない。それに耐えたあの日々が、今のシュオウを形作っている。

下持ちに構えた針がソウガイキの甲羅に届く瞬間、シュオウは笑っていた。

無駄じゃなかった。

死ぬ思いをして獲得したすべての技術や経験が、今、この時、この瞬間、仲間を守る力となって発揮できる。

そのことが、なによりも嬉しかった。

一条の雷光が大地を穿ち、遅れてきた轟音が大気を揺らした。

高所からの勢いと、振り下ろした腕の力が、刃先の一点に集中して青い甲羅に突き刺さり、下に隠された輝石ごと豪快に破碎した。

ソウガイキの巨体は光砂となって天空へと舞い上がり、その命は世界に溶けていくかのように消え去った。

ソウガイキの体が崩れ去り、唯一残された碎けた輝石と一緒に、シユオウも地面に着地する。

シユオウの背後にそびえ立つ巨木に、雷が落ちた刹那、世界が白く染まった。

仲間達の元へ戻ると、皆が目を大きく見開いて呆然と立ち尽くしていた。

アイセはなにか伝えようとして口を開くが、ぱくぱくと動かすだけで声になっていない。

シユオウは胸ポケットの中にしまっていた指輪を取り出した。

「ボルジッ」

濡れた地面に座り込んだ、ボルジの手元に指輪を投げる。

それを受け取ったボルジは、シュオウと指輪を交互に見た。

「え……お、おい」

戸惑うボルジに、シュオウはこう言った。

「自分で渡せ」

過酷な深界に行く旅も、もうすぐ終わる。

先日の夜、あの騒ぎの後、小隊は無事に森を抜けて、目標地点への到達を果たした。

真新しい白道が敷き詰められた、ただっ広い道のご真ん中に、試験官達が寝泊まりする砦があり、その門を叩く頃には夜中近くになっていた。

まさかこんなに早く試験を終わらせてしまう小隊があると思っていなかった彼らの慌てようは凄まじく、仲間達は皆苦笑していた。砦に入った後は、乾いた予備の服を借りて、暖かいベッドの中で泥のように眠った。

翌日、起床して食事をもらい、昼近くになった頃には馬を借りて王都に戻る事になった。

あれほど苦労したここまでの道程も、試験官が行き来に使った整備された白道を馬で行けば、半日もかからずに王都へ戻れるという。

アイセは今、王都を目指して馬を走らせる道中であつた。

意外な事に、馬に乗れないというシュオウは、これまた意外なことに、馬が得意だというジロの後ろに乗って先頭を走っている。ジロは得意だというだけあつて、その乗りこなすは見事なものだつた。アイセ、シトリはジロから少し離れて後ろを併走している。クモカリは背にボルジを乗せて、すぐ後ろをついてきている。

「昨日の……凄かつたな」

アイセは興奮気味に言つた。

二体の大型狂鬼を一人で片付けてしまったシュオウ。

あのとときの光景が、今も脳裏に焼き付いて離れない。

何度その話をしようかと思つたかわからない。だが、あまりにも落ち着き払つたシュオウの雰囲気飲まれてしまい、あの時の事には触れられなかつた。

「そうね」

クモカリの反応は、アイセが期待していたよりもあっさりとしていた。

「どうしたんだ、あんな立ち回りを見ておいて、それだけなのか？」

「正直、あまりにも驚きすぎて、びっくりする感情が一周しちゃうたのよね。それに、彼つてなんとなく並じゃない雰囲気匂わせでたじゃない。だから、あれだけ凄くことをしても、そのくらいで

きちゃいそうだな、なんて不思議と納得しちゃったのよね」

クモカリの背後でしがみつくボルジが、言葉を挟んだ。

「ありやすげえなんてもんじゃねえ。一生に一度お目にかかれるかって神業だぜ。彩石持ちでもない、ただの平民が、たった一人であの大きさの狂鬼を倒しちまったんだ。しかも二体だツ。まったくとんでもない野郎に命を拾われたもんだぜ」

ボルジは指を二本立てて、二体、というところを強調した。

「そうなんだツ！ 凄いんだ！ あいつは凄い。あのでっかい蜘蛛の足を、こつ」

アイセは身振り手振りで昨日のシュオウの動作を一つ一つ再現した。

あの二体の狂鬼が目の前に現れた瞬間、アイセは確かに死を覚悟した。

そんなアイセの覚悟を、たやすく吹き飛ばしてしまったのはシュオウだ。

あれだけの事を成して、最後に雷を背負うようにして立っていた、あの時の姿は神々しくさえ見えた。あの時の光景を、一生忘れられそうにない。

「彼、これから大変なんじゃない」

クモカリのその言葉が、アイセの妄想を断ち切った。

「どうしてだ？」

「あれだけの事をひょいっとやって涼しい顔をしてられるような人なのよ？ そんな凄い人材、国や軍が放っておくのかしら。あれだけの腕があるって世間に知れたら、彼を雇いたいって大商人や傭兵団だつて掃いて捨てるほど出てくるわ。なにせ、白道を行き来する商売は、儲かるけど安全性に難あり、つてのが商売人達の悩みの種だしね」

「なるほどな」

たしかに、とアイセは思う。

軍は常に優秀な人材を欲している。シュオウのような人材なら、各国、各領主などが喉から手が出るほど欲しがる逸材だ。

もし、ムラクモが彼を雇い入れたらどうなるだろう。

うまくすれば、同じ隊の所属になれるかもしれない。

そうすれば、またあんな姿を見せてくれるのだろうか。

もっと色々な話をして、今よりもっと仲良くなれるだろうか。

そんな前向きな想像が頭を駆け巡り、心が自然と浮き立った。

「シトリはどうだったんだ」

すぐ横を走るシトリに声をかける。が、シトリは前のほうへ視線を固定させて返事をしなかった。

「シトリッ」

「え？」

今気づいた様子でシトリがアイセを見た。

「昨日のシュオウの事を聞いたんだ。なにか思わなかったのか？」

「……………べつに、なんとも」

そっけなくシトリはそう言って、また視線を遠くへやってしまう。

この時のシトリの態度に少し違和感を感じながらも、アイセは再びクモカリやボルジとシュオウの話をする事に没頭し、あまり深くは考えなかった。

馬を飛ばして、夜のそこそこ遅い時間に、王都に到着した。

シュオウ達、従士志願者組は出発したときの宿に泊まる手筈になっていて、これから朝まで飲み明かすのだと騒いでいる。

街の門をくぐってすぐ、彼らは早々に宿へ向かった。

アイセとシトリも誘われたが、行けそうだったら、と曖昧な返事を返すに留めた。

「シトリは参加するの？」

「するわけないじゃん。帰ってお風呂に入ってゆっくり寝たいし」

「そうか」

「アイセはこれから大変なんじゃないの」

シトリは、アイセの手元にある一枚のカードに視線をやった。

アイセの小隊が前代未聞の早さと、同行する平民を全員と別の隊の怪我人を一人加えて試験を無事に終えたことは、昨夜のうちに知らせが送られている。

父親のモートレット伯爵の耳にも当然届き、アイセが王都に到着するなり、待ち構えていた家の者にパーティーへの招待を知らせる招待状を渡された。

モートレット伯爵家の血族、および社交界の貴族達を大勢招いた、

アイセの祝勝パーティーが開かれているらしい。

アイセはこのまま家に戻って支度をして、主賓として参加する
とになっている。

「まあ、どうにかこなすさ」

「アイセなら、そうでしょうね。」

わたしはもう行くから。

おつかれさま」

「あ、ああ……おつかれ」

おつかれ、か。

シトリからねぎらうような言葉をもらうのは、これがはじめての
経験だ。

なんとなくむず痒いものを感じつつ、アイセは家族の待つ館に向
けて馬を走らせた。

雅な宝飾の数々で彩られた黄色のドレスを身に纏い、色鮮やかな
カクテルを片手に持つ。

天井の高いダンスホールに、食べきれない量の豪華な食事が並ん
でいる。

綺麗で贅沢な衣服を身に纏う人々は、中身のない美辞麗句のやり
とりに必死だ。

なんてことはない。見慣れた貴族達の世界が、そこにはある。

つまらない。

自分を褒めそやす言葉も、尽きることなく新しいものがでてくる
料理も、甘い飲み物も、目に映るなにもかもが、無価値なものに見

えてしまう。

試験に参加する前の日まで、自分はこの世界に満足していたはずだった。

母や父、その他の人々が自分を認め、賞賛してくれることが、なにより嬉しかったはずだ。

それなのに、深界の灰色で生氣のない風景が、今はなんとなく恋しい。

一口で食べ終わった質素な食事。築いてきた自信を、一瞬で打ち砕いたあの狂鬼。ゴツゴツとしていて寝苦しかったテント。落ち込んだ自分を気遣って話しかけてくれた仲間。そのどれもが、ここにはない。

わずか六日間に濃縮された数々の出来事が、いまはすでに懐かしい。

アイセは足にまかれた包帯を見た。

家に戻ったとき、包帯を替えようと言ってくれた使用人の提案を断ってしまった。

傷を負った足を綺麗に洗って、優しく花の蜜を塗ってくれたシユオウを思い出し、顔には自然と微笑みが浮かんでいた。

「セ アイセ」

考え事に集中していたところに、父の言葉が現実へ引き戻した。

「……失礼致しました。お父様」

「なに、疲れているのだろう。無理をいつているのは私のほうなのだから、気にする事はない」

いつも厳格な態度を崩さない父は、ほどよく酒も入って、めったに見せないくらい機嫌が良い。

宝玉院の卒業試験の結果は、貴族としての今後の人生を大きく左右する。その試験に、アイセはかつてない好記録で合格した。

娘の出した成果に、父は誇らしい気持ちで一杯なのだろう。

挨拶に集まってくる貴族達は、優秀な子供を育てたモートレット伯爵を羨み、祝いの言葉を絶やすことなく浴びせている。その度に父の鼻は高くなっていった。

「アイセ、そろそろ皆さんに挨拶をしてもいい頃だろう」

「……はい」

ホールを中心に置かれた小さな演壇の上に立つ。

静粛を求める使用人の呼びかけで、人々は雑談を切り上げて、視線をアイセに集中させた。

「本日は、私のような若輩者のために、これだけの方々にお集まりいただいたこと、本当に嬉しく思っております。モートレット家を代表し、お礼を申し上げます」

アイセが優雅に一礼してみせると、会場から拍手がおこった。

拍手がおさまるのを待って、言葉を続ける。

「父は、この度の試験の成果を、私の実力だと褒めてくださいました。ですが、それは違います」

人々の間から、ざわめきが起こる。

「私は弱くて、そして愚かだった。頼りになる仲間がいなければ、今、私はここでこうして話をしていることはありませんでした。私は、小隊を率いる責任者として、その役割をほとんど果たせなかった……」

「アイセツ、いつたいなにを言い出すんだ」

急ぎ足でアイセの元まで来た父を真っ直ぐ見据える。

「お父様、今日だけは、どうか私のワガママをお許しください。

私は行きます」

「行くつて、どこへだね!？」

アイセは演壇を降りて駆け出した。

はじめから、仲間達と共に行くべきだったのだ。

ここにはなにもない。

皆を気遣うクモカリの声も、不機嫌そうなシトリの顔も、おかしな言葉で笑わせてくれるジロも、そして、静かに皆を見守っていてくれた彼の姿も。

空っぽの箱から出て行く間際、呆然と見送る父に言葉を残した。

「仲間達の元へ!」

アイセはドレス姿のまま、上着も羽織らずに外に出た。

乗ってきた馬に跨って、仲間のいる宿を目指して走り出す。

吐いた息が、白煙のように尾を引いて後ろへ流れた。

表通りを駆け抜けて、慣れない市街地を右へ左へ曲がる。

あらかじめ聞いていた場所を頼りに、アイセはどうにか目的の宿へ辿り着いた。

建物から暖かい光が漏れて、中から楽しげに語り合う、聞き慣れた声が耳に届く。

入り口のドアに手をかける。
緊張で高鳴る胸を押さえて、扉を開けた。

建物の中でテーブルを囲んでいた仲間達がアイセに気づいて、大喜びで迎え入れてくれた。

仲間達に向けて、アイセは子供のようになつこに微笑んだ。

ジロが魚を啜えたまま椅子を運んできて、クモカリが後ろから背中を押す。ボルジは座ったまま酒の入ったコップを掲げて笑っていた。

そして、これまでと変わらず、一人落ち着いた表情でアイセを見るシュオウがいる。参加しないと Saying していたシトリが、なぜかちゃっかりその隣に陣取っているのが気になるが、今は置いておこう。

今はただ、苦楽を共にした仲間と過ごすこの時間が、嬉しくてたまらないのだ。

第五話 握髪吐哺

試験前日の夜に寝泊まりした宿の一階は、客もほとんどなく閑散としているにも関わらず、にぎやかな話し声と楽しげな空気に満ちていた。

試験参加の報酬を受け取るのは開始から一ヶ月たった試験終了後、つまり今からほぼ二週間後の予定となっている。

それまでは、ここで自由に寝泊まりして飲み食いまで無料であるという説明を受けて、ボルジを筆頭として平民参加組はとても喜んだ。シュオウもそうだ。師匠の元を飛び出してから、はじめて本当にゆっくりとできそうなので嬉しかった。

宿に到着してからすぐにテーブルを囲んで食事会となった。

ジロはさっそく魚料理を全種類注文して、ボルジは米から作った濁り酒をガブ飲みはじめ、クモカリは料理を小皿にとって配ったり、ジロの口元をまめに拭いてやったりしていた。

食事をするだけで、それぞれにこれだけ個性があるのだから面白い。

暖炉から漏れる暖色の光に照らされたテーブルの上に、出来たての料理やツマミが所狭しと並んでいる。

なにせ食べた分はすべて国が支払う事になっているので、宿の女将がこれでもかと頼んでいない料理まで運んでくる。

イモを甘辛い味付けで煮込んだムラクモでは定番の家庭料理をかじりつつ、シュオウは冷たいミドリ茶を喉に流し込んだ。

「最後に別れたときには、たしかこの集まりに参加するつもりはないと言っていたような気がするのだが、いったいこれはどういうことなんだ、シトリ」

絢爛豪華なドレス姿で合流したアイセが、シトリを問い詰めた。

「俺達がここに到着して、たいして時間もたたないうちに来てたぞ」

シュオウは親切心のもりで説明したのだが、正面に座っていたクモカリが、誰にも気づかれなないように自分の足を軽く蹴ったことで、言うてはまずかったのだろうかと後悔した。

「ほほう……」

アイセはじつとりと湿った視線をシトリに送る。

「気が変わったの」

シトリはアイセと視線を交えることなく、抑揚のない声で言った。

「うっ」

まだ追求をあきらめていなかった様子のアイセだが、シトリの言葉には何も返せなかった。

気持ちが変わった、といわれればそれまで。これ以上の追求は無意味だと悟ったのだろう。

まんまとアイセの問いかけを一言ではね除けたシトリは、甘い飲み物にちびちびと口をつけていた。

シトリはシュオウの左隣の席に座り、椅子をぴったりとくっつけている。わずかな時間の間に風呂に入ってきたらしく、シトリのふわふわとした水色の髪からは、ほんのりと甘やかな香りが漂ってくる。

る。服装は黒のシンプルなドレスに、肩から真紅のシヨールをかけている。ドレスは体の線を美しく強調するようなデザインになっていて、しっかりと凹凸のある女性的な肢体が放つ魅力を、さらに倍増させていた。

途中からこの集まりに参加したアイセは、シュオウの右隣に椅子を置いた。目に眩しいほどの鮮やかな黄色のドレスが、アイセの金色の髪とよく合っている。いつもの鋭い印象が、気品漂う高潔さへと見事に昇華されていた。

期せずして両手に花状態のシュオウの戸惑いは大きかった。両脇に華やかな女子達が、肩が触れそうなほど近くににいるせいで落ち着かない。

せめてもの救いは、視界に入る巨体のクモカリと、一心不乱に魚料理にがつつくジロ、それに特大のコップで酒を流し込むボルジ達の存在だった。彼らが近くにいただけで、アイセとシトリから漂ってくる桃色な気配をどうにか軽減してくれる。

「それにしても……」

アイセはシトリのほうへ身を乗り出して、ふんふんと鼻を鳴らした。

「もしかして香水をつけてるのか？」

シトリが少し体を動かすたびに、そこから花のような香りが流れてくる。アイセはそれを指摘した。

「……つけてるけど、なんで？」

「いや、めずらしいと思ったただけだ。普段、香水どころかそんな

服だつて着ないじゃないか」

「いいでしょ、べつに。制服の替えがなかったから、仕方なくよ」
「そう……なのか」

話が終わると、二人は無言でそれぞれ皿に取った料理を食べる作業に戻る。

さつきから、アイセがシトリの行動や服装等をチクチクと指摘しては、シトリがさらりとそれに返答する、というやり取りがシュオウを挟んで何度も続いていた。その度に少しずつ沈黙が入るのも困りものである。

どうにも息苦しさを感じ始めていた頃、この微妙な空気をぶち壊してくれそうな救世主が現れた。
酔っぱらったボルジである。

「ういっく　　おい、シヨロウ」

「シュオウ、だ」

到着早々に酒をガブ飲みして、すでに呂律が回っていないボルジが、片足立ちでシュオウの元までやってきた。手にはたつぷりと酒が注がれたコップを持っている。

「おらあな、すげえとおもってんだって言ってたんどはああ」

ボルジはシュオウに顔を近づけて、酒臭い息を盛大に吐きだした。すぐ隣に座っていたシトリが、うつつと声をあげながら、距離を置く。

「ちよつと飲み過ぎじゃないのか」

「うるへえ！　こんなのまだまだ序の口よう。シヨロウを見る
と若い頃をおもいらすんら！　おめえはすげえやるうら！　わかっ

てんのかコノヤロウツ」

ボルジは怪我をした足をかばって、ただでさえ安定しない片足立ちである。さらに酒も手伝ってグニヤングニヤンと揺れている。視点も定まらず、かなり酔いが回っているようだ。

「わかったから、座って水でも飲んだほうがいい」

「いいや、おめえはぜんっぜんわかってくれえ。よしッ！ おれが
どんだけ感謝してるかってやつの証拠をみへてやるあ」

ボルジは手に持っていたコップをシュオウの頭上まで持っていき、ゆっくりと傾けて中に入っている酒を注いだ。

「祝い酒だあッ！ とつとけシュロウツ！」

ほろ苦い酒が頭の上からトクトクと注がれる。それを黙って受け止めつつ、シュオウは、こんなことがつい最近あったな、等とのんきに懐かしさを噛みしめていた。

「こらッ！ なにをするんだッ」

ボルジがシュオウの頭に酒を注ぐ光景を呆気にとられながら見ていたアイセが、立ち上がってボルジを突き飛ばした。

不安定な姿勢で押されたボルジは、そのままテーブルの上に置いてあった料理を手に引っかけ、床に倒れ込む。

サラダや肉料理などが床に派手に散乱した。

運ばれてきたばかりの汁物も倒れて、中身がシュオウのふとももにかかった。

「大丈夫か、シュオウ」

「心配ない。濡れただけだ」

「濡れただけって、湯気のでてる汁物までかかっているじゃないか、はやく脱がないと火傷するぞ」

「大袈裟だ。こんなの、ちよつと温い程度だろ」

アイセは訝しんで濡れたズボンの上を触って、やっぱり熱いじゃないか、と言った。

そのまま有無を言わさぬ勢いでズボンを引きずり下ろして、シュオウの太股を確認する。

「ほら見る、真っ赤になって……………ない、な」

シュオウの太股は、なんら変わりなくそこにあった。肌はわずかに赤くすらなっていない。まったくの平常である。

「ちよつと心配しすぎなんじゃないの。普通、熱かったらもつと大騒ぎしてるわよ」

クモカリが苦笑してアイセに言った。

「うん……………それもそうだな。ちよつと待っててくれ、店の者に拭くものをもらってく」

アイセがそう言い終わる寸前、隣で静観していたシトリが、物凄い勢いで椅子から飛び出して店の奥へ走り出した。

「って、ちよつと待てこら！ 最初に言ったのは私だぞッ」

先行したシトリを追って、アイセも走り出す。服を引いたり、手の平を顔に押しつけて前に出ようとしたりの激しい競争が繰り広げ

られていた。

二人の事も気になるが、シュオウは床に倒れ込んだボルジを心配して声をかけた。アイセに突き飛ばされてから、ぴくりとも動いた気配を感じない。

「おい、大丈夫か」

返事はない。

心配して立ち上がったクモカリが、ボルジの元まで歩み寄った。

「……寝てるみたいね」

クモカリが、うつぶせに倒れたボルジを仰向けにすると、があがあと大きな寝息が聞こえてきた。

「そうみたいだな」

「にしても、学ばないオヤジよねえ……………邪魔だから奥に転がしておきましょう」

「ジロも手伝うつぽい」

ジロも魚を啜えたままやってきて、クモカリと共にゴロンゴロンと奥の壁までボルジを転がしていく。

これだけされても、まったく起きる様子がないボルジは、壁にぴつたりと背中がつくまで転がされても、安らかな寝顔をこちらに向けていた。

「よく寝てるわねえ、よっぽど疲れてたのかしら」

濡れた髪もそのままに、シュオウは床に散らばった皿や料理を片付けていた。

落ちてしまった食べ物、少し汚れてしまったが食べられないほどでもない。

もったいないので口に入れてしまおうかと考えていた矢先、クモカリが生野菜を細長く切ったサラダを渡してほしいと言ってきた。

「なにに使うんだ」

「ちよつとね、食べ物や床に落とした責任をとってもらおうかなって」

シュオウから皿を受け取ったクモカリは、細長い野菜スティックを一本手に取り、それを眠るボルジの鼻の穴に差し込んだ。

「んじん」

ボルジの体がびくりと跳ねる。しかし、一向に起きる気配はない。

「オッサン起きないわね。それじゃあもう一本……」

クモカリはもう一方の鼻の穴にも野菜スティックをゆつくりと挿入していく。

隣でその様子を見ているジロは、魚をくわえたまま、真剣な表情で見守っていた。

床に横たわる中年男の鼻の穴に、野菜スティックを差し込む巨体のオカマと、それを助手のように真剣なまなざしで見つめる蛙人という図が目の前にある。

これは、いったいなんのゲームなのだろうか。

本人達はいたって真剣なので、シュオウは黙ってそれを見守ることにした。

そして、慎重に作業を進めていたクモカリは、無事に作戦を完遂させた。

「入ったわ　でも、なんかもう一つ足りないのよね」
「目が寂しいかんじっばい」

ジロは皿の上に乗っていた、薄切りにした丸い形の野菜を、ボルジの両の目蓋の上に貼り付けた。

鼻の穴から長い二本の棒が伸び、その隙間からはピイピイと情けない笛のような音を鳴らしながら空気が漏れている。両目は薄く輪切りにされた白い野菜で飾られていて、鼻が塞がれたせいで口は大きく開いている。

そこには、かつてボルジと呼ばれていた男の成れの果ての姿があった。

一仕事終えたクモカリとジロは、互いに顔を見合わせて、うんうんと頷いた。

「またせたな、拭くものを借りてきたぞ」

アイセとシトリが手にタオルを持って戻ってきた。

二人はボルジだったモノを一瞥して、何も見なかったかのようにすぐに競うようにシュオウの頭と体を拭き始めた。

床で眠るボルジに毛布をかけて、一同は再び穏やかで暖かい時間を取り戻していた。

それぞれに料理や飲み物に手を伸ばしながら、試験であった色々な出来事を語る。

話の内容が、試験の終わり頃の時になった時、クモカリが慎重な口調でシュオウに質問した。

「ねえ、シユオウ。聞いてもいいかしら」

「ああ。答えられることなら」

「最後の狂鬼を相手にしたときの、あの戦い方のことよ。どこであんな事を覚えたの？」

クモカリの問いかけに、アイセが同調した。

「私も聞きたいと思っていた。深界で狂鬼を狩る人間もいるとは聞いたことがあるが、それは何十人も人を集めての事だろう。彩石を持たない人間が、それも一人であれだけの狂鬼を相手にして傷一つ負わずに退治してしまうなんて、前代未聞だぞ」

どこまで話すべきなのだろうか、と考えながら、少しずつ言葉を選ぶ。

「アイセには、たしか話したな。深界については俺の育ての親から教わったと。孤児だった頃、その人に拾われた時に一つ約束をしたんだ」

「約束？」

「約束の内容は、その人が受け継いだ、とある古い戦闘術を受け継ぐ、というものだった」

シユオウの言葉に、アイセが身を乗り出した。

「その戦闘術というのが、あの狂鬼を一撃で倒した、アレなのか？」

「あれは違う。森の事や狂鬼の対処の仕方は、その戦闘術を仕込むついでに教わったオマケみたいなものだ。もっとも、そのオマケのほうがよく使いだがある、と俺の育ての親は言っていたけど」

「あれで、オマケなのか……………その戦闘術、というものはどんなものなんだ？」

「ん……………」

どう説明したもののか、と悩み言葉が詰まる。それを言いにくい事だと勘違いしたのか、アイセが困惑した様子で両手を振った。

「いや、言いにくいならいいんだ、無理に聞こうとは思ってない」

「言いたくないわけじゃない。ただ、人間を相手にした戦い方、というくらいしか今は言葉が出てこない」

師匠から受け継いだ戦闘術は一風変わったものだった。それを咄嗟に説明するとなると、うまく言葉を選ぶことができない。戦闘術、などと大袈裟にいつても、そうたいしたものでもないのだ。シユオウ自身、時間をかけて教わる課程で、どれほどそれが役に立つのか疑問に思っていた。人の世界に出てきた今でも、実戦で技を使った事は一度もない。

「そうか、ならいいんだ。ただ、いつか見せてもらえると嬉しい」

アイセはそこで言葉を終わらせて、それ以上は何も聞かなかった。いつか見たいと言ったアイセの期待には、正直なところあまり応えたくはない。

人間を相手にその技を使うような場面は、控えめに想像しても穏やかな状況ではないだろうからだ。

その後も楽しい時間は続いた。

クモカリの一発芸に大笑いして、ジロのこれまで食べた色々な魚料理の講釈がはじまったり、皆で将来の夢を語り合ったりして、時

間はあっという間に過ぎていく。

そして、テーブルの上の料理を粗方食べ終える頃には、全員が座ったまま眠ってしまったっていた。

時刻はすでに深夜。

シユオウは、自分の脇に肩を入れて支える誰かに、二階の寝室まで連れてこられた。

目を開けるのも億劫なほど疲れていたもので、そっとベッドに寝かせてくれた誰かに感謝する。

こつした気遣いをする人間は、おそらくクモカリだろうと、寝惚けた思考で予想をつけて礼を言った。

「クモカリ、ありがとう……」

暗がりの部屋の中、礼を言った相手からすぐに言葉が返ってくる。

「どういたしまして。だけど、わたしの名前はシトリです」

そう聞こえた瞬間、暖かくて柔らかい感触の何かが、ドサリと自分の上に乗り込んだ。

漂ってきた甘やかな香りに、ぼやけていた意識が一気に覚醒する。

「シトリ!?!」

目を開けると、ぼんやりとした蝋燭の小さな灯りに照らされたシトリの姿が目の前にあった。

「せいかい。ご褒美にわたしのファーストキスを……」

目をつぶり、軽く唇を突き出して顔を近づけてくるシトリをどうにか押し戻す。

「ちょッ　　待て」

「どうしたの？」

「こっちのセリフだ………なんのつもりだ。他のみんなは？」

シユオウの問いに、シトリは妖しく微笑んだ。

「下で寝てる。わたしが眠れないときに飲む薬を、少しずつ飲み物に入れておいたんだけど、あのオジサン以外なかなか効いてくれなくて、すごく焦れたかったよ」

「眠り薬を、飲ませた、のか……」

「わたしと君の以外に、ほんのちょっただけ」

どつりで、と得心する。

あの不自然なほどよく眠っていたボルジは、眠り薬のせいだったのか。

「どうしてこんな事を」

「君が欲しいからに決まってるじゃん。だからお邪魔虫達には、しばらく静かにしておいてほしいだけ」

試験中、側で見てきたシトリとはまるで別人だった。

普段どこを見ているかわからないぼやけた瞳は、シユオウを鋭く捕らえて一瞬でも離そうとしない。呼吸が荒く、口からは甘くて熱い吐息をもらしている。

「自分が何をしているのかわかっているのか」

「君の上にまたがってるんだよ」

シトリは曇惑的な表情でこちらを見下ろしながら言った。

両手をシュオウの服の下に滑り込ませて、ヘソから胸へすこしずつずらしていく。冷たくて柔らかい指の感触が体をなぞる。はじめて経験する奇妙な感覚に、体が震えた。

シトリは微笑みを浮かべながら上唇を舐める。

その妖艶な姿に、心臓が大きく跳ねた。

「たしか、男なんて気持ち悪いって

」

「君は気持ち悪くなんてない。試験中からなんとなく気になってた。心細くて、深界に詳しい君を頼りにしたいって気持ちだと思っただけ、最後のあの化け物を簡単に倒してみせたあの姿。あれを見てから、心臓の鼓動が早くなって、お腹の下が熱くなった。枯れた木みたいだったわたしの心が、こんなに動いたのははじめてなんだよ。だから……責任をとって」

今の言葉に嘘偽りがないことを証明するかのように、シトリの視線はまったく揺るがない。

蕩けた微熱な表情で迫るシトリに、例えようのない薄気味悪さと、男としての欲求が同時に沸いた。二つの感情は、睨み合う剣士のように対峙する。しかし、あっけなく後者が勝利した。

頭が熱湯をそそいだみたいに熱くなり、心臓が早鐘のように鳴っている。体全体が熱を帯びて、もはや理性を思い出す余裕すら与えてくれない。

とろんとした双眸がじつとこちらを見つめて、熱でほんのりと赤くなったシトリの顔が、徐々に近づいてくる。

だが、シトリの手がシュオウの顔の眼帯に触れた瞬間、沸き上がった熱気が一瞬にして冷めてしまった。シトリの手を掴み、自分から遠ざける。

「すまない……おりてくれ」

熱くなるのも一瞬なら、冷めるのもまた同じ。いわゆる性欲という本能は、不便なものようで状況によっては笑えるくらい柔軟でもある。

もつとも、今のこの状況はとても笑い飛ばせるような軽いものではなかった。

「どうして」

「理由はない。とにかく、冷静になつてくれ」

「それに触つたから？」

シトリはシュオウの眼帯を見て聞いた。

「……………そう、だな」

図星をつかれ、ごまかす気力もなくなっていたシュオウは、正直に認めた。

「見られるのが怖い？」

「……………怖い。一度でも隠してしまえば、それをさらけ出す事に、たくさんの勇気が必要になるみたいだ。親しくなった相手には、とくに、な」

眼帯の下に隠した醜い火傷の痕。これを見せたからといって、仲間達が自分への態度をころりと変えてしまうとは思っていない。

だけど、もし……………そう考えてしまうと、ほんの僅かな勇気ですら干上がった井戸のように枯れ果ててしまう。知られずにすむのならそのままでもいい。安全な場所に留まって、心に余計な傷を増やしたくはないと思ってしまう。

逃げの思考に体が動かなくなる。

皆が恐れる化け物にすら、単身で挑むことができる自分がこの有様とは、なんとも情けなく笑える話だと思った。

「その眼帯の下がどうなっている、君への気持ちは変わったりしないって断言できる。だけど、無理に見たいとも思わない。もし、君がいいと思うときがきたら、そのときは見せてくれる？」

シトリの言葉は、心底シュオウを氣遣ったものだった。

今までどこに隠していたのかと思うほど、その表情は真剣で温かい。

「ああ、約束する」

シトリは上から降りて、そのままシュオウの横に寝転んだ。

「あーあ、覚悟してたんだよ」

恨めしそうに横目で睨むシトリに、本気で申し訳ない気持ちになる。

「……ゴメン」

謝ると、シトリは笑った。

「なんだか、急に幼く見えるんだね。君って不思議。偉そうにしてるのかと思えばたまに優しいし、物凄く強いところを見せてくれたと思ってたら、意外に繊細だし」

「こっちだって、同じだ」

「同じって？」

「育ての親に拾われてからは、ほとんど他人と接する機会がなかったから、歳の近そうなシトリやアイセのような異性は自分とは違う生き物に思える」

シトリは、ムツとした表情でシユオウを睨んだ。

「アイセの名前はださないで　でも、歳が近いっていうのは気になる。わたしは今年で十八になったけど、君もそれくらいなの？」

「二十歳になった……たぶん」

「たぶんって」

「わからないんだ。孤児だった頃は自分の年齢もわからなかった。師匠　育ての親にはじめて会った時に、六歳か七歳くらいじゃないかって言われて、それが十二年前ことだ」

「七歳としたって、それじゃ一年足りなくない？」

「二十歳になったら自由にしてやるって言われていて、自分は早く外の世界を見て歩きたかったから、無理矢理二十歳になったことにして出てきたんだ」

「適当だね。だけど、その見立てはそれほどはずれてないと思う。君の見た目の雰囲気は、わたしの同級生の男子達とそう離れていないみたいだから」

「そうか……なら……よかった」

少しずつ、目蓋が重くなっていく。

試験を終えた日に、そこそこの睡眠をとることができたとはいえ、疲れはまったく解消されていない。

試験中、ほとんど寝ずの番で夜をすごし、途中からはボルジを背負ったまま歩きずくめだった。

気を遣われるのが嫌で隠していたが、仲間の前でも立っているの

が精一杯なほど足腰にも疲れが溜まっている。

こうして柔らかいベッドの上で横になっている今、シトリの淡々とした話し声が、子守歌のように聞こえて心地良い。

「眠そうだね。ねえ、起きるまで一緒にここで寝てもいい？」

シユオウは寝返りをうつて、シトリに背を向けた。

「好きにしてくれ」

目を閉じる。

暗闇に飲み込まれていくような感覚に酔いしれる。

意識は途切れ途切れになり、シユオウはほどなくして眠りに落ちた。

シトリは寝息をたてはじめたシユオウの背中を軽くつついた。完全に眠ってしまったのを確認して、一人溜め息を吐く。

「ほんとに寝ちゃった……」

だけど、眼帯の下を見せるのが怖いと言っていたのに、こうして無防備に眠ってしまったのは、少しは信頼されているのだろうか。シトリはシユオウを後ろから抱きかかえるように腕をまわして、目をつむった。

温かい。

さきほどまで火照っていた体は、心地良い温度に落ち着いて、何物にも代え難い安心感を与えてくれる。

ほんの数日前まで、男を視界にいれるのも嫌だと思っていたのに、人生とはわからないものだ。今は一人の男の事が頭から離れない。夢でもいい、もっと一緒にいたいと願いつつ、シトリもまた眠りへとおちていった。

「聞こう」

アミュ・アデュレリアは机ごしに向かい合うように立っている力ザヒナに発言を促した。

「試験開始から二週間がたちますが、例年通り、とくに目立った混乱もなく進行しております」

的外れな説明をする部下に対して、アミュは軽い苛立ちを覚えた。

「それはわかっている。聞きたいのはあの青年についてじゃ」

試験開始前日に、偶然の出会いを経験したあのシユオウという青年。彼の所属した小隊は、たったの一週間で随行した平民全員を連れて帰るといふ快挙を成し遂げていた。その知らせを聞いたときに

は驚いたものだが、あの青年がいる小隊だと聞いたとき、浮き立つような不思議な気持ちを感じた。ちょうど、乗馬レースで応援していた者が勝利する、その瞬間に感じる優越感のようなものを。

「それが……………」

カザヒナは言い淀む。

「言いにくい情報でも見つけたか」

「いえ、それならまだよかったです。影狼を使ったにも関わらず、知人や出身、ムラクモへ来た経路などの一切の情報を得ることができませんでした。わかった事といえば、彼に仕事を紹介した王都のギルドくらいで、そこでも大した情報はなにひとつ……………」

カザヒナが暗い表情で差し出した報告書は、ほとんど白紙の状態だった。

「ふむ……………」

「申し訳ございません。あの青年の容姿、特にあの灰色の髪から北方の出身を疑いましたが、ターフェスタから最近ムラクモへ入国した者の中には、あの青年の容姿と合うような人間を見たという情報はありませんでした」

青年の灰色の髪は、ムラクモではめずらしい。

しかし、北方の国々では貴族、平民を問わず灰色の髪を持つ人間は多い。となれば、そこに出身地を予想するのは当然のことである。

ターフェスタ公国は東と北を繋ぐ入り口のような国だ。

他に道がないわけではないが、道幅が大きい事と、途中休憩に使えるような街や施設が充実していることから、東と北を行き来する

人間のほとんどがターフェスタを経由する。

北方で灰色の髪はめずらしいものではないが、あの大きな黒い眼帯は、一目でわかるほど特徴的なので、その目撃情報が一切ないというのは気になる。

考え混んでいたアミュに、カザヒナが頭を下げた。

「この失態は、命令を受けた私にあります。どうか、調査にあたった影狼の者達には寛大なご処置を」

さつきから妙に神妙な態度だとは思っていたが、そんなことを心配していたようだ。

「気にするでない。あの者達が調べてこれなら、本当に情報が無いのじゃろ」

影狼は、アデュレリア公爵家が私費で保有している諜報組織だ。

その主な仕事内容は情報収集だが、時には裏工作や汚れ仕事をさせる事もある。

構成員の多くは平民で、一部の貴族も秘密裏に所属している。偉そうにふんぞりかえっている家柄の良い輝士達よりよほど優秀な彼らが、白紙の報告書を提出したということは、これが答えなのだろう。

しかし、人が深界を渡るには、かならず白道を通らなければならない。

各国は他国との境界近くや、自国の領土内であっても、白道を行う者達を調べることができるように関所として砦や要塞を設けている。

それはもちろん、ムラクモも同様である。

その時の状況によりけりだが、彩石を持たない平民であれば、それほど嚴重な取り調べを受けずとも通行料を払えば関所を通過することができる。

とはいっても、あれほど特徴的な容姿をしている青年を、誰も見ていないというのはおかしな話ではある。

「ありがとうございます。今のは別に、アイセ・モートレット准輝士主席候補生のほうから試験中の出来事をまとめた報告書を受け取っています」

渡された報告書の束に目を通す。

そこには試験開始から終わりまでにあつた事が詳細に記載されていた。

中身はかなりわかりやすく書いてあるのだが、どうにもシュオウという青年について書いてある部分だけが、強く感情のこもったような内容になっている。

とくに最後の大型の狂鬼二体をたった一人で相手にしたというあたりまでくると、物語や詩のような表現が増えて、青年がまるで白馬に乗った王子様であるかのごとく描写されている。これを書いた准輝士候補生の気持ちが透けてみえるようで、おもわず吹き出しそうになってしまった。

報告書の最後には、ムラクモが青年を雇い入れることで得られる利を、びっしりと文字を敷き詰めて訴えている。

「お前は読んだのか？」

「はい、すでに何度か」

「ふむ。色々と気になることはあるが、最初に食料の大半を捨てていったというのは、剛胆じゃな」

報告書には、青年の提案で開始早々に米をすべて捨てていったと

ある。

この試験で食料として重たい米袋を持たせるのは、輝士の卵である生徒達の思考の柔軟さを見るためのものだ、と聞かされている。

過去にこの試験に合格した者の中には、米を五人分に分けて持ち運んだ生徒もいたが、大半の生徒達は貴族特有の傲慢さが邪魔をして、自分達にまで負担がおよばないように、平民にだけ無理をさせる傾向が強い。

米を捨てさせた青年の言い分では、火の臭いが狂鬼を呼ぶから、とある。これはまったくその通りだ。

だが、火を使ったからといってかならずしも狂鬼に襲われるわけではない。状況は常に流動的で、風向き一つでも結果は変わる。

「火を使うことを警戒したことは理解できます。あえて重たい荷物を捨てて、進行速度を優先したというのも、選択としては十分に効果を期待できるものかと」

「うむ。じゃが、すべてを捨てていく事はなかった。深界では何があるかわからぬ。せめて一週間分でも分けて持つていけば、不測の事態にも備えられたはずじゃ。一指揮官としては、まだまだ頭が固く、安全性への配慮が足りない」

「閣下、お忘れのようですが、この小隊の隊長はアイセ准輝士候補生です」

「む……そうじゃった」

報告書を読んでいると、どうみても決定権を有していたのは平民である青年のほうで、いつのまにか隊の責任者という目で見えてしまっていた。

アミュは報告書を読み進めながら、さらに続ける。

「途中、別の小隊が見捨てた怪我人を一人拾っているな。これは軽率な行動じゃ。少ない手持ちの食料で、すぐに森を抜けられる確たる根拠がないにも関わらず、食べ物が必要とする人間を無計画に増やすような行動は控えるべきじゃった」

「彼は正規の軍人というわけではなく、歳もまだ若いですから。計算をして命を捨てていくというような割り切り方はできなかったのでしょう」

「であるうな。それにしても、森を抜ける直前での狂鬼二体を相手にしたという、この話だけは簡単には信じられぬ」

狂鬼という生き物は、人間にとっては天敵のような存在である。人数を用意して準備を重ねてから狩る事もあるが、人間一人がおいそれと相手をできるようなものではない。

それも、シュオウという青年は彩石を持たない平民なのだ。

「私も、あれを見るまでは信じていませんでした」

カザヒナは部屋の隅に重ねて置いてあった、二つの大きな木箱を運んできた。

中身を確認すると、たつぷりと敷き詰められた藁束の上に、巨大な砕けた輝石が乗せられていた。

一つは暗い灰色。もう一つは濃い紺色をした輝石だ。

「灰色の輝石は、オウジグモと呼ばれる狂鬼の物で、もう一つのほうはソウガイキという狂鬼の物です。彼らが試験を終えて間もなく、回収させました」

砕けた輝石を集めてみると、どちらも中心に尖ったものを穿たれ

たような痕跡がある。

「これが証拠というわけじゃな………はじめて見たとき、並外れた運動神経をしているとは思ったが、ここまでとはな」

深界に詳しく、一人で大型狂鬼を倒せてしまうほどの腕と、輝士の放った晶気を躲してしまう身のこなし。

そして、その出自は不明。

なんにせよ、シユオウという青年が百年に一度出会えるかどうかの逸材であるのは間違いない。

この才能は種のようなもの。放っておいてもいずれどこかで芽吹くだろうが、それでは面白くない。

自分の手の中でたっぷりと水を与えて、いずれ花咲くその日まで見守りたいという気持ちが沸いてくる。

この種を誰よりも早く見つけた幸運に喜びつつも、頭の中にはわずかな不安もよぎる。

もし咲いたのが手に負えないような花なら。

アミュは自分の右手をじっと見つめて、強く握りしめた。

「件の青年に会いに行くぞ」

「はい………ですがどのような用件でしょう」

「決まっております。我が軍に勧誘するのじゃ」

アミュが言うと、カザヒナは目を見開いて聞き返した。

「勧誘、ですか。それは左硬軍にということでしょうか」

ムラクモ王国には大きく四つに分かれる軍がある。

一つは、国事を司る王轄府固有の兵力である 近衛軍

アデュレリア公爵家が保有する、通称 氷狼輝士団 とも呼ばれる 左硬軍

ムラクモに存在する燦光石の一つ《蛇紋石》のサーペンティア公爵家が保有する、通称 風蛇輝士団 とも呼ばれる 右硬軍

最後に、治安維持を目的とした警備隊や、一般従士の多くが所属し、戦争時においては傭兵団を組み入れることになる 第一軍

これら計四つの軍で、ムラクモは諸外国から領土を守ってきたのである。

「他になにがある」

「ですが、閣下は試験の内容に不満を述べておられたように思うのですが」

「不満ではない。報告内容を自分なりに評価したにすぎぬ。人間のことである以上、完璧はありえぬからな。この者達が無事に試験を終えられたのは運によるところも大きい。じゃが、運を呼び寄せるのも、またその人間の行動力である。それに、我が何よりも件の青年を評価するのは、類い希な運動神経をしているからでも、狂鬼を一人で屠ることが出来るほどの腕があるからでもない」

カザヒナは軽く首を傾げて聞いた。

「では、なにを見込んで閣下自らが勧誘に向かうと？」

「人間性、といっても漠然としすぎているやもしれぬな。自尊心の塊のような貴族に対して、自分の意見を述べたばかりか、それを受け入れさせた。あげく、この報告書から見てもわかるように、随分と准輝士候補生に気に入られているようじゃ。人間は強い者に惹

かれる。他者を魅了し、引っぱっていけるような人間を、我は欲する。この青年を、つまらぬ退治屋等にするのではなく、アデュレリアの重要な戦力となるような未来の将官候補として迎え入れるつもりじゃ」

「……………そこまでの期待をかけておられるのであれば、異存はありません。では、これから会いに行くついでに彼の出自等についても直接本人から聞き出してみましよう」

「特殊な事情があるのだとしたら、強引に聞けば警戒心を持たれてしまう。軽い質問を投げてみて、まずは出方をうかがう。時間はいくらでもあるのじゃ。焦る必要はない」

カザヒナは恭しく一礼した。

「承知致しました」

「うむ。では、外出の支度をせよ。身分を隠していくので、市井の者達が着るような服と輝石を隠せそうな上着もな」

ドアをコンコンと叩く音がして、微睡みから意識が覚醒する。閉めきったカーテンの隙間から漏れてくる光の加減で、時間はだいたい夕方頃だろうと予想する。

少し蒸し暑さを感じて、かけていた毛布を蹴ると、そこからたホコリが漏れ入る光を浴びて砂塵のように空中に舞った。

「シユオ、起きてるっばい？」

扉の向こうから聞こえたのはジロの声だった。

ジロはシュオウ、と最後まで言わず、シュオと短く自分と呼ぶ。

試験を終えて王都に戻ってから一週間。その間、疲労から夕食を食べる時以外ほとんど部屋で寝たまま一日をすごしていた。

途中、あれやこれやと贈り物を持って訪れるアイセとシトリ以外の仲間達は、自分に気を遣って夕食の時間以外はそつとしておいてくれる。

この時間にジロが呼びにきたということは、常ならざる事態と考えたほうがいいのだろう。

「今起きた」

ベッドに座ったまま、返事をする。

「シュオにお客さんっばい。辛かったら帰ってもらっつばいけど」

客、と聞いて不思議に思う。

アイセとシトリならこんな言い方はしない。では誰なのか。

シュオウには、自分を訪ねて来るような知人の心当たりはなかった。

「いや、大丈夫だ。こつちから会いに行く」

「一階で待つてるっばい」

ジロの気配が遠ざかっていく。

誰かはわからないが、待たせるのも悪いと思い、寝起きのままに部屋を出た。

階段を下りると、一階の出入り口付近に佇む子供と大人の女の姿が見えた。二人とも、目深に薄茶色のフードをかぶっている。

二人に近づき、その顔を確認したシュオウは驚いた。
試験開始前日、柄の悪い三人の輝士達を叱りつけた、氷長石こと
アデュレリア公爵とその付き人らしき女輝士が、そこにいた。

「あなた達は」

続きを言う前に、アデュレリア公爵が人差し指を口元に当てて、
「ッ」と言った。

「正体を知られたくないのじゃ。そなたの部屋があるなら、そこ
へ案内してもらいたい」

「はあ……」

戸惑いながらも、シュオウは二階の自室へ二人を案内した。

ろくに掃除もしていない薄暗い部屋に二人を入れて、扉を閉める。

「這いつくばって、頭を下げるべきでしょうか」

「いらぬ。それに、そんな気はないと顔にかいてあるぞ」

なんら悪気をこめずに言ったつもりだったが、見た目はどこから
どうみても少女であるアデュレリア公爵は、不機嫌そうな様子だっ
た。

目の前にいる人物は、非常に希有な存在である燦光石の継承者で、
軍のお偉方でもあり、王に次ぐ爵位を持つ大貴族でもある。

あまりにも自分とは世界の違いすぎる人間を相手にして、どのよ
うな態度をとるべきなのかが、まったくわからなかった。

シュオウの部屋には小さなテーブルと椅子がある。客人にそこへ
座るように促して、自分はベッドの上に座った。

「それで……この訪問の理由を聞かせてもらえますか……アデュ

レリア公爵、様」

「この場ではアミュと呼ぶがよい。非公式の訪問じゃ」

目の前にいる少女は、長い薄紫色の髪、クリクリとした濃い紫色の大きな瞳。体は小柄で、ムラクモで師匠に拾われた頃のシユオウと同じくらいの背丈だ。小さなテーブルと椅子が、彼女が腰掛けているだけで大きく見えてしまうあたり、本当にどこからどう見ても子供である。

だが、この少女がただの小さな女の子ではないということは、手にある異様なほどの存在感を放つ藤色の輝石と、アミュの後ろで姿勢良く立っている女輝士が証明している。

女輝士の容姿は、目尻が少し垂れていて大人しそうな印象を受ける。二の腕くらいまである青が混ざった薄紫色の髪の毛の先は、外側にくるんと跳ねている。女性の平均よりは少し高めな身長と、完璧なまでの姿勢の良さから、優秀な軍人としての雰囲気を漂わせていた。思い出してみれば、この女輝士は初対面のときに三人の輝士達に怒鳴りつけていたので、その場面が強烈な印象として残っている。しかし、今は落ち着いた表情で静かに立っているだけで、顔には微笑をうかべていた。

女輝士と目があうと、なごやかな口調で話しかけてきた。

「会つのはこれで二度目になりますね。私の名前はカザヒナ、家名はアデュレリアです」

「アデュレリア……」

「アミュ様とは血族の関係にあたります」

「なるほど」

どつりで、と思う。

髪の毛の質感や目の色、その他にも、アミュとカザヒナの見た目の共

通点は多い。

「自分は、シユオウといます」

シユオウも名乗ると、アミュがうんうんと二度頷いた。

「うむ。互いに自己紹介をしたところで、本題じゃ。実は、個人的にそなたに興味があつてここへ来た。さしつかえがなければ、少し話をしたいのじゃ。よいか？」

「話すくらいなら、もちろん」

「うむ。しかし、ここはちと寒い。火を入れてはもらえぬか」

シユオウの部屋には備え付けの暖炉がある。

陽も徐々に落ちていつている時間で、いわれてみればたしかに少しだけひんやりとしている。

「下から種火をもらつてきます」

「では、ついでに熱い飲み物をもらえると嬉しい」

アミュがそう言った後ろで、カザヒナもにっこり微笑んで人差し指を立てた。

「私もお願いします。ここに来るまでにすっかり冷えてしまつて」

二人の要求に、あつかましい等とは思わなかった。

むしろ、親しい友の家に訪ねてきたような力の抜けた態度に好感を抱いたくらいだ。

シユオウは了解したことを伝え、二人を残して部屋を出た。

部屋を出て行ったシュオウを見送ったアミュは、早口でカザヒナに声をかけた。

「いまのうちじゃ、部屋の中を探るぞ」

「え？ もしかしてそれを狙って彼に頼み事を……」

カザヒナがきょとんとして聞き返した。

「あたりまえじゃ。なんの考えもなしに、突然訪問しておいてあれこれ要求するものか」

家捜しをしたいわけではないが、これから軍へ勧誘するにあたって、少しでも情報が欲しい。

それがどんなに小さい事でも、人間を相手にするうえでは、次の扉を開くための鍵になることもある。

部屋の中を見回すと、窓際の椅子にかけられた黒い毛皮の外套が目にとまった。

手にとってみると、平民が持つものとは思えないほど良質だ。売り物なら相当に値の張る物だろう。

表面はしなやかで柔らかいのに、押せばしつかりとした弾力がある。いったいどんな動物から作ったものなのか、アミュの持つ知識では思い当たるものはなかった。

「外套、ですか。見るからに上質な素材で出来てますね」

「うむ。これほどの物を買って手に入れたとは考えにくい」

だからといって降って沸いてくるようなものでもなく、かならずこの毛皮の元となった動物を狩った者と、材料を加工した者がいるはずである。

あのシュオウという青年が作ったのだろうか。

これ以上の推理は無駄なことと判断し、アミュは別の手がかりを探した。

なにしろ時間はかぎられている。

「他にもっと何かないのか」

「あのう、ベッドの毛布の下に、こんなものが……」

カザヒナが照れた表情でさしだしたそれは、男物の下着だった。しかも、へなへなとくたびれていて、どう見ても使用済みだ。

「こ、こらッ、何を考えておるッ」

こんなものを直接目にする機会のほとんどないアミュは心底戸惑った。

恥ずかしいやら、興味があるやらでチラチラと下着に目がいつてしまう。

「毛布をめくったとき、これが置いてあつて、なぜだかそこから良い匂いが……」

カザヒナはおもむろに下着に鼻をつけて、くんくんと嗅ぎだした。竜巻の如き勢いで下着の臭い成分を吸収したカザヒナは、普段見せたことのないほど艶っぽくうっとりとした表情で息を吐いた。

なんとなくの背徳感におそわれたアミュは、顔が熱くなつていくのを自覚していた。

「お前にそんな趣味があったとは……どつりで嫁のもらい手がな
いはずじゃ」

「ほつといてくださいッ。それに趣味じゃありません、こんなこ
と初めてなんですから」

「手慣れているように見えたがの」

「自分でも変なことをしているとは思っていますが、なんかこう、
癖になる香りというか……アミュ様もいかがですか？」

そう言うと、カザヒナはまるで高貴なデザートでも捧げるかのよ
うな手つきで、シユオウの使用済み下着を肅々と差し出した。

馬鹿なことをするなと怒鳴りそうになりながらも、アミュは言葉
を飲み込む。そのついでに湧いてきた唾液も飲み込んだ。

これまでの百年以上の人生のなかで、男の下着の匂いを嗅ぐ等と
いった、はしたない行為はしたことがない。カザヒナのうつつとりと
した表情を見ると、そんなにかくわしいものかと好奇心をそそ
られたが、どうにか堪える。これに手を出せば、これまで築いてき
た威厳やその他の様々なものが崩壊してしまうのでは、と思ったか
らだ。

「いらぬ……自分一人で堪能するがよい」

「そうですか？ それではお言葉に甘えてもう一嗅ぎ」

カザヒナは下着に顔を埋めるほどの勢いで匂いを嗅ぎはじめた。
一嗅ぎすることには、はあはあと顔を赤くして蕩けた瞳で息を吐い
ている。

そんな姿を呆れながら見守っていたアミュは、自分の有能な部下
の将来がふと心配になってきた。

「おい、それくらいにして」

「

そろそろ止めようかとしたその時、ガチャリと奥の扉が開く音が聞こえて、部屋の主が戻ってきた。

「宿の人が買い出しに行っていて、道具の用意にてまど」

ドアを開けたシユオウは、くたびれた下着の匂いを楽しんでいたカザヒナを凝視して固まった。それはもう見事に、糊で固めたかのようにぴくりとも動かない。

カザヒナも同様で、朱に染まっていた顔は血の気が引いて青ざめていた。

「あ、ああああのツ、これはち、ちが」

錯乱状態一歩手前のカザヒナの手から、下着がぼとりと床に落ちる。

変質者でも見るような目でカザヒナをじっとりと睨むシユオウと、平素みることもないくらい慌てふためいて言い訳を重ねるカザヒナの後ろで、アミュは密かに溜め息を落とした。

探りをいれるための貴重な時間を、部下の特殊な趣味を満たすために使ってしまった後悔に頭痛がしてくる。

しばらくして恐る恐る部屋に入ってきたシユオウは、暖炉に火を入れてから、慣れない手つきで茶を入れてくれた。

シユオウが運んできたのはアカ茶という飲み物で、アミュが好んで毎日飲んでいるものと同じだった。茶葉は西方のイベリス産の高級品で、品質は申し分ない。

飲み物を受け取る際、アミュへの態度は普通だったが、シユオウのカザヒナへの態度は明らかに取り繕っているのがわかる。カップを受け取るときに、カザヒナは羞恥心からずっと下を向きっぱなしで、シユオウはそんなカザヒナに同情するような生ぬるい視線を送

っていた。

熱いア力茶をフーフーと冷ましてから喉に流し込む。思っていた以上に体は冷えていたようで、五臓六腑に染み渡る美味さだった。暖炉に火も入って、それなりに落ち着ける空間になってきたが、アミュは目的があつてここに来ている。ほっと一息ついている暇などないのである。

「では、本題に入りたい」

アミュは椅子を移動させて座り直した。今はベッドに腰掛けるシユオウと向かい合う形になっている。

こちらの意気込みが伝わったのか、カザヒナの件で落ち着かない様子だったシユオウも、しっかりと背筋を伸ばして座り直した。

「どうぞ」

「そなたの参加した試験の目的を知っておるか」

「宝玉院という軍学校の、卒業試験だと聞いています」

「うむ、その通りじゃ。じゃが、もう一つ別の目的もある」

「試験に参加した平民を、従士として採用する、でしたか」

シユオウは、どこか揶揄するような口調で言ったが、それも無理はない。この試験は平民を従士として採用するというのが主目的ではなく、高額な報酬を餌にして、あくまで危険な試験を運用するための必要人員を確保するための方便であるとわかっているのだろう。

「端的に言う。そなたを従士長待遇で軍に迎えたいと思っている」

アミュの言葉に、シユオウのみならず、後ろで待機しているカザヒナも息を飲む気配が伝わってきた。コネも実績もない平民を、い

きなり士官待遇で雇い入れるというのは、前例がないことだ。

軍の階級は、大きく二つに分かれている。平民である従士の階級と、貴族である輝士の階級がそれにあたる。

貴族の軍での階級には、さらに輝士と晶士の二つに分かれて存在し、以下の順で上にあがっていく。

候補生	准輝士	輝士	硬輝士	重輝士
候補生	准晶士	晶士	硬晶士	重晶士

貴族は軍学校を卒業後、自動的に士官となるため、原則として貴族の軍での階級に下士官は存在しない。

階級に硬、重という言葉がつくのは、力を増すほどに硬く重くなる輝士の性質からきている。

重輝士、重晶士より上の階級からは将官となり、	准将	重将
元帥	という順で階級が用意されている。	

重将は、その国の歴史ある大貴族や王族などが世襲によって受け継ぐもので、通常、普通の輝士や晶士が望める出世の最高位は准将までである。

准将からは司令官としての役割を担うため、総じて准将から重将の階級にある者は将軍と呼ばれることが多い。

また、輝士は貴族にとって最下位の爵位でもあるため、晶士であろうとも、一般的には輝士と呼称されることが多い。

平民である従士の階級は以下の順で上がっていく。

見習い	従士	従士曹	従士長	百砂従士長	千砂
従士長	砂将				

従士曹、従士長の階級からは小隊ほどの人数をまとめる事となる。従士長から千砂従士長までは士官階級となる。

砂将は将官階級で、准将と同格だが、貴族を優遇する傾向が強いムラクモでは、今現在砂将の位を持つ軍人は一人もいない。

アミュとしては、用意できる最大の待遇を提案した。従士長ともなれば給料もそこそこいい。

それに、若い男であれば、一度は戦場で部下を指揮する事に憧れるものだ。

てつきりこの厚遇ぶりに歓喜して飛びついてくるものと思っていたのだが、その期待はたやすく崩れた。

「正直にいつて、あまり興味がありません」

「……なぜか、聞いてもよいか」

「世界を、見て回りたいと思っています。この試験に参加したのも、そのための金を稼ぐためでした。自分を従士長に、という話はありませんが、受けることはできそうもありません」

シュオウはアミュを真つ直ぐ見据えて言った。それはとても真摯な態度で、断られたというのに好感すら抱く。

年長者として、若者が旅立ちを望んでいるのなら、それを引き留めるべきではない。

だが、ここで見逃してしまえば、いずれシュオウの才能を見いだす者はかならずどこかで現れる。それが自分ではないということが、アミュにはひたすら面白くない。大好きなオモチャを誰にも触られたくないという、一種の独占欲のような感情に囚われそうになる。

なので、一度断られたからといって、簡単にあきらめる気にはならなかった。口説き落とすためにも、なにか一点でいい、突破口になるものが欲しい。

相手は地位や金に執着しない。だからといって、欲しいものはかならずあるはず。世界を見たいと言っていたように、他にもこの青年の欲求があるとすれば、それを満たしてやることのできる何かを、かならず提供できるはずである。

「そうか……ところで話は変わるが、そなた達の試験中にあった出来事については、こちらでもすでに把握しておる。色々と驚かされもしたが、大きな狂鬼二体をたった一人で片付けてしまったそうじゃな。たいしたものじゃ」

シユオウは軽く頷いた。

褒めたつもりだったが、その事でとくに自慢気にするわけでもなく、淡々としている。

普通ならこれだけの事を成せば自信過剰になったり、高く鼻を伸ばすものだ。とくに若い者には、調子に乗りやすいという特技がある。

だが、シユオウからは褒められて特に喜んでいる様子もなかった。

「報告書には、風変わりな武器を使っていた、とあった。先の尖った物だったとか。さしつかえがなければ、見せてはもらえぬか」

シユオウは快く了承した。

ベッドの脇に置いてあったベルトを持ってきて、白い棘のようなものを取り付けた武器を取り出す。

「針、といいます」

「ほう。これはめずらしい得物じゃな……」

受け取ると、思っていたよりもずっと軽い。作りも単純で、本当にこれで狂鬼の輝石を打ち砕いたのかと疑問が湧いてくる。

めずらしいものなので、カザヒナもこちらに身を乗り出して覗き込んでいた。

「この刃の部分はなんじゃ？ 金属、ではないな、軽すぎる。…
…骨か」

針の刃の部分は、先にいくほど細く研磨されているようだ。形状は細長い円錐形である。

「コクテイ、という狂鬼の歯から作られています」

「コクテイ……はじめて聞く名じゃな。カザヒナ、お前は知っておるか？」

「いいえ、聞いた事ありません」

「黒くてデカイトカゲだと、師匠は言っていました。自分も見たことはありません」

「師匠、といったか。それは、そなたに狂鬼との戦い方を教えた人物か？」

「自分を拾って、育ててくれた人でもありません」

シユオウは孤児だったらしい。報告書には書いていなかった事だ。

「なるほど。さぞ優秀な人物だったのじゃろうな。弟子を見ればわかる」

シユオウは、いえ、と言って後ろ頭をかいた。表情には僅かに微笑みをうかべている。

その態度から、育ての親、そして師への愛情が深いと推察できる。口説き落とすための材料としてはまだ弱いが、心に留め置く価値はあるだろう。

「狂鬼を一人で相手にできるほどの腕前なら、さぞかし剣の腕も立つのであろう」

「いえ、剣は……ほとんど触ったこともありません」

「ほう、そなたの師匠殿からは教わらなかったのか？」

「針以外の武器の扱いは何一つ。棒きれを持っただけで怒られま

したから」

なにかを思い出したのか、シユオウは視線を遠くへやって笑った。しかし、これは意外なことだ。

大型狂鬼二体を倒したという報告を見たとき、あまり考えることもなく剣の腕も立つものと思っていた。この世界で武人にとっての剣の扱いは、基本中の基本である。もちろん腕の上下はあるが、ムラクモでは下っ端の従士ですらそこに剣は扱えるのだ。

思い出してみれば、はじめて会った時も帯剣していた様子はなかった。

この話題を続ければ、剣を使えないことを馬鹿にしているとられかねないと思い、アミュは話題を変えることにした。

「よければ、そなたの出身を知りたい。さきほど、拾われた、と言っていたが」

シユオウという青年の存在は、依然として謎めいている。狂鬼を相手に出来る腕前。それを教えた師の存在。なにか隠したい事がある。とてもおかしくはない。答えを嫌がるようなら、この質問はすぐに取り下げるつもりでいた。

シユオウは少し間を置いて、じっくりと言葉を選んで言った。

「ムラクモです。物心ついた頃には、この王都に独りぼっちでした」

アミュは一瞬、言葉を失った。

「……ムラクモの、しかも王都の出とは」

アミュの背後で、カザヒナが、あらまあ、と驚きの声をあげた。

他国の出身を疑っていた相手が、自分達の国の出身者だったとは、なんとも滑稽な話だ。

「あるとき、偶然師匠に拾われて、それから遠くの、その………
…田舎のほうで育てられました」

シユオウは場所を説明するのを渋っているようにみえる。師匠と呼ばれている人物は、もしかすると訳ありなのかもしれない。

詳しく問いただせば、せつかくの会話が絶たれてしまうかもしれない。アミュはあえてそのことには触れなかった。

「そうか。あなたの灰色の髪から、てっきり北方の生まれかと思っていたのじゃが」

「北には、自分と同じような髪をした人達が？」

「うむ。あちらではそれほどめずらしくなろう。なにがあつたのかはわからぬが、両親か、もしくは片親が北方人だったのかもしれぬな」

「そう、ですか……」

シユオウは黙り込んだ。

空気が重たくなってしまった。アミュは焦って次の話題を用意した。

「アイセ准輝士候補生は、あなたを随分と気に入っていたが、それほどの腕があるなら、試験中に他の人間達を疎ましくは思わなかったか？」

「最初の頃は、少し。ですが、今ではあの仲間達と共に試験を経験できてよかったと思っています」

シユオウが仲間について語った瞬間、表情がゆるみ、幼さをみせ

たのをアミュはめざとく見つけた。隙といってもいい。はじめてみせる油断した、年相応の男子の顔である。

仲間、か。

「仲間は大切か？」

「そう、ですね」

「じゃが、その仲間達もそれぞれに生きる道が分かれてしまうぞ。試験が完全に終わり、報酬を受け取れば離ればなれになってしまう。寂しくはないか？」

「……少しは」

シユオウの表情が陰る。

仲間という言葉に関わる話になった途端、あきらかに感情が揺れ動いている。

突破口を見つけたかもしれない。そう思った。

「仲間とは不思議なもの。血は繋がっていないのに、苦難を共に乗り越えることで強い絆で結ばれる。軍で共に歩むこととなる同僚部下、上官も同じことじゃ。皆、仲間であり戦友であり、そして家族になる」

「家族……」

「組織というものは、そこに所属している者達を絆という見えな
い糸で結ぶ役割をする。そなたがもし、仲間を欲するのであれば、
我はその場を提供することができるぞ。もう一度問う、軍に入る気
はないか。そなたは世界を見たいと言ったな。ムラクモも、そして
軍隊も、世界の中の一つであることに違いはない。まずは手近なと
ころから見て、知るのはどうじゃ。そなたがムラクモに残れば、喜

ぶ者もおるじやろっ」「

シユオウは沈黙して、深く考え込んだ。
悩んでいる。

これまでにない手応えを感じて、アミュはさらに攻勢にでた。

「今回の試験と同じように、軍に入れば友と呼べる者も増えよう。もし、入ってみて気に入らないと思ったなら、辞めるのはそなたの自由じゃ。無理に縛ろうとも思わぬ。どうじゃ」

シユオウはアミュの一言一言にしっかりと頷いて、答えを出した。

「……………経験をさせてもらえるというのなら、お願いします。自分が、一つ所に居続けることができる人間なのかは、まだわかりませんが」

「そうか、そうかつ。心配するな、我の元で働くかぎり、他国との関わりは嫌というほど経験することになる。そなたが望んでいた世界を見るという目的の一部もかなうに違いない。誘いを受けてくれたこと、嬉しく思うぞ」

アミュは立ち上がって、シユオウの手を取りブンブンと振り回した。

まるで子供のように無邪気に喜びを表現してしまったが、勧誘に成功したことが嬉しくて気持ちを抑えられないのだ。

これからどうするか、さっそく考えを巡らせる。

まず、周囲からあやしまれないように適当な出身地を用意してやるべきだろう。その点では、影狼を使えばたやすく実行できる。関所でシユオウの自撃情報が一切ない不自然さも、こちらで適当に目

撃情報をでつちあげてやればすむことなので、万が一、王轄府などが探りを入れてきたとしても心配はいらない。

あとはそう、剣を使えないと言っていたので、師を与えてやるのがいいかもしれない。軍での剣の腕は、その人間の有能さを示す判断基準ともなる。そんな事で卑屈な思いはさせたくないなので、一流の腕を持つ剣士を指導に当たらせるのがいいかもしれない。幸い、アミュの部下の中でもかなり剣の腕の立つ者がすぐ後ろにいる。シユオウの運動神経がずば抜けて優れていることは証明済みなので、さほど苦労もなくモノにしてしまいかもしれない。

アミュに手をふりまわされるシユオウは、少しだけ困った表情で微笑していた。

まずは入り口に立たせることには成功した。そこから先の事は、導く人間の資質も重要になってくる。つまりは自分だ。責任も感じるが、今は楽しみな感情のほうが圧倒的で、目の前の青年が、いずれはカザヒナと共に自分の右腕として実力を発揮してくれるのではないかと、期待は尽きなかった。

王都の北に スイレイ湖 と呼ばれる湖がある。

春になると流れてくる山頂付近の雪解け水を、堤を設けて塞き止め量を調節している。この人工的に作り出した湖は、半透明の美し

い青の水で満たされていて、湖の中心に用意された島には 水晶宮 という名の王宮がある。

水晶宮の外壁のほとんどは、切り出した夜光石で作られていて、夜になると周囲の湿気を吸収してぼんやりと光を放つこの王宮は、それを見た人々の間で光宮や青光宮とも呼ばれていた。高価な夜光石を採掘できる鉾山を、自国の領土に多く有しているムラクモ王国だからこそ出来る、贅沢な作りの建物だ。

水晶宮への道は、巨大な石造りの橋があり、たつぷりと余裕をもつて設計された道幅のおかげで、たくさんの人々や物資が同時に往来しても窮屈さをまったく感じない。

橋を渡った先にある、三日月のような形をした美しい水晶宮を初めて見た者は、静かな青の湖を背負って建つその神秘的な姿に、うっとり溜め息をもらすので、この橋を 溜息橋 とも呼ぶのである。

水晶宮内の中心奥にある水翼の間という名の謁見の広間に、多くの人間達が集まっていた。

広間には、白い柱が奥の玉座に向かって林立していて、柱の間には王家の紋章である翼蛇を金糸で刺繍した真っ青な大きな国旗が連続して吊られている。

室内の中心には水色の制服に身を包む宝玉院の生徒達が整然と隊列を組んで並んでいた。

中央で並ぶ生徒達の両側は、宝玉院の制服よりも濃い色の青の軍服を身に纏った輝士達が、規則正しく整列している。

ムラクモの軍服は、階級があがるほど青色が濃くなっていく。並んでいる輝士達の軍服の色は、玉座のある奥のほうへいくほど色が濃くなっていき、最も奥のほうにいる輝士達の軍服は、黒と見間違えうほど濃い紺色をしていた。

試験が始まってから一ヶ月と十日の時間が流れていた。

宝玉院の生徒達からは十一人の死者が出て、多くいた平民の参加者は、その数の七割もの大量の死者を出して、試験は幕を閉じた。

シユオウは今、試験の閉幕式と、宝玉院の卒業式、そして輝士の卵達が輝士爵を授かる叙爵式とをまとめて執り行う、めんどろな式に参加している。

宝玉院の生徒達はもちろん強制参加だが、共に深界を歩いた平民達は、式への参加は自由意思が尊重される。つまりは、来ても来なくてもどっちでもいい、ということである。

すでに報酬は受け取っている、このような催しに執着する必要はないのだが、水晶宮の中を見ることが出来る絶好の機会でもあったので、ジロヤクモカリ、ボルジも連れだつて全員で参加していた。ちなみに、アイセとシトリの二人から、式を見に来てほしいと頼まれた、というのも理由の一つだ。

重たい太鼓の音が繰り返り鳴らされて、水翼の間は静まりかえる。玉座の右横の青い袖幕から、一人の少女と、初老の男が現れた。少女のほうは、シユオウも知る氷長石ことアデュレリア公爵である。もう一人、一緒に現れた男のほうは、初めて見る人物だ。

「サーペンティア公爵様ね。あれが《蛇紋石》よ。ムラクモでは吸血公の血星石、氷姫の氷長石と並ぶ、名高い燦光石の一つ。蛇紋石は風を自在に操る燦光石で、サーペンティア公爵は、別名 風蛇公 とも呼ばれているわ」

シユオウの横に立つクモカリが、まわりに聞こえないような小声でそう説明してくれた。

サーペンティア公爵の第一印象は、平凡、である。

立ち姿はどこか頼りなく、背筋もしんなりと曲がってみえる。おでこから頭の天辺まで禿げ上がった髪がどこか哀愁のようなものを誘い、黒くてテカテカとした高そうな軍服を着ていなければ、どこにでもいる街中のくたびれた中年、といった風貌だ。かといって人の良さそうな雰囲気は皆無で、蛇のように無機質な緑色の瞳がギョロギョロと忙しく動いていて、はっきり言って不気味である。

隣にいるアミュからは、幼くみえても権力者であることを納得させられてしまう気品がある。その横でおちつきなく目を動かしているサーペンティア公爵は、彼自身にとって、蛇紋石の継承者という看板は重荷ではないのだろうかと心配してしまうほどの小物臭が漂っていた。

氷長石、蛇紋石の両公爵は、シユオウから見て玉座の左側の少し後ろに位置を決めて立ったまま静止した。

太鼓の音が消えて、管楽器の甲高い音色がファンファーレを奏でた。

水翼の間にいる貴族達が、全員左手の甲を前にして、握った拳を胸の前にかざす、軍の敬礼の姿勢をとった。

まず現れたのは、体格の良い武人風の男。長い髪は白髪で、後ろで一本に束ねている。強面な顔には皺も目立つが、老人と呼ぶにはあまりに体格も姿勢も良い。黒の軍服には、はみ出してしまいそうなほどの数々の勲章が飾られていて、左肩から青いマントをたらしめている。左手の甲には、血のように赤黒い色の輝石。

クモカリの説明を待たずに、咄嗟に理解する。

まちがいなく、この男こそが血星石の保有者。アイセの話していた、長くこのムラクモという国を支え続けているという傑物、グエン元帥であると。

次いで登場した人物を初めてみたとき、この場にいる者達全員の息を飲む音が聞こえたような気がした。

「王女様よ。はじめて見たわ。綺麗ね……………」

女にはあまり興味を示さないクモカリも、我を忘れて見入っている。

クモカリの言った、綺麗、という言葉が耳にこびりついて離れなかった。

奥が透けてみえるのではと錯覚してしまうほど、絹糸のようにきめ細やかな黒髪は、膝に届きそうなほど真っ直ぐ長い。身に纏った純白のドレスに負けないくらい白い肌。真蒼の輝石。すこし伏し目がちな蒼色の瞳は、かすかに潤んでいるようにも見える。なににより完璧なまでに整った眉目は、名だたる芸術家達ですら再現不可能なのでは、と思わせるほどの美しさだ。

若さから醸し出される儚さと、女としての色香が混在している。老若男女を問わず、皆が見とれてしまうのも無理はない。

初めて見る王族、サーサリア王女は、絶世の美女と呼ぶに値する女性であることは間違いなかった。

だが、シュオウは強烈な違和感も感じていた。

あれは、人間なのか。

この世に、完璧な人間など存在しない。

誰もがうらやむような容姿をした者でも、細かく見ていけばかならずどこかに欠点と呼べるものはある。

サーサリア王女には、少なくとも見た目の点では一切の歪みがない。

だが、彼女に対して抱く美しいという感情は、無機質な宝石を見

て思う感想と同質のもののような気もするのだ。

シトリとは違った種類の無表情さで、蒼色のガラス玉のような瞳は虚ろだった。たったいまこの場でこれは人形でした、と言われても納得できる。それほどに、命の気配が感じられなかった。

サーサリア王女はゆっくりと玉座に腰掛ける。

前を歩いていたグエンは、サーサリア王女の少し後方に立ち、険しい顔で正面を見つめていた。

ムラクモ王国でも遙か高みに存在する四人の貴人が揃い踏みとなった。

式の最中にひざまずくことは禁じられているため、シュオウ達平民の参加者達も、皆立ち姿勢で見守っている。

試験前日の説明会の際に見た監督官が、生徒達の名前を呼び、卒業証書と正式に輝士爵を与える言葉が贈られていく。左胸に准輝士の階級章をつけられた生徒は、敬礼の姿勢をとりながら、王女に向けて一礼する。それを受け、サーサリア王女が軽く頷く。

それを人数分繰り返した後、最後に残されていたアイセとシトリの番がきた。

「いよいよね」

「ああ」

クモカリの表情が綻び、シュオウもつられて微笑んだ。

今年の試験での合格者は、アイセとシトリの二人だけ。二人は同小隊の所属だったので、つまりこの試験で合格条件を満たした小隊は、たった一つだけだったことになる。たしかに聞いていた通り、

この試験の合格者という肩書きはそれなりに価値があるらしい。

二人の名前を呼んだのはサーサリア王女だった。見た目通りの美声は、すこしかすれていて力を感じない。だが、静寂が保たれた水翼の間では、よく響いて聞こえた。

呼ばれて、玉座の前まで歩み寄ったアイセとシトリは、片膝をついて左手を胸の上に置いた。

「アイセ・モートレット准輝士候補生。シトリ・アウレール准晶石候補生。両者とも、過酷な試験で優良なる結果を出したこと、王家の者として誇りに思う。今後の忠誠に期待し、そなた達に剣と杖を贈る」

サーサリア王女は、グエンから複雑な文様が裝飾された鞘に収められた剣を受け取り、それをアイセに手渡した。同様に、シトリには頭に大きな青い宝玉が埋め込まれた焦げ茶色の木製の杖が手渡される。この杖は、一点に力を集中することを特に必要とする晶石のための武器で、晶気を練り、溜め込むことを補助するらしいのだが、それにどれほどの効果があるのかは、シュオウにはわからない。

最後に王家の紋章が入ったマントが手渡され、二人は一礼して後ろへ下がった。

その後、サーサリア王女から死者への手向けの言葉が贈られ、全員で黙祷を捧げた。そして無事に帰還した者達をねぎらい、試験の終了が宣言され、水翼の間は人々の拍手で埋め尽くされた。

進行係から式の終わりが告げられて、サーサリア王女を先頭に、氷長石、蛇紋石、血晶石の三人も退場していく。

静々と歩くサーサリア王女と、その後ろをついて歩くグエンを可能な限り観察しつつ、シュオウは彼らを見送った。

いつまでもわからないが、この国の軍に入ると決めた以上、国
主の姿を目に焼き付けておくくらいのことは、しておくべきなの
だろう。

「どつどつことじゃッ！」

アミュの怒声に、カザヒナが肩をすくめた。

式への出席を終えた後、仕事場に戻ってきたアミュに届けられた
一報は、我を忘れて怒鳴り声をあげてしまつほど不愉快なものだ
た。

王轄府からグエンの名義で届いた書簡には、シュオウという平民
の人事については王轄府の管轄であり、左硬軍への入隊は認めない
等といった文言が綴られていた。

「私も、すぐにグエン様の側近を通じて何度か理由を尋ねたので
すが、王轄府の決定に口出しは無用、という回答を非公式にいた
だいてしまいました」

カザヒナの言葉を聞いて、アミュはさらに激高した。

「なぜじゃッ！ なぜ平民一人の人事で口出しをする。この身は
公爵であり、重将でもあるのじゃ。であるのに、なぜ一人一人を我が
軍に欲しいという要求が拒絶されるッ。ありえぬぞ！」

怒りにまかせて、大きな仕事机を両の手の拳で叩いた。

「ありえない、とおっしゃられるのであれば、閣下のようなお立場の方が、特定の人物を強く求める事自体がありえないことでは

カザヒナが最後まで言い切る前に、アミュは強く睨みつけた。

「 出過ぎたことを申しました」

「ふん、お前の言いたいこともわかる。それよりじゃ、シユオウを我が軍へ迎え入れるにはどうすればよい。何か手はないのか………そうじゃ、提出させた軍への入隊希望届けを取り下げさせてから、我が個人的に雇い入れるというのは」

「それには賛成いたしかねます。彼の入隊希望届けは、すでに王轄府によって正式に受理されています。それに対して下手に横槍を入れれば、アデュレリアが王家に対してよくない感情を持っている、ともとられかねません」

「む……」

カザヒナの言うとおりだ。王轄府は王を頂点とした組織である。王のいない現状では、グエンが長としての役割を担っているが、王轄府へ異議を露わにするということは、結果的に王家への反逆と見られても文句はいえないのである。

「では、内々に異議申し立てをするのはどうじゃ。波風をたてたくないのは王轄府とて同じはず。非公式の抗議であれば、あちらも

わざわざ表沙汰にすることはあるまい」

アデュレリアは、ムラクモの国力を大きく支える大貴族で、その名は他国まで知れ渡っている。自国に夜光石等の貴重な鉱物資源を多く抱えるムラクモは、長い歴史の中で、何度も他国の侵攻を受け、それをはねのけてきた。今現在も、国境沿いの情勢は常に不安定で、いつ何時戦争状態になったとしてもおかしくない。そんな状況で、王家とアデュレリア公爵家の関係が悪化している、などといった情報は、たとえ水一滴分ほどであっても漏らしたくないのが王轄府の本音だろう。

「それには強く反対いたします」

カザヒナの以外な返答に、アミュは目を丸くした。

「なぜじゃ」

「非公式にはいえ、閣下の名前で平民である青年の人事権を求めたとなれば、かならずどこかからその情報が漏れ伝わります。そうなったとき、彼のムラクモでの生活が心配です。氷長石である閣下が熱望する才能、という話が一度でも広まってしまえば、いらぬ嫉妬も受けるかもしれません」

アミュは部下の言葉をよく噛み砕いたあと、溜め息を一つついた。

「手はないのか……あれほどの才能を、正当に評価してやれぬとは」

「彼の試験中での実績は、すでに王轄府も知るところのようで、グエン様の耳にも届いているとか。そのことが原因となっただけか、彼

の階級が見習いを飛ばして正式な従士としての採用が決定しています。なんの後ろ盾もない平民の若者に与えられる待遇としては、十分破格であるかと」

「我なら従士長として迎えたものを……それに、なにより気に入わんのは、シュオウの任務地じゃ」

受け取った書簡に記載されていた、予定されているシュオウの任務地候補は、アベンチュリンとの国境沿いにある、中規模の砦である。国境沿いとはいえ、ムラクモよりもさらに東側に位置するアベンチュリンは、ムラクモのお情けで国としての形を保っている属国である。軍事力を含めた国力に乏しく、ムラクモが建国して間もなく、その軍門に下った弱小国家。このような重要性に乏しい場所へ送られるなど、軍人としては出世の道を絶たれたのと同じ事だ。

「今は様子見の姿勢を維持するのが賢明と考えます。運命が再び交差するようなことがあれば、我が軍へ迎える事ができる機会も訪れるかもしれません」

「運命、か……」

「閣下には、他に考えていただかなくてはならないことがたくさんあります。今はどうか、このことを胸の奥に……」

カザヒナは神妙な面持ちで頭を下げた。

「……わかっておる。じゃが、シュオウへ謝罪の文を書く時間くらいはもらうぞ。直接勧誘しておいてこのていたらしく。本人に会って詫びたいが、今は情けなくて会わせる顔もない」

アミュは暗い顔で筆を取った。

シュオウ宛に、簡単な経緯の説明を書いていく最中に、不満が再

燃してしまっ。

たった一人の人間を、自分の軍へ入れることもできない事への怒りもある。だが、もっとも腑に落ちないのは、アミュの要請を強引につっぱねるグエンの態度だ。あげく、使える人材であるとわかっているにもかかわらず、平和な任務地に送って飼い殺すような真似をしようとしている。

グエン殿は、いったいなにを考えておるのか。

水晶宮の長い廊下に、大股で歩く靴の音が響いている。

左右の壁には、水で満たされた青色のガラス瓶が埋め込まれ、そこに入れられた夜光石がガラス越しに夜の湖のような深く青い光を放ち、壁や床を照らしていた。

「グエン様」

人気のない廊下で、女の声がした。

「イザエか」

グエンは副官の姿を認めると、ついて来い、という意思をこめて人差し指を振った。

少しだけ遅れてついてくるイザエを、横目で見る。短くカットし

た茶色い髪。やや浅黒い肌。茶系色の輝石。どちらかといえは小柄で、少し手を伸ばせば大柄なグエンの手が頭にのっってしまう。猫のようにくつきりとした目は、ほとんど瞬きもせず、前を見据えていた。よく見れば、目元に小さな小皺のような線がある。

三十年、か。

過去、南方諸国との戦いの最中に、一時的に制圧した小さな街の領主館で、一人生き残ってしまった幼い女の子を拾い、イザエと名付けて手元においた。なんの気まぐれだったのか、その後もグエンはイザエに食べ物と教育を与えて育て、気がつけば重輝士として活躍するほどの人間に成長していた。

イザエは知っている。このムラクモ王国という国が、自分の本当の家族を死の運命へ追いやった存在だと。しかし、それを知っても尚グエンを実の親のように慕い、国に尽くしているのだ。

人の命は短い。

こうして息をして歩いているだけで老いて朽ちていく。

いま後ろをついて歩いてきているイザエも、そう長くないうちに死んでいくのだろう。

自分を残して。

だが、それを悲しいとは思わない。

大砂丘の如く長き時の中を生き続けているグエンの心は、とくに乾き、枯れ果てているのだから。

しかし、だからといって立ち止まることはできない。ただ一つの生きる目的を果たすまで、なにがあってもグエンは生にしがみつかなければならない。

「式中、なにかかわった事はあったか」

「いえ、これといつては。あえて申し上げるとすれば、左硬軍の

カザヒナ重輝士より、シュオウという名の平民のことで、何度か問い合わせがありました」

「アデュレリアの小娘か……氷長石にせつつかれでもしたか。平民一人をそこまで欲しがるとはな」

「同行した准輝士候補生の報告書は読みました。事実であれば、かなりの手練れと思いますが」

かなり、などという言葉では足りないだろう。一人で狂鬼二体を冷静に処理してしまえる平民など、探して見つかるものではない。まずまちががなく天賦の才にめぐまれた人間である。そのうえ、その腕か人柄のためか、自尊心の強い貴族の娘を虜にしている。他者を圧倒する実力、そして惹きつけるだけの魅力。どちらも備えているとすれば、それはいずれ人の上に立つ一角の人物になるのは間違いない。

「知っている。であるからこそ、無駄に氷長石にくれてやる必要もない」

「ですが、我らの手元に残したとしても、配置先があそこでは……対北方、南方の要塞にでも配置するのが妥当であると考えますが」

才に恵まれた若い男。すでにムラクモでも上位の権力者である氷長石が目を付けている。これ以上の活躍の場を与えれば、その名はどんどん売れていくはず。それはグエンの望むところではない。力のある者は、それが強ければ強いほど、たとえ一時は従順にみえたとしても、隠れて牙を磨き爪を研いでいるものだ。グエンは長く生きた時の中で、嫌と言うほどそれを学んでいる。

この国に、英雄はいらない。

シュオウという青年はまだ若い。飼い慣らすことができる可能性

もあるかもしれないが、それは確実ではなく、そんなことにかまけている余裕もない。

必要なのは無能でも従順な者達。自分の手の中で好きに転がせる駒以外は不要だと言いつかれる。大国であるムラクモは、ただ一人の天才を探し頼らなければならぬほど弱くはないのだ。

強引に追い払えば氷長石が拾うのは目に見えている。それでは意味がない。国と各領主達の力関係は絶妙なバランスを保っている。たかが一人の人間であれ、飛び抜けて有能な者が一領主につけば、その均衡はたやすく崩れ去ってしまうかもしれない。そうならば、東方の安定は保たれなくなる。それがどんなに小さな種だとしても、なにが芽吹くかもわからないようなものを捨て置くことはできない。

せいぜい平和な僻地で飼殺し、退屈にまみれて、この国に失望して出て行ってくればよし。他国で成り上がろうと、あとは好きにすればいい。強引に殺してしまうという手もあるが、そこまで強硬手段にでなければならぬほどの人間ではない。すくなくとも今は。それに、氷長石に気取られれば面倒になる。ゲン個人としては件の青年になんら恨みはないし、才ある人間は好ましく思っている。なにことも穏便にすめば、それが最良である。

「すでに決定したこと」

短くそう言うと、イザヤは畏まった。

「失礼致しました……。閣下は、これからどちらへ」

「王女殿下の元へ行く。今日はひさかたぶりにお姿を見せられたとはいえ、諸侯らは直接の謁見を望んでいる。石の継承も、これ以上引き延ばせばろくでもない噂もたつだろう。」

他に報告が

ないのなら下がれ」

「はッ」

イザヤは敬礼して、その場に停止した。

グエンは副官に見送られながら、最上階へと続く階段を一段ずつ昇った。

天窓から入る薄雲に濁った月明かりだけが、ひんやりと冷たい部屋を照らしている。

乱暴に靴を脱ぎ捨てて、シルクのシートで覆われた絢爛たるベッドに、逃げ込むようにして転がり込む。

花を焦がしたような甘苦い香りが、部屋に舞った。

部屋の入り口から人の気配がする。俯せに横になつたまま、視線を送った先には、よく見知った男の姿があつた。

「グエン、部屋に入るときは声くらいかけて」

白髪の大男。ムラクモの父と称され、今この場で床に根をはつたように立ち尽くすこの男は、すでに五百年以上もの時を生きている化け物だ。生まれた頃から自分を知っているグエンは、幼い頃に両親を亡くした自分にとって、唯一の身内と呼んでもいいほどに関わりの深い人物でもあるが、昔から小言の多いグエンに対して、あまり良い感情を抱くことができずにいた。あたりまえの関係に例えるならば、小言が多く煩わしい祖父のようなものだ。

「殿下。せめて服を着替えてから横になったほうがよいではありませんか」

「余計なこと。あのくだらない式に出てあげたのだから、これくらい見逃したらどうなの」

「……ムラクモの未来を担う若者達の門出となる大事な式です。

次期国主である殿下が出席なさるのは、当然の義務でありましょう」

「その未来を担う若者を、毎年無駄に死なせているのは誰だったかしらね」

無茶な内容の試験を強行する、グエンに対しての皮肉を言った。

「……………」

効果はあった。グエンの小言を一時は封じることができたらしい。次の発言を許す間をあたえず、サーサリアは呼び鈴を鳴らした。すぐに、女官の一人が現れる。

「アレを」

これ以上の言葉など不要である。いつもの要求に、女官も黙って頭を下げた。

「待て」

グエンが女官の前に手を出して行く手を阻む。

「リュケインの花 をまだ続けておられたのか」

「それが、なんだというの」

「あの花の煙は精神を強く蝕むのだと知っているはず。前回の忠

告のとき、やめていただけると約束したのをお忘れではありませんま
いな」

「うるさいこと……。今日は人前に出て疲れたのだから、少しく
らいいいでしょ さあ、はやく行きなさい」

足止めされている女官を睨みつけて促す。が、グエンはなおも外
への通路を塞ぎにかかった。

「ならん」

グエンは女官を睨みつけ強く言った。

女官は怯えたように身を竦めて、足を止めてしまう。

サーサリアは、自分の命令を最優先に実行しない事に、しだいに
苛立ちを感じ始めていた。

「なにをしているの、命令したのは私よ」

「で、ですが……」

女官は、グエンとサーサリアを見比べて、なおも動こうとしない。

「もうよい。私の命令が聞けない者に、ここにいる資格はないわ」

サーサリアは左手をかざして、晶気を構築した。

部屋の入り口に、濃厚な青霧が充満していく。

女官のすぐ側に立っていたグエンは、化け物じみた動作で霧の届
かない部屋の隅まで退避した。

「クカツ……………ガツ……………ハツ……………」

青霧の中に一人残された女官は、喉を押さえて地面に倒れた。悲

痛にのたうちまわり、口からはだらしなく涎をたらしている。その姿があまりに情けなくて、サーサリアの顔にはうつすらと笑みが浮かんでいた。

ムラクモ王家の者が使う毒の霧。この力をもって、ムラクモ建国女王は、当時はまだ一国家であり、互いに小競り合いを続けていたアデュレリアとサーペンティアを支配下においたと聞かされている。王家の燦光石である天青石の継承をしていないにも関わらず、生まれ持つてのこの力は、たやすく人を殺めてしまえる。

女官に吸わせたのは麻痺性の毒霧。肉体の自由を瞬時に奪い、呼吸する力すら徐々に奪っていく。地上で溺れるようにゆっくりと苦しんで死んでいくこの霧は、自分にさからった愚か者に与える死としては上等なものになるだろう。

「で、んか……………なに、とぞ……………おゆる、しを……………」

息をするだけでも精一杯のはずなのに、女官は出せる力を振り絞って命乞いをする。

「殿下、どうかそのくらいに」

「グエン、お前がいけないのよ。でも、そうね……………口出しをやめると約束するのなら、許してもよい」

グエンは沈黙したまま、ゆっくりと頭をさげた。

それを確認して、サーサリアは晶気を消した。

正常な呼吸を取り戻した女官は、激しく咳き込みながら体を起こした。

「これが最後。命令されたことを今すぐやりなさい」

脱兎の如く駆け出していった女官は、すぐにリュケインの花びらを詰めた袋と、道具一式を持って戻ってくる。小さなテーブルの上に置いた球根のような形をしたガラス瓶に花びらを入れ水を注ぐ。それを下から蝋燭の炎で炙り、徐々に熱されて出てきた花の煙をガラス瓶の先端に繋いだ管から、ゆっくりと吸い込む。

甘苦い花の香りが、口の中いっぱい広がった。

目の前がぐらりと揺れるような感覚がして、ベッドの上に大の字で横たわる。

リュケインの花からでる煙には、多幸感を伴った強力な幻覚作用がある。高い依存性があり、使用者の多くは常習してしまう。煙の効果が続いている間は、幸せな妄想に頭が支配され、そこにないものが見えたり、聞こえるはずのない音が聞こえたりといった、幻覚、幻聴効果ももたらされる。

忘れない。なにかも。

王家に生まれたこと。

一国を背負わなければいけないこと。

誰一人親しい者がいない孤独。

失望の眼差しで自分を見るグエン。

両親の死。

そして、あの時の、あの光景。

辛い現実など、消えて無くなればいい。

しだいに正気は失われていく。

煙の匂いが、心の奥底に沈殿した記憶を根こそぎに拾い集めてい

く。

まだ両親が生きていた頃。

幼かった自分の頭を優しくなでて、子守歌を歌ってくれた。今だけは、あの頃と同じように無邪気に笑う事ができる。

「で し か ー」

グエンが、何かを言っている。

グエン……？ この男は………誰だっけ。

さっきまで話をしていた相手のことを思い出せない。

しかし、そんなことにもすぐに興味はなくなった。

天井に視線をうつすと、キラキラとした星粒たちが賑やかにダンスを披露していた。

その様子があまりに楽しそうで、サーサリアは天井に向けて手を伸ばした。

星粒たちはサーサリアの手に集まって、そこでまた楽しげに飛び跳ねて、喜ばせてくれる。

「ふふ」

理性的な思考は氷のように、少しずつとけていく。

ふらふらと定まらない視線を泳がせながら、サーサリアはわらった。

あ、きもちいい。

プレゼント

深界で行われた卒業試験を無事に終えて、王都に戻って仲間達と盛り上がった夕食会の次の日の朝。

大急ぎで家へ戻ったアイセを待っていたのは、いつもの何倍も不機嫌そうな顔で出迎えた父だった。

客の前で失礼な態度を取ったこと、勝手な外出、朝まで戻らなかつたことなど、たつぷりと小言をもらつたが、試験を終えたばかりで疲れていることを盾にして、どうにかやりすごした。

安心できる家の中で人心地がつき、高揚した気持ちでどうにか塞き止められていた疲れがどっと押し寄せてきたので、それから丸一日を睡眠で潰した。

翌日、早朝に目を覚ましたアイセは、いつも通りの宝玉院の制服を着て、ゴソゴソと屋敷の中を家捜ししていた。

会いたい。

起きてからこんなことばかり考えている。

この気持ちが恋なのか、友情なのか、もしかしたらただの強い者への憧れの気持ちだけかもしれない。

だけど、今はただシュオウの顔を見て、あの落ち着いた、安心を与えてくれる声を聞きたかった。

もし、これが恋愛感情だとしたら。

同年代の女子達が、誰が好きだの、キスをしただのとヒソヒソ話す内容にはうんざりしていた。

自分達は国の未来を預かる軍人になるのだから、勉強すること、鍛えなければならぬことがたくさんある。

だから、自分にそうした機会が訪れるのは、もっと先のことだと思っていた。

「あつた……」

倉庫部屋の中にうずたかく積まれた木箱の一つを手取る。

これで、シュオウに会いに行く口実ができた。

昼過ぎになり、アイセは徒歩でのんびりとシュオウが滞在している宿を訪れていた。

誰に会うこともなく、二階に昇って、あらかじめ聞いていたシュオウが泊まっている部屋のドアをノックする。

「私だ」

「……………」

しかし、ドアの向こうは無反応。

「おーい、シュオウ。いないのか」

さらに強くドアを叩くが、やはり反応はない。

あきらめきれず、最後だと決めて声を張り上げて、さらに強くドアを叩いた。

「おーい！ いたら開けてくれ！」

扉の向こうから人が動く気配がする。

少しして、ガチャリ、とドアが少しだけ開いた。

隙間から顔を出したシユオウは、目を細めて不機嫌そうな顔をこちらへ向けている。

どう見ても起きたばかりといった様子だった。かろうじて目を薄く開いていて、灰色の髪は寝癖であちこち飛び跳ねていた。

「……………なんだ」

「もしかしてまだ寝てたのか？ もう昼過ぎだぞ」

困った弟を注意するような口調でアイセが言うと、シユオウはますます不機嫌そうに眉をひそめた。

「……………用件はそれだけか」

「いや、じつは試験中に色々世話になったお礼にと思って、贈り物を持ってきたんだ」

抱えてきた木箱の上蓋をはずしてシユオウに見せる。

アイセは中に入っている物を、自信満々に胸を張って披露した。

「父の領地で作っている土産物で、金箔を貼った木彫りの熊だッ

」

ボタン！ と、ドアは勢いよく閉じられた。

扉に押し出されて舞い上がった風に、アイセの金色の前髪がふわりと浮いた。

「……………え？」

あ、あれ。

何度もドアを叩いてシユオウを呼んだ。が、返事はまったく返っ

てこない。ついさつきまで普通に應對していたのだから、これは意図的に無視されているのだろう。

なにか怒らせるようなことを言ったのだろうか。

持ってきた贈り物は、買えばかなり値の張るものだ。てっきり喜んでくれるものと思っていたのだが、期待はずれてしまった。

アイセは木箱をかかえて、なにがいけなかったのか吟味しながらとぼとぼと帰宅した。

翌日、アイセはリベンジに燃えていた。

わざわざモートレット伯爵家と縁の深い商人を呼び出して、オススメの最高の品を買い付けた。

昨日と同じくらいの時間に、必死の思いでそれをついで持って行く。

部屋の前で何度か呼びかけてみて、ようやくシユオウは応じてくれたが、昨日と同じように寸前まで眠っていた様子で、強引に起こした形となってしまったせいも、機嫌はすこぶる悪そうだった。

また逃げられてしまう前に、今度こそと意気込んで持ってきた物を見せたのだが、シユオウは昨日と同じように無言でドアの向こうへ消えてしまった。

「そんな……」

持ってきた物がだめなのだろうか。

今回用意したのは、高価な赤い宝玉を目に埋め込んだ、酒樽をかっいだ大きなタヌキの置物だった。

自分としては、かなりセンスの良い物を選んだと自信があったのだが、受け取ってはもらえなかった。

二度目の敗戦に、ふと嫌な考えが頭をよぎる。

もしかして、嫌われて……る？

いや、そんなことはないはずだ、と自分に言い聞かせて首を振る。

結局、それ以降まったくシュオウから反応が返ってこなかったの
で、あきらめてタヌキの置物を担いで一階へ下りた。

すると、偶然紙袋を抱えて宿に入ってきたシトリとバツタリ出く
わした。

「シトリ、どうしたんだ。誰かに会いに来たのか？」

「べつに」

シトリは、なんとなくはぐらかした態度でそっぽを向いた。
アイセはシトリが抱えた紙袋が気になってしかたがない。

「それ、贈り物……か？」

シトリはかすかに頷いた。

「ひょっとして、シュオウに……か」

そうでなければいい。そんな甘いことを一瞬考えた自分が情けな
かった。

「だとしたら、なに」

やっぱりそうなのか。この瞬間、アイセは明確に理解した。
いままでの態度を見ていて、なんとなく感じていたことだが、ど

うやらシトリもシユオウに対してなにかしらの好意を抱いているらしい。

ならば、目の前にいる無愛想な同級生は、同じ得物を狙うライバルとなるのだろう。

彩石を持つ貴族社会では一夫多妻の重婚は当たり前前の文化だ。

輝士や晶士の数と質は、そのまま国の軍事力として大きく影響するので、貴族は多く子供を作れることを推奨されている。

とくに優秀な能力を持つ輝士や晶士ともなれば、結婚相手を探すのにあまり困ることはない。

アイセの父にも、五人の妻がいる。

ただ、複数人と結婚をしたからといって、正妻や側室といった考え方はない。爵位を持つ貴族家などでは、生まれた子の中で最も優れた者を後継者に選ぶのが一般的だからだ。

優秀な血を多く、そしてより確実に残すために必要な手段でもあるのだが、基本的に一夫一婦の結婚しかしない平民からは、奇妙な目で見られているらしい。

シユオウは平民だ。

異性との付き合いに関する考え方なども知らず、どのような結婚観を持っているかもわからない。

下手をすれば、一つだけの椅子をシトリと争わなければならない事態も予想できるのだ。

もともと負けず嫌いのアイセは、僅かな時間の間に、シトリを敵として改めて認識した。

今の段階ではシユオウへの思いをたしかなものとして自覚しているわけではないが、春の訪れを予感させる新たな感情の芽生えの気配くらいは感じている。

ひよつとすると、一生に一度の何かに巡り会ったかもしれないのに、それを易々と他人に渡してやるほどお人好しでもない。目の前にぶらさがっているチャンスは、かならず掴むのがアイセという人間なのだ。

「無駄なことだぞ。シュオウはあまり贈り物が好きじゃないらしい」

アイセが高みから見下ろすように言うと、シトリはムツとした表情を作った。

「ほつといて」

だが、シトリの視線がアイセの横に置かれたタヌキの置物に移ったとき、嘲笑をこめた表情へと変化する。

「もしかして、それ、プレゼント？」

「む……そうだが」

「プッ」

「なあッ!？」

あの感情をほとんど表に出さないシトリが笑った。しかも、自分を小馬鹿にしたように。

「そんなモノで彼の気を惹こうなんてバカすぎ。どうせ受け取ってもらえずに帰るところだったんでしょ」

カーッと頭に血が上っていく。

「う、うるさいッ! そういってお前は受け取ってもらえたのか」

「ムッ」

シトリは再び不機嫌そうに顔の色を消した。

なんだ、シトリも同じなんじゃないか。

だからといって安心もしてられない。

今回は何を持ってきたのか知らないが、自分より先にシユオウがシトリの贈り物を受け取ってしまったえば、それは後れを取った自分の負けを意味し、我慢ならないほどの屈辱である。

それから両者は、互いに火花が飛び散らんばかりに睨み合って、それぞれの行く道へ別れた。

もつとなにか、シユオウが喜んでくれるようなものを探さなければ。

さらに翌日。

残り少ない小遣いをはたいてまで購入した高価な置物を持ってシユオウの部屋を訪問したアイセは、再びもの見事に玉砕していた。今度は持ってきた物の説明すらさせてもらえず、シユオウは一瞥しただけでドアを閉めてしまったのだ。

さすがのアイセも、これには気落ちした。

いくら持ってきたものが気に入らないからといって、あの態度は酷いのではないだろうか。

帰る気力すら湧かず、宿の二階から一階へ続く階段の途中で座りこみ、一人溜息を落とした。

「あら、こんなとこでなにしてるの？」

声をかけてきたのは、外から戻ってきたクモカリだった。

「いや、ちよつとシュオウに会いに来たんだが……………」

続く言葉が出てこなかった。

シュオウのあまりに冷たい態度に、厳しい訓練にも耐えてきた鋼の心ですら、濡れた紙のようにしんなりと萎えてしまっている。

「もしかして、プレゼントを持ってきて受け取ってもらえなかったとか？」

「……………なんで、わかる」

「そりゃ、荷物を脇に置いて落ち込んでるのを見たらなんとなくね。シトリも似たような感じで贈り物をつっぱねられたみたいだし」

「そうか」

シトリもまた失敗したらしい。少しだけ安心してしまったが、どうしようもなくむなしいだけだった。

クモカリはアイセの隣に座った。体が大きいので、一枚壁が出来たみたいに存在感がある。

「気を惹きたくてプレゼント攻撃ってところは、いかにも貴族様の発想よねえ」

「わるいか？ 好きな相手へ高価な贈り物をするのは、どれだけ本気なのかを相手に知らせるのにとりばやいじゃないか」

アイセが口を尖らせながら言うと、クモカリはワガママを言う子供を諭すような口調で言った。

「あのねえ、異性から物を貰うのってけっこう重いよ。そりゃ貰える物ならなんでも、なんて人もいるけど、シユオウって結構真面目そうじゃない？ なんでもかんでもホイホイ受け取ったりなんてしないわよ。それに王都に家があるわけじゃなし、そんなかさばる物を渡そうってのは論外ね」

「……そうか」

言って聞かせるようなクモカリの言葉を受けても、怒りは湧いてこなかった。

最初に見たときは、その独特な容姿から特に考える事もなく気持ち悪い人間だと決めつけていたのだが、共に旅をして苦難を乗り越えた今となつては、クモカリのまわりを気遣う細やかな優しさをきちんと見て理解することができていた。

まるで面倒見の良い姉に見守られているかのように、心が安らぐ。

「にしても、これ何？ ずいぶんと重そうだけど」

クモカリは布でくるんだ置物を手に取った。

「ベリキン様という南方の神様の置物らしい。これを売ってくれた商人が、あつちでは土産物として人気があると言っていた。表面に金箔が貼ってあつて綺麗だろ」

クモカリは布をはがして中身を確認した。そして顔を盛大に引きつらせた。

「なによこれ……顔はぶっさいくだし、腹は出てるし、角みたいなのも生えてるし、神様ってよりお伽噺にでてくる鬼なんかじゃ

ないの」

「失礼な事を言うな。向こうでは民草の間で崇められていると聞いたぞ」

「ねえ、聞くのが怖いけど、これいくらで買ったの？」

アイセは買った金額の数字を、指を立てて見せた。

「それって銀貨、よね？」

「……金貨」

「あんたって……結構バカ子だったのねえ」

「なあッ!？」

クモカリがアイセに送る視線は同情一色だった。

「絶対騙されてるわよ。こんなもんがそんなに高いはずないじゃない」

「……そう、だろうか」

「そうよ。まったく、悪徳商人を儲けさせただけだったわね」

「はあああ」

情けなくて溜息がこぼれてしまう。

今までたいして使いもせず溜め込んできた小遣いを、ほとんどつぎ込んでしまった。

これから正式に准輝士として働けばそれなりに給料を貰えるが、それもまだ少し先のこと。

未だにシュオウが喜んでくれるような贈り物を選ぶことができていないというのに、これは完全に失敗してしまった。

「そのブサイクな置物、銀貨一枚でよければ買い取るわよ」

「欲しいのか？」

「ぶつちゃけ欲しくはないけど、今度だそうと思ってるアタシの店の隅っこに置くのもいいかなってね。キンキラしてて魔除けになりそうだし」

「ならゆずる。私はもう見たくもない……」

クモカリから銀貨一枚を受け取り、ベリキン様の像を渡した。少しでも必要としてくれる人のもとへ渡るなら、異国の神様も本望だろう。

「お礼っていうのも変だけど、一つだけ助言してあげるわ」

「うん」

「シユオウの事。もし彼の態度が冷たいからって落ち込んでるなら的外れよ」

「どういうことだ？」

「知らないでしょうけど、彼、試験中ずっと寝ずに夜の番をしてくれてたのよ」

「えッ……？」

それは完全に初耳で、クモカリの言った事を理解するのに、僅かに時間を要した。

「三日目くらいの夜だったかしら……夜中に喉が渴いて起きたら、シユオウが一人で夜光石の即席ランプに少しずつ砕いた石を入れたのよ」

「そんなことをする必要があるなんて、一言も言わなかったじゃないか……。知っていたら順番を決めて交代したのに」

「アタシも言ったわよ。だけど、一言で断られて、みんなには黙っておけて言われたわ。アタシも疲れてたから、つつい甘い甘えちゃったけど」

「どうして……」

シユオウが頼ってくれなかった事が悲しかった。信頼されていなかったのだろうか。

「みんな今みたいに打ち解けてなかったしね。それに、なにかあったときにすぐに動けないと困るからって言ってたわ。今ならわかるけど、狂鬼相手にあれだけの事ができるなら、自分一人でどうにかしたほうがいいって思うのも無理ないわよ」

「そうだとしても」

シユオウを責める気持ちよりも、彼が一人で苦勞を背負っていたことに気づけなかった事がくやしかった。

「だから、こっちに帰ってきてからはほとんど一日寝っぱなし。途中からは大人一人を背負ってずっと歩いてたわけだし、相当疲れ溜まってるみたいよ。だから、ちょっと彼の態度がそっけないからって変な誤解はしないであげて」

重たい荷物を持たせ、食べ物の管理をまかせて、怪我の面倒まで見て貰い、夜の見張りを一人でさせて、最後には命まで守ってくれた。

結局自分は、最初から最後まで彼に頼りっぱなしだったのでないか。戻ってからくたびれ果てた体を癒すため、誰に泣き言を言うでもなく一人で眠り続けているシユオウを思うと、心に穴が空いてしまったかのように悲しくなった。

「……うん。わかった」

「それじゃ、部屋に戻るわ。もしどうしてもシユオウに何かあげ

たいなら、小さくてかさばらないものにしたほうがいいわよ。それと、会いにくる時間は夕方くらいにしたほうがいいわね。彼、夕食を食べる時間だけは起きてくるから」

アイセは礼を言つて、クモカリと別れた。

明日こそ、と気合いを入れて立ち上がる。

過ぎたことを引きずってもしかたがない。アイセは塞ぎかけていた気持ちを素早く切り替えた。

シユオウが黙って引き受けていた苦労を労う意味でも、やはり彼に喜んでもらえるような贈り物を用意するのは、意味のある行為だ。そう考えれば、いつまでも鬱々と悩んでもいられない。

アイセは顔をあげ、前を見ながら帰路についた。

次の日は朝から王都の市場へと足を運んでいた。

そこそこの商人が経営しているような大きな店はだめだ。商売っ気が強すぎて、こちらが伯爵家の人間だからと高くて、無駄に大きな物ばかりすすめてくる。

アイセはこれまであまり来たことがなかった、普通の人々で賑わう普通の市場で、シユオウへの贈り物探しをすることに決めた。

市場には肉や野菜、果物などがカゴに山盛りで置かれ、あちこちに隙間なく並べられている。工芸品や日用品、アクセサリーを売る店もあり、品質にこだわらなければ、ここだけで生活に必要な物はほとんど揃ってしまいそうだ。

各店の主達は大声で客寄せをしていて、どこもとても活気に溢れていた。

お金を入れた袋を逆さまにして中身を手の平に落とす。

いまある手持ちは銅貨が十二枚と銀貨が二枚だけ。軍資金としてはどうにも心許ない。

だがとにかく、シユオウに受け取ってもらえそうな物を探さなくてはならない、のだが、意気込んで市場をぐるりと一周してみたものの、結局これといった物は見つけることができなかった。

アイセはがつくりと肩を落として市場を出た。

街中をふらふらと歩きつつ、手ぶらで会いに行ってもいいのだから、と自分に問いかける。最初はただ会いたかっただけなのに、今ではすっかり目的がすり替わってしまっている気がする。

アイセをこれだけ焦らせている一因はシトリだ。もし、自分よりなにか良い贈り物を用意して、シユオウがそれを受け取ったら。彼はきつと、喜ぶに違いない。そして礼をしたいと言ってシトリを部屋に招き入れ、良い雰囲気になった二人はそつと抱き合い

「ああッ、もうッ」

アイセは綺麗に整えた金色の髪を、ガシガシとかき乱した。

イライラしている。落ち着かないと。

心を鎮めるために深呼吸をする。

何度か深く息を吸って吐いてを繰り返していると、鼻の奥をくすぐるような甘い匂いが漂ってきていることに気がついた。

しかし、周辺を見渡してみても、匂いの元となるようなモノはなにもない。

アイセは匂いが濃くなっているほうを探して少しずつ裏路地のほうへ進み、丸い菓子を焼いている小さな屋台を発見した。

半球形にいくつもくぼんだ鉄板に、黄色い生地元となる液体を

流し込んで、そこそこに焼き上がったところで針のような道具を使ってひっくり返している。そうすることで、まだ生の状態で中心に残っていた生地が、もう半分にも丸い形で広がって焼き固められていく。

完成したまん丸い黄色の玉をしばらく冷まして、中心に穴の空いた先の尖った器具を玉に差し込み、餡を少しと生クリームを注入して完成する。

王都では平民達の間で昔からよく知られている、シュータマという甘いお菓子だ。

嫌な想像を巡らせて頭が疲れていたアイセは、屋台から泳いでくる甘い香りに誘われるように前まで進んだ。

「いらつしやいませー！」

屋台の中から元気の良い女の子が出迎える。

「こんにちは」

アイセが顔を見せて言うと、女の子は目を見開いてとても驚いた表情をした。

「お、おかあさんッ」

「はいはい」

屋台の奥で材料の用意をしていた、女の子の母親らしき女性が腰をあげた。

「あら、まあ……こんなところに輝士様が、いったいなんのご用でしょうか……」

女の子の母親は怯えた様子でアイセに聞いた。その足下では、不安な様子で母親の服を掴んでいる女の子がいる。

「あ、いや」

「もし商売の許可証のことでしたら、私たちのような者にはとても……どうか、これで見逃してはもらえませんか」

母親はそう言って、店の儲けであろう何枚かの銅貨を差し出した。

「ちがう！ 私はただ、売り物を見に來ただけだ。変な勘違いはしないでくれ」

「はあ……」

母親はきよとんとしていた。

見ると、目の前にいる二人の親子はみすばらしい格好をしている。ムラクモは豊かな国で、男手であればたいした技術がなくても、夜光石を掘る鉱山や石切などの高賃金の仕事がたくさんある。

平民とはいえ、この親子の着ている服はボロすぎる。もしかすると、父親のいない家庭なのかもしれない、とアイセは想像した。

それにしても、あまりにも自然に賄賂を渡そうとした事が気にかかった。

市場や路上での商いは、国から許可を取る必要がある。その辺りを現場で監督しているのは第一軍所属の警備隊だろう。

ひよつとすると、彼らの中に許可申請を取る事が出来ず、こっそりと商売をしているような弱者から金をせびっている者がいるのかもしれない。だとしたら、それは非常に残念なことだ。

「よければ、作っているところを見せてもらいたいのだが」

「は、はい。それはもちろんでございます」

シュータマが目の前で一から作られていく。

ただのトロトロとした液体が、少し手を加えただけでコロコロと丸い形になるのが面白かった。

「あの……よかったらどうぞ」

女の子が、出来たてのシュータマを一つ差し出す。

「いいのだろうか」

受け取ったアイセは、念のため母親にも確認した。

「どうぞ、貴族の方のお口に合うかはわかりませんが」

「なら、一ついただく」

シュータマー一つはそれほど大きくない。アイセは一口でまるごと放り込んだ。

「美味しい……」

口の中で薄皮がはじけて、中からドツシリとした甘さの餡と、濃厚かつ爽やかな生クリームの食感が混ざり合い、絶妙な甘さと歯触りを醸し出している。

家や宝玉院の寮で出てくる洗練された菓子と比べると、たしかに少しチープではあるが、一口で食べられる気安さと一粒で二度美味しい食感はやみつきになりそうだった。

シュオウは、甘い物は好きだろうか。

シュータマを食べて美味しいと思った気持ちを彼と共有できたなら、きつと楽しいはずだ。

どうせ手ぶらなのだし、食べ物でもなにもないよりいいかもしれない。

アイセは袋から銀貨を一枚取り出して、屋台の主に手渡した。

「これで」

買えるだけすべて欲しい、と言いかけてやめた。

どっさりと買い込んでいって、またシュオウに拒絶されれば無駄になるだけだし、クモカリに言われたように、無闇にかさばる贈り物を持参するのは、考え直したほうがいい。

「一つだけ欲しい」

シュータマは十個を一セットとして販売している。

欲張らずに、それだけを貰うことにした。

「あ、ありがとうございます。あの、ですけど、銀貨一枚に用意できるお釣りがなくて……」

「……いいんだ、釣りはいらぬ。驚かせてしまった詫び代でも思っておいてくれ」

何度も頭を下げる親子に別れを告げて、アイセはシュオウのいる宿までの道を一人で歩いた。

お釣りをもらわなかったことは、傲慢だったかもしれない。手持ちには細かい銅貨もあった。シュータマの代金をぴったり払うこともできたのに、銀貨を渡してしまった。子供を抱えて裏路地でこっそりと商売をして生きている、あの女性に同情してしまったのだ。

あの親子にとって、アイセの渡した銀貨は相当な儲けとなったはずだ。

きつと言んでいるだろうが、少しも良い事をしたという気にはならなかった。

自分で稼いだわけでもない金を寄付したところで、それを誇ることもできそうもない。

以前なら見えなかった事や、考えもしなかった事が心にある。

これもやはり、シユオウ達とすごした深界での様々な経験による変化なのかもしれない、とアイセはしみじみ思った。

考え事をしている間に、あつという間に目的地まで到着していた。時間も、ちょうど夕暮れ時。暗くなりかけていた気持ちを切り替えて、再びシユオウのいる部屋まで行き、ドアを叩いた。

「シユオウ、起きてるか？」

今日はすぐに反応があった。

ドアが開いて、シユオウが目を擦りながら顔を出す。

まだ起きて間もないといった雰囲気だが、これまでのようにおもいきり不機嫌な様子はない。

「どうした。もし、またクマやらタヌキの置物だったら」

「ちがうちがう！ ちょっと、な。近くに用事があったから寄ってみたんだ」

会いたかった。話がしたかった。顔を見たかった。

言えたらどんなにすっきりするだろうと思っただけでも、恥ずかしくて言葉が出てこない。

「なら、もうすぐ夕食だから一緒に食べていったらどうだ」
「あ、ああ。そうしよう、かな……。ところで、これ、来る途中で買ったんだが、よかったらどうだ」

アイセはシュータマをシュオウに差し出した。
断られてもダメもとだ。

いらん、とつっぱねられるのを覚悟していたのだが、意外にもシュオウはシュータマをじっと見つめて興味をしめした。

「これ……」

「シュータマ、というんだ」

「一つもらってもいいか？」

「もちろんだッ」

シュオウはシュータマを一つ摘んで、恐る恐る口に運ぶ。

そして、一噛みした途端、その表情が一瞬にして子供のようになり、頬を柔らかくして微笑んでいた。

初めて見る、完全に油断したシュオウの顔がそこにある。

「……美味しい。とくに、この中身のクリームみたいなのが」

「もしかして、生クリームが好きなのか？」

「わからない。今初めて食べたから。だけど……本当に美味しいな」

シュオウは念入りに舌を動かして、口のまわりについたクリームを舐めとった。

「これ！ よかったら貰ってくれ」

シュオウはアイセが差し出したシュータマを見つめて、少し悩んだ様子を見せながらも結局は受け取った。

「……ありがとう」

やった！

ついに、贈り物をシュオウに受け取ってもらえた。

手を小さく握り、笑みがこぼれないように顔を無理矢理引き締める。

しかし、誰からも見えない想像の中の自分は盛大にガッツポーズを作り、満面の笑みで飛び跳ねていた。

「えっと……一つ、頼みがある」

心の中で小躍りしていたアイセに、シュオウが神妙な面持ちで言葉かけた。

「なんだ、なんでも言ってくれ」

「俺が、その……こういうのが好きだって事、内緒にしてほしい。なんとなく恥ずかしいから」

なにが恥ずかしいのかはわからないが、アイセにそれを断る理由はない。むしろ誰にも教えたくなんてなかった。

シュオウの好物を、ライバルに先んじて知ることができたのだから。これはかなり優勢なのではないだろうか。

そんなことを考えていただけで、自然と顔が綻んでしまう。

「わかった、誰にも言わない！　じゃ、今日はこれで帰る。また近いうちに寄らせてもらうから」

「夕食は食べていかないのか？」

「うん、いいんだ。今日のところは、目的は果たしたから」

別れの挨拶もそこそこに、アイセはシュオウの元を後にした。

軽やかにスキップしながら宿を出ると、またシトリと正面から出くわした。なにやら大きな荷物を両手で抱えている。

「シトリ、良い夜だな」

「……まだ日、おちてない」

「そうか、あっはっは、まあいいか」

アイセはかつてないくらい朗らかに笑った。

「なにか変な物でも食べたんじゃないの」

「又フ」

シトリの一步先を行っている優越感から、にやけ顔を抑えられな
い。

「キモ……ねえ、なにがあつたの？」

「内緒だ。シュオウと約束したからな」

「……それってどういうこと」

「悪いけど、言えないんだ」

追求されても困るので、アイセはさっさとその場から離れた。

勝利の美酒に酔うアイセは、後ろから苛ついた様子で自分を呼び止めるシトリの声をさらりと聞き流し、歩幅を大きくしていく。

鼻歌を歌い、勝者としての貫禄をふりまきながら家路についたの
だった。

おかしい、あの態度はなんだ。

にやけたマヌケ面で立ち去って行ったアイセが気になる。

前に見た時はどこか自信なさげで、おどおどとしていたのに、次に会ったら見たこともないくらい幸せそうな馬鹿面でスキップまでしていた。

シトリはその理由を瞬時に推理する。そして、稲妻のような直感が頭を打った。

負けた、の……。

「ありえない……」

これまではアイセに対して、剣で劣っても、馬術で負けても、なんら腹は立たなかった。

しかし、やっと出会えた思い人にちよっかいをだされるのだけは許せない。

シトリのなんとなくの予想では、アイセはこの手の恋愛沙汰には疎いのでは、という油断もあったので、今まではある程度安心できていたのだが、もし仮に、あの上機嫌の原因が、自分よりも先に彼への贈り物を渡す事に成功した事からきているのだとすれば、これは由々しき事態だ。

不安な気持ちに背中を押されるように、シトリはシュオウのいる宿の二階まで急ぎ足で向かった。

息を切らせながらドアを叩くと、中からここ数日で一番すっきり

と目覚めているシユオウが出てきた。

「どうした、慌てて」

「アイセ！ もらった！」

「え？」

気持ちが焦って、訳のわからないことを言ってしまった。

「じゃなくて、アイセから何かもらったの？」

「あー……」

シユオウの返事は煮え切らない。

「ねえ、どうなの」

「もらった、けど」

「……やっぱり」

あのアイセの態度は、勝ち組としての余裕からきているものだったのだ。

「ねえ、何をもらったの？」

シトリがこれまで持ってきた物は、最高級品質の剣、立派な馬が買えそうなほど高い毛皮のフード付きコートや、葉巻などなど。自分なりに男の好みそうな物を考えて選んだつもりだったが、無理矢理起こされて機嫌の悪そうだったシユオウは、無言でドアを閉めてなにも受け取ってはくれなかった。

「……言いたくない」

シュオウの答えは素っ気ない。この様子では、アイセに口止めされていてもいい。シトリは素早く思考を切り替えた。

「じゃあ、これ受け取って」

アイセは綺麗な青い鳥籠を差し出した。

中には青銅で作られた小鳥の置物が入っている。

王都の大きな輸入品店で見つけて買ったもので、かなり高かった。

「気持ちは嬉しい。けど、こんなに高そうな物は受け取れない。

それに、もらっても持って歩けないだろ」

「う……」

どうも、シュオウは気軽に物を受け取ってくれるような性格ではないらしい。

そんなところも好意的に思えるが、アイセが贈り物の受け渡しに成功していることを考えると、このままでは平常心を保っていられる自信がない。

こうなったら、奥の手。

「うっ、うっ………ひどいよ、君の事を想ってがんばって選んだんだよ………それなのに………」

鳥籠を大袈裟に床に落として、顔を下に向けて泣いてみせる。

もちろん、嘘なのだが。

えーんえーん、と子供の頃でもこんな泣き方はしなかったが、ここは勝負所だと決めて必死に泣くふりをした。

「あ、いや………泣かせるつもりは………」

顔を落としているから正確なところはわからないが、シユオウからは明らかに狼狽した気配が伝わってくる。

母から聞かされていた通り、男は女の涙には弱いらしい。

こうなればしめたもの。

主導権を握ったシトリは、シユオウには見えないように小さく舌を出して仕上げにかかる。

「……………う、うツ……………デート」

「え？」

「デート、してくれたら、許してあげる……………じゃないと」

さらに大きな声で泣くぞ、と脅してみせる。

「わ、わかったツ。わかったから泣くのはやめてくれ」

こつそり顔をあげてみると、心底まいったように視線を上げて、後ろ頭をボリボリと搔いているシユオウが見えた。

少しやりすぎてしまっただろうか。なにぶん、こつした事にまるで経験がないので、さじ加減が難しい。

「ほんと？」

「約束する。だけど、金もまだ入ってないし、そういうことには経験がないからよくわからないけど、いいのか」

「いい」

シトリは即答した。

奢ってもらったり、金のかかる遊びを一緒にしたいわけじゃない。ただ、誰にも邪魔されずに一緒に居られる時間が欲しいだけだ。

シユオウから数日後の昼頃から一緒に出かける約束を取り付けて、シトリは宿を後にした。

帰り道、暗くなった街中を歩いている途中で、シトリは小さくガツツポーズした。

作戦、成功。

待ち遠しかった初デート当日は、念入りに支度を調べている間にすぐにやってきた。

シユオウが気疲れしない程度にカジュアルな服が見あたらなかったのも、けつきよく着慣れた水色の制服を選んで、迎えに行く。

気持ちが焦って約束より少し早い時間に行ってしまったが、シユオウはきちんと準備して待っていてくれた。

さつそく二人連れだつて外に出た。

シトリはこの日のために、事前に独自の調査をして、王都の恋仲の男女が共にでかける人気の場所を把握していた。

なかでも、溜息橋と呼ばれている、王宮へ続く大きな石橋が人気があるらしい。

シユオウの手を引いて、さつそくそこへ案内した。

見渡すかぎりの青い湖。

湖面は静かだが、溜息橋はたくさんの人で溢れていた。

橋は途中まで自由に行き来ができるようになっていて、遠目ではあるがここから王宮も見ることができる。

他国や地方から、商売などのついでに観光に来た人々でそこそこ賑わっていて、道の両側には、許可をとって商いをしている露天や

屋台が並んでいた。

「すごいな」

「うん。人がいっぱい」

溜息橋は、途中いくつかの支柱で支えられていて、そこだけ道が
広くて丸い作りになっている。

二人は王宮に近い橋の真ん中あたりまで進んで、木製のベンチに
腰掛けた。

「それにしても、王宮がこんなに近いのに随分と開放的なんだな。
もっと緊張した雰囲気だと思っていた」

「何代か前の女王の時に、吸血鬼が橋の半分近くまで自由に出入
りできるように開放させたみたい」

「なるほど」

一陣の冷えた風が、二人の間をすり抜けていく。

「さむい……」

シトリは体をかかえて、縮こまった。

「これ、よければ使つか」

シュオウは、自前の黒くて立派な外套を摘んで見せた。

「ううん。それじゃ君が風邪ひいちゃう………一緒に入れて」

シトリは隙をみて、一瞬の早業でシュオウが着ている外套の中に
潜り込んだ。

すべては作戦通り。わざわざ出かける際に薄着で来たのはこのためだ。

外套の中はシュオウの熱がこもっていて、ぽかぽかと温かった。べったりとシュオウにくっついて、わざと自分の胸が当たるように体を押しつける。

シュオウは咳払いをして、緊張した面持ちで照れ隠しをしているように見えた。

「ねえ」

「うん」

「こんな事、初めてするんだからね」

シトリは囁くように、シュオウの耳元でそう言った。

「俺だって初めてされた」

「わたしの気持ち、気づいてるよね」

「……ああ」

「どう思ってるのか聞いてもいい？」

時折、体を近づけてみたりすると望んだとおりの反応が返ってくる。ことがあるが、それはおそらく男としてはあたりまえの反応で、相手が自分だから特別そうなのだ、などという甘い事は考えていない。

深界での濃密な時間をすごしたせいか、出会ってから随分と長い時間が経過しているように感じられるが、実際はまだお互いの事をほとんど知ることできていないほど、この関係は極浅いものなのだ。

彼の気持ち、真っ直ぐこちらを向いていない事もわかっている。だけど、それでも聞きたかった。

「……正直、嬉しい、と思ってる。だけどすぐにどうにかするのは難しいだろうな」

「どうして？」

「どうしてって、俺には家もないし職もない。家庭を持つには準備が足りなさすぎるだろ」

シユオウは少し呆れた声音でそう答えた。

「真面目なんだね。女としては嬉しい気持ちもあるけど、ちょっとだけ手を出して遊んでみたい、とか思わないの？」

「後が怖くて、その覚悟がまだ持てない」

「いくじなし、って言いたいかも」

「言われてもしかたないな」

抱き合った形のまま、二人の間に明るい笑い声がこぼれた。

思い出したようにたまに吹く強い風に髪を撫でられながら、目を閉じる。

少し離れたところから聞こえる人々の喧噪。

空を泳ぐ鳥たちの鳴き声。

のんびりとたゆたう水の香り。

隣にいるシユオウに寄りかかり、温かくて少しガツシリとした体に頭を預ける。

しあわせ。

少し前までの深界での辛い試験が、まるで夢の中の一時だったかのように、今は身も心も蕩けてしまいそうなほどの平和な空気を満喫している。

微睡みに手招きされるように、シトリは意識が軽くなっていくの

を感じていた。

「だけど
」

シユオウの硬い声が、うとうとしかけていたシトリを呼び覚ました。

「 現実の話として、ちょっと難しいんだろうな」

「 なんのこと？」

「 身分、っていつのか。その……」

シトリは貴族、シユオウは平民。つまりは、そのことを言いたいのだろう。

「 さあ。でも、ママは全部知ってるよ」

そう言うと、シユオウは驚いた様子で聞いた。

「 知ってるって……今日、俺と会う事を、か」

「 うん」

「 それでよくここまで来られたな。よく知らないけど、貴族っていうのはその手のことにはうるさいんじゃないのか」

「 それは家による。私の家はパパもママもあまりうるさくないから。でも、さすがにパパは相手が貴族じゃないって知ったら腰をぬかしちゃうかもね」

子爵である父が自分に望んでいる事といえば、無難な相手を見つけて結婚し、子供を産むことくらいだろう。

自分は晶士という、軍ではどこの国でも貴重でありがたがられるような才能を持って生まれたが、軍人としての資質がまるでないこ

とを両親はよく知っている。

今回の試験で合格したことも、喜んだというより、エリートとしての道に乗せられてやっていけるのだろうか、と心配されてしまったくらいだ。

優秀な彩石を受け継いでいくことを重視する貴族家では、女であろうと才に優れる者が当主として選ばれることはある。だが、それもシトリの性格やこれまでの怠惰な様子から、ほとんど期待はされていない。

「お母さんは、なにも言わないのか？」

「……………わたしのね、ずうずうつと前のご先祖様は娼婦だったんだって」

シトリは唐突に言った。

シユオウはきょんととして聞き返す。

「でも、たしか子爵家だとか」

「それはパパのほう。今の話はママのほう」

「へえ」

シユオウの受け答えは軽かったが、興味がないといった感じではなく、あまりに突然の話に戸惑っているようだった。

「それでね、その娼婦だったご先祖様は、生まれも育ちも苦労ばかりで、それでもとびつきり見た目がよかったから、娼館で働いている間に運命的な出会いを経て、真面目で良い旦那様を見つけて幸せになっただって」

シトリの話に、シユオウは真剣に頷いて耳を傾けていた。

「すこしして、その二人の間にも女の子が生まれて、ご先祖様はその子に強く言い聞かせて育てたの。女の幸せは男で変わる。だから、お前はお父さんより良い男を捕まえなさい、って。そんなことを言い聞かされて育てられた女の子は、大人になってお父さんよりもちよつと稼ぎの良い優しい夫と結婚したの。それで、また女の子が生まれて、自分が言われて育つた事を、またその子にも言つて育てた」

「ちよつと、お伽噺みたいだな」

「うん。わたしが子供の頃から、寝かしつけるときに毎晩聞かされたんだから。それで、そんなことが何代か繰り返されていくうちに、ご先祖様の血を受け継いだ女達は、しだいにたくさんお金を稼ぐ商人や、彩石を持っている輝士と結ばれて、ついにわたしのママの代になって爵位持ちの妻になった。わたしの中には、男を見る目で成り上がってきた女達の血が流れてるんだって」

「面白い話だな。だけど、それって」

「そう。わたしのママが言うには、あなたの見つけた男なら、きっと間違いないって。その男をものにするためなら、なんでもしなさいって背中まで押されたんだから」

「それは……随分と過大評価されてる気がするけど」

シユオウは苦笑して視線を流した。

「わたしにもよくわからないし、今まではどうでもいい話だと思つてたけど、そんなことで君との仲が公認になるなら、むしろ歓迎したいくらい。でも、だからって、君に期待を押しつける気なんて

全然ない。ただ、側にいたいだけ。今話したのは、わたしを知って欲しいと思ったから。変な話だから、いままで誰にも言ったことないんだよ」

日々をただなんとなく生きてきたシトリには、強くアピールしたい自分というものや思い出が少ない。

なので、うんざりするほど母から聞かされた今の話くらいしか、自己主張できることがなかったのだ。

「……わかった。覚えておく」

「うん」

それから二人の間には、一時の静かな時間が流れた。

目をつむり、心地良い水の音を聞いて、相手の温もりを確かめ合う。

またこんな風にできたらいいな、などと考えていたとき、大事な事を聞き忘れていた事を思い出した。

「ねえッ、そういえば、君は試験が終わったらどうするか決めたの？」

「ああ、一応」

「それで？」

「軍に入ることになった。ずっとかどうかは、わからないけど」

シトリはほっと胸をなで下ろした。軍に入るということは、ムラクモに残るということだからだ。

「よかった。もし旅に出るなんて言ったら、急いで支度しないといけないかった」

「……ついてくる気だったのか」

シユオウの声は、呆れたような、退いたような、複雑な色が混ざっていた。

「あたりまえじゃんツ。でも、どうして軍に？ あんまり興味なさそうだったけど」

「誘われたんだ。色々、まあ説得されて、ちょっとだけ興味が湧いた」

「まさか、アイセに……？」

シトリは眉根を寄せた。

アイセの説得でムラクモに残る事を決めたのだとしたら、素直には喜べない。

「いや、違う人だ。誰かっていうのは、ちょっと言えないんだけど」

「ふうん」

軍の人間だろうか。

彼の試験中での活躍が耳に入ったのだとしたら、それも十分ありうる。

だがとりあえず、アイセでないのなら一安心だ。

「そろそろ帰ろう。今から歩いたらちようど暗くなる頃だろ」

「うん。ねえ、今日は一緒に夕食を食べてもいい？」

「問題ないだろ。むしろ、宿の女将さんが喜ぶ。儲けが増えるって」

寄り添ったまま、来た道を辿って橋を歩いた。

橋の入口近くに差し掛かった時、道の脇にある屋台のほうから漂

ってくる良い匂いがシトリの食欲を刺激した。
ぐうう、と腹の虫は状況を考えずに自分勝手に恥ずかしい音を鳴らす。

「腹が減ってるのか」

「べつに……」

本気で恥ずかしかったので、シトリは顔を見られないようにシユオウから視線をそらした。

「一つ食べていこう。帰っても夕食の時間まではまだ少しあるから」

シユオウの声はどこか気遣うようだった。

本人は無自覚かもしれないが、相手を思いやるときのシユオウは反則的なまでに声音が穏やかで優しくなる。普段は突き放したような、少し冷たい態度なので、その落差で余計に心に突き刺さるのだ。まるで優しい兄に甘やかされる妹のような心地になり、シトリの羞恥心はさらに倍増した。

「いい……おなか、減ってないから」

「俺が食べたいんだ」

シユオウはシトリに外套を預けて、串刺しに焼いた鳥肉を売っている屋台に寄って、スパイシーに香るボリューム満点の串焼きを二本買って戻ってきた。

差し出された湯気のアがる串焼きを受け取って、感謝の気持ちを伝える。

「ありがとう……お金、払う」

「いい。クモカリに少し借りてきたから余裕があるし、報酬が出たらすぐに返せる。それに、今日ここに来たおかげで気分転換ができたから、そのお礼だ」

「うん……ありがとう」

シトリは、シュオウの気持ちのこもった串焼きを頬張り、幸せな気持ちも噛みしめた。

だが、シュオウは自分の串焼きになかなか手をつけようとはせず、視線を少し遠くへやっていた。

視線の先を見ると、さきほどの串焼きの屋台を、少し離れたところからじつと見つめる、孤児らしきみすばらしい格好の痩せた男子の姿があった。

ムラクモは比較的豊かな国ではあるが、なんらかの事情で親を失った子供をきちんと保護できるような施設や法に乏しく、街中を歩いていると、そうした子供達を希に見かけることがある。

「……ちょっと待っていてくれ」

シュオウは孤児の男の子の元まで行き、まだ湯気が出ている串焼きを差し出した。

男の子はそれを恐る恐る受け取って、小さく頭を下げて走り去っていく。

シトリの元に戻ってきたシュオウは、悲しそうな声で、独り言のように言った。

「わずかな食べ物が一瞬の餓えを満たすだけにすぎないって事はわかってるんだ。だけど、ほんの少しでも美味しい物が食べられたら、あと一日生きてみようって、小さな希望になるから」

シュオウは去っていく男の子の背中を、酷く辛そうな顔で見つめていた。

孤児だった彼の、実体験からくる憐憫の情なのだろうか。

なにに不自由することなく育てられたシトリには、その気持ちを共有するための手がかりすら見いだせず、ただ黙っていることしかできなかった。

預かっていた外套をシュオウの肩にかけて、また二人で寄り添うように歩き始めた。

隣に立ちたいと思っっている人の、心の内をもっと知りたい。

シトリは強く決心をこめて、シュオウの手を力強く握りしめた。

プレゼント（後書き）

今回は、無名編のおまけストーリー的なお話を書きました。

前回、はじめてこちらで投稿させていただいてから、はじめて読んでいただいた方も居たようで、とても嬉しかったです。

いただいた感想やレビューも、嬉しくて大切に読ませていただきました。

今のところ予定している分だけでも、この物語はけっこうな長さになってしまいう予定なのですが、なんとか完結まで持って行けるようガンバリたいと思っていますので、よろしければ、今後もお付き合いいただければと思います。

次回からは本筋に戻り、従士編をスタートする予定です。

主人公が関わる世界も徐々に広がって、新しい場所や人々との出会いも増えていくことになりそうです。

最後に、3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震で被害を受けたすべての人に、心からお見舞いを申し上げます。

第一話 シワス砦

？ シワス砦

味気ない灰色の森が覆う世界に、忙しく足を踏み鳴らす音が響いている。

乾いた冬の空気を胸いっぱい吸い込み、幼いシュオウは一步、また一步と師であるアマネ目掛けて、小さな拳を突き出した。

アマネは、シュオウの手を自身の持つ小振りな木の棒で叩きつけた。右手に走った鮮烈な痛みにも、おもわず小さな悲鳴が漏れる。

「殴るといふ選択肢は選びうるものの中で最悪の一つ。人の拳はなにかを叩いて平気でいられるようには出来ていない」

アマネは淡々と言った。
間合いを置く。

呼吸は乱れ、乾燥した空気を吸っては吐いてを繰り返し、口の中は真昼の砂漠のように乾いている。

殴ってはいけない。シュオウの頭が理解した言葉の意味はそのくらいのことだった。

拳は使えない　なら、足を使えば良いはずだ。

再び間合いを詰め、左足でふんばり、出せるかぎりの力をこめて蹴りあげる。が、アマネはシュオウの軸足を軽く棒で振り払った。結果支えを失い、無様に地面に尻をつく。

「足は根を張る大樹のように。無闇に地面から離さない。戦場での機動力は最も重要なものであると心得なさい。人の体は目や耳、指先や足の小指一本に至るまですべてが消耗するのだということも」
アマネの教練は、シュオウの頭にほとんど届いていない。言っていることの半分以上は理解ができないし、それになにより空腹で頭

がおかしくなつてしまひそうだったからだ。

『食べ物欲しければ、自分に一打を当ててみる』 師のそんな言葉から 教え は唐突に始まった。

この日に至るまで、食べるものが少ないからとほとんどろくな物は与えられていなかった。約束が違つたと抗議したくても、子供であるシユオウは、自分を拾つてくれた大人である彼女に対して、まとも何かを要求する勇氣も力もない。きっと本当に食べ物が少ないんだと納得して空腹に悲鳴をあげる腹を押さえてきた。

その結果がこれだ。

限界に近いほどの飢餓感に襲われるなか、食料を餌にして戦い方とやらを仕込まれてもいつこうに頭に入つてはこない。あらゆる思考は食べる事への渴望と、目の前の女に対する恨み言で溢れていた。地面に落ちてゐる木の枝を手取る。アマネの持っているものより長く頑丈そうだ。

これならば そう思い、不意打ちのつもりで勢いよく立ち上がり、目をつむつてがむしゃらに棒を振り下ろした。が、なんら手応えはなかった。

うつすら目を開くと、片手で軽々とシユオウの繰り出した木の枝を掴む、アマネの姿があつた。

「武器は使わない。失せてしまえば探し、壊れた瞬間無防備になる。手にした得物の長さや強度の分、人は自らが強くなつたと過信する。だから、最初から所持する事を考えない」

言つて、アマネは掴んだ木の枝を折つて捨てた。途端、彼女は初めて反撃に転じる。

短い棒を自在に振り回すアマネの攻撃。シユオウの生まれながらに持つ類い希なる動体視力を持つて、迫り来る木の棒の軌跡と表面についた皺の数まで捉える事が出来た。だが、見えている事と、それに対応できるか、という事はまったくの別問題だった。幼いシユオウには、高速に迫り来る予測不能な攻撃を避けるだけの身体的な能力が圧倒的に不足している。

木の棒はシュオウの頬を、腹を、頭を小突く。どれも手を抜いたもので致命傷にはなりえないが、的確に強烈な痛みだけは与えてくる。

苦痛から逃れるため、シュオウはジリジリと後ずさった。

「周囲のものはすべて自身の利得として利用する。相手が勝手に転けたなら、その分体力の消耗を節約できる」

突如、視界が揺れた。古くなり、欠け落ちてしまっている地面に足を取られたのだ。意図的にこの場所へ追い込まれたのだと、この時のシュオウでも理解できた。

アマネは木の棒を放り捨て、こちらへ向けてゆつくりとにじり寄る。言い知れぬ恐怖がシュオウの心を覆った。

「誰かと対峙した時。その相手に対して最も単純かつ明快に勝利を得る方法は、相手をこの世から葬り去る事。けれど、複数の相手を同時にするような場面で、いちいち相手を殺しては時間も体力の消費も増え、効率の低下を招く。この戦い方を最初に興し、戦場で実践した男の考えたことはそんなところ。では、どうすれば損耗少なく戦いに勝利する事が出来るのか。答えは簡単。可能なかぎり僅かな労力で相手の戦意を失わせる最適な行動を選択する。

老若男女、痛みはあらゆる人間が平等に持つて生まれる重要な感覚の一つ。それに対する耐性は鍛えることが難しく、精神力なんていう曖昧なもので乗り切れる度合いにも限度がある」

アマネは転んだシュオウの手を取り、体をうつ伏せに地面に押しつけた。

尖った小石が頬にめり込む。

左腕だけが背中にまわされ、軽く身動きをとっただけで肩から手首にかけて強烈な痛みが走る。まるで、これ以上動いてはならないと体が悲鳴をあげているかのよう。

「まず身をもって方法を体感しなさい。これから教える様々の苦痛のうち、これが最初の一つ。頭にしっかりと焼き付けなさい。そして耳の底にこびりつけなさい。これが」

もしも、木の枝が石のように硬かったなら。その枝を折った際には、こんな音がするに違いない。

アマネは言った。『これが、人の心が折れる音』だと。

左腕をあつてはならない方向にへし折られたシュオウの悲鳴は、静かな森の空気を盛大に震動させる。

周囲の森から、驚いた鳥達が一斉に空へ飛び去った。

苦痛にもがくシュオウを前にして、アマネは平素と変わらぬ涼やかな微笑みを見せていた。この時、この瞬間、はじめて知ったのだ。優しさから自分を引き取ってくれたと思っていた目の前の女が、ただの心優しい人間ではなかったということ。

腕を伝って脳天にまで、落雷のように伝わった激しい痛みによる恐怖。

気づけば、シュオウはアマネに向かい必死に命乞いをしていた。

殺さないで、と。

彼女は酷薄な笑みを浮かべ、言った。

「命に執着してられる今を精々喜んでおきなさい。これから私の元にいるかぎり、次の瞬間には心底殺してくれと願うようになっているだろうから」

考えたくなかった。やっと出会えた、共に生きてくれる人に対して猜疑を抱くということ。しかし、今のシュオウの心には、はっきりとあの日の出会いに対する後悔の念が渦巻いている。

あの時のほうが、ましだった。

まるで見透かしたように、アマネは柔らかい声で言った。

「汚水溜めで寝て、その日の食事だけを探して生きる人生に戻りたい？」

今や恐怖の対象でしかないアマネを見上げ、シュオウは痙攣したように小刻みに頷いた。

アマネはシュオウを見下ろしつつ、ひんやりと冷たい手でシュオウの頬を撫でた。

「だめ、約束したでしょ？ それに、ここは灰色の森に囲まれた

魔境の世界。森での生き方を知らないあなたは、自力ではどこにも逃げられない」

師はシユオウを抱き起こして、優しく頭に手を置いた。

「シユオウ。あなたには、私が受けた教えのすべてを叩き込む。

この歳になるまで、私にもその理念を体現することは出来なかつたけれど、あなたの持つて生まれた天賦の才は、それを存分に活かすことが出来るかも知れない。……元々弟子なんて取るつもりはなかつただけだね。恨むなら、私に欲を出させたその目を恨みなさい。そして強くなりなさい。私から受け継いだ物を使ってどう生きるかは、あなたの好きにすればいい。だけど、約束を果たすまでは、私の元から絶対に逃がさないから。まあ、気が向いたらこの森の中で生きていく方法もついでに教える機会もあるかもしれない。きちんとして習得すれば、自分の意志でここを出て行ける時も来るかも、ね」

初めて出会った時のような優しい眼差しで、アマネは優しくシユオウの頭を撫でる。折られた腕はまだ痛い。それなのに、温かな羽毛にくるまれているような安心感が心を包む。

シユオウの頬に一筋の涙が伝った。

この日以降、文字通り死んだほうがましだ、という時間を積み重ねることになる。残酷だと思っていた彼女の言葉が、それでもなお控えめな表現だったと知るのは、さらに後の事となる。

無味乾燥とした灰色の世界。人が 深界 と名付けたそこは、かつては普通に人々が生活を送るありふれた世界だった。しかし、突如発生し、増殖を始めた灰色の不気味な木々は、徐々に平地を浸食し、世界は不気味な灰色の森に覆われた。灰色の森には人間を捕食し、害をなす生物が誕生し、それらは爆発的に繁殖する。人類は死の世界と化した平地から逃げ、灰色の森の侵攻が届かない山や高地へと逃げ延びた。

やがて、人は森の浸食を退ける効果を持つ石の存在を知る。水気を受けると暗闇で発光するそれを 夜光石 と名付け、その石を加工した素材で作る道を 白道 と呼ぶ。

一度は逃げ延びた深界。しかし、人類は白道によって道を繋いだ。閉ざされた文明は再び開かれ、遠く離れた人々の間に交流が生まれた。それにより、人類は多くの恩恵を受けることになる。だが、それは異文化間での争いの火種を生む結果にも繋がった。

幾度となく繰り返される戦い。

古い王国は倒れ、新たな王が立つ。その繰り返し。転んでは立ち上がり、泣き、笑い。その繰り返し。

終わることのない進歩と衰退を繰り返し、人はそれでも尚、前を向いて歩くことをやめなかった。

白道という名の街道が、深界の森に一条の線を穿つ。その道を塞ぐように、ぽつりと一つ、赤茶けた石造りの建物がある。

シワス砦

東を統べる大国、ムラクモに数多存在する軍事拠点の中でも、最も後方に位置するこの砦は、隣国であるアベンチュリン王国との国境を守護する重要拠点である。

シワス砦では日夜、国境の警備と国家間を行き来する者達の対応に追われ、そこに勤める従士達は多忙を極めている、ということになっていた。

だが、実際にはなんら軍事的脅威となりえないアベンチュリンに対しての警備業務はかぎりなく無意味に近く、砦で働く従士達の間には、怠惰な雰囲気恒常的に立ちこめていた。

そうした退屈を享受する二人の従士が、深夜から早朝にかけての周辺警戒のため、見張り塔に詰めていた。

そのうちの一人、小太りで垂れ目の男の名をサブリという。村を

出て一発当ててやると豪語し、その手始めにと石掘りの仕事を始めたが、すぐに手のマメが潰れて半日で仕事を投げ出し、半べそをかきながら現場放棄したという逸材である。自他共に認める根性なしだ。

もう一方、痩せ形で無精ヒゲを生やした男の名をハリオという。

剣の腕一筋に傭兵として身を立てると言い村を出たが、剣を握って勇ましく敵を葬っていたはずの骨張った手は、塩辛い木の実入りの革袋の中をまさぐる事くらいにししか使っていない。自称、出身村一番の剣豪である。

ここに来て半年ほどの二人は、シワス砦に配属されてからの微睡みに似た退屈という名の日々を、ほぼ強制的に満喫させられていて、そうした日々にもすっかり慣れてしまっていた。

「なあ、ハリオ……」

「なんだよ、サブリ」

見張り塔の内壁にぐてんと体を預けた姿勢のまま、サブリは相棒であるハリオに声をかけた。

「俺達、これでいいのかなあ」

「なにが」

「なにがってさ、俺達今年でもう二十九、来年には三十だぜ。こうして辺境の警備隊でぼーっと過ごすだけの毎日でさ、いいのかなって思うんだよ」

「いいじゃねえかよ。一日に何時間か言われたことやってるだけで、寝るところもあって飯も出る。使う当てのない金は貯まる。これ以上の仕事なんて探したってそうはないぞ。北方や南方に近い拠点じゃ、しょっちゅう殺し合いしてるってのに、ここはそういう血なまぐさい出来事からも無縁だしな。まあ、俺としちゃあ、鍛え上げた剣術を活かせる機会がなくて、ちっと退屈なんだがよ」

ハリオは剣の腕には自信があるようで、日頃からよくそのことを自慢していた。サブリはそうした話はすっかり聞き飽きていたので、さらりと流して対応する。

「でもよお、俺がなにより嫌なのはさ、ここじゃ女との出会いが全然ないってことなんだよ。ガキの頃遊んでた奴らなんてよ、みんな二十歳すぎたくらいの頃には嫁さん貰って一家の長になってるんだ。俺だつてさ……」

「ぶつさいくな面してよく言っぜ」

「ハリオには言われたくないよ……」

サブリは顔をしかめ、ハリオはにへらと笑った。

「けどな、まじめな話、田舎の若い女どもはみーんなさつさと相手見つけちまうし、その他でまともな女と知り合いたいってんなら王都かそれ以外の都市にでも行くしかないだろ。そこで生活していくとして、仕事はどうするんだ？ つるはし持って汗臭い男達と、窮屈な穴に潜って石掘りして暮らすなんて、俺あごめんだね。お前だつて親から貰えるもんがありゃこんなところでこんな時間に俺とくつちゃべつてないだろうがよ」

「それは、そうだけどう」

「それにこの皆にだつて何人か女の従士がいるじゃねえか。ほら、従曹の孫のミヤヒ従士なんか結構美人だろ？ あれ……ちよつと待てよ、そういえば誰かさん、ここに来てすぐあの女に告って剣でポッコボコにされたんだっけ？」

思い出したくない過去を掘り出され、サブリの顔は真っ赤になる。

「お、おおお、おま、おまッ！」

「へへ、悪かったよ、落ち着けよ」

ハリオになだめられ、サブリは両手で後ろ頭をワシワシと搔いた。

「はああ……」

それからしばらくは二人とも口を開かなかった。

しんと静まり帰った夜の世界。時折、思い出したように鳴くフクロウの声に耳を傾ける。

静かな空気が苦手なサブリは、どうにかして話題がないものかとネタを思い出した。

「なあ、ハリオ。聞いたかよ」

「なにがだよ」

ハリオは無精ヒゲを生やしたままの顔をぼりぼりと搔いて、革袋から塩辛い木の実を一つ取り出し、口に放り込んだ。

「このあいだ配属された新入りのことだよ」

「ほんなのひたっけか？」

ハリオは口の中で木の実を噛み砕きながらもごもごも返事をする。喋りながら余った木の実の皮を吐き出す事も忘れない。

「あんだだけ目立つやつもそう居ないだろうよ。とにかくさ、今シワス砦はその新入りの話で持ちきりなんだぜ」

シワス砦のある位置は辺境と呼んでもさしつかえないほど、ムラクモ王国の中でもすみっこのほうにある。大貴族が統治するような都からは遠く、周辺には小さな農村が点在しているのみ。当然遊んだり、鬱憤晴らしをできるような店もなく、唯一の楽しみはムラクモとアベンチユリンの二国間を行き来する商人達からの情報や嗜好品を買うくらいなものだ。

そんな彼らにとって、王都の軍司令部から直接の指示で配属された新入りの話は、その奇抜な見た目の相乗効果もあり、大きな関心事となっていた。

「そもそも、なんでここに寄越されたのかも不思議なんだがよ、その新入りが来て以来、王都から早馬でしょっちゅう荷物が届くんだと」

「それがどうしたよ。辺境勤務の軍人に、実家から差し入れが届くのなんて珍しくもないだろうが」

ハリオがそう言うと、サブりはしめたと言わんばかりのしたり顔で反論する。

「それがなあ、送られてきた荷袋があんまり上等だったもんで、受け取った奴らが差出人を見たらしいんだが、そこに書いてあった名前が アウレール だったんだと」

ハリオは木の実へと伸ばしていた手をぱたりと止め、体を起こした。

「アウレールっていや、お前それ」

「そうだよ、ムラクモでもそこそ中堅の貴族。子爵様の家だな」
しかし、ハリオは一笑に付す。

「ばっかやる、かつがれてんだよ。どこの世界に平民の若造に物を送る貴族がいるってんだ」

「この話はヒノカジ従曹の耳にだつて入ってるんだ。荷を直接受け取ったやつの話によると、荷札にアウレール子爵家のロウ印も押してあったらしいんだぜ。間違いねえよ」

力説するサブリの顔の贅肉がふるんと揺れた。

「まじかよ……」

「この話はまだ終わりじゃねえぞ。そのアウレール子爵家からの荷が届けられた翌日なんだが、またその新入り宛に荷が届いたんだ」と

サブリのもつたいつけたような話し方に、ハリオはすでにのめり込んでいるようだった。さきほどまで大切に抱いていた革袋を手放して、顔をサブリのほうへ寄せている。

「また、その貴族から送られてきたのか？」

「それが違うんだ。こんどの差出人に書いてあった名前は モー
トレッド だったらしいんだな」

「今度は伯爵家かよ……どうなってるんだ、その新入り。でもよ、肝心な話が抜けてるな」

「そこ、そこなんだよおッ！ 一番重要なのはッ」

ふだん自分の話を真面目に聞いてくれないハリオが、真っ直ぐこちらに興味を寄せることにすっかり気をよくしているサブリは、声を荒げて身振り手振りで話を盛り上げた。

「届いた荷に書いてあった差出人の名前は家名だけじゃない。それを見たやつによると、二つとも女の名前だったらしいんだ」

「てことは、なんだ……その……」

異性へ宛てた贈り物。それが何を意味しているのか、錆びたノコギリ並に鈍い者でも、想像はつくというものだ。

言葉に詰まるハリオを尻目に、サブりは腕を組んで一人納得するように頷く。

「そういうことなんだろうな。簡単には信じられねえけどよ。その二人の貴族のお嬢から荷が届いて、その後も二、三日おきになにかしら、同じ差出人達から届いてるらしい」

「誰かその新入りに詳しく聞いた奴はいないのかよ？」

「いねえよう、そんな奴。みんな気味悪がつて声もかけてねえつて話だ。俺も同感だね」

定員はとつくに溢れているシワス砦に突如配属され、それを追いかけるようにして届く二人の貴族令嬢からの贈り物。

いくらシワス砦の従士達が平和呆けしているとはいえ、件の新入りになにかあると考えるのが妥当であり、小心者の彼らはそうした出来事に巻き込まれるかもしれないと、目を合わせることをすら避けている始末だった。

ハリオはどこか遠くを見つめるように目を細める。

「くそツ、いいよなあ……貴族の娘ならきつとすっげえ美人なんだろうな……」

ムラクモの特権階級層の多くは、西から渡ってきた移民の子孫だ。その詳しい経緯については、長い歴史と共に一般の人々の間で忘れられてしまったが、ムラクモが立国して間もなく、利権や新たな領地を期待して渡ってきたのではないか、というのが詳しい者達の間で語られている説である。

西側の人々は色白で目鼻がくつきりとした顔立ち。それに多種多様な髪色が特長的で、見栄えの良い容姿を持つ者が多い。黒髪や濃い茶系の髪色が多く、彫りの浅い顔立ちが一般的な東方の土着の民にとつては、しばしば畏怖と共に憧れの眼差しで見られることがあった。

「よし、次の交代時間がきたらそいつを見に行くぞ」

好奇心に駆り立てられたハリオが、柄にもなく瑞々しい声で言った。

「本気かい？」

「どうせ他にやることもないしな。で、その新入りがまかされた
仕事場はどこなんだよ」

「ない」

サブりはきつぱりとそう言った。

「は？」

「だから、ないんだよ何も。まだここに来てなんにも振り分けられた仕事がないらしい。日に何度か中庭のほうで体を鍛えてるのを見かけた連中が居たみたいけど」

「ほお、そいつはけっこうな身分だな。あとで遠巻きに冷やかにしてやるうか」

根本的に性格がひねくれているハリオは、他人をバカにしたり、からかったりすることが大好きだった。しかし、今回ばかりは相手が悪い。

「やめとけて、あの新入り、そういう雰囲気じゃねえ」

「なんだよ、雰囲気って、えらく中途半端な言い方だな」

「うん、なんていうか、近寄りがたいんだよ……なんとなく、だ
けどさ」

「ほお。そりゃ、ますます見るのが楽しみだ」

空はうつすらと光が差し始め、皆で飼われている鶏が目覚まし代わりにコケコツコウと喉を鳴らしている。

皆の中がざわめきに包まれるまでのほんの間。

黎明の時。

風に揺られ、しゃらしゃらと枝を震わせる灰色の木々に囲まれた、
平和で退屈だけが取り柄のシワス皆に、いつもと同じ朝が訪れる。

白く硬い地面を踏みしめながら、皆の中庭をぐるぐると走る。

薄ぼんやりと明るい静かな早朝。

シュオウは身を切るような真冬の空気を吸い込み、白い息を小気味良く吐き出しながら、自分はいったいなにをしているのだろう、と数え切れないほど自問した。

出生不明の孤児であったシュオウは、ある夜の出会いから師に拾われ、通常、人が暮らせぬ深界という、人にとっては死の世界のまっただ中で育てられ、鍛えられた。

十年以上の歳月を経た後、外の世界への好奇心から師の元を飛び出したシュオウは、幼い頃に孤児として残飯を漁り、泥水をすすってどうにか生きていた街、ムラクモ王国王都へと向かった。そこで旅の資金調達のため、貴族の子女達が通う学校の卒業試験に同行し、皆と共にいくつかの試験を乗り越え、はじめての友と呼べる、仲間達との絆も築く事が出来た。

その後 氷長石 との異名を持つ大貴族からの勧誘を受け、ムラクモ王国軍に入ることを決めたシュオウだったが、どういうわけか、今現在シュオウのいる場所は、当初の予定からはほど遠いものとなっていた。

胸に感じる強い圧迫感を合図に、自身の限界を悟ったシュオウは、走る速度を少しずつ緩めて、転がり込むようにして地面に体を横たえた。

汗で張り付いた衣服の下に感じる、冷たくて硬い地面の感触が心地良い。

四方に広がる赤茶色の壁は、外にいるにも関わらず絶えず不快な圧迫感を与えてくる。木箱の中に閉じ込められた動物の気持ちはこんなだろうかと考える。そろそろ見慣れてもいいはずのこの光景を、未だに好きになれそうにはない。

なんの因果でか、ムラクモ王国の中でも最も東に位置するシワス砦に配属されたから、そろそろ一ヶ月が経とうとしていた

こうなってしまう経緯を、シュオウを軍に誘った氷長石ことア

デュレリア公爵は、丁寧な謝罪の言葉を含めて手紙で説明書きを超越していた。その文面からは真摯に謝る姿勢が伺えたため、その事で相手を恨むような気持ちはなんら持ち合わせてはいないのだが、さすがにシワス砦での退屈極まりない日々は予想の範囲外であり、自問自答を繰り返し心の中で唱えてしまつに十分な、無意味に思える時間が、ただ淡々と過ぎていく。

シワス砦には多くの人間が勤めている。今現在も、見張りや食事の支度、馬の手入れ、掃除などの様々な雑用で複数の従士達が蟻の巣のように砦内でうごめいているのだが、シユオウのいる中庭には、自分の吐き出す荒い呼吸音しか聞こえず、この退屈な世界に独りぼつちになつてしまつたような錯覚すら抱いてしまつ。

呼吸を落ち着かせるために吐き出した大きな溜息には、自虐的なものが少なからず含まれていた。

「新入りのくせに、いつちよまえに悩み事か？」

唐突に中庭の空気を揺らしたのは、聞き覚えのある女の声だった。シユオウは仰向けに曇り空を見上げたまま、声の主に戻答する。

「悩みがない人間なんているんですか」

上機嫌とはいえない精神状態だったこともあり、険のある声になつてしまつた。

「おうおう、そんな態度でいいのか？ もつたいなくも先輩従士たるこの私が直々に新入り宛への荷物を持ってきてやったというのに」

またか。

シユオウは体を起こし、背後から近づいてくる声の主のほうへ振り返つた。

無風の日の雨のように真っ直ぐな黒髪を静かに揺らしながら歩いてくるのは、このシワス砦に長く勤めている女性従士で、名前をミヤヒという。

鼻は少し低く、切れ長で意志の強そうな目元。顔の一つ一つの部位はどれをとっても平凡そのものだが、美人と呼ぶに相違ないくら

いには整っていて、身長もスラリと長い。着慣れた様子の従士の茶色い制服は、女性用のものを支給されているらしく、男のもの比べて胸元から腰にかけて、ゆったりとした造りになっている。言葉使いが少し乱暴な点を除けば、おそらく異性からの注目を集めやすい部類の人であるはずだ。

一度年齢を聞いた際に、彼女が物凄く不機嫌な顔で黙ってしまったのを見て以来、詳しく知る機会はなかったのだが、おそらく二十歳くらいの年齢である自分より、五から十くらい上であると予想している。黙っていたれば落ち着いた三十代くらいの女にも見えるし、快活に明るく喋っている姿を見れば、二十代前半に見えることもある。どちらにせよ、シュオウにとっては先輩従士にあたるため、目上の者に対する態度を取る理由としてはそれで十分だった。

「ほれ」

ミヤヒはシュオウの前で軽く膝を折り、綺麗な布でくるまれた二つの荷を地面に置いた。

「……ありがとうございます」

荷にはそれぞれ送り主を示す小さな荷札がついているが、確認するまでもなく誰からのものかはわかっている。

「あんたのそれ、すっかり噂になってるよ」

ミヤヒは荷を指さして言った。

「噂、ですか。どうして」

「当然だろ。送り主の名前に貴族の名前が入ってれば、誰だって不思議に思うよ」

シュオウはなるほど、と言って頷いた。

この世界の人類社会では、人間は大きく二つの種類に分けられる。手の甲部分にある輝石という命にも直結した石に、多彩な色が付いた物を持っている側と、そうではなく、白く濁ったような石を持つ側の二種である。

色のある輝石は 彩石 と呼ばれ、自然を操る等の超常的な力を持つ者に与える。一方の色のない輝石は 濁石 といい、それには

なんら特別な力はない。

両者の差は埋めがたく、彩石を持つ者は人類社会の中で自然と権力を得るようになり、彼らは貴族階級を占めるようになった。

そんな貴族の娘達が、彩石を持たない平民階級であるシュオウに対して頻繁に贈り物を寄越している状況は、常識のある者から見れば異常事態といって過言ではないのである。

「あなたの出生にまつわる秘密から、貴族の令嬢達をたぶらかした経緯まで、根も葉もない噂の数は今わかってるだけでも両手で数え切れないほどあるけど、聞きたい？」

「やめておきます」

もう一度大きな溜息をつきたくなったが、自重する。

深界を踏破する試験を共に乗り越えた仲間であるアイセとシトリという二人の貴族の娘達。彼女達はとうとうわけか自分に対して良い印象を持つているようで、試験を終えて王都に戻ってから、出会って間もない頃の棘のある態度が嘘のように、競い合うようにシュオウに対して好意的な態度で接してきた。

王都から離れた場所での仕事が決まり、離ればなれになってからすぐに送られてくるようになった二人からの贈り物も、始めの頃は嬉しかった。が、今やシュオウのささやかな人生に刺さる小骨となって悩みの元となっている。

シュオウが甘い物に感心がある、という事を知っているアイセは、見たこともないような色とりどりの菓子を頻繁に寄越し、シトリのほうは使い道に困る置物や、高そうな防寒具などをせっせと送りつけてくる。

自分に対してこれほど良くしてくれることに感謝の念は尽きないが、それが二日おき、三日おきの間隔で届くとあっては、もはや嫌がらせ一歩手前だった。

「その様子じゃ、あんまり喜んでもないみたいだね」

ミヤヒは苦笑しつつ、地面に尻をついたままのシュオウの顔を覗き込んだ。

彼女は面倒見がよく、シユオウに対してもなにかと声をかけてくれたり、気を遣ってくれている。シワス砦に配属されて以来、周囲から孤立してしまっている状態の自分にとっては、貴重でありがたい存在となっていた。

シユオウが孤立状態になってしまっているのには、いくつか理由がある。

一つはシトリ、アイセ、両名から頻繁に届く贈り物。もう一つは、配属されて一ヶ月たつにもかかわらず、ここで自分に割り振られた仕事は何一つないからだった。

周辺の農村で、親から継ぐ物がない二男、三男が年金を当て込んで軍に入り、配属されるのがこのシワス砦なのだという。砦内部はすでに飽和状態で、見張りの任務ですら交代間隔が極端に短く、水汲みから掃除まで、ありとあらゆる細かい雑用にまでそれを担当する者がいるのだ。

それほど人が余っている場所にシユオウが配属されたことも不思議だが、当然のようにここで突如現れた新入りが預かれるような役割はなく、食事以外することがないシユオウは持て余した時間をひたすら基礎体力訓練に消費していた。

いくら運動で体力を減らしても、働かずに食べる食事は味もわからず、奇異の目を向けてくる他の従士達の視線もあって、ここへ来て気が安らぐこともない。

シユオウの扱いは完全に腫れ物で、お客様であり、蟻の巣にまったく別の虫が迷い込んでしまったかのような居心地の悪さを日々噛みしめていた。

「貴族が何を考えてるかなんて興味もないけど、その送り主に悪気はないんだろ。邪険にするのもかわいそうだよ」

「邪険になんてしてないです。ただ、ちよつと疲れるっただけでシユオウは眉根を落としてそう呟いた。

「それにしても、あんたがねえ……お嬢様を二人も籠絡出来るよ
うな色男には見えないけど」

ミヤヒは下からシユオウの顔を覗いて言った。

「ほつといてください」

シユオウが顔を背けると、ミヤヒはからかうような口調で言う。

「ぷッ、いっちょまえに拗ねた？」

本当のところは違う。拗ねたのではなく恐いのだ。

シユオウの顔の半分ほどを隠す黒い眼帯。この下がどうなっているのか、と興味を示されるかと思うと、反射的に相手の視界からはずれてしまいたくなる。自分でも病的だと思っほどの過剰反応は、過去の顔に纏わる苦い経験からきていた。指をさされ、醜い顔だと笑われたり、意味のない同情を浴びせられたり、気持ちが悪いと言つて罵倒されたり。そうした経験が心に深く傷を残し、それは大人になつた今でも、シユオウが背負う重荷の一つとして、暗い影を落としている。

空気が重たくなつたことを感じ取つたのだろう。ミヤヒはさつさと話題を変えて、声を張り上げた。

「まあ、こここのところ退屈してるみたいだし、ちょっと付き合いなよ」

シユオウの返事を待たずに、ミヤヒは中庭の角に立てかけられていた二本の木剣を手に取つた。

「子供の頃からじつちゃんに鍛えられてたから、これでも剣の腕はちよつとしたもんなんだ」

ミヤヒは誇らしげに言つて、片方の木剣をシユオウに向け放り投げた。

狙い良く胸の前まで飛んで来た木剣を受け取る。見た目の印象よりもずつしりと重い。

「重たいですね」

「軍で使つてる訓練用の本格的なものだからな。中に重りが入つてて実剣とほぼ同じくらいの重量に調整されてるんだ」

「それで、でも、どうしてこんなもの？」

「今からあなたの腕を見る。新入りの腕試しを先任がやるのは皆

の伝統なんだ。他の連中がなにもしようとしないうち抜けばつかりだから、あたしが筋を通してやるよ」

ミヤヒは重たい木剣を軽やかに振り上げ剣先を胸の前に突き出して構えた。

構えるまでの動きは音もなく流れる水の如く。まったく剣に対して知識がないシュオウでも、ミヤヒがそれなりに使える相手だと、瞬時に悟った。

「待つてください、剣なんて一度も」

「問答無用！」

ミヤヒは素早く一步を踏み出す。構えた木剣を頭上まで持ち上げ、勢いそのままにシュオウのいる位置まで振り下ろした。

うそだろッ。

立ち上がって後退する余裕はないと判断したシュオウは、体を右へ振り、地面を転がって木剣を躲す。鋭利な風切り音が頭の後ろを通りすぎた。

「反応良いね」

ミヤヒがわずかに後退したのを確認し、シュオウはゆっくりと立ち上がった。

「話を聞いてください。こんなもの、一度も使った事がないんです」

「冗談にしては笑えないよ。剣も使えないようなのが軍に入れるわけないだろ。もしかして、勝負から逃げたいからってそんなこと言ってるのか？」

ミヤヒの顔面があらさまに不機嫌そうに歪んでいく。ここへきて以来、彼女のこんな表情を見るのは初めてだった。

「嘘は言ってません」

シュオウは真顔でそう通すが、ミヤヒに納得した様子は見られない。むしろ、目の色はさらに怒気を増したような気がする。

「わかった。負けた後にそう言い訳してもいいから。だから今はきちんと相手しな。どうしても嫌だつてんなら、先任からの命令つ

てことにしてもいい」

聞く耳持たずか。

思惑がどうであれ、あまりに短慮な先輩従士の振る舞いに、怒りを通り越して呆れる心地がする。

シュオウの胸中など知った事ではないミヤヒは、足早に間合いをつめて二度目の剣撃を振り放つ。狙いは右肩から腹にかけて、上から斜め下に切り裂くような一撃。シュオウは左足を擦るように後退する。最小限の動作でこれを躲し、ミヤヒの木剣はむなしく中空を切り裂いた。

適当にいなせば冷静になってくれるだろうか。そう考えたシュオウの期待は空振りに終わる。

今の一振りに自信があつたのか、ミヤヒは一瞬の動揺を見せた。が、すぐに意識をシュオウに戻し、突進しつつ横薙ぎに剣を振り払つた。当然、シュオウはこれも躲そうと予備動作に入る。だが、そこで猛烈な違和感を覚えた。

体が重い。

右手に握つたままの木剣はシュオウにとっては異物でしかない。実剣と相違ない重さの木剣が、いつも通りの動きを阻害している。即座に、戦闘行動に不要な物だと判断してその場に木剣を放棄する。身軽になつた分さらに軽快に足をずらし、腰を引いて際どい位置で回避行動を取る。

ミヤヒの剣先がわずかにシュオウの従土服をかすめた。

相手の次の行動は　そう思考した瞬間、襲つてきたのは剣ではなく怒声だった。

「なんだよ今のはッ！」

「え？」

「え、じゃないッ！ さっきから危なっかしい避け方ばかりしやがって。ちゃんと剣の背で受け止めるよ！ おまけに途中で放り投げるし……今の本物だつたらどうするんだ？」

「はあ……」

シュオウは気の抜けたような返事をした。

どう説明すればいいのかわからない。この状況で何を言っても、おそらく聞いてはもらえないだろう。血走った彼女の目を見れば、そうとしか思えなかった。

「いいか、次はきちんと剣で受けるんだぞ」

ミヤヒが拾って再び投げて寄越した木剣を受け取り、見よう見真似で構えてみた。その途端に立ち方すら忘れてしまったかのように、猛烈な違和感に襲われた。

手の平が汗ばむ。

「やあッ！」

ミヤヒの攻撃は最初と同じ、頭上から振り下ろす重たい一撃。

縦の攻撃を防ぐためにとる行動は、剣を横に構えて前へ突き出せばいい。経験では圧倒的に劣っていても、腕力でなら男でもあり、鍛えてきたシュオウに利があるはずである。

受け止めるくらいのは出来るといふ漠然とした自信がたしかにあった。だが

「ッ
ッ

ガチンと木剣がぶつかり合う耳障りな音がして、シュオウの手元からジインと衝撃が両腕と肩にまで響いて伝わった。その拍子に指先に痺れるような痛みが走り、強く握っていたはずの木剣は、カラカラと音をたてて地面に落ちていた。

「……………悪かったな、無理をさせて。あんたがここまでよわっちい奴だなんて思ってた」

ミヤヒは落胆した様子で目も合わさず、木剣を元あった場所へ片付けに向かう。

呆然とその様子を伺っていたシュオウは、そこではじめて複数の視線を肌を感じた。

見上げてみると、見張り塔の上や建物の窓など、あちらこちらから砦の従士達が自分を見下ろしていた。皆一様に、にやけた顔で口を動かしている。退屈に溺れる彼らの好奇心を満たす、一時の見せ

物となつていたのだろうか。

「ガキ共ツ、飯の時間だ。遊んでないでさつさと食え」

二回の窓から顔を出した白髪の老人が怒鳴るような口調で二人に声を浴びせた。

「だつてさ」

ミヤヒはそう言ったきり、一人でさつさと中庭を後にした。

シユオウも一步を踏み出そうとして、渡された二つの贈り物の事を思い出す。食堂に行く前に、まずは自室に荷を置いてこなければならぬ。

場違いに上等な布でくるまれた箱を持ち上げると、腹がぎゅるぎゅると間の抜けた音を鳴らした。

憂鬱であるうとなかるうと、呪わしいことにならず腹は減るらしい。

俺は、何をしてるんだろつ。

ここへ来てもう何度目になるかわからない大きな溜息を吐いて、シユオウは頼りない足取りで中庭を後にした。

「あんた達、いつまでも窓に張り付いてないでさつさと食つちまいなッ！ これからどんどん集まってくるんだ。急がないと後が詰まっちゃうよッ！」

食堂に、野太く豪快な老婆の声が轟いた。

一喝された従士達は、蜘蛛の子を散らしたような勢いで残してきた食事にがつついていく。

「大声あげると皺が増えるぞ」

ヒノカジは、左耳に指を入れてきゅるきゅると奥をほじくりながら言った。

「うるさいね。ちょっと声を荒げたくらいで老けるような繊細な顔はもってないんだよ」

老婆は濡れた手を割烹着で拭いながら、ヒノカジが陣取る窓際まで歩み寄る。

シワス砦の台所を管理している彼女の名前はヤイナという。五十歳の頃ここへ来て二十年以上が過ぎた今になってもそれほど老けて見えないのは、ほどよくついた贅肉のおかげで皺が目立たないからだろう。性格は剛胆で怒らせると手に負えないほどに恐ろしいが、面倒見の良い性格と美味い家庭料理を、長年砦に勤める従士達のために作り続け、皆からは母親や祖母のように慕われている。

ヤイナの夫であり、シワス砦の最古参兵であるヒノカジは御年七一歳になる老人だ。黒かった髪は朽ちた老木のように白くなり、古い切り傷が多く刻まれた顔には、年相応の深い皺も刻まれている。軍に入ってから地道に仕事をこなし、新兵の世話や訓練をよく見た戦場等でこれといった功績を残していないにもかかわらず、ヒノカジが従曹の階級にあるのは、そうした実直な管理能力を買われてのことだった。

「そんなことより、さつきから何をそんなに熱心に覗いてるのさ。庭に金銀財宝でも転がってるのかい」

「ミヤヒが小僧に剣の勝負をさせとった」

ミヤヒはヒノカジとヤイナのたった一人の孫だ。幼くして両親を亡くしたミヤヒを引き取り、ここまで二人で大切に育ててきた。

「またかい。まったく、見た目ばかり女になっちまって、中身は子供の頃のままだね」

まったくだ、とヒノカジは渋い調子で同意した。

ヒノカジはそれなりに剣の腕が立つ。若い頃は道場経営などもしていたくらいだ。

孤児になってしまった孫を引き取った当時、幼くして両親を亡くしてふさぎ込んでいたミヤヒを心配して、本格的に剣術を教えたのがまずかった。護身術として武術をたしなむ女は少なくないが、ミヤヒはそうした領域を軽々と飛び越え、次第にその腕は、大人の男を軽々とのしてしまえるほどの域に達した。本人にも剣術には並々

ならぬ思いがあるようで、仲間の従士を捕まえては剣の勝負を挑み、ほとんどすべてに勝利している。

黙っていればおしとやかな女に見えるが、一度口を開けば男か女かわからないようなぶつきらぼうな口調が目立ち、剣を握れば餓えて暴れる猛犬の如く手に負えない。そうした性格のせいで適齢期を過ぎた今となつても浮いた話の一片すらなかった。

「それで、どっちが勝ったかね」

「勝負にもなつたらん。ミヤヒが小僧の剣をたたき落として終いだ」

「ほう……あの坊や、腰抜けかい？」

がっかりしたような口調のヤイナを一瞥し、ヒノカジはゆっくりと首を横に振る。

「いんや、ありやミヤヒが強引に剣の勝負を持ちかけたからだ。

俺の目から見たら、あの小僧の体捌きはこなれたもんに見えたがな。まあ、ただ……剣に関しちゃ、ずぶの素人以下なのは間違いねえ。

棒きれも振った事がないってくらい所在なさげだったわ」

「あんたがそう言うならそうなんだろうね。でもまあ、剣がだめなんていうんじゃ、ミヤヒは面白くないだろうさ」

「ああ、わかりやすくへソをまげとつた」

ミヤヒが怒るのも無理はない。ムラクモの平民達の間では、農民であれ、子供の頃から親や道場でムラクモ刀という片刃で背にふつくと金属を盛つたような独特な造りになっている剣を使い、剣術を習う風習がある。あるいは、そうした事を教わる事が出来なかつた生い立ちだったとしても、男の子なら棒きれをもって剣術の真似事くらいは経験があるはずだ。ヒノカジが小僧と呼ぶ新入り従士の青年シュオウは、それすら経験がないのではないかというほど、木剣を渡されてからの様子が頼りなかつた。

「あの坊やの事、どうするつもりだい。まだ仕事もやってないんだろ」

二人が目で追う先にはシュオウがいる。ちょうどミヤヒから渡さ

れた荷を手に、中庭から出ていくところだった。

「やらせる仕事が多くなければいいわけじゃねえんだが。どうしたもんかと思つてな」

なんの前触れもなくシワス砦に配属されたシュオウという青年は気になる点が多くある。所属は第一軍という扱いになつてゐるのに、配属命令書に押されていた口ウ印は、ムラクモ王国軍を取り仕切る近衛軍司令部のものでした。それだけでヒノカジの不審を煽るに十分だが、実際にやってきた青年は、あきらかにムラクモの人間ではない灰色の髪。おまけにどこの大山賊だといわんばかりに目立つ眼帯までしてあり、どこにでもいるような若者という存在からは逸脱していた。

シュオウという名前もおかしい。東方の平民的な面影を覗かせる響きをしているが微妙に違ふ。かといつて貴族的というにはどこか気品に欠けている。おそらく、ムラクモにシュオウという名を持つ人間は彼だけだろう。

さらに、後を追いかけるように届く、貴族の娘達からの贈り物の件もある。

たった一つでも、シワス砦では浮いてしまうというのに、こつも珍しい状況が重なれば、皆が遠巻きに噂話ばかりしてしまうのも無理はない。

その生い立ち。どういつた理由で軍に入り、どうしてここへ配属されたのか。貴族の娘達とどんな関係にあるのか。

知りたい事は尽きないが、年老いてすっかり慎重になつてしまつたヒノカジは、そうした質問を一つとして直接ぶつけられずにいた。シュオウが貴族と関わりがあると知つてからはなおのことだ。

「かわいそうに。あの坊や、ここへ来てからほとんど元気をなくしちまつてるよ。なんとかしておやりよ」

ヤイナは女性らしい心遣いで、今やすっかり孤立状態のシュオウを心配している。口にはしないが、その想いはヒノカジとて同じだった。

「少し前に小僧の進退に関する質問状を王都に送つといた。その返事があるまでは様子を見る」

どこからともなく現れた謎めいた新入り従士の配置が書類上の誤りなのではないか、と思いついたその旨を問う内容の書状はすでに送付済である。一介の従曹からの質問を軍上層部がまともに取り合うかもわからないが、なにもしないよりはましだろう。

ほどなくして食堂に現れたミヤヒは、黙ってヒノカジと同じ食卓についた。

シユオウはミヤヒから少し遅れて入ってきて、食器を手に座る場所をさがして視線を泳がせていた。それに気づいたヒノカジは、シユオウを自分の座る食卓へ手招きした。

「いいですか？」

シユオウは確認をとって、ミヤヒの隣の椅子に腰掛けた。

「災難だったな」

ヒノカジのその一言で、シユオウは一瞬だけミヤヒに視線を流した後、いえ、と否定した。

「ミヤヒは剣のこととなると頭に血が昇りやすくなる。まあ、通り魔にでも遭つちまつたと思つて忘れるこつた」

そう言つと、ミヤヒはすぐに不満を表明した。

「ひとのことを辻斬りみたいに言わないでよ、じつちゃん！」

「似たようなもんだ。いきなり木剣渡して勝負しろ、なんて女のことつちやねえぞ」

「う……でもさ、こいつ、いつもこれみよがしに体鍛えてたりしたから、期待しても仕方ないって」

シユオウが鍛錬を見せびらかせていたのではなく、やることななく仕方なしといった風だったのをヒノカジは知っている。

「勝手な期待を押しつけたあげく、勝手に失望してりやせわねえぞ」

祖父からの説教で機嫌を損ねたらしく、ミヤヒは顔をそむけて唇

を尖らせた。

静かに汁物を口に運ぶシュオウは、伏し目がちで覇気のかけらもない。その原因の一端が自分にもあるような気がして、ヒノカジはうつかり口を滑らせた。

「小僧、どうだ、ここには慣れたか」

馬鹿な事を聞いたものだど、心中で自分自身を怒鳴りつける。

案の定、まだ年若い青年の表情はみるみる曇り、片方だけ開かれた頼りない瞳は、うらめしげにヒノカジを映していた。

「仕事をください。自分一人だけがなにもせずにごうやって食べ物をもらっても、ここの一員になれたような気が、少しもしません」シュオウの言葉に切羽詰まったような色を感じ取ったヒノカジは、それを軽く受け流すことなどできなかつた。

「んむ……」

シワス砦には諸事情もあり、近隣の農家の子供達が多く勤めている。本来の許容量はとくに超していて、関所と国境警備の業務をこなすには、現状の半分の人数も必要ないほどだ。そのため、砦の中の仕事はあらゆる方面で細分化され、それに時間交代制まで導入されている。廊下に転がっている小石を拾う係まであるほどだった。

だからといって新入りの従士に対して本当に一切の仕事がないかというところではない。たとえば人の多さから砦の手洗い所は衛生的に汚れやすい。その清掃と、水洗用の水を井戸から汲む作業は重労働でありやりたがる者が居ないため、新入りに宛がうには丁度良い仕事ともいえるが、それを謎めいた目の前の青年に対して、まかせてもいいのだろうかという奇妙な考えに囚われる。

どんなに想像をめぐらせても、砦の雑用をせつせとこなしているシュオウの姿を思い描くことができない。絶対にぴたりとハマる事のない積み木を手にしているような、そうした収まりの悪い疑念がまとわりつく。

つまるところ、自身に生じるためらいの感情の出所がわからないヒノカジは、ただただ戸惑っているのだ。突如として現れたシュオ

ウという新入り従士の扱いを。

どう返事をすべきかを迷っていた一瞬間の間

「従曹ッ！」

ヒノカジが口を開く前に食堂に飛び込んできた従士の一言が、突然に状況を一変させた。

「どうした」

「それが、アベンチュリン側から人が来てるんですが、それがちよつと……」

「いつも通り、簡単に荷を調べて通せばいい。俺に報告が必要な事か？」

「いえ、それが、来てるのはどうも全員アベンチュリンの貴族みたいで、その中の一人が、自分はアベンチュリンの王子だ、なんて言ってるもんで……」

ざわついていた食堂の雑音がぴたりと止まった。

「王子、だと？」

食堂を出てすぐの廊下に、複数人の従士の靴音が重なり合っている。食堂に詰めていたほとんどの従士達が、頼んだわけでもないのにヒノカジの後を追って来ている。退屈を払拭できそうな出来事の前にして、皆じつとしてはいられなかったのだろう。

「本当に王子と名乗ったのか？」

ヒノカジは報告に来た従士に再度確認をとった。

「ほんとうですって!!」

「お前、アベンチュリンの王族を見たことがあるのか？」

「い、いやないですけど……けどッ！ 輝士を三人もつれてたし、間違いないです！」

「まあ、嘘をつく理由も思いつかんか。しかし……」

アベンチュリン王国は、今から五百年以上の昔にムラクモの前に屈服した敗戦国である。

本来ならば領地の没収と王位の剥奪をされているところだが、ア

ベンチュリンは自国で産出している豊富な食料を差し出す事と、軍隊を保有する権利を放棄する条件で、王家の存続を許された、いわばムラクモの傘下に収まった属国だ。

アベンチュリンの王族が国外へ出ることを禁じられてはいないだろうが、越境する場合には、ムラクモからの許可が必要のはず。しかし、今回そのような予定があるという話は微塵もシワス砦には届いていなかった。ヒノカジが降って沸いたように訪れた王子訪問を不思議に思うのはそうした理由があるからだ。

階段を駆け下りて、勢いそのままに中庭に出る。

アベンチュリンからムラクモへは、砦の内部を通っても、もちろん通り抜けることができる。だが通常、両国を行き来する人間を通すのは、直接入口から通じている中庭を使う。

中庭にある東側の頑丈な門を開くと、その先には四人の男女が佇んでいた。

左から男が二人、その隣に若い女が一人。その三人を従えるように中央にいる青年が一人。全員が左手甲に黄色系の彩石を持ち、アベンチュリンの地装束 という黄色いツナギの民族衣装によく似た軍服を纏っている。

青年を除いた三人は、顔つきや長剣を腰に帯びていることから、容易に輝士階級の者達であることがわかった。

輝士 というのは彩石を持つ者が軍で与えられる階級の呼称である。国により多少のバラつきはあるが、たいてい輝士階級にある者はそれと同時に士官としての資格も有する。社会での彼らの位置は、彩石という生まれながらの才に恵まれ、なおかつ国の中枢に近い選ばれた者達だった。

中央にいる青年が前へ歩み出る。

王子、か。

薄茶色の髪、前髪の片側を三つ編みにして垂らし、後ろ頭は刈り上げている。彫りの浅い顔立ちは、印象こそ薄い、表情は粒の細かい砂のように滑らかで気品が漂う。

輝士三人を平然と背負う立ち居振る舞い。報告に来た従士が、間違いないと言ったのも頷ける。

「シユウ・アベンチュリンです。はじめまして。突然このような形でお騒がせしてしましまして、申し訳ありません」

王子はそう言って、深々と頭をおとした。

「あッ……いえッ」

ヒノカジはもちろん、後ろから様子を伺っていた従士達も息を飲んだ。

属国とはいえ、彩石を持つ人間、それも王族が平民に向かって頭を下げるなどあるはずがない。そう思ったのは、ヒノカジだけではなかったらしく、すぐに同行する輝士の一人が声を張り上げた。

「殿下ッ！ そのような」

頭を上げた王子は、手の平を見せて輝士を制した。

「不作法を承知のうえでまいりました。失礼ながら、ここの責任者の方でしょうか？」

王子の問いかけに、ヒノカジはたどたどしくも答えた。

「シワス砦国境警備隊所属、ヒノカジ従曹であります。現場を監督しておりますが、現在ここの最上級責任者はコレン・タール男爵であります」

「では、これを、その男爵殿にお渡し願いたい」

王子が差し出した金色の筒を、ヒノカジは恭しく受け取る。

「書簡、でありますか」

「女王陛下からの直接の申し入れです」

「アベンチュリン女王陛下からの……。ですが、今ここには、コレン・タールは不在である、そう言いかけると、近くにいた従士が歩み寄り、ヒノカジに耳打ちをした。

「いるのかッ？ いったいいつのまに」

「昨夜遅くに……。コレを連れて部屋に閉じこもってますよ」

従士は小声で囁きつつ、小指を立てた。

ヒノカジは姿勢を正して王子へあらためて向かい合う。

「しばし時間をいただきたい。ご一行はこのまま帰国されるご予定でしょうか」

「陛下からは返事を急ぐよう言われています。ご迷惑でなければ、ここで返答を待たせていただきたいのですが」

ヒノカジは王子に承知したことを伝え、急ぎ部下に指示を飛ばす。「六名残れ 他はついてこい」

殿下の称号を持つ人間を外に放置したままにするのは気が引けるが、門から先はムラクモの領内となるため、勝手な判断で入れることは出来ないので仕方がない。

ヒノカジはここへ来た時以上の勢いで、皆の三階にある執務室へと急いだ。

皆内部の一階と二階部分は、四六時中従士達が行き交っているため賑やかだが、三階部分からは少々趣が異なる。

三階には、ほとんど使われることのない会議室や、高価な荷や武器を預かるための鍵付きの部屋があり、奥にはかなり広い造りになっている士官用の執務室が設けられている。

他の者達を二階に残し、一人執務室の前まで向かうと、部屋の前には二人の武装したコレン・タールの私兵が険しい表情で立っていた。

「男爵閣下はこちらにおられるか」

ヒノカジが聞くと、男達は腰の剣に手を置いて、制止を促した。

「そこで止まれ。閣下は職務につき多忙を極めておられる。用向きがあるならここで聞こう」

多忙とはよく言ったものだ、とヒノカジは心中で毒突いた。

「アベンチュリンより使者としてシユウ王子殿下が来訪中である。女王陛下よりの書簡も預かっている。急ぎ男爵に子細を報告したい」

男達は焦った様子で顔を見合わせた。

「ま、待ってるッ」

一方の男が素早く扉を叩き、中に入る。僅かな間を置いて部屋か

ら出てきた男は、ヒノカジに入れ、と入室を促した。

執務室の中に入った途端、異様な臭気がヒノカジの嗅覚を刺激した。

強烈な酒臭さ。その中に混じった男と女の淫靡な臭い。それに葉巻の苦い香りが入り混じり、今まで嗅いだこともないような独特な異臭を作り出している。

ヒノカジはこみあげる吐き気を堪え、部屋の窓をすべて開け放つてしまいたい衝動に蓋をした。

室内の窓はカーテンでほとんど覆われている状態で、ただでさえ曇り空で薄暗い外よりもさらに空気が重たかった。まるで空気穴のない箱に閉じ込められた心地がして、どうにも落ち着かない。

小さな燭台に照らされて見えたのは、寝台に横たわり、裸の女の肩を抱いて葡萄酒をあおるコレン・タールの姿だった。

頭のは天辺は薄くなり、腹は三段に折り重なるほど肥えている。左手甲にある泥水のような色の輝石がなければ、酒場で飲んだくれている五十路前後の中年男といった風采だ。

こう見えて、コレン・タールはムラクモ王国軍の正式な輝士である。もつとも、シワス砦に配属されている時点ですでに出世の道からは大きく逸れているのだろう。

酒色に溺れる怠惰な輝士。その姿にまったく尊敬に値するところはなく、視界に入れるのも不快な人物ではあるが、シワス砦の長官は数年おきに入れ替えがされるため、ヒノカジとしては特に気にもとめていなかった。

むしろコレン・タールは、砦の業務によけいな口を出さず、定期的に自身の別荘から妻の目を盗んで愛人との逢瀬に執務室を使っているくらいで、どちらかといえば無害なほうに分類される。

ヒノカジが寝台の前に立ち、敬礼をすると、コレン・タールは気怠そうにもそもそと口を開いた。

「アベンチュリンの王子が来たとか」

「はッ。輝士三名を連れ、現在も門外で待機しております。アベ

ンチュリン女王陛下からの書簡に対する返事を求めておられますが」
ヒノカジは懐に入れていた金色の筒を取り出して見せる。

「砂金石、か……。いったい何の用だ。王都にはなく、ここへ宛てたものに間違いないのだろうか」

砂金石 というのはアベンチュリン王家が継承してきた 燦光石 の名である。燦光石は特別な力を有する彩石よりもさらに別格の石として認識され、その力は天変地異の領域にまで及ぶ。

多くの国々では燦光石を有する一族が玉座に座り、王、あるいは大貴族として政をこなしている。燦光石はそれを有する者に不老や長寿を与えることもあり、人々はその石を特別な名で呼び神格化していた。

「そのような話は聞いておりませんが」

コレン・タールは二重顎に手を当てて、充血した目を上に寄せた。

「よし、許可する。中身を確認して教えろ」

「私が、でありますか」

「暗がりで見界が悪い。お前の立ち位置ならいくらか外の光が当たるだろう」

王族からの書簡を最初を開くのが、ただの平民である自分でいいものかとも考えたが、半酔っぱらいを相手に抗議したところで無駄なことだろう。

ヒノカジは慎重な手つきで筒を開き、中に丸めて入れられていた羊皮紙を広げ、内容を確認した。

「どうした、なんと書いてある」

「これは……………」

二の句を継げなくなってしまったのは、書簡に書かれた内容を理解するのに時間を要したからだ。

「女王陛下よりの招待状のようです。日頃、国境を守護する兵達に対する感謝と労いを伝えたい。代表としてシワス砦の従士数名を城に招待し、夜会にてもてなしたい、と。そういった旨が書かれておりますが……………」

言いながら、語尾は少しずつ力を無くしていく。

王族が一般の従士を労いたいなど、荒唐無稽な申し出にもほどがある。それも、他国の王が、である。

「なんだ、それは。本当にそんなことが書いてあるのか？」

コレン・タールは寝台から裸足のまま降り、ヒノカジから書簡を取り上げて目を通した。

「ふむ……間違いのないようだな。浮ついた行動をとる人物であると噂には聞いていたが、これほどとは……」

「王都の司令部にどう対処すべきか連絡を入れたほうがよいのでは」

ヒノカジの真つ当な申し出に、コレン・タールは強く反発した。

「馬鹿を言うな。これしきのことではいちいち上を煩わせていては、私の評価に影響する。ただでさえ予算は減らされているというのに、これ以上この砦の役立たずさをひけらかしてもなんの得にもならん」

コレン・タールは愚痴るようにまくしたてた。

「ですが、この書簡の内容に答えるにしても、我が軍の兵が許可なく越境する事になります」

「ムラクモとアベンチュリンとの関係は周知の事。属国に入るのにいちいち許可などとしていられるか。それに、今回はあちらからの招きだ。気にすることもなからう」

「もしや、この申し出を受けるおつもりですか」

「慰労のための招待なのだ、断る理由もないだろう。なに、どうせ臣下の前でムラクモの軍人に大層な料理でも振る舞い、器の大きさを見せたいのではないか。一つや二つ愚痴を聞かされるかもしれないが、そのくらいで王族の歓待が受けられるなら安いものだろう」

「まさか……私に行けと？」

冗談であつてほしい、というヒノカジの願いは、コレン・タールのまくしたてる醜い声にかき消された。

「お前以外、この砦は若造だらけではないか！ 期待はしていない」

いが、最低限失礼のないよう対応しろ。残りの者の人選はまかせ。私はこれからやらねばならない仕事があるから、後のことはまかせたぞ」

コレン・タールは顎をしゃくつて見せた。出て行けということだ。この馬鹿げた提案を、現場の判断だけで承知してもいいとは到底思えない。しかし、ヒノカジとて軍人である。上官から命令されれば、それに従わなければならない。

意見を述べたところで、傲慢な貴族を相手に無駄であることは、それなりに軍の中で生きてきた経験が教えてくれる。ヒノカジには守るべき部下達と家族がある。無茶をして無駄に目をつけられるような事は出来ない。

二階に下りると、心配そうに見つめるミヤヒと妻のヤイナがいた。そして皆の従士達が好奇心を込めた表情で自分を待っていた。

ヒノカジは、ぼつぼつと事情を説明した。

最初に勢いよく食いついてきたのはミヤヒだった。

「それって、色付きがあたしらを招待して、もてなしてくれるってこと？ そんなのあるわけないよ」

色付きという表現は、平民が影でこつそりと貴族の事を呼ぶときに使われる。こうした呼び方をする人間は、往々にして貴族をよく思っていない人物である事が多い。

それまでは、子供のように無邪気な表情で話に聞き入っていた従士達も、他に同行者が必要であるという部分にまで話が及んだ途端、ヒノカジから視線をそらして俯いてしまった。

彼らは、そのほとんどが農民の子供達だが、だからといって皆が情弱で臆病者というわけではない。だが、ことが貴族に関わるとなると途端に尻込みをしてしまう。

今回の話がどこぞの大商人からのものであったなら、我先に自分をつれていってほしいとせがんだらうが、相手が貴族、それも一国の王となれば話は別だ。正直、ヒノカジとて本音は王都にいるそ

れなりの地位にいる人物に丁重に断りの文を出してほしいと願っている。

本音がどうであれ、結局はこう言わねばならない。

「誰か他に、アベンチュリンまで同行する者はいないか。うまい飯にありつけるかもしれんぞ」

自らの言葉にまったく自信がないのは、それすらあるかどうかもわからないからだ。下手をすれば、王族や貴族の前で馬鹿にされ、晒し者にされるくらいのことはあるかもしれない。

率先して手をあげる者などいるはずがなかった。つい最近までこの一員ではなかった、とある青年を除いて。

「はい！ 行きますッ」

元気の良い宣言と共に高らかに手を挙げた人物に向けて視線が集まった。

「小僧……」

声の主は、王子一行が書簡を持って皆に現れるまで、ヒノカジの一番の悩みの種であった青年、シュオウだった。

シュオウの目には強い輝きが見えた。初めて年相応に思える幼さすら伺わせる。

「あたしも行くよ」

今度はそう言ったミヤヒに視線が集中した。

「い、いかんッ。何かあるかわからんところに、お前を連れてな
ど」

「そんなところに、じつちゃん一人を行かせるほうが心配だよ。大丈夫だって、あっちが何をしたいかわからないけど、ムラクモの軍人に手を出せばどうなるかわかってるはずだろ？ もしかしたら、本当にあたしに美味しい食べ物でもご馳走したいって思ってる酔狂な女王様かもしれないよ」

ミヤヒの言った通り、いくら王族といえどもアベンチュリンの間がムラクモの軍属に手を出せば、最悪戦争にまで発展しかねない大事となり得る。当然、アベンチュリンにそんなことをする利はな

にもなく、独自の兵力も軍も持たない件の国が、ヒノカジ達におおつぴらに危害を加えるようなことをするはずがない。

ヒノカジは所在なさそうに俯く従士達を見渡した。誰もが自分を指名されることを恐れている。怯える人間を連れて行き、むざむざ笑いものにされるネタを提供してやるのも賢い行動とはいえないだろう。士気の低い兵は、いるだけ役立たずどころか、足を引っぱる場合すらある。

もう一度、ミヤヒに視線を戻す。意志の強い瞳はだれに似たのか。言い出したら聞かない頑固さは妻のヤイナによく似ている。

大切に育ててきた孫娘を、状況の予測が立たない地へ連れて行く事への抵抗感是非常に強い。しかし、ここでミヤヒを置いていくと宣言し、他の従士を指名して連れて行くようなことをすれば、孫娘に対して特別扱いをしていると取られても言い訳ができない。時間をかけて築いてきた信頼が、それだけの事で崩壊したとしても、なんら不思議はないのだ。

なんとか、なるか。

覚悟を決めたヒノカジは、じつとこちらを見つめる孫娘に問う。

「きつと、楽しいことばかりじゃねえぞ。それでも行くか？」

顔と声に凄みを効かせ、脅すようにミヤヒを睨みつけた。

「行くよ。それにいい機会じゃない。こんなに近いのに、あたしはアベンチュリンに入ったことないし」

異国への旅は商売人でもないかぎり、たしかにそうある機会でもない。今回の件を良い方向へ考えれば、孫に貴重な経験をさせる好気ともいえる。

「小僧、旅の経験はあるのか」

ヒノカジはシュオウに向けて聞いた。

「それなりに」

シュオウはまっすぐヒノカジを見つめた。そこには躊躇いも不安もない、ただ期待だけが満ちているように見えた。

「よし。小僧とミヤヒを連れて行く。支度が終わり次第中庭に集

まれ。他の連中は通常業務だ。俺がいないからって手なんて抜きやがったら、戻ってから尻を百回叩いてやるから覚悟しておけよ！」

少し戯けた声音で檄を飛ばすと、後ろめたそうにしていた従士達も元氣を取り戻して、それぞれの持ち場に散って行った。砦の仕事は簡単なものばかりだし、数日ヒノカジがいなくても支障はないだろう。ミヤヒとシュオウもそれぞれに支度のために足早に去って行った。

「あんた……………」

最後にその場に残ったヤイナは、何かを言いかけて、結局言葉は出てこなかった。

「心配するな、ミヤヒは無事に連れ帰る」

「あの新入りの子もだよ。まだ若い。なにかあっちゃ気の毒さ」

「ああ、もちろんだ」

「あんた自身も、ね。勝手におっちゃんじまったら許さないからね」

ヤイナは昔から照れやで、自分を心配するときはきまって乱暴に言葉を濁す。そうした癖は、いくつになっても変わらないものらしい。

「若い連中を連れ帰らんといかんからな。それまでは這いつくばってでも生きて戻るわいッ」

ヒノカジもまた、照れ隠しに顔を背け、吐き捨てるように言った。結局のところ、自分たちは似たもの夫婦なのだろう。

旅の支度を調えたシュオウは、はずむ足取りで中庭を目指していた。

ここへ来て初めて心が躍っている。

突如降って沸いたアベンチュリン王国への同行者を求めるヒノカジの提案に、シュオウは無言を言わさぬ勢いで立候補した。

まだ行ったことがない国を見に行く事ができるという状況は、シユオウが師の元を飛び出した動機にも叶うからだ。

時刻は正午を迎えようかという頃合いだが、空に浮かぶ雲は一層濃さを増し、辺りは薄暗かった。冬の空気は冷たいが、王都のある山や高所などにくらべれば遙かにマシで、南からの緩い空気が入るここらでは、雪もめつたに降ることはない。

跳ねるような勢いで中庭に出ると、そこにはすでにヒノカジとミヤヒが待機していた。見送りのためか、ヤイナやその他の従士達も出てきている。

「小僧、支度はすんだか」

「はい。いつでも出られます」

頷いたヒノカジは東門の前で佇む王子に向き合い、敬礼する。

「そちらがよろしければ、この三名で同行させていただきます」

王子は満足気に頷いた。が、その後ろにいる強面で体格の良い輝士が前へ出て、不満をこぼした。

「これだけか？ 最低でもあと二人。そこから倍の人数でもかまわん。とにかく三人では少なすぎる」

威圧的にわめく輝士をなだめるようにシユウ王子は口を挟んだ。

「これで十分ですよ。元々陛下の急な思いつきで無理を言っているのです。了承していただけただけでも良かったと考えなければ」

シユオウは目の前で愛想笑いを浮かべている王子を不思議に思う。

王族という高貴な身分にありながら威厳はなく、よく言えば優しく、そうで、正直に言えば腑抜けて見える。

シユオウが王族を見るのはこれが二度目。一度目はムラクモ王都にある水晶宮で遠くから見た姫様だったが、あちらもまた一癖ある独特な雰囲気帯びていた。

「皆の業務に支障のない人員を選びました。数に問題があるのであれば、また日を改めてということにしてもよろしいのですが」

ヒノカジがそう言うと、強面の輝士は苦虫を噛み潰したような顔で舌打ちをした。

「この人数に不満はありません。アベンチユリンでの滞在は、私が責任を持って案内をしますので、観光だとしても思つて気楽にしてください。途中休憩する予定の町には温泉もありますよ」

未知の世界を見て回れるというだけでも楽しみな気持ちは尽きない。そのうえ、案内人が殿下の称号を持つ人物なのだから、これはもう一生に一度あるかないかの機会といえる。

だが、ここへ来てようやく時が動き出し、心の弾むシユオウとは逆に、ヒノカジの横顔は険しく、なにかしらの不安を抱えているような、そんな暗い雰囲気を漂わせていた。

疾走する馬上。周囲の景色は前から後ろへ引っぱられていく。ムラクモのものより半分もないであろう白い道は、古びてひび割れや欠損が目立つ。それ以外はなんといいことはない。どこも似通っている深界の中を行くかぎり、同じような景色が続いている。

前に行く四頭の馬には、シユウ王子と付き添いの輝士三人が乗っている。その後方、三馬身ほど離れたところから、シワス砦の従士三人を乗せた二頭の馬が後を追って走っていた。

シユオウは一人で馬に乗ることが出来ず、その事をヒノカジとミヤヒに伝えると、二人は驚き、呆れているようだった。

シユオウは幼い頃から一人ぼっちだったうえ、物心がついた頃には師に連れられ、灰色の森にかこまれた異世界とも呼べるような特異な環境で育った。そうした人生の中で、一度たりとも馬を必要とするような状況がなかったため、馬に乗るといふ技術の習得機会を逃していたのだ。その事を恥じてはいなかったが、これまでの周囲の反応から学ぶかぎり、馬術の心得がないという事は一般的な人間からみて奇異に映るらしい。

結局、ヒノカジの馬に三人分の荷を乗せ、シユオウはミヤヒの後ろに乗ることになった。

馬上でミヤヒの細く引き締まった胴に手をまわしながら、シユオウは所在ない心地を持って余していた。

「すみません」

「ん？ どうした」

出発してからずつと黙って手綱を握るミヤヒに、シュオウは謝罪の言葉を投げかけた。

「後ろに乗せてもらってることです……。それに、朝の事も」

早朝にミヤヒに無理矢理剣の勝負を持ちかけられたことについては、自分に落ち度があったとは思っていない。しかし、それ以来態度が刺々しいことと、なし崩し的に自分を乗せることになった事で、相当機嫌が悪いのではないかという懸念があった。

皮肉の一つでも聞く覚悟はあったが、予想はずれて、思いの外穏やかな答えが返ってきた。

「もう気にしてないよ。それに今はどっちかという感謝してる」

「感謝……？」

「あんたさ、じつちゃんがアベンチュリンへの同行者を募集した時、真つ先に手上げてくれただろ？ 他の連中が行きたくなさそうにしてたし、あのまま誰も手をあげなかったらじつちゃんが無理矢理誰かを選ばなくちゃいけなかった。そうなったら空気悪いしさ。

そしたらあんたがさっさと行きたいって言ったから、あたしも勢いがついたってどうか……。うまく説明できないけど、とにかく感謝してるし、見直したよ。根性あるんだなって」

正確には根性ではなく好奇心。退屈を払拭したいという、どちらかといえば不純な動機からこの旅路に臨んだのだが、それをあえて言う必要はないだろう。

ミヤヒはシワス砦で得た、数少ない関わりのある人物であり、この先の旅程を数日間共にする相手には、できるだけ上機嫌でいてもらったほうが安心できる。

「だけど、あの王子様の態度、どこまで本気なんだろうね」

ミヤヒは王子の背中に軽く顎をしゃくって見せる。

「優しそうな人、ですね」

本来抱いた感想より、かなり柔らかい表現の言葉を選んだ。

「そつだよな。貴族を見たのは両の指で数えられるくらいだけど、それでもみんな無愛想か横柄な態度だった。あの王子様の腰の低い態度を初めて見たとき、てっきりからかわれてるのかと思つたけど、見るとお付きの輝士達にも同じように接してたし、ああいう性格なのかな」

ミヤヒは腑に落ちないものがあるのだろう。首を横に傾げていた。

「アベンチュリンは女王の治める国なんですよ？　ということ

は、あの王子は女王の息子、か」

「んー、いや、どうだったかな……」

ミヤヒは答えに窮した。

「弟君だ。別腹のな」

いつから聞いていたのか、少し前を走っていたヒノカジがミヤヒに代わつて答えた。

「弟、ですか」

「なにか気になるのか」

ヒノカジは渋い表情でシュオウに聞いた。

「いや、ただ次のこの国の王様があのシュウ王子になるのかと、

そう思つただけです」

まつたく大きなお世話だろうが、物腰柔らかなシュウ王子に、一國を背負うことなどできるのだろうか、とふと心配になったのだ。

「それはないだろう。先王が無くなつた際に、王子は早々に継承権を放棄し、それをムラクモも認めたと聞いた事がある。そのせいには知らんが、女王は唯一の肉親である弟君を可愛がっているようだという噂はよく聞いた」

間髪入れず、ミヤヒが声を弾ませた。

「そんな可愛い弟を直接迎えに寄越したってことは、歓迎してくれるって話も本当かもね。温泉もあるって言つてたし、ちよつと楽しみになつてきたよ」

無邪気に妄想を膨らませる孫娘とは対照的に、祖父であるヒノカジの声は重かつた。

「どうだかな。あんまり期待はせんほうがいいだろう」
たまらず、シユオウは聞いた。

「なにかあるんですか？」

「王都までの途中、交易所のある町に寄ると言っとった。まあ、そこに行けば透けて見えてくる事もあるかもしれん」

丁度そのとき、前を走る輝士の一人が手を挙げて口笛を吹いた。

「どうやら急ぎたいらしいな。ついていかにやならん。できるかぎり飛ばすぞツ、やあツ！」

ヒノカジは言い残し、一気に加速を強めた。

「こつちも飛ばすよ。もっとしっかりつかまってな」

遠慮がちに捕まっていたミヤヒの腹に、シユオウは思い切りしがみついた。両腕を簡単にまわせるほど細い腰の感触を、慣れない馬上で喜んでいられるような余裕はないが、日頃口調の乱暴なミヤヒもたしかに女なのだ実感する。

冬の空気を切りながらの疾走で耳は千切れそうなほど冷たくなっていたが、心なしか、シワス砦に居たときよりも空気は暖かくなっているような気もする。

わずかな距離しか進んでいないはずなのに、そこはたしかに異国の地であった。

第一話 シワス砦（後書き）

皆様、おひさしぶりです。ここまで読んでいただいております。ありがとうございました。

前回の更新からかなり間が空いてしまって申し訳ありませんでした。

今回からスタートする従士編では、前回の無名編冒頭で師匠に拾われた主人公が、いったいどんな事を教わったのか。そして、単身で人の社会に入り込んでしまった主人公が、これからどのようなようにしてそこで生きていくのか、という指針のような物をお見せしたいと思います。特異な環境で狂鬼という怪物を相手にしたお話が、前回のメインでしたが、今回は徹頭徹尾人の世界でのお話となっております。

今回は地味で重ためな展開が続きます。ヒロイン成分がからつきしだったり、これでいいのかと悩みましたが、結局思った通りに書くことにしました。

従士編は完結まで、今回を含めて全体で3〜4回くらいの更新を予定しています。できるだけ完結まで間が大きく開かないように頑張りたいと思っています。

それと、今回から縦書き用ソフトを使った環境で書いてます。これまでのようなセリフと地の文の間に改行をあえて入れませんでした。その点でちょっと読みにくいと感ずる方が多いのではないかと心配しています。

それでは、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4006r/>

ラピスの心臓

2011年10月2日18時48分発行